宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第181集

黒仁田遺跡

（くろにた）

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

２００９

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第181集

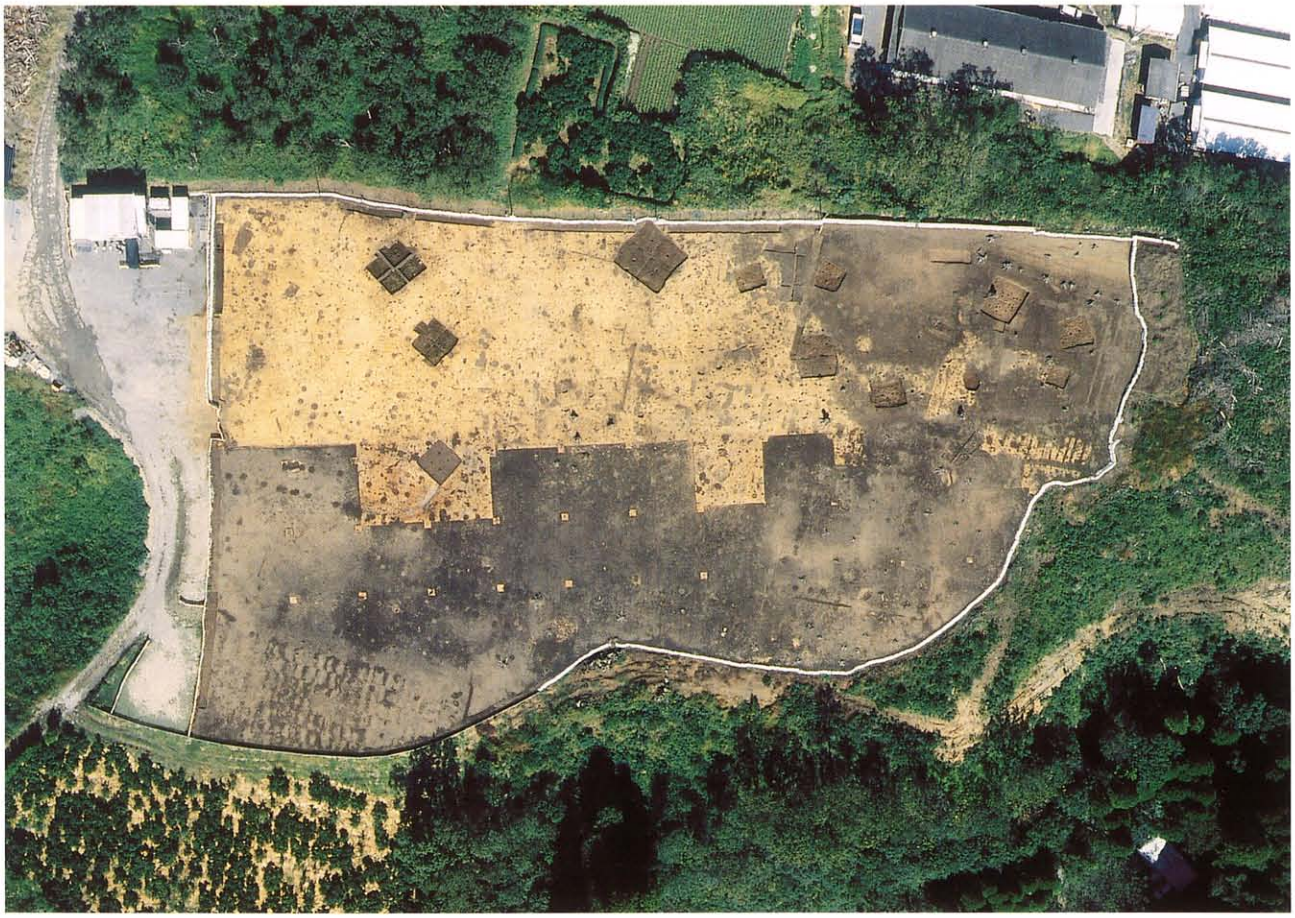
黒仁田遺跡

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

２００９

宮崎県埋蔵文化財センター

黒仁田遺跡遠景＜遺跡西より五ヶ瀬川をのぞむ＞



黒仁田遺跡全景＜第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面＞

巻頭図版２

旧石器時代接合資料〈旧石器時代第Ⅱ期〉

叩き目の見られる土師器

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、一般国道218号北方延岡道路建設事業に伴い、宮崎県延岡市北方町に所存する黒仁田遺跡の調査を行いました。

今回の調査では、後期旧石器時代をはじめ、縄文時代早期、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が確認されました。特に後期旧石器時代の細石刃石器群における接合資料や弥生時代・古墳時代の集落跡から多数の土器が出土したことは注目されます。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果だと言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成21年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　福　永　展　幸

例　言

1. 本報告書は、一般国道218号北方延岡道路建設工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った黒仁田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託を受けて、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成18年5月8日から平成18年12月8日まで行った。
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は、平山十四郎・黒木俊彦・橋本憲二・古屋美樹が行い、空中写真撮影は、九州航空株式会社に、基準点・水準点・グリッド杭設置は、株式会社東九州コンサルタントに委託した。
5. 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは平山十四郎が整理作業員の協力を得て行った。一部の石器遺物の実測図作成・トレース図作成は、株式会社九州文化財研究所、株式会社パスコに委託した。自然科学分析については、株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
6. 本書で使用した位置図（第1図）は、国土地理院作成「延岡(1/50,000)」を、周辺地形図（第2図）は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所から提供の1000分の1を基に作成した。
7. 土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に拠っているが、数字等記載のない色名はその限りではない。
8. 本書で使用した方位は、「N」と記載しているものは磁北である。「GN」と記載しているものは座標北である。レベルは海抜絶対高である。報告書抄録に使用している経緯度数値は、世界測地系を使用している。
9. 本書で使用した遺構および石材の略号は次の通りである。

   SA……竪穴住居跡　　SC……土坑　　Ob……黒曜石　　ho……ホルンフェルス

10. 本書の執筆・編集は平山十四郎が行った。第Ⅲ章第１節については芝康次郎氏（当時、熊本大学大学院）と平山が共同で執筆し、第Ⅴ章第１節については芝氏が主に執筆した。旧石器時代の執筆について、芝氏には多大な御教授を賜ったことに感謝申し上げる。

11. 出土遺物、その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅱ章　調査の概要
第１節　調査の経過 …… 5
第２節　基本層序 …… 7
第Ⅲ章　調査の記録
第１節　旧石器時代の調査 …… 10
第２節　縄文時代早期の調査 …… 73
第３節　弥生時代・古墳時代の調査 …… 76
第４節　包含層出土の遺物 …… 131
第５節　不明遺構 …… 148
第Ⅳ章　自然科学分析
第１節　黒曜石の原産地同定 …… 149
第２節　炭化材についての分析 …… 151
第３節　炭化種子についての分析 …… 155
第Ⅴ章　まとめ
第１節　旧石器時代の様相 …… 160
第２節　縄文時代早期の様相 …… 168
第３節　弥生時代・古墳時代の様相 …… 169

挿図目次

第１図　延岡市周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　黒仁田遺跡周辺地形図 …… 6
第３図　土層断面図１ …… 8
第４図　土層断面図２ …… 9
第５図　旧石器時代第Ⅰ期検出状況図 …… 11
第６図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図１ …… 12
第７図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図２ …… 13
第８図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図３ …… 13
接合資料Ⅰ―①分布図
第９図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図４ …… 14
第10図　旧石器時代第Ⅱ期１号土坑実測図 …… 15
第11図　旧石器時代第Ⅱ期検出状況図 …… 16
第12図　旧石器時代第Ⅱ期主要遺物の分布と接合関係 …… 17
第13図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図１ …… 18
第14図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図２ …… 19
第15図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図３ …… 20
第16図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図４ …… 21
第17図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図５ …… 22
第18図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図６ …… 23
接合資料Ⅱ―①分布図
第19図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図７ …… 24
第20図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図８ …… 25
接合資料Ⅱ―②分布図
第21図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図９ …… 26
接合資料Ⅱ―③分布図
第22図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図10 …… 27
接合資料Ⅱ―④分布図
第23図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図11 …… 28

第24図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図12 …… 29
接合資料Ⅱ—⑤分布図
第25図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図13 …… 30
第26図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図14 …… 31
第27図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図15 …… 32
接合資料Ⅱ—⑥分布図
第28図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図16 …… 33
接合資料Ⅱ—⑦分布図
第29図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図17 …… 34
接合資料Ⅱ—⑧分布図
第30図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図18 …… 35
第31図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図19 …… 35
第32図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図20 …… 36
接合資料Ⅱ—⑨分布図
第33図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図21 …… 36
接合資料Ⅱ—⑩分布図
第34図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図22 …… 37
第35図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図23 …… 37
接合資料Ⅱ—⑪分布図
第36図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図24 …… 38
接合資料Ⅱ—⑫分布図
第37図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図25 …… 39
接合資料Ⅱ—⑬分布図
第38図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図26 …… 40
第39図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図27 …… 41
第40図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図28 …… 42
第41図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図29 …… 43
第42図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図30 …… 44
第43図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図31 …… 45
接合資料Ⅱ—⑭分布図
第44図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図32 …… 46
第45図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図33 …… 47
第46図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図34 …… 48
第47図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図35 …… 49
第48図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図36 …… 50
接合資料Ⅱ—⑮分布図
第49図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図37 …… 51
第50図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図38 …… 52
第51図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図39 …… 53
第52図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図40 …… 54
第53図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図41 …… 55
第54図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図42 …… 56
第55図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図43 …… 57
第56図　旧石器時代接合資料Ⅱ—⑯分布図 …… 58
第57図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図44 …… 59
第58図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図45 …… 60
第59図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図46 …… 61
第60図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図47 …… 62
第61図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図48 …… 63
接合資料Ⅱ—⑰分布図
第62図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図49 …… 63
接合資料Ⅱ—⑱分布図
第63図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図50 …… 64
接合資料Ⅱ—⑲分布図
第64図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図51 …… 65
第65図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図52 …… 65
第66図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図53 …… 66
第67図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図54 …… 67
第68図　縄文時代早期１号集石遺構実測図 …… 73
第69図　散礫検出状況図 …… 74
第70図　縄文時代早期遺構検出状況図 …… 74
第71図　縄文時代早期土器実測図・石器実測図 … 75
第72図　弥生時代・古墳時代遺構配置図 …… 77
第73図　５号竪穴住居跡（SA5）実測図 …… 79
第74図　５号竪穴住居跡（SA5）出土遺物実測図１ … 80
第75図　５号竪穴住居跡（SA5）出土遺物実測図２ … 81
第76図　７号竪穴住居跡（SA7）実測図 …… 82
第77図　７号竪穴住居跡（SA7）出土遺物実測図 … 83
第78図　８号竪穴住居跡（SA8）実測図 …… 84
第79図　８号竪穴住居跡（SA8）出土遺物実測図 … 85
第80図　２号竪穴住居跡（SA2）実測図 …… 86
第81図　２号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図１ … 87
第82図　２号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図２ … 88
第83図　２号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図３ … 89
第84図　２号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図４ … 90
第85図　２号土坑（SC2）実測図 …… 91
出土遺物実測図
第86図　９号竪穴住居跡（SA9）実測図１ …… 93
第87図　９号竪穴住居跡（SA9）実測図２ …… 94
住居跡内土坑実測図

第88図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図1 … 95
第89図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図2 … 96
第90図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図3 … 97
第91図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図4 … 98
第92図　1号竪穴住居跡（SA1）実測図 …… 99
第93図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図1 …100
第94図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図2 …101
第95図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図3 …102
第96図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図4 …103
第97図　3号竪穴住居跡（SA3）実測図 ……104
第98図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図1 …105
第99図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図2 …106
第100図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図3 …107
第101図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図4 …108
第102図　4号竪穴住居跡（SA4）実測図 ……109
第103図　4号竪穴住居跡（SA4）出土遺物実測図1 …110
第104図　4号竪穴住居跡（SA4）出土遺物実測図2 …111
第105図　10号竪穴住居跡（SA10）実測図 ……112
第106図　10号竪穴住居跡（SA10）出土遺物実測図1 …113
第107図　10号竪穴住居跡（SA10）出土遺物実測図2 …114
第108図　11号竪穴住居跡（SA11）実測図 ……115
第109図　11号竪穴住居跡（SA11）出土遺物実測図1 …116
第110図　11号竪穴住居跡（SA11）出土遺物実測図2 …117
第111図　12号竪穴住居跡（SA12）実測図 ……118
第112図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図1 …119
第113図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図2 …120
第114図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図3 …121
第115図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図4 …122
第116図　4号土坑（SC4）実測図 ……122
第117図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図1 ……123
第118図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図2 ……124
第119図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図3 ……125
第120図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図4 ……126
第121図　3号土坑（SC3）実測図 ……127
第122図　3号土坑（SC3）出土遺物実測図1 ……128
第123図　3号土坑（SC3）出土遺物実測図2 ……129
第124図　1号土坑（SC1）実測図 ……129
出土遺物実測図
第125図　6号竪穴住居跡（SA6）住居跡内炉実測図 …130
出土遺物実測図
第126図　包含層出土遺物実測図 ……131
第127図　不明土坑実測図 ……148
第128図　細石刃石器群におけるブロック相関概念図 …161
第129図　石材別消費状況の比較 ……164
第130図　黒曜石産地別分布 ……166
第131図　南・北ブロック群の機能的差異 ……167
第132図　SA5の器種構成 ……169
第133図　SA7の器種構成 ……169
第134図　SA8の器種構成 ……170
第135図　SA2の器種構成 ……170
第136図　SA9の器種構成 ……170
第137図　SA1の器種構成 ……171
第138図　SA3の器種構成 ……171
第139図　SA4の器種構成 ……171
第140図　SA10の器種構成 ……172
第141図　SA11の器種構成 ……172
第142図　SA12の器種構成 ……172
第143図　遺構全体の器種構成 ……173
第144図　Ⅰ期の器種構成 ……173
第145図　Ⅱ期の器種構成 ……173

表目次

第1表　旧石器時代石器計測表1 …… 69
第2表　旧石器時代石器計測表2 …… 70
第3表　旧石器時代石器計測表3 …… 71
第4表　旧石器時代石器計測表4 …… 72
第5表　縄文時代土器観察表 …… 76
第6表　縄文時代石器計測表 …… 82
第7表　弥生時代・古墳時代鉄製品計測表 ……131
第8表　弥生時代・古墳時代石器計測表 ……132
第9表　弥生時代・古墳時代土器観察表1 ……133
第10表　弥生時代・古墳時代土器観察表2 ……134
第11表　弥生時代・古墳時代土器観察表3 ……135
第12表　弥生時代・古墳時代土器観察表4 ……136
第13表　弥生時代・古墳時代土器観察表5 ……137
第14表　弥生時代・古墳時代土器観察表6 ……138

第15表　弥生時代・古墳時代土器観察表７ ……139
第16表　弥生時代・古墳時代土器観察表８ ……140
第17表　弥生時代・古墳時代土器観察表９ ……141
第18表　弥生時代・古墳時代土器観察表10 ……142
第19表　弥生時代・古墳時代土器観察表11 ……143
第20表　弥生時代・古墳時代土器観察表12 ……144
第21表　弥生時代・古墳時代土器観察表13 ……145
第22表　弥生時代・古墳時代土器観察表14 ……146
第23表　弥生時代・古墳時代土器観察表15 ……147
第24表　第Ⅱ期接合資料作業内容一覧 ……163
第25表　竪穴住居跡（SA）一覧 ……175
第26表　土坑（SC）一覧 ……176

図版目次

図版１ …… 巻頭１
黒仁田遺跡遠景＜遺跡西より五ヶ瀬川をのぞむ＞
黒仁田遺跡全景＜第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面＞
図版２ …… 巻頭２
旧石器時代接合資料〈旧石器時代第Ⅱ期〉
叩き目の見られる土師器
図版３ ……179
黒曜石石器における使用痕
図版４ ……180
炭化材Ⅰ
図版５ ……181
炭化材Ⅱ
図版６ ……182
炭化種子
図版７ ……183
SA9遺物出土状況
SA9壺(394)出土状況
SA1土器集中部分
SA7鉢(319)出土状況
SA12炭化材検出状況
SC4遺物出土状況
集石遺構検出状況〈縄文時代早期〉
作業風景
図版８ ……184
旧石器第Ⅰ期出土遺物（1～9）
旧石器第Ⅰ期出土遺物（接合資料Ⅰ—①）
旧石器第Ⅰ期出土遺物（接合資料Ⅰ—①構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（12～21）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（22～25）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（26～29）
図版９ ……185
旧石器第Ⅱ期出土遺物（30～33）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（34～36）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—①）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—①構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—②）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—②構成剥片）
図版10 ……186
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—③）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—③構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—④）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—④構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑤）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑤構成剥片）
図版11 ……187
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑥）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑥構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑦）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑦構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑧）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑧構成剥片）
図版12 ……188
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑨）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑨構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑩）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑩構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑪）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑪構成剥片）
図版13 ……189
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑫）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑫構成剥片）

旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑬）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑬構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑬構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑬構成剥片）
図版14 ……190
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑭）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑭構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑭構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑭構成剥片）
図版15 ……191
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑮構成剥片）
図版16 ……192
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑯）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑯構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑯構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑯構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（251～255）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（256～262）
図版17 ……193
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑰）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑰構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑱）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑱構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑲）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ—⑲構成剥片）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（269～275）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（276～282）
図版18 ……194
旧石器第Ⅱ期出土遺物（283・284）
旧石器第Ⅱ期出土遺物（285～287）
縄文時代早期出土遺物（288～290）
縄文時代早期出土遺物（291～299）
図版19 ……195
弥生時代・古墳時代出土遺物
（5号竪穴住居跡）
図版20 ……196
弥生時代・古墳時代出土遺物
（7号竪穴住居跡）
図版21 ……197
弥生時代・古墳時代出土遺物
（7号・8号・2号竪穴住居跡）
図版22 ……198
弥生時代・古墳時代出土遺物
（2号竪穴住居跡）
図版23 ……199
弥生時代・古墳時代出土遺物
（2号竪穴住居跡・2号土坑）
図版24 ……200
弥生時代・古墳時代出土遺物
（9号竪穴住居跡）
図版25 ……201
弥生時代・古墳時代出土遺物
（9号竪穴住居跡）
図版26 ……202
弥生時代・古墳時代出土遺物
（9号・1号竪穴住居跡）
図版27 ……203
弥生時代・古墳時代出土遺物
（1号竪穴住居跡）
図版28 ……204
弥生時代・古墳時代出土遺物
（1号竪穴住居跡）
図版29 ……205
弥生時代・古墳時代出土遺物
（1号竪穴住居跡）
図版30 ……206
弥生時代・古墳時代出土遺物
（3号竪穴住居跡）
図版31 ……207
弥生時代・古墳時代出土遺物
（3号竪穴住居跡）
図版32 ……208
弥生時代・古墳時代出土遺物
（4号竪穴住居跡）

図版33 ……209
弥生時代・古墳時代出土遺物
（10号・11号竪穴住居跡）
図版34 ……210
弥生時代・古墳時代出土遺物
（11号竪穴住居跡）
図版35 ……211
弥生時代・古墳時代出土遺物
（12号竪穴住居跡）
図版36 ……212
弥生時代・古墳時代出土遺物
（12号竪穴住居跡・４号土坑）
図版37 ……213
弥生時代・古墳時代出土遺物
（４号土坑）
図版38 ……214
弥生時代・古墳時代出土遺物
（４号土坑）
図版39 ……215
弥生時代・古墳時代出土遺物
（３号土坑）
図版40 ……216
弥生時代・古墳時代出土遺物
（１号土坑・６号竪穴住居跡・包含層・鉄製品）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

一般国道218号北方延岡道路整備事業は、宮崎県北地域への高速交通サービスを提供し、地域活性化に寄与することを目的として、建設省九州地方整備局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所）が平成８年度に高規格道路（延岡道路・北方延岡道路）を事業化した。

宮崎県教育委員会は、平成６年度に国の補助を受けて延岡市～西都市周辺を対象とした詳細分布調査を実施し、この成果を踏まえ、同事業による埋蔵文化財への影響や保護の方法について協議を開始した。以来、現在も同事業に伴う協議・調査を継続している。この協議を基に工事によって影響を受ける埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施した結果、今回報告する黒仁田遺跡において、古墳時代の遺構・遺物が確認され、記録保存の措置をとることとなった。

本発掘調査は、調査対象区12,000㎡を平成18年５月８日～平成18年12月８日の約７か月間（調査実施日138日）実施した。また、今回報告する黒仁田遺跡における遺物整理作業と報告書作成作業を、平成19年度から平成20年度にかけて宮崎県埋蔵文化財センターで実施した。

第２節　調査の組織

黒仁田遺跡の発掘調査及び整理・報告書作成作業は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会　　調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

（平成18年度）

黒仁田遺跡発掘調査

所長	清野　勉
副所長	加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　尊
総務課総務担当主幹	高山　正信
調査第二課調査第四担当主幹	近藤　協
同課調査第四担当主査	平山十四郎
同課調査第四担当主査	黒木　俊彦
同課調査第四担当主査	橋本　憲二
同課調査第四担当調査員	古屋　美樹
事業調整担当主査	飯田　博之（文化財課）

（平成19年度）

黒仁田遺跡整理作業

所長	清野　勉
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　尊
総務課総務担当主幹	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄
調査第二課調査第四担当主幹	近藤　協
同課調査第四担当主査	平山十四郎
事業調整担当主査	飯田　博之（文化財課）

（平成20年度）

黒仁田遺跡整理作業・報告書刊行

所長	福永　展幸
副所長兼総務課長	長友　英詞
総務課総務担当主幹	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄
調査第二課調査第四担当主幹	近藤　協
同課調査第四担当主査	平山十四郎
事業調整担当主査	飯田　博之（文化財課）

第３節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

黒仁田遺跡は、宮崎県北部、延岡市北方町字子に所在する。延岡市は、九州山地や大崩・祖母・傾山系に源を発する五ヶ瀬川、北川、祝子川の下流域である。これら河川の沖積平野を中心に周辺山地や丘陵地より構成されている。五ヶ瀬川流域には、阿蘇火砕流堆積物の堆積とその浸食によって形成された河岸段丘と台地や丘陵地が分布している。本遺跡は、延岡市南方地区、旧北方町との隣接側にあり、五ヶ瀬川流域に広く分布する阿蘇火砕流堆積物が、五ヶ瀬川本流やその支流の曽木川によって浸食されできた丘陵上に位置している。そのなだらかな丘陵は標高約66ｍであり、丘陵間には狭小な谷部が、基底部には湧水が存在する。

２　歴史的環境

遺跡の立地する延岡市には、黒仁田遺跡のほか多くの遺跡が分布している。

旧石器時代では、矢野原遺跡、岩土原遺跡、蔵田遺跡、畑山遺跡、笠下遺跡、赤木遺跡、吉野遺跡等、姶良Ｔｎ火山灰層（以下、ＡＴ）下位で石器群の確認例がある。ＡＴ上位の石器群としては、切出形ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の２つの文化層が確認されている赤木遺跡をはじめ、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石器などが出土している笠下遺跡等、林遺跡や黒土田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、吉野遺跡、下曽木慈眼寺霊苑遺跡、片田遺跡等がある。岩土原遺跡では、半船底型細石核と隆帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土している。

縄文時代では、矢野原遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山田遺跡等がある。地蔵ヶ森遺跡では、押型文土器と塞ノ神式土器の時期の集石遺構８基が確認されている。また、山田遺跡では、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認され、集落構成の理解ができる事例の一つである。

弥生時代では、弥生時代前期から中期については様相が不明瞭である。後期では、貝の畑遺跡で竪穴住居跡が確認されている。延岡城内遺跡や差木野遺跡では、後期の水田跡が確認されている。また、瀬戸内地方の交流を示す資料として、三須町出土の二段矢羽透かしのある高坏が有名であり、恒富本村遺跡や差木野遺跡でも瀬戸内系土器が出土している。

弥生時代後期末から古墳時代後期では、中尾原遺跡をはじめ、蔵田遺跡、畑山遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山口遺跡第２地点、林遺跡、野田町八田遺跡等、集落の確認例が増加する。そのうち山口遺跡第２地点では細見川左岸の微高地上に弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約30軒確認されており、64軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている中尾原遺跡や竪穴住居跡６軒のうち１軒から小鍛冶跡と考えられる遺構が確認されている畑山遺跡と、同流域上に展開するこれらの遺跡間の関連性が注目される。蔵田遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が1軒確認され、その一角から磨製石鏃の未製品が45個程確認され、工房の可能性が指摘されている。また、南方古墳群をはじめ北方村古墳、延岡古墳群等、数多くの古墳があり、国指定・県指定史跡になっている。

古代から中世では、苺田窯跡があり、９世紀から10世紀前半にかけて須恵器が生産されている。また、十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や大型掘立柱建物跡群や土壙墓、五輪塔等の確認された林遺跡等がある。

近世にはいると延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、窯跡（小峰窯跡）等が確認されている。延岡城については、初代延岡藩主高橋元種が松尾城から中州内の丘陵地に築城したもので、この時に城下町の整備にも着手している。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることとなる。

3　延岡道路・北方延岡道路建設事業関連遺跡

国土交通省は平成６年度から北川町大字長井字上迫～延岡市伊形町間の全長20.6kmの国道10号延岡道路の事業に着手し、それに伴い宮崎県埋蔵文化財センターは、林遺跡、吉野第２遺跡、今井野第２遺跡、天下城山遺跡の発掘調査を行った。林遺跡は、平成９～12年度の４か年調査を行い、旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出された。吉野第２遺跡は、平成12・13・15年度に調査を行い、旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出された。天下城山遺跡は中世山城に関連する遺構・遺物が検出された。平成８年度からは、北方町大字蔵田から延岡市天下町の全長11.0kmの国道218号北方延岡道路事業にも着手した。それに伴い、山田遺跡、山口遺跡第２地点、野門遺跡、赤木遺跡第８地点の発掘調査を行った。山田遺跡は主に旧石器時代や縄文時代早期の遺構や遺物が、山口遺跡第２地点は弥生時代後期から古墳時代中後期にかけての集落跡が、野門遺跡は縄文時代から古代にかけての幅広い時代の遺構・遺物が、赤木遺跡第８地点（第二次・三次調査）は姶良Ｔｎ火山灰層を挟む上下位において、旧石器時代の遺構・遺物が検出された。

【参考文献】

北方町教育委員会1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第１集』

北方町教育委員会2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第23集』

延岡市教育委員会1978「野田町八田遺跡」

延岡市教育委員会1987「延岡市の歴史的環境・赤木遺跡・多々羅遺跡」『延岡市文化財調査報告書第３集』

延岡市教育委員会1992「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書第９集』

延岡市教育委員会1991「上南方地区遺跡　中尾原遺跡　山口遺跡」『延岡市文化財調査報告書第６集』

延岡市教育委員会1992「上南方地区遺跡　中尾原遺跡　畑山遺跡」『延岡市文化財調査報告書第８集』

延岡市教育委員会1996「市内遺跡詳細分布調査報告書」『延岡市文化財調査報告書第16集』

延岡市教育委員会2001「吉野遺跡（第４次）・吉野遺跡（第６次）・延岡古墳群第16号墳・多々羅第１遺跡・新宮遺跡・吉野遺跡（第７次）」『延岡市文化財調査報告書第24集』

延岡市教育委員会2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書第26集』

鈴木重治1973「宮崎県岩土原遺跡の調査―土器伴出石器文化の一例―」『石器時代』第10号　石器時代文化研究会

宮崎県教育委員会1995『打扇遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・蔵田遺跡』一般国道218号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮崎県教育委員会1987「林遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第30集』

宮崎県教育委員会1988「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第31集』

宮崎県教育委員会1990「林遺跡」『一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』

宮崎県教育委員会1992「延岡市苺田窯遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第9集』

宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡第２地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集』

宮崎県埋蔵文化財センター2006「今井野第２遺跡・天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第135集』

宮崎県埋蔵文化財センター2006「野門遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集』

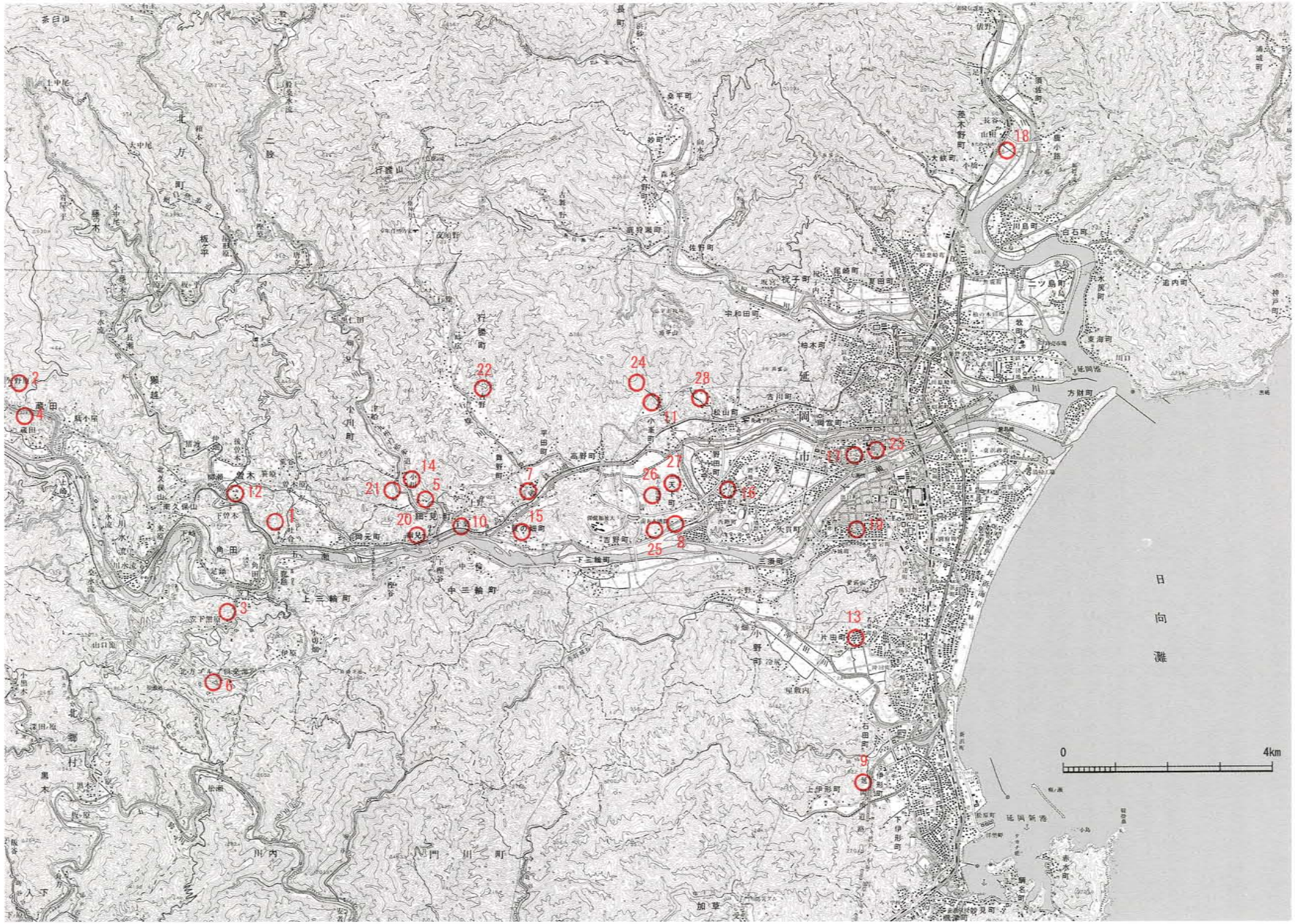
宮崎県埋蔵文化財センター2007「赤木遺跡第８地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集』

宮崎県埋蔵文化財センター2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』

宮崎県埋蔵文化財センター2007「吉野第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集』

宮崎県埋蔵文化財センター2008「赤木遺跡第８地点（第三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第165集』

宮崎県埋蔵文化財センター2008「林遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集』



1．黒仁田遺跡　2．矢野原遺跡　3．岩土原遺跡　4．蔵田遺跡　5．畑山遺跡　6．笠下遺跡　7．赤木遺跡　8．吉野遺跡　9．林遺跡　10．黒土田遺跡　11．地蔵ヶ森遺跡
12．下曽木慈眼寺霊苑遺跡　13．片田遺跡　14．山田遺跡　15．貝の畑遺跡　16．野田町八田遺跡　17．延岡城内遺跡　18．差木野遺跡　19．恒富本村遺跡　20．中尾原遺跡
21．山口遺跡第２地点　22．苺田窯跡　23．延岡城下町遺跡　24．小峰窯跡　25．吉野第２遺跡　26．今井野第２遺跡　27．天下城山遺跡　28．野門遺跡

第１図　延岡市周辺遺跡分布図（S=1/100,000）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経過

調査対象区は北方延岡道路建設部分である約12,000㎡であり、平成18年５月８日より調査を開始した。文化財課の試掘では、基本土層第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面に古墳時代の遺構・遺物が確認されていた。そこで、重機を使って第Ⅰ～Ⅱ層の除去を行った。排土置き場等の関係で、調査区の３分の２程の除去を行った。重機による除去は２週間程の日数を要した。第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）は、ほとんどのところで確認できたが、調査区南側や東側では、耕作により削平されていた。

この段階で国土座標に準じて東側から西にＡ～Ｏ、北から南に１～９の10ｍ×10ｍのグリッドを設定し、人力による作業を開始した。

調査区西側から精査を行い、はじめに竪穴住居跡の黒色のにじみを検出した。それ以降、全部で７軒の住居跡と１基の土坑を検出した。

６月に入り新たに１軒の住居跡と３基の土坑を検出した。さらに、多数のピットも検出した。第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面での精査から、竪穴住居跡８軒、土坑４基、ピット群の遺構を確定し、遺構掘削を開始していった。

７月は、第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削に併行して、遺構・遺物の確認されなかった調査区南西部分から、縄文時代早期の確認として、第Ⅲ～Ⅴ層の掘削を開始した。

８月は、削平により鬼界アカホヤ火山灰土層の残存していない調査区東側部分の黒褐色土に覆われた部分の精査を行った。杉や竹の切り株、密生する竹の地下茎等が多数存在し、作業は難航したが、その部分から、新たに２軒の住居跡を検出した。この２軒の住居跡は、埋土と堆積土の判別が容易ではなかった。縄文時代早期の確認（第Ⅲ～Ⅴ層掘削）では、石鏃等が出土した他、散礫のまとまりが３か所見られ、そのうちの１か所の下位より、集石遺構を１基検出した。しかし、点数は極めて少なく、密度は散漫としていた。下旬には、１回目の空撮を行った。その後、重機を使って排土を移動し、その部分の第Ⅰ～Ⅱ層の除去を行った。

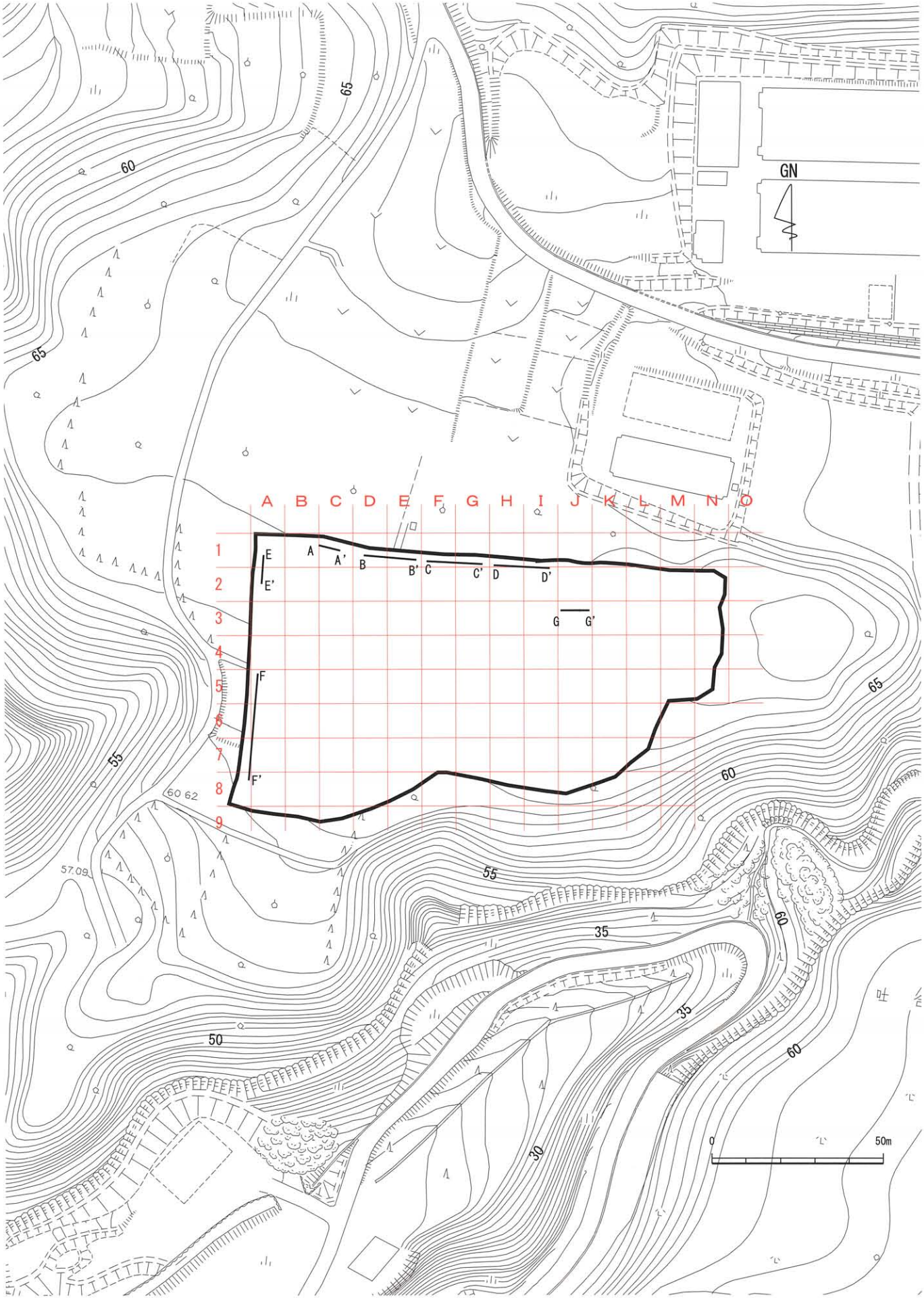
９月は、排土を移動した部分から、新たに２軒の住居跡を検出した。第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削に併行して、調査区南側部分から、グリッドごとにＬ字トレンチを設定し、旧石器時代の確認として、第Ⅲ～Ⅸ層の掘削を開始した。９月10日（日）には、現地説明会を行い、53名の参加があった。

10月は、第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削を継続していった。また、旧石器時代の確認（第Ⅲ～Ⅸ層掘削）トレンチで剥片が数点出土した部分を広げ、掘削を行っていった。下旬には、２回目の空撮を行った。その後、トレンチで剥片等がまとまって確認された調査区東側部分に重機を投入し、第Ⅲ～Ⅴ層の掘削を行った。

11月は、第Ⅲ層上面検出の住居跡の調査と併行して、旧石器時代の掘削も行った。重機で掘削した部分の各グリッドに５ｍ×５ｍのトレンチを設定し、第Ⅵ～Ⅸ層までの掘削を行った。剥片等がまとまって確認されれば、周辺まで範囲を広げるという方法で調査を行っていった。

12月は、旧石器時代の掘削を行った。剥片等は、第Ⅵ層上部からの出土がほとんどで、一部第Ⅶ層中部からも出土した。最終的には、一部第Ⅻ層上部まで掘削を行ったが、遺物は、第Ⅵ・Ⅶ層以外からは確認されなかった。

約７か月にわたる調査の中、気温が40度を超す日も幾度かあったが、作業員のけが等もなく平成18年12月８日に無事調査を終了した。



第２図　黒仁田遺跡周辺地形図（S=1/1,500）

第２節　基本層序

黒仁田遺跡で確認された層序は12層である。第Ⅷ層から第Ｘ層は、土質が硬質で安定した堆積ではなく混交している。径２～３mmの白色鉱物粒を含むもの、姶良Ｔｎ火山灰がブロック状に堆積しているもの、径１～２mmの円礫が混じるもので細分した。以下層ごとに堆積状況を記述する。

第Ⅰ層　表土(10YR1.7/1)…現地表面の表土。

第Ⅱ層　黒色土(10YR2/1)…やわらかくしまりがない。

第Ⅲ層　黄橙色火山灰土（10YR7/8）…鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah)。調査区の３分の２程に堆積しており、Ｈラインより東は消滅している。また一部耕作により削平されている。

第Ⅳ層　黒色土(10YR2/2)…やや粘質がある。

第Ⅴ層　黒褐色土(10YR2/3)…第Ⅵ層への漸移層。

第Ⅵ層　暗褐色土(10YR3/4)…粘性がある。第Ⅴ層よりやわらかい。

第Ⅶ層　褐色土(7.5YR4/1)…粘性がある。第Ⅵ層よりやわらかい。

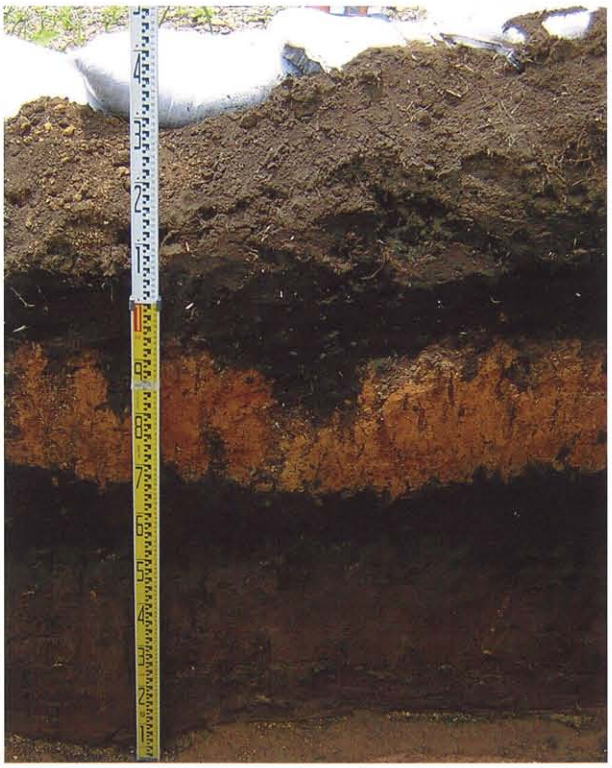
第Ⅷ層　暗褐色土(10YR3/3)…やや砂質を帯びる。硬質でブロック状に割れる。径２～３mmの白色鉱物粒を全体に含んでいる。

第Ⅸ層　黒褐色土(10YR3/1)…姶良Ｔｎ火山灰層（AT）がブロック状に混じる。硬質でブロック状に割れる。

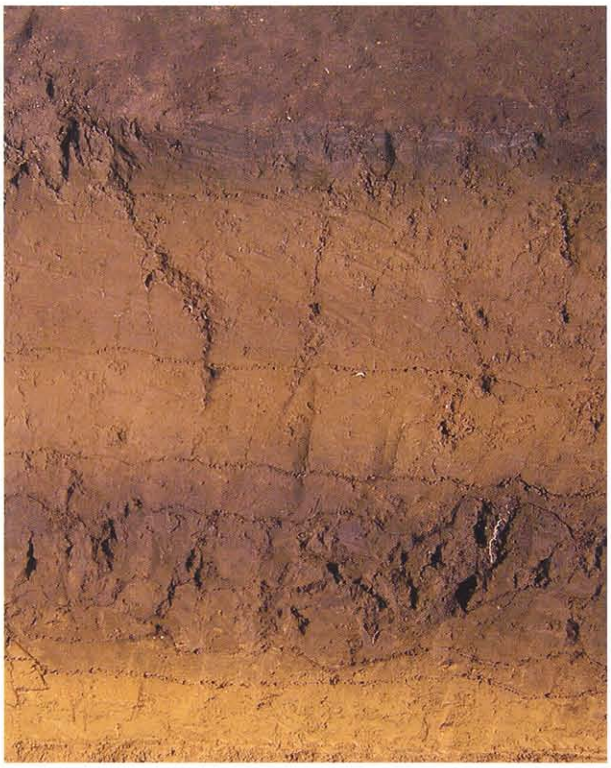
第Ⅹ層　黒褐色土(10YR2/3)…径１～２mmの円礫が混じる。硬質でブロック状に割れる。

第Ⅺ層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)…第Ⅻ層への漸移層。

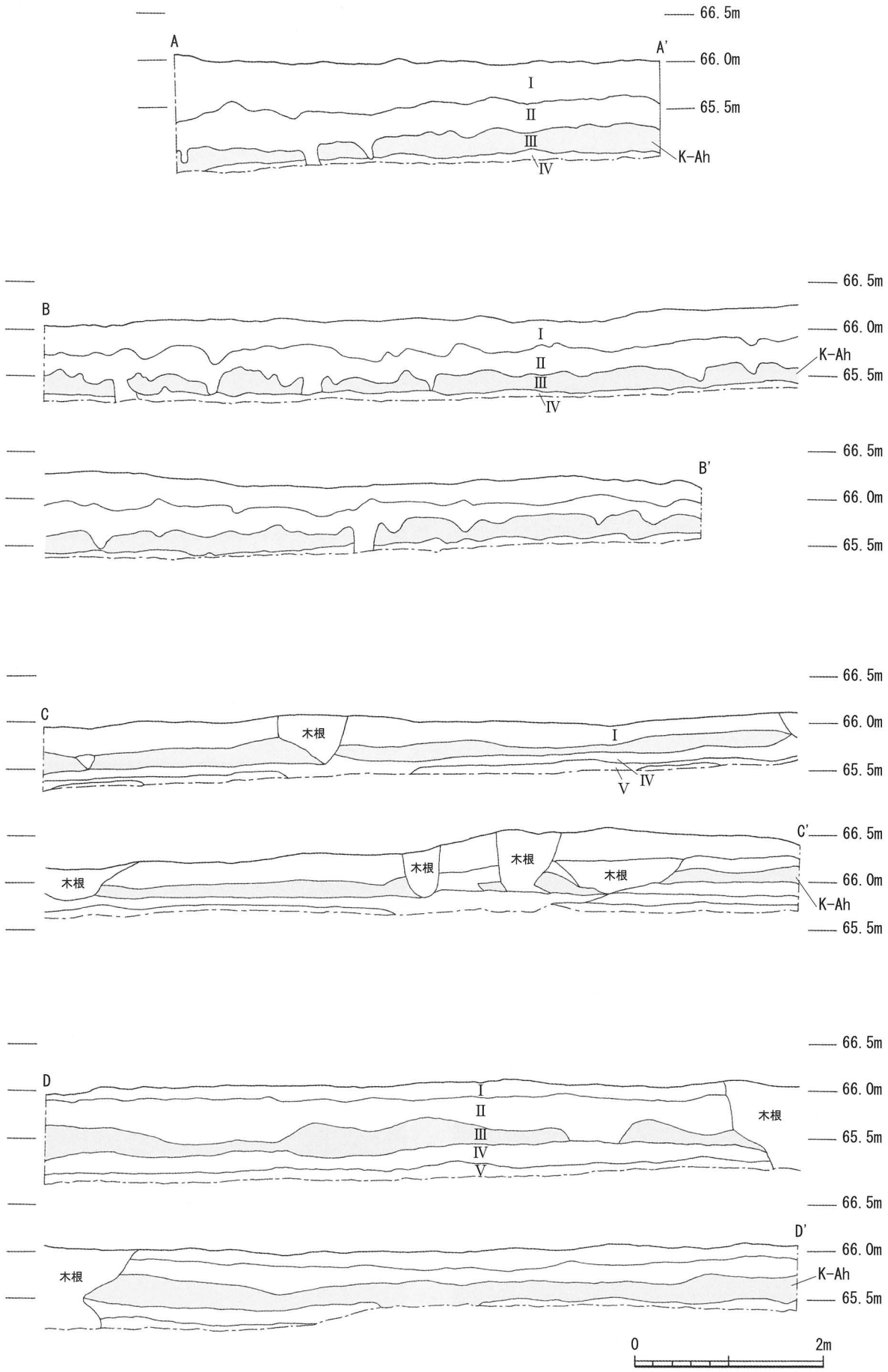
第Ⅻ層　黄褐色粘質土(10YR5/8)…粘性が非常にあり、保水力がある。



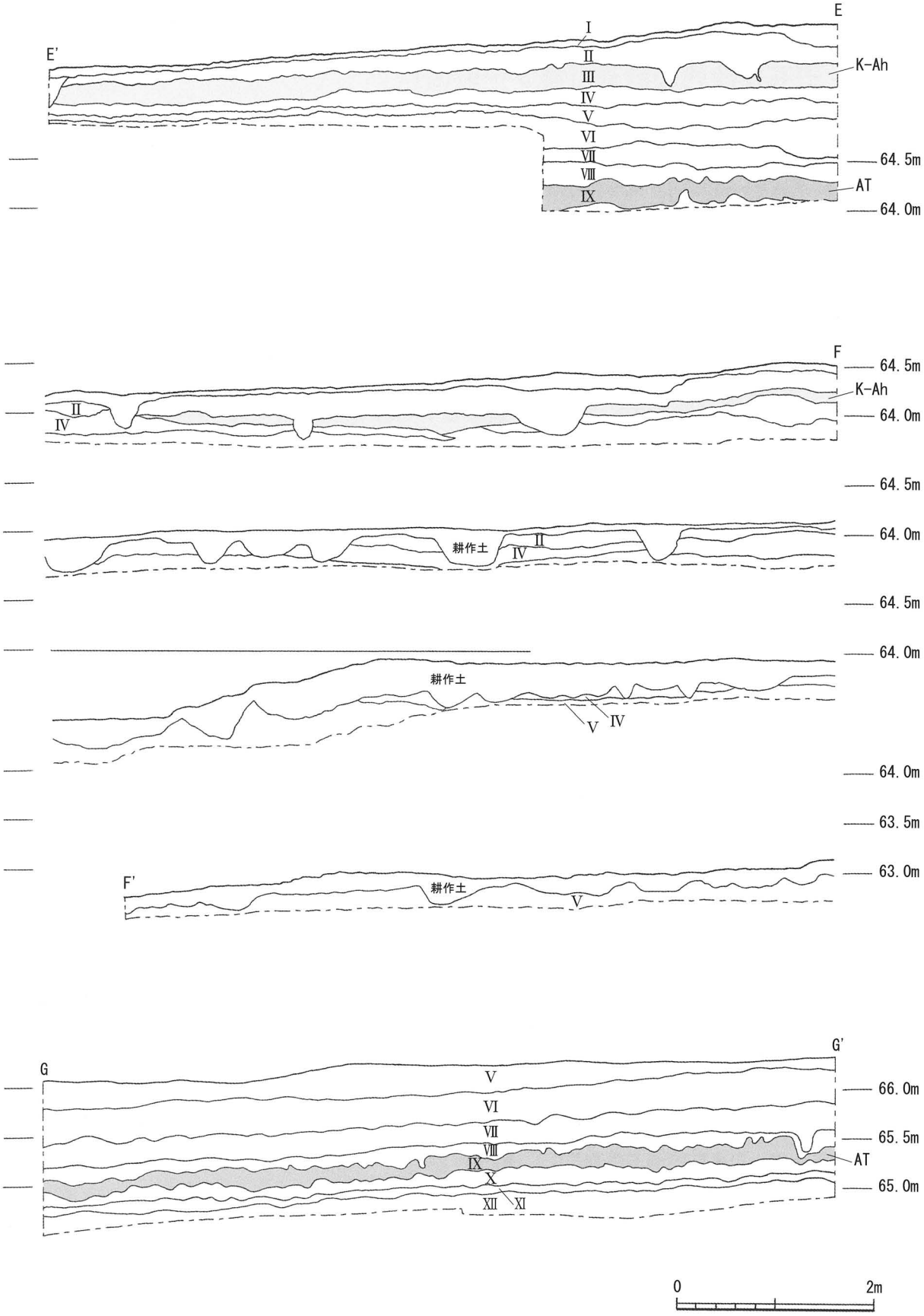
土層堆積状況①
第Ⅰ層～第Ⅸ層：A1・2グリッド西側＜Ｅ～Ｅ'＞



土層堆積状況②
第Ⅴ層～第Ⅻ層：J3グリッド西側＜Ｇ～Ｇ'＞



第３図　土層断面図１（S=1/60）



第４図　土層断面図２（S=1/60）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　旧石器時代の調査（第５～67図）

旧石器時代の調査は、調査区の各グリッドにＬ字型、または５ｍ×５ｍのトレンチを設定し、これらの中を第Ⅸ層まで掘削していった（第５図）。トレンチ内に剥片等がまとまって確認されれば、トレンチ外周辺まで範囲を広げるという方法で調査を行っていった。その結果、調査区の中央より東側に遺物の集中区が確認できた。遺物は、Ⅶ層中部とⅥ層上部それぞれに出土レベルのピークがある。以上のことから、同時代を大きく２時期に設定した。第Ⅰ期は、Ⅶ層中部に遺物が散漫に分布している。遺構は確認できなかった。第Ⅱ期はⅥ層上部に遺物が集中し、遺構は土坑を１基、調査区南東側Ｌ５グリッド部分において検出した。

１　第Ⅰ期（Ⅶ層）の調査（第５～９図）

第Ⅰ期は、Ⅶ層中部に遺物が分布している。調査区南東部Ｋ６グリッド付近、調査区東部Ｎ５グリッド付近の２か所を中心に散漫な状態で出土した（第５図）。

(1) 出土石器（第６～９図―１～11）

遺物は合計72点を確認した。器種別の内訳は、ナイフ形石器２点、剥片尖頭器２点、スクレイパー１点、その他は剥片類である。石材別に見ると、流紋岩61点、ホルンフェルス11点である。なお、流紋岩は色調で肉眼分類でき、白色系、暗灰色系、黒色系の３系統に分類した。しかし、接合作業を試みた結果、白色系と暗灰色系で接合するなど、別系統に分類したものでも接合しており、分類はあまり意味を持たないと考えた。そこで、一括して流紋岩と記述する（第Ⅱ期も同様）。また、第Ⅰ期の特徴的な石器は全て流紋岩製石器である為、ここでは流紋岩製石器のみ図化している。

流紋岩製石器

＜単体資料＞

ナイフ形石器　２点（第６図―１・２）

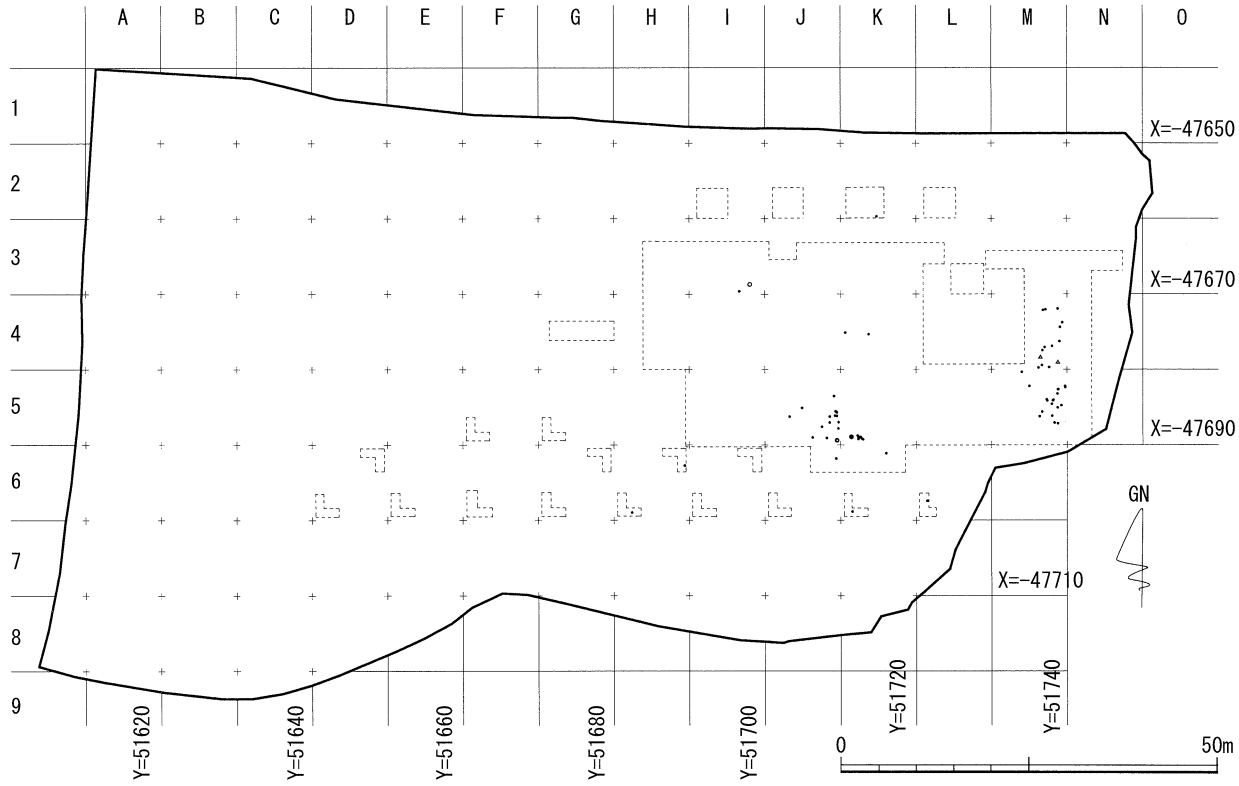
１は、分厚い幅広剥片を素材とする。背面の剥離面は腹面のそれとは逆方向であることから、打面転移の行われた石核からの産物であることが想定される。右側縁の全体（長側縁）、左側縁下部（短側縁）および下端に急角度（70～80°）のブランティング加工が施されている。短側縁と刃部とをなす角度は90°に近く、ノッチ状である。加工のほとんどが腹面側からだが、基部付近では背面側からの加工も施されている。いわゆる狸谷型ナイフ形石器（松藤1992・岩谷1998）に類似する。

２は、分厚い幅広剥片を素材とする。背面の剥離面は腹面のそれとは逆方向であることから、打面転移の行われた石核からの産物であることが想定される。素材剥片の打面を除去するように、腹面側から右側縁に急角度（80°前後）のブランティング加工が施されている。短側縁は欠損しており、全体形は不明だが、素材の利用方法や加工状況から、１と同様、いわゆる狸谷型ナイフ形石器に類似する。

剥片尖頭器　２点（第６図―３・４）

３は、縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。打面部を基部に設定し、両側縁にブランティング加工が施されている。ブランティングによる抉りは認められない。打面は欠損している。

４は、縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。打面部を基部に設定し、両側縁にブランティング加工が施されている。ブランティングによる抉りは左側辺に若干認められるが、右側縁には認められない。



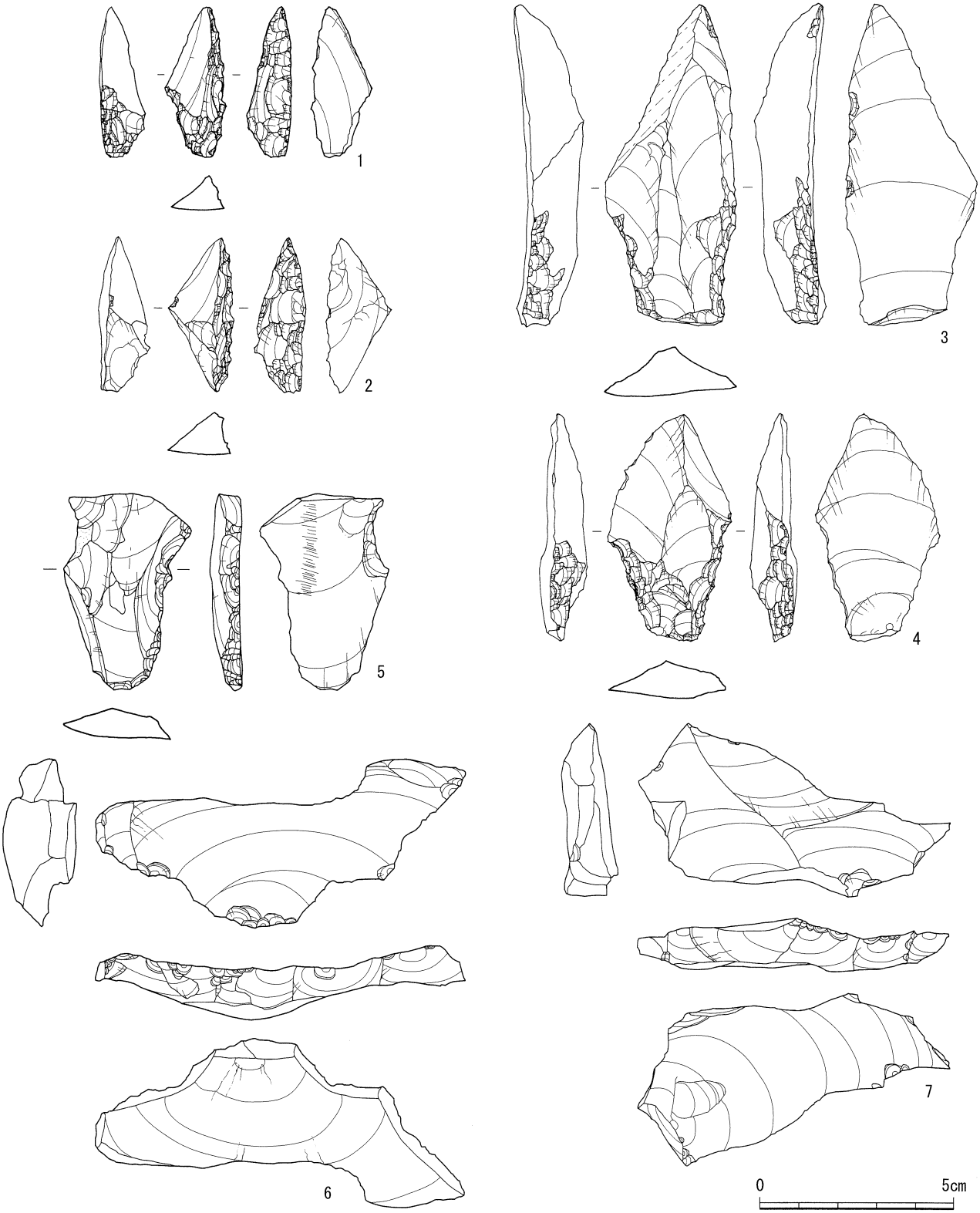
第５図　旧石器時代第Ⅰ期検出状況図（S=1/1,000、1/500）

スクレイパー　1点（第6図―5）

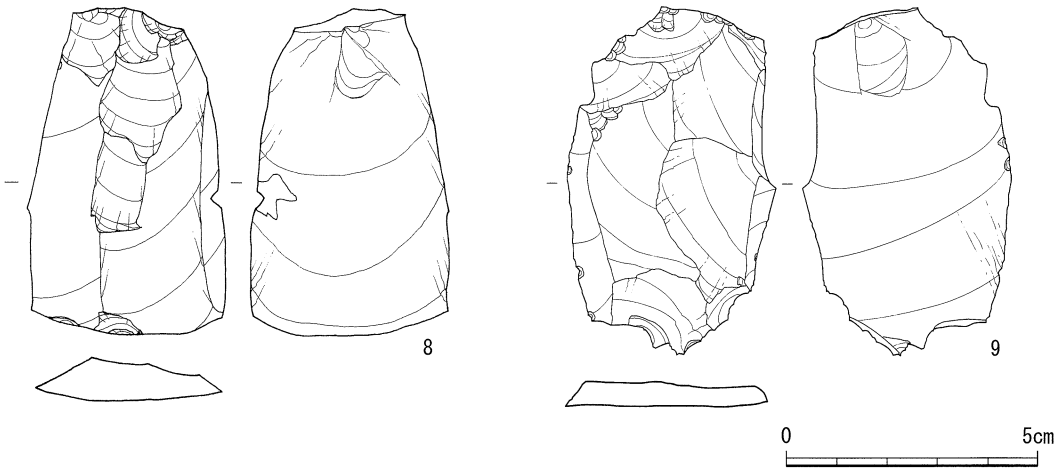
縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。右側縁部から下端部にかけて二次加工が施されている。右側縁部の刃部角は40～55°にとどまるのに対して、下端部では70°以上に及ぶ。

剥片　4点（第6・7図―6～9）

打面再生剥片（6・7）と縦長剥片（8・9）が見られる。



第6図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図1（S=2/3）



第７図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図２（S=2/3）

＜接合資料＞

接合作業を試みた結果、接合資料は４例確認され、そのうち１例の図化を行った。なお、以下の接合資料の記述において、矢印（→）は剥離接合を示している。

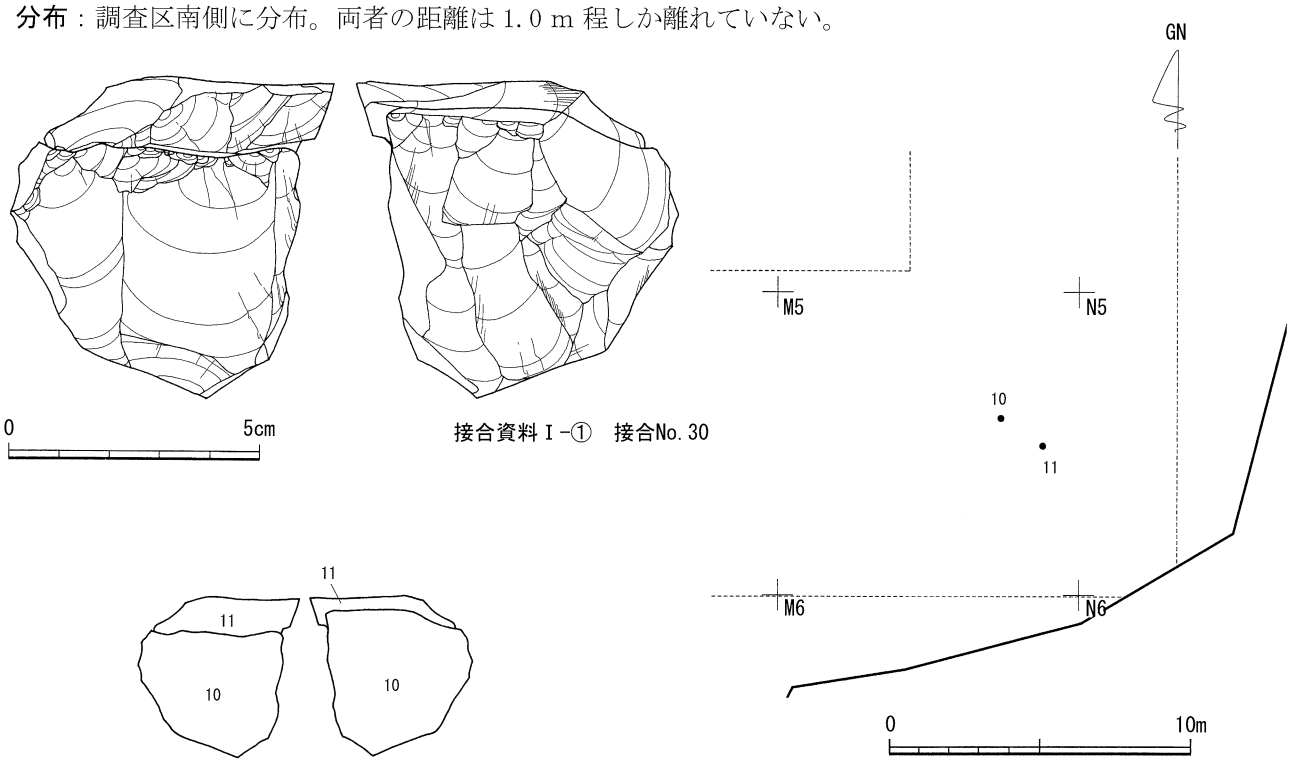
接合資料Ⅰ―①　接合No.30（第８・９図―10・11）

作業内容：縦長剥片製作

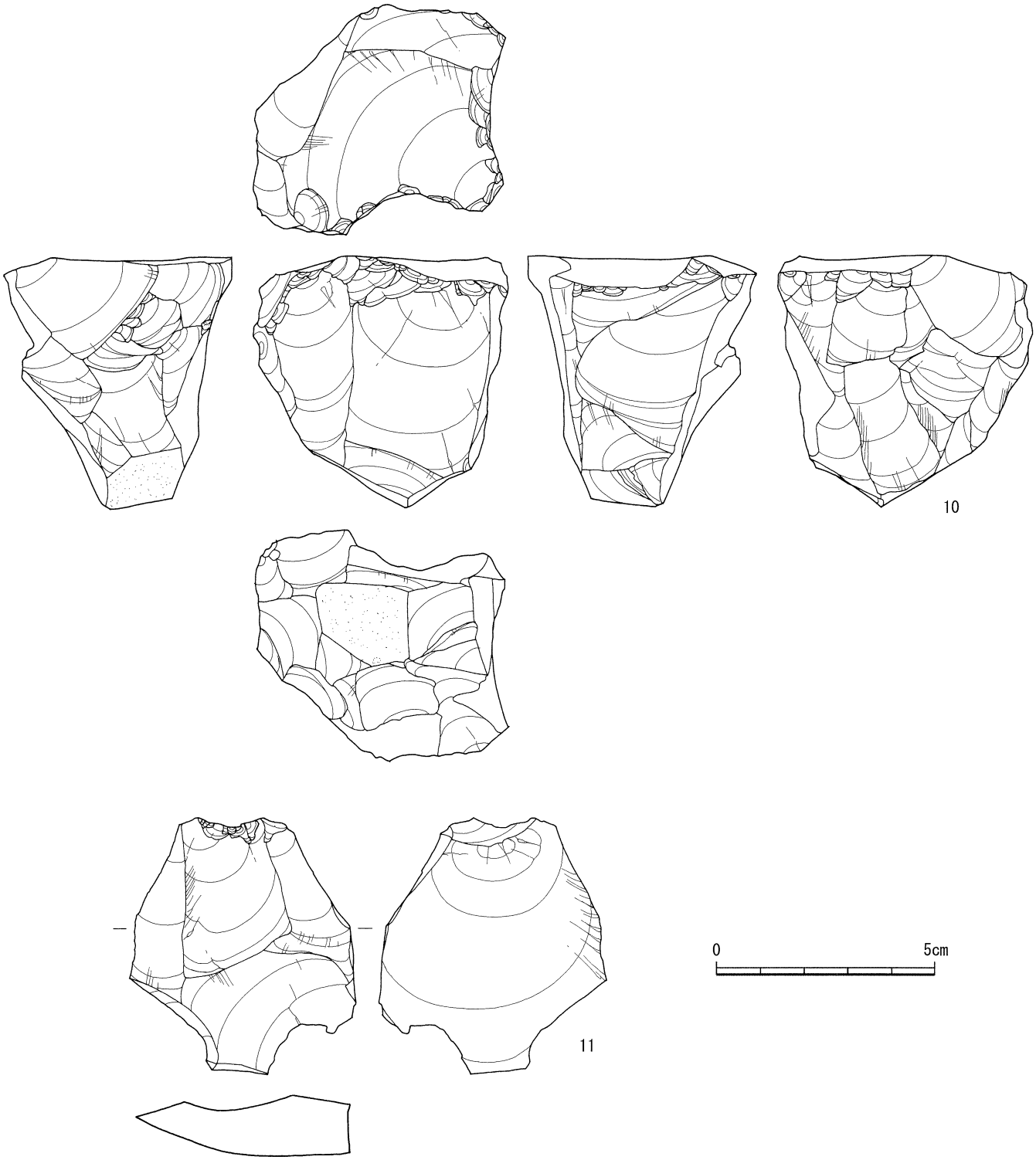
剥片作業の復元：[10→11]

剥離面の切り合い関係の観察によると、まず打面が形成され、その打面から縦長剥片剥離が行われる。その後、打面が入念に整形され、縦長剥片が剥離される。さらに打面再生（11）が行われ、再び縦長剥片が剥離される。残核形態は角錐状である。

分布：調査区南側に分布。両者の距離は1.0ｍ程しか離れていない。



第８図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図３（S=2/3）接合資料Ⅰ―①分布図（S=1/250）



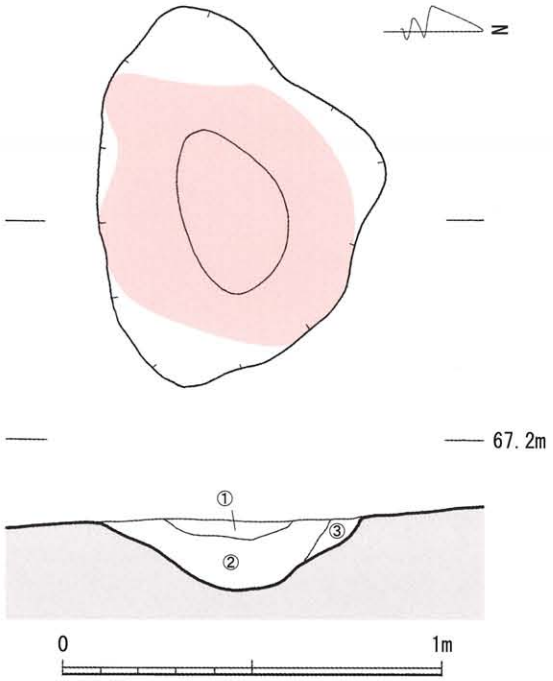
第９図　旧石器時代第Ⅰ期石器実測図４（S=2/3）

2　第Ⅱ期（Ⅵ層）の調査（第10～67図）

第Ⅱ期は、Ⅵ層上部を主体とした細石刃石器群で、一部上下層に遊離した状態で遺物が出土している（第11図）。遺構は、土坑１基（第10図）を検出した。

(1) 土坑（第10図）

１号土坑は、焼土を伴う土坑である。調査区東部Ｌ５グリッドで検出し、検出面はⅥ層上部である。長径1.0ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.2ｍで、楕円形に近い不定形である。埋土は、焼土粒を含む赤褐色土が主である。遺物は出土してない。しかし、遺物との出土高低差もさほど違いないことから、第Ⅱ期に帰属するものと考えられる。



１号土坑土層注記
①赤褐色土（5YR4/8）…径１mm以下の炭化粒を含む。
②明赤褐色土（2.5YR4/8）…径５mm程の焼土ブロックを多量に含む。
③にぶい赤褐色土（5YR4/4）…①と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。

第10図　旧石器時代第Ⅱ期１号土坑実測図（S=1/20）

(2) 出土石器（第13～67図―12～287）

第Ⅱ期の石器は、調査区南東部のＫ４グリッドとＪ４～５グリッドの２か所に密集して分布している。これをA・Bブロックと呼称する。出土石器量はそれらより少ないものの、この他にも数か所のブロックが認められる。これらを調査区南東側から順にC・D・E・Fブロックと呼称する（第12図）。

遺物は合計793点を確認した。器種別の内訳は、細石刃９点、細石刃核25点、スクレイパー12点、敲石２点、磨石１点、その他は剥片類である。

石材別に見ると、剥片石器については大きく流紋岩製と黒曜石製とに分けられ、前者が720点、後者が40点と前者のほうが主体となる。

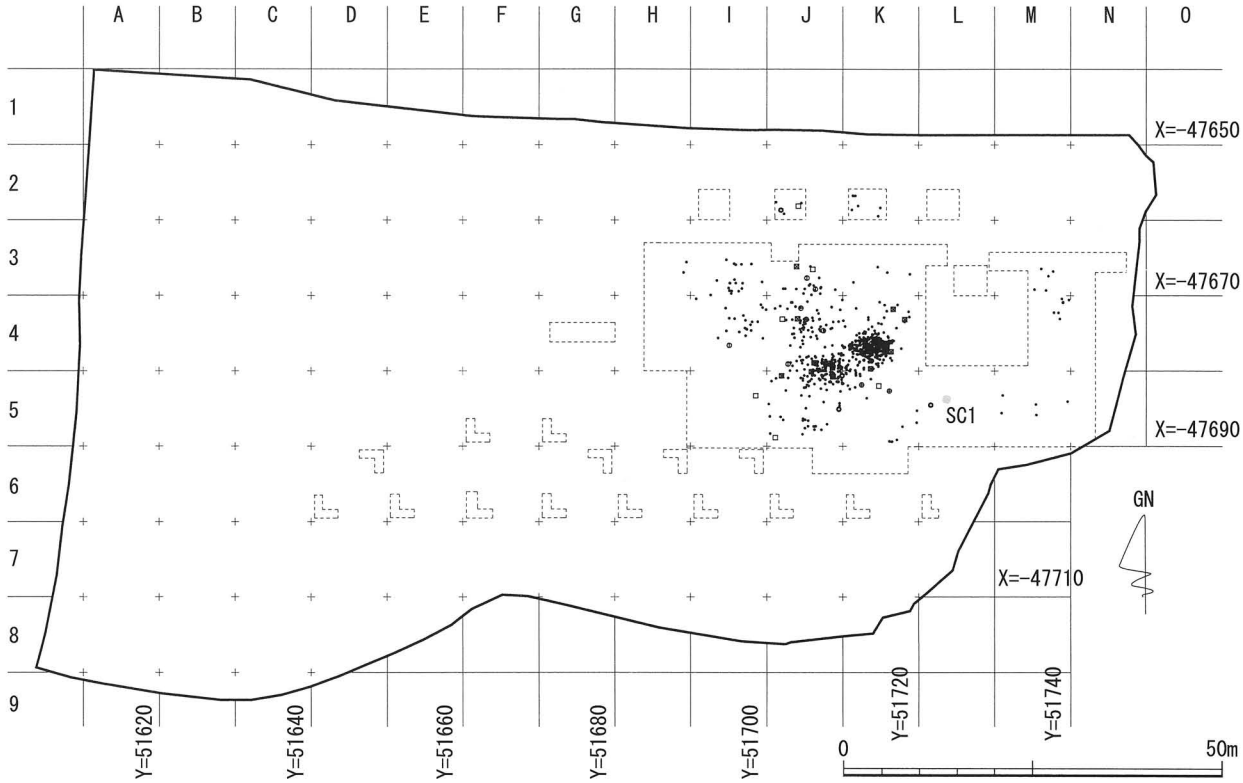
黒曜石は、蛍光Ｘ線分析の黒曜石産地同定結果（第Ⅳ章第１節）から、同定可能な試料39点を産地別に分けると、大きく桑ノ木津留産と腰岳系に分けられ、前者が25点、後者が11点となる。この他の３点が現時点では産地不明に該当する元素比を示しており、未知の産地由来の黒曜石である可能性がある。

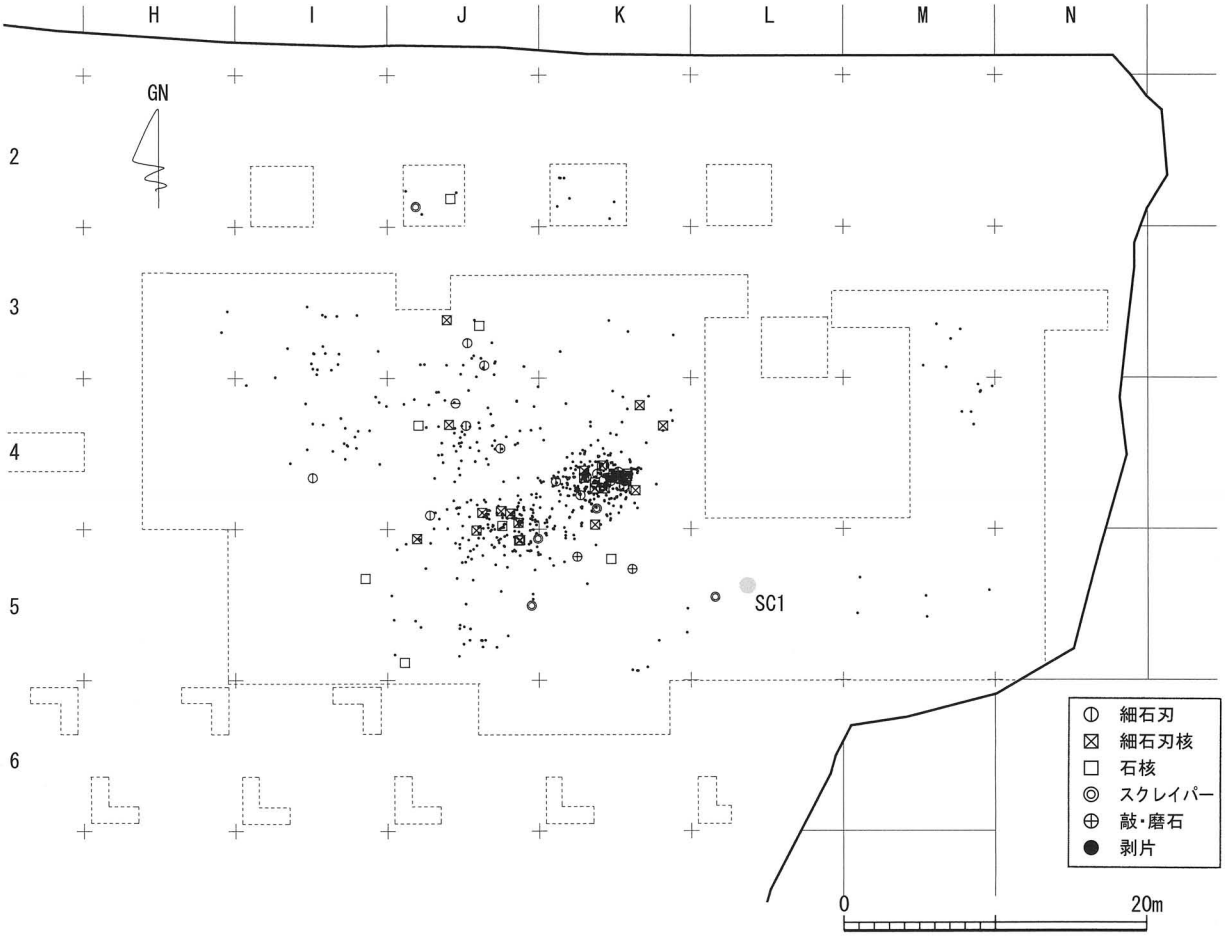
その他の石材製石器として、敲石にはチャート製のものと礫岩製のものがあり、磨石は砂岩製である。

接合作業を試みた結果、接合資料が76例確認され、そのうち19例の図化を行った。これを石材別にみると、流紋岩69例、黒曜石５例、ホルンフェルス２例である。これらの接合状況はそれぞれ異なっている。すなわち、流紋岩には、10点以上の剥片が接合し、大きさも拳大以上の大きさに復元されるものがあるのに対して、黒曜石やホルンフェルスには２点程が接合するもので、大きさも5.0cm以下という状況である。

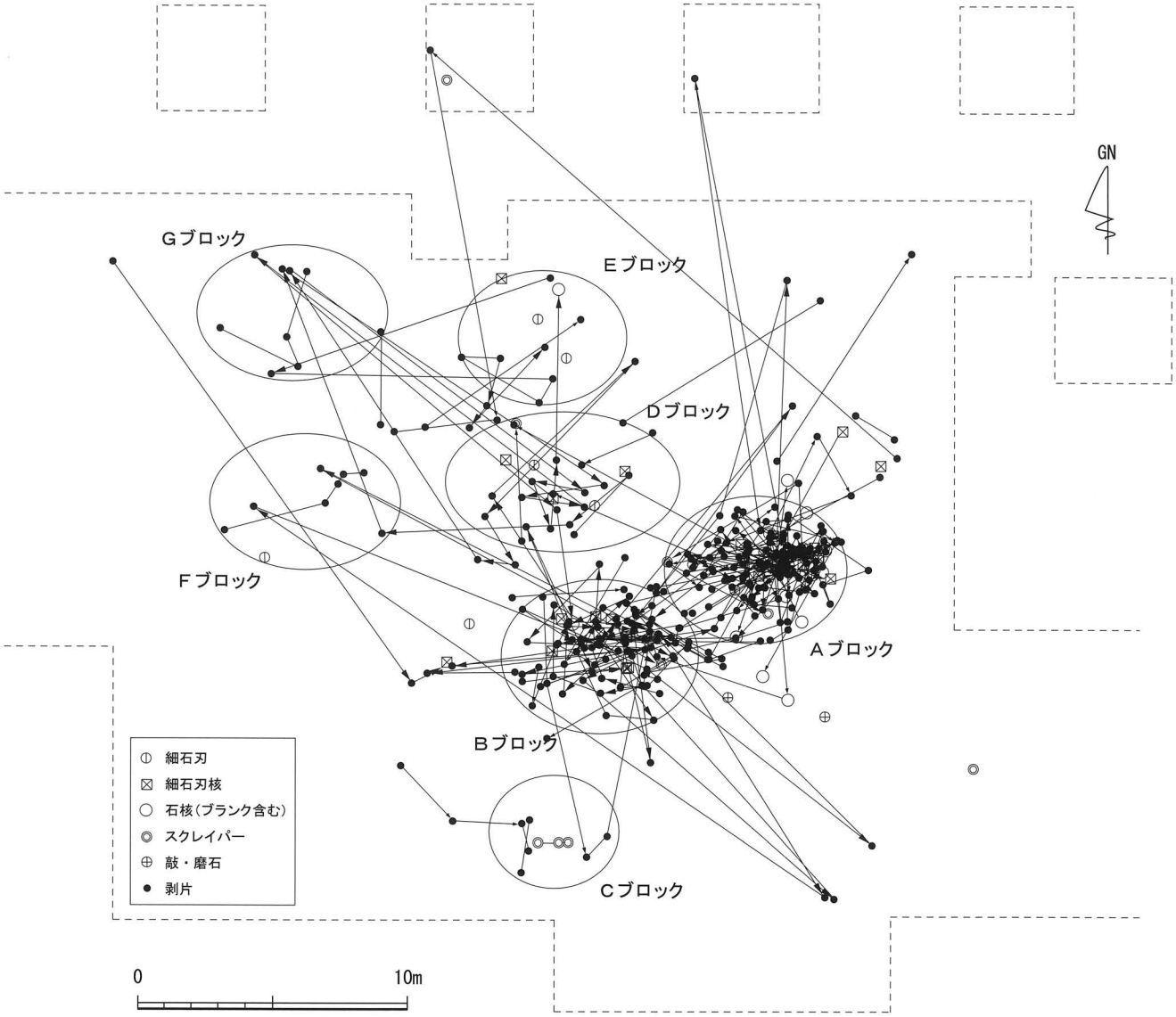
なお、以下の接合資料の記述において、剥片剥離作業の復元経過を次のように示す。すなわち、矢印（→）は剥離接合を示し、プラス（＋）は折れ接合を示す。また、接合資料の中に欠落部分があり、それが残存する資料との関係の中で捉えられる場合、これを（○）として記述している。

以下、石材別に記述していく。





第11図　旧石器時代第Ⅱ期検出状況図（S=1/1,000、1/500）



第12図　旧石器時代第Ⅱ期主要遺物の分布と接合関係（S=1/250）

流紋岩製石器

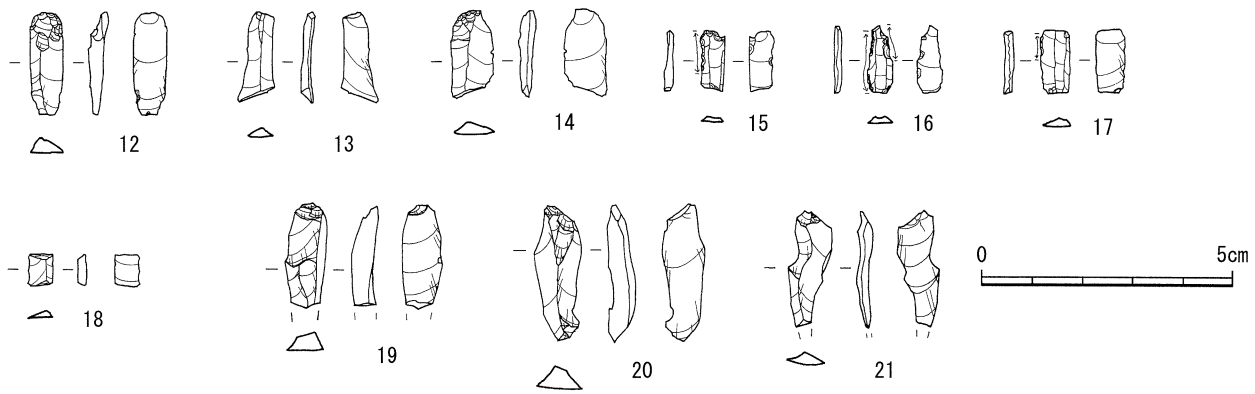
＜単体資料＞

細石刃　7点（第13図―12～18）

部位別には、頭部が4点、中間部が3点である。13を除いて頭部には、頭部調整が認められる。全て単剥離打面である。また16の両側辺、15・17の片側辺には、微小剥離痕が認められる。

細石刃様剥片　3点（第13図―19～21）

形態的には細石刃に類似するが、厚みがあること（19・20）、直線的ではないこと（21）から、細石刃と呼べるものではない。調整剥片あるいは失敗品であると考えられる。



第13図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図1（S=2/3）

細石刃核　8点（第14・15図―22～29）

22は、厚みのある剥片を素材とする。素材剥片の一端に打撃が加えられ半割される。この時、主要剥離面が石核の側面に設定される。石核調整は右側面における調整が主体である。調整は細石刃核の打面からが中心だが、右側面では一部下（背）縁からの調整も認められる。打面上には側面からの打撃が加えられ、剥離痕が認められる。細石刃剥離は、両小口面で行われた可能性があるが、作業面aでの剥離作業が主体となる。作業面bでの細石刃剥離痕は明瞭ではないが、稜上調整と考えられる細やかな調整痕が認められ、細石刃剥離が行われた可能性がある。

23は、厚みのある剥片あるいは分割礫を素材とする。まず、打面形成が行われる。この打面はネガ面である。次いで行われる石核調整は、そのほとんどが、この打面からの打撃による。どちらの側面から先に行われたかは定かではない。両側面ともに石核の中央部分に大きな剥離面が認められる。この他に両側面において下縁調整が行われる。これと並行して打面上には、側面からの打撃による調整が施される。細石刃剥離は22と同様に両小口面で行われる。

24は、自然面のある石核から剥離された剥片を素材とする。素材剥片の背面側に打撃が加えられ、細石刃核の打面が形成される。打面には全く調整が施されていない。石核整形は、自然面を打面とした右側面および下面の形成である。さらに、右側面において細やかな調整が施される。細石刃剥離は小口面で行われ、7条の細石刃剥離痕が認められる。

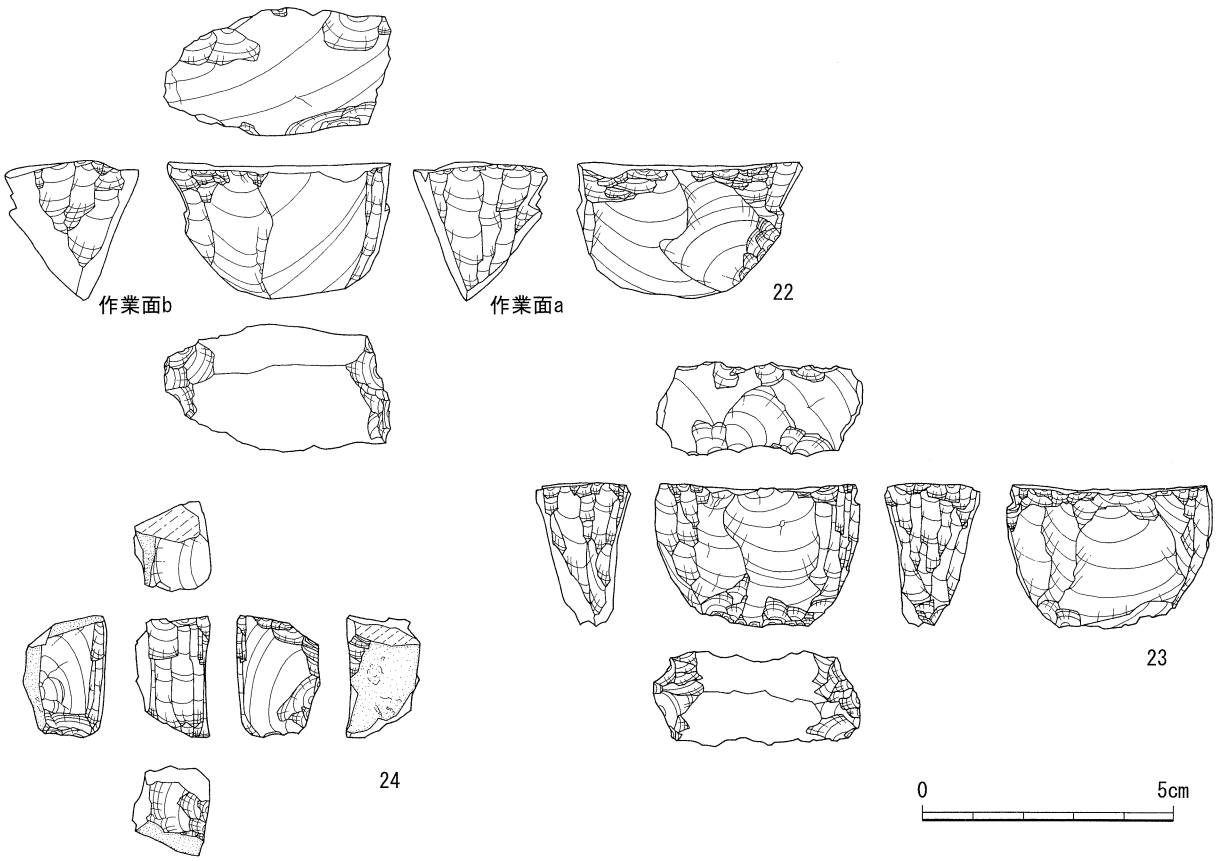
25は、板状の剥片を素材とする。この素材剥片を分割して打面が形成される。打面には全く調整が施されていない。石核調整は、打面からの打撃による右側面および左側面における下縁から背縁の調整である。調整は非常に細やかなものである。細石刃剥離は小口面で行われ、3条の細石刃剥離痕が認められる。

26は、2.0 cm 前後の厚みをもつ剥片を素材とする。素材剥片の剥離は、残核の背面を打面として行われている。この素材剥片の右側に打撃が加えられ、平坦面が形成される。これが将来の細石刃核打面である。打面には全く調整が施されていない。石核調整は、左側面における背縁調整および側面調整、右側面における側面調整である。左側面には、作業面側からの剥離痕が認められることから、細石刃剥離に先立って稜調整が介在している可能性がある。細石刃剥離は小口面側で行われ、5 条の細石刃剥離痕が認められる。

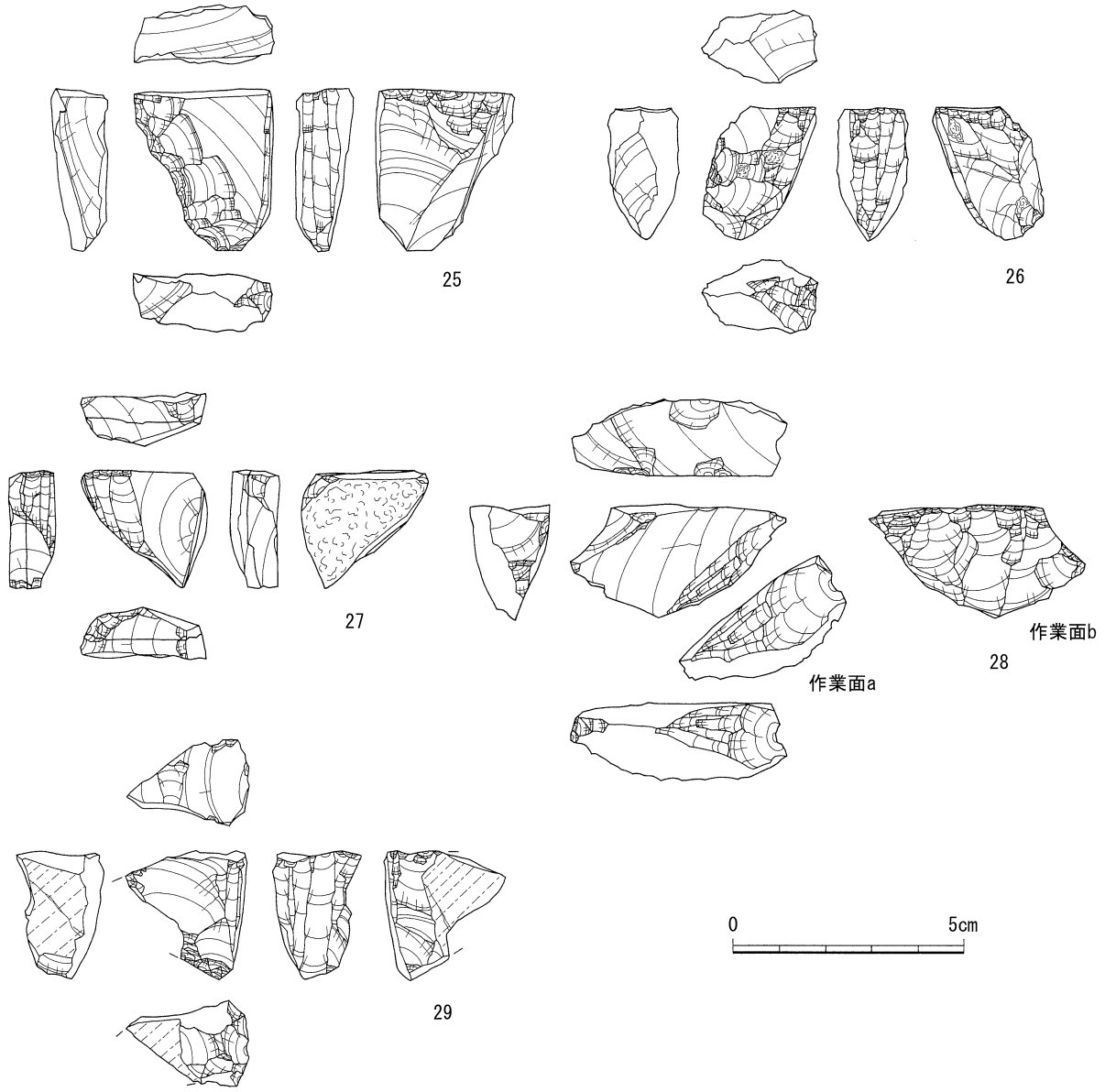
27は、直方体状の石核から剥離された薄手の剥片を素材とする。細石刃核の打面には、石核の右側面が利用され、素材剥片の主要剥離面が設定される。打面には全く調整が施されていない。細石刃剥離は、小口面から右側面側にかけて行われる。

28は、剥片を素材とする。この背面形態は不明である。素材剥片の背面側に打撃が加えられ、打面が形成される。打面にはいくつかの小さな剥離が認められるが、意図的なものかどうかは不明である。石核調整は右側面のみで行われる。全て細石刃核打面からの側面調整である。細石刃剥離は両小口面で行われた可能性がある。1 つは作業面 a での細石刃剥離で、5 条の細石刃剥離痕が認められる。最終的には細石刃剥離痕の上部全体に広がる剥離が施される。剥離は細石刃剥離とは異なる強い打撃によるものだが、剥離痕が下端に抜けていないため、作業面再生の失敗剥離と見なされる。もう一方の作業面 b では、細石刃剥離痕が明瞭ではない。剥離痕は短く下部がステップ状になっていることから、ヒンジ・フラクチャーによる失敗剥離と考えられる。

29は、おそらく厚みのある剥片あるいは分割礫を素材とする。打面は、作業面側から形成される。打面には全く調整が施されていない。石核整形は、両側面ともに下面からの側面調整が主体であり、右側面においてのみ細石刃核打面からの側面調整が施される。細石刃剥離は、残核においては小口面の一端で行われているが、石核背面が節理によって欠損しており、実態は不明である。



第14図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 2 (S=2/3)



第15図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図３（S=2/3）

流紋岩製細石刃核単体資料の評価

素材の利用：剥片素材で、剥片の主要剥離面を側面に設定する。

打面の設定：単剥離面を打面に設定する。打面の加工痕はあるものの、細石刃剥離に直接関係するものではない。

石核の調整：細石刃剥離時と同様の打面から、側面調整が施される。側面調整の他に下縁調整や背縁調整が施される個体もある。正面形はＶ字状あるいは長方形状である。

作業面の設定：素材剥片の一端を作業面とする。基本的に打面転移は行われないが、短軸両端で細石刃剥離が行われるもの（22・23）や、異なる平坦面を打面とした細石刃剥離が見られるもの（28）がある。

細石刃核は、従来の分類でみれば全て船野型の特徴を備えるものである。ただし、23には下縁調整が、26には背縁調整が施されており、25には両方の調整が認められる。これらの特徴は、船野型というよりも福井型の特徴といえる。

スクレイパー　5点（第16・17図―30～34）

30は、厚みのある剥片を素材とする。背面のほとんどは自然面に覆われている。剥片の左側縁部に連続的な二次加工が認められる。刃部角は40～50°である。

31は、縦長剥片を素材とする。剥片の左側縁部には、連続的な二次加工が認められる。刃部角は30～40°である。

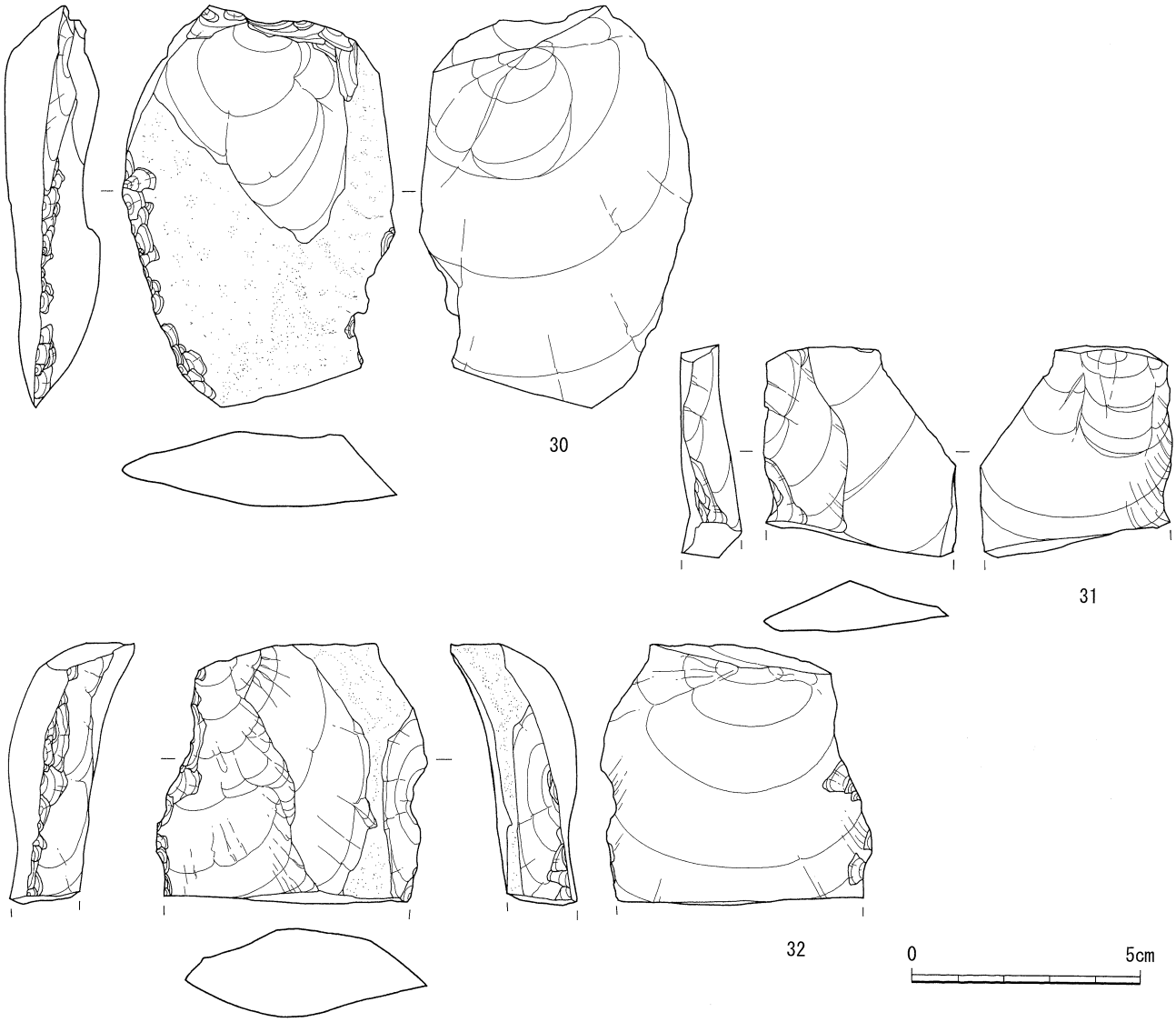
32は、分厚い縦長剥片を素材とする。単剥離打面をもち、連続的な縦長剥片剥離の行われた石核から剥離されたものであると想定される。背面右側には、自然面が残っている。両側縁には二次加工が施されているが、左側縁の方がより丁寧である。刃部角は左側縁で40～70°、右側縁で60～90°である。下半部は欠損している。

33は、縦長剥片を素材とする。剥片の右側縁、下部に連続的な二次加工が認められる。刃部角は右側縁で30～50°、下部で30～40°である。

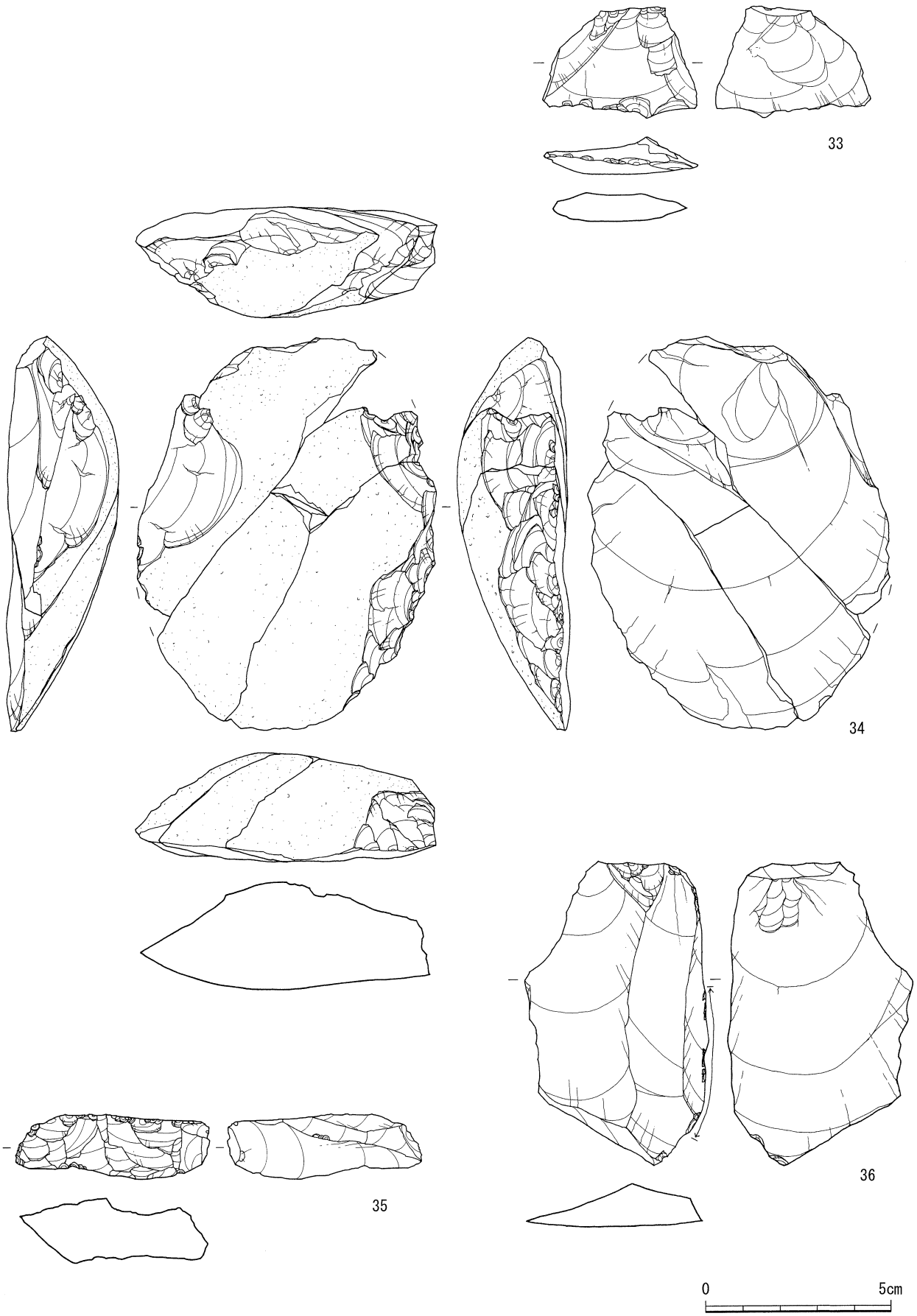
34は、円礫から剥離された大型の剥片を素材とする。背面のほとんどが自然面で構成され、打面は単剥離打面である。剥片の右側縁には、粗い二次加工が施されている。刃部角は50～80°で、下部ほど角度は浅い。欠損が激しく、4つの石片から構成されている。

剥片　2点（第17図―35・36）

35は、調整剥片と考えられる剥片である。36は、縦長剥片素材で右側縁に微小剥離痕が認められる。



第16図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図4（S=2/3）



第17図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図５（S=2/3）

＜接合資料＞

接合資料Ⅱ―①　接合No.7（第18・19図―37～40）

作業内容：細石刃製作

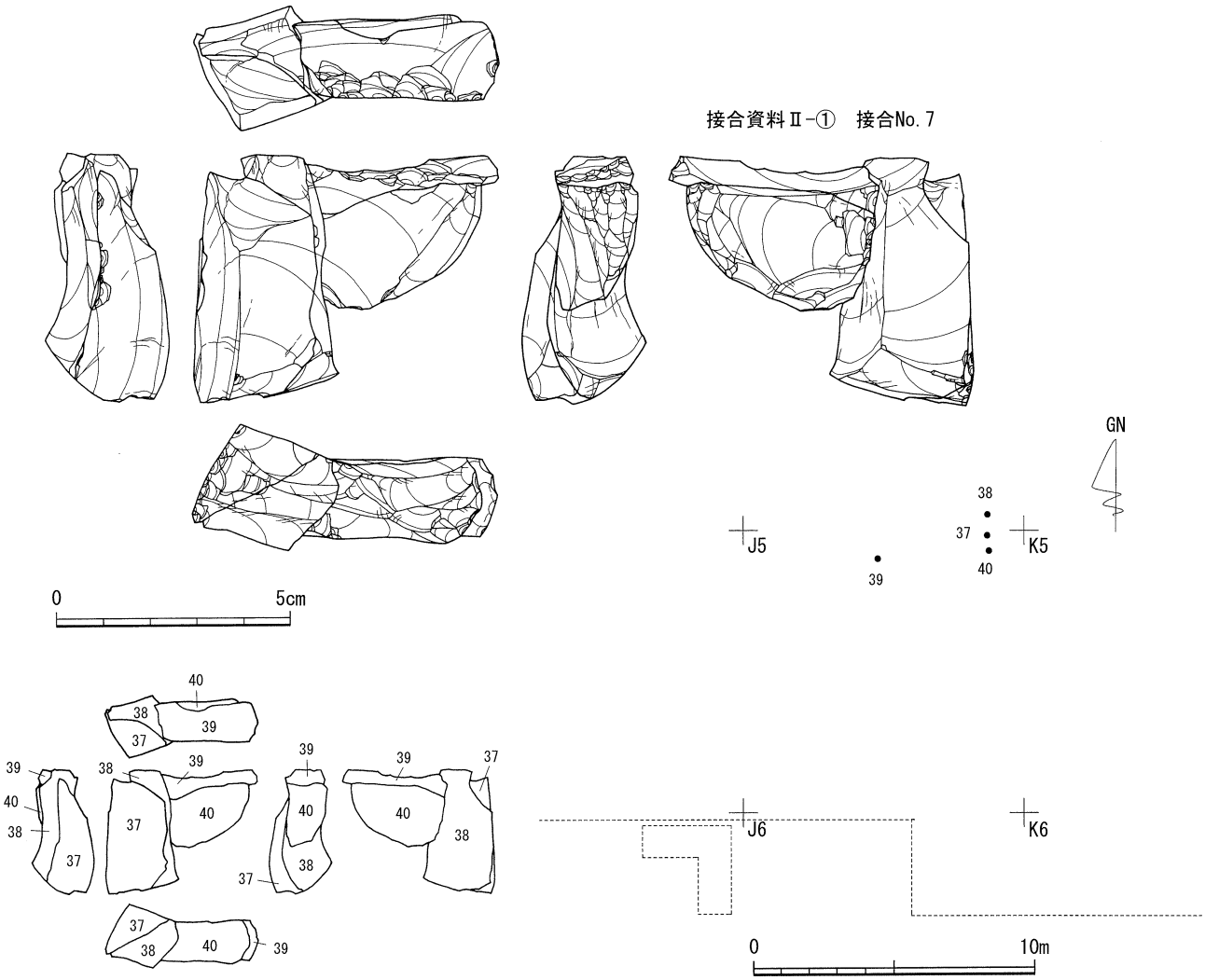
剥離作業の復元：［37→38＋39→40］

素材は、板状の剥片である。素材剥片の背面と腹面で同一の方向からの剥離面であることから、同一打面からの連続的な剥片剥離の行われた石核の存在が予想される。素材剥片の背面側に打撃を加え、細石刃核の打面が形成される。そして、素材剥片の小口面側で細石刃が剥離される（推定作業面長：6.0 cm 以上）。

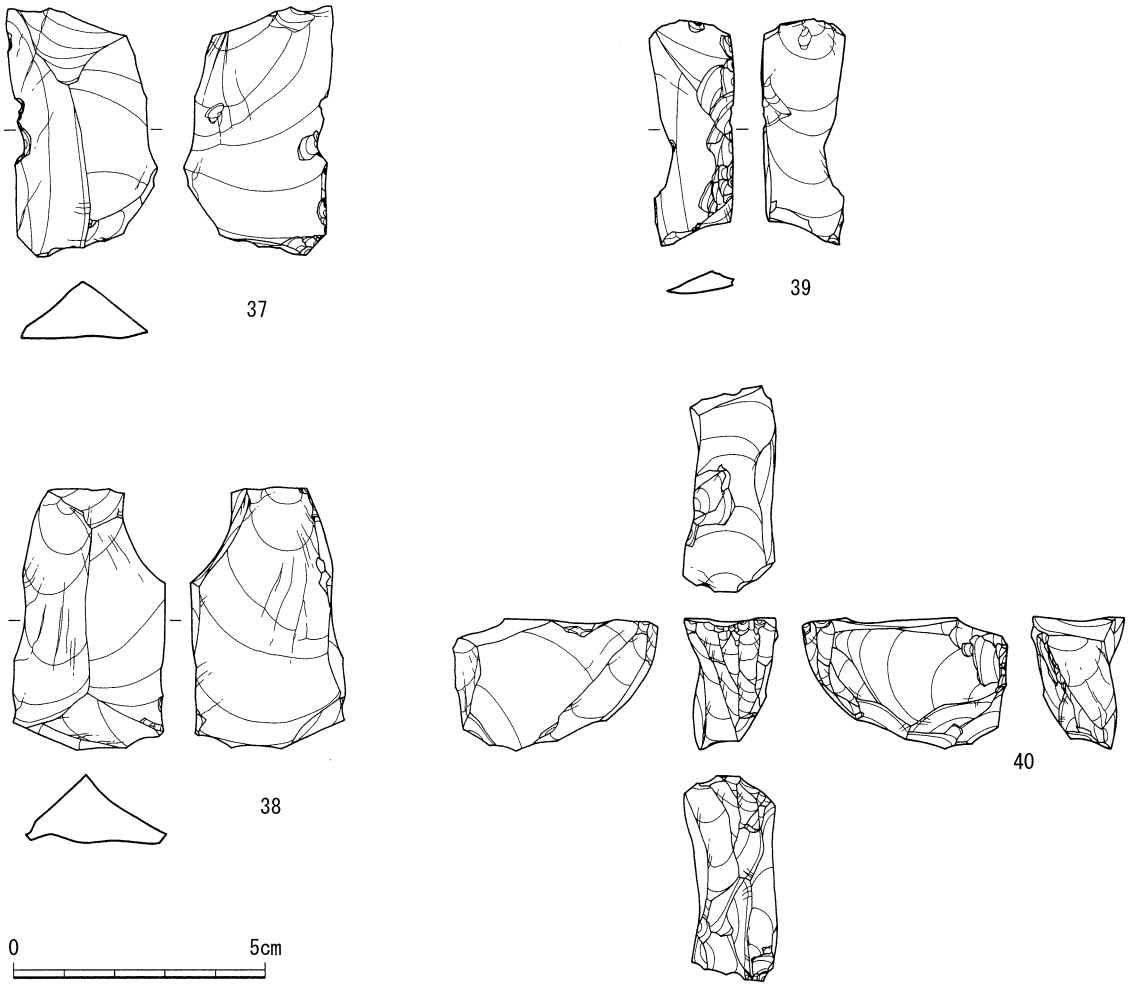
その後、2 回の打撃によって打面再生が行われる。打面再生後、残った石核を用いて細石刃核の整形が行われる。石核整形の内容は、側面の形成および下縁や背縁調整で、これらは右側面においてのみ実施される。以前の細石刃核の背面部分を打面とし、横打調整による打面形成が行われる。その後、打面再生を介在しつつ、細石刃剥離が行われる。

この接合資料は、2 回の異なる細石刃製作過程に分かれている。最初の段階では、平坦打面からの細石刃剥離であるのに対して、次の段階では、横打調整打面からの細石刃剥離である。石核調整に関しても、前者ではあまり施されていないのに対して、後者では、下縁や背面に調整が認められる。これは、従来の細石刃核分類では、前者が船野型、後者が福井型に属すると考えられているものである。

分布：B ブロックに分布する。最大で 3.5 m 離れる。



第18図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 6（S=2/3）接合資料Ⅱ―①分布図（S=1/250）



第19図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図７（S=2/3）

接合資料Ⅱ―②　接合No.16（第20図―41～48）

作業内容：細石刃製作

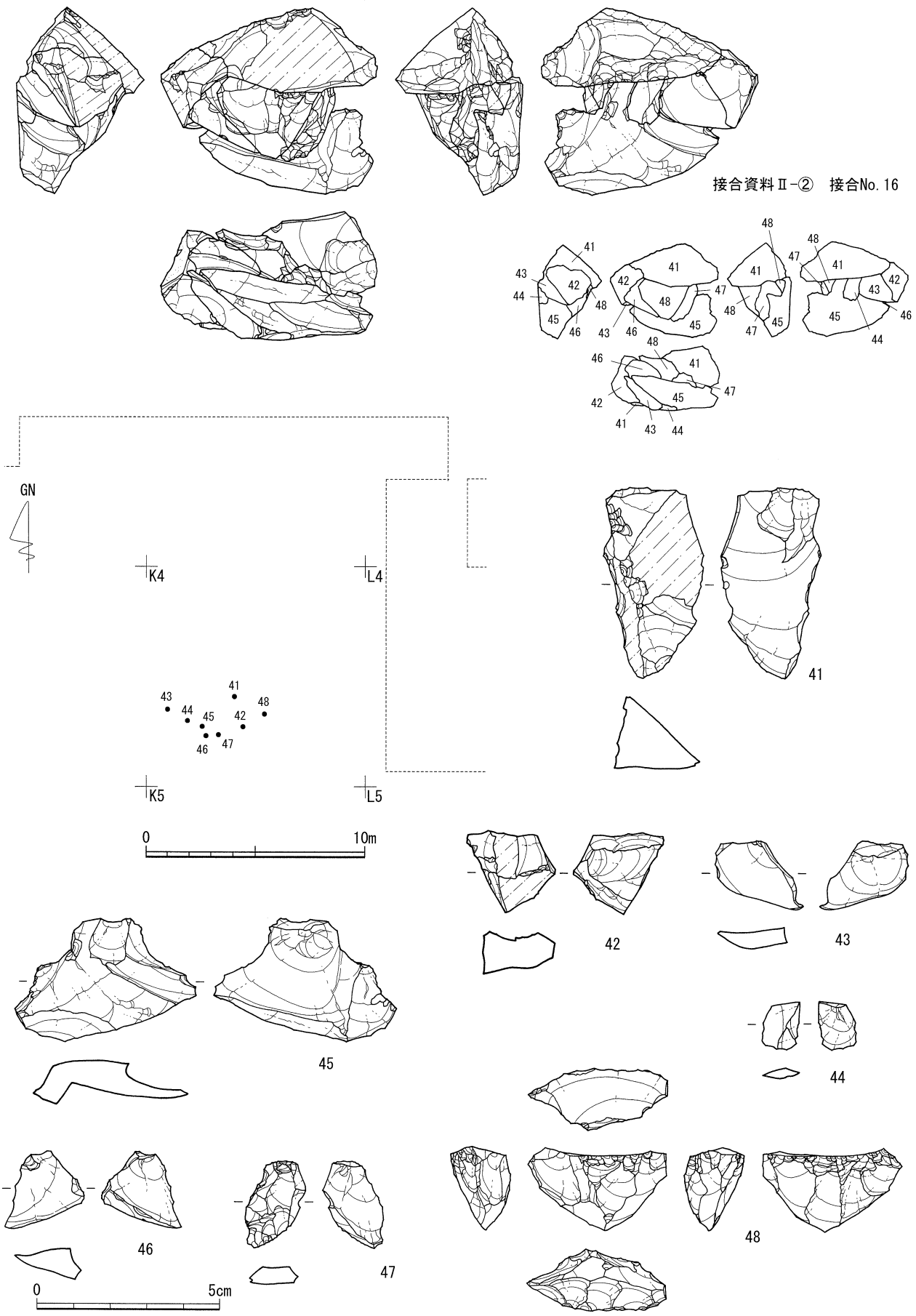
剥片作業の復元：［41＋42→43→44→45→○→46→○→○→○→47→○→48］

径約 10.0 cm の亜角の半割礫を素材とする。その平坦な分割面を打面として石核整形が行われるが、数枚の剥片を剥離した後に、剥片（41＋42）を剥離することによって打面を一新する。この剥片（41）には、二次加工が認められることから、石器あるいは（細）石刃核ブランクとして利用された可能性がある。

その後、先に形成された剥離面を打面とした細石刃製作が開始される。左右両側面において側面調整が行われる。この調整は、ほとんどが細石刃核打面からの打撃によるものだが、左側面においては下縁調整が施される。以上の石核整形の状態は、間違いなく細石刃核の整形に関係するものである。しかし、明瞭な細石刃剥離痕は認められず、細石刃剥離に至る前に廃棄された可能性が高い。

なお、初期段階の石核の打面が、打面形成剥片から推測して長軸 4.5 cm、短軸 3.5 cm の打面を有したものであるのに対して、最終的に整形された細石刃核の打面は、長軸 3.5 cm、短軸 1.5 cm まで縮小している。これは、石核整形時における石核の縮小過程の一端を示している。

分布：A ブロックに分布する。



第20図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図８（S=2/3）接合資料Ⅱ－②分布図（S=1/250）

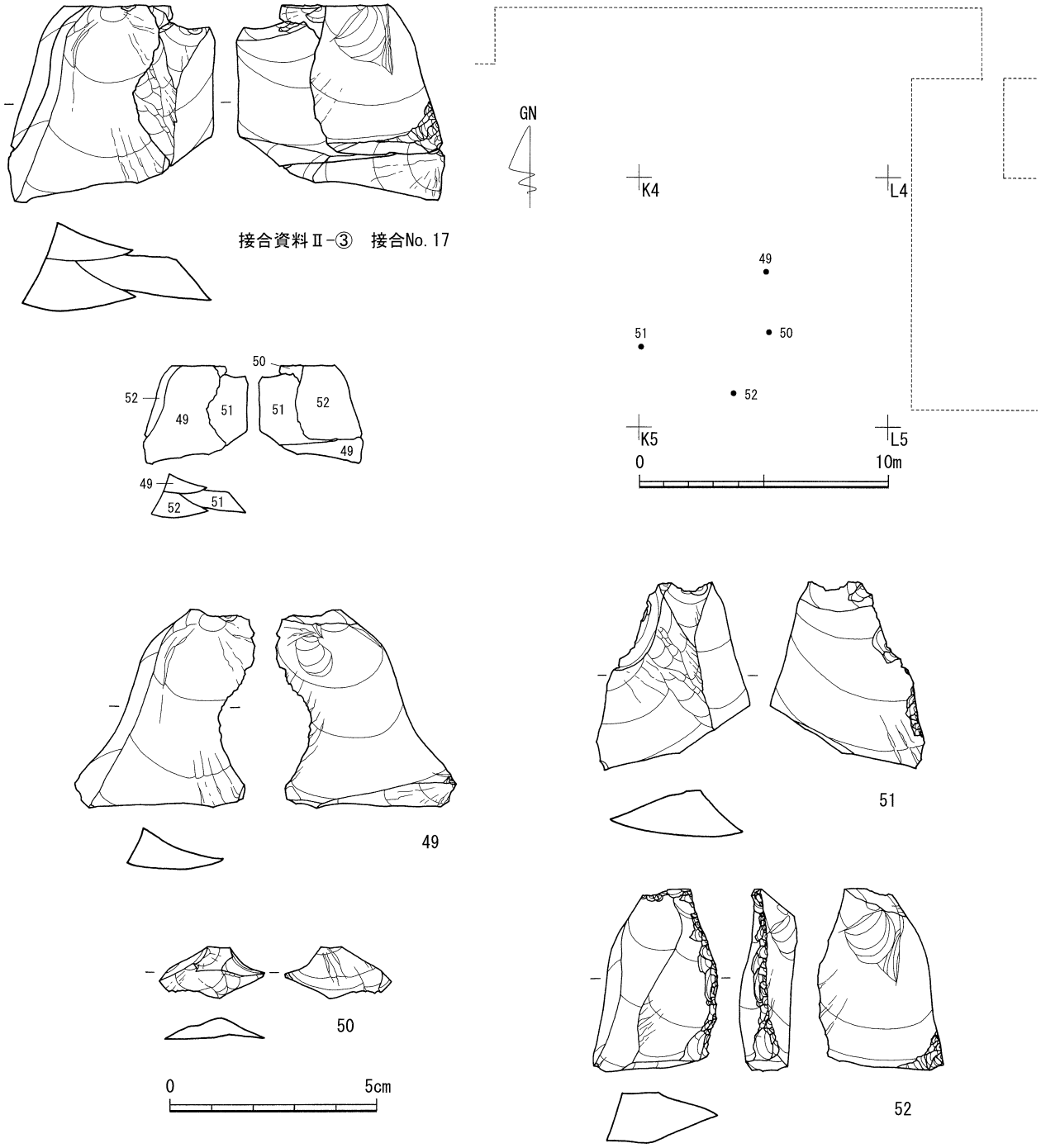
接合資料Ⅱ—③　接合No.17（第21図—49～52）

作業内容：一般剥片剥離・スクレイパー製作

剥片作業の復元：［49→50→51→52］

幅広の縦長剥片が 3 枚剥離される。石核が欠落しており、その形態の詳細は不明だが、側面や下面が意識的に形成されており、立方体状の石核が想定される。剥離された 3 枚の剥片は、それぞれほとんど同じ大きさであり、このうち剥片（51）の腹面左側縁には、二次加工が施されている。また、剥片（52）の背面右側縁には、急角度の調整が施され、スクレイパーとして利用されたものと考えられる。

分布：A ブロックに分布する。それぞれが 3.0 ～ 4.0 m 離れている。



第21図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 9（S=2/3）接合資料Ⅱ—③分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—④　接合No.18（第22図—53～56）

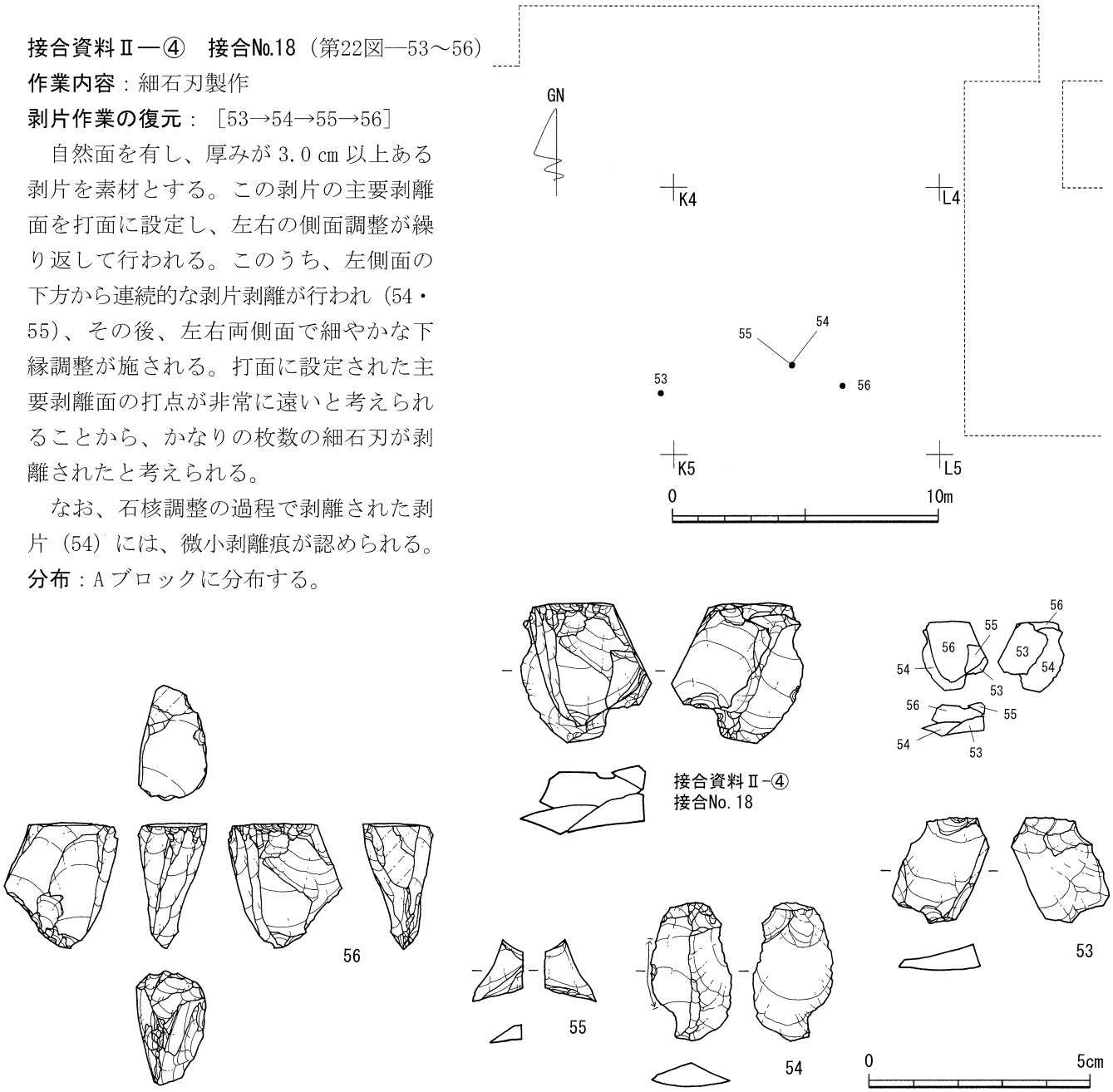
作業内容：細石刃製作

剥片作業の復元：［53→54→55→56］

自然面を有し、厚みが3.0㎝以上ある剥片を素材とする。この剥片の主要剥離面を打面に設定し、左右の側面調整が繰り返して行われる。このうち、左側面の下方から連続的な剥片剥離が行われ（54・55）、その後、左右両側面で細やかな下縁調整が施される。打面に設定された主要剥離面の打点が非常に遠いと考えられることから、かなりの枚数の細石刃が剥離されたと考えられる。

なお、石核調整の過程で剥離された剥片（54）には、微小剥離痕が認められる。

分布：Aブロックに分布する。



第22図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図10（S=2/3）接合資料Ⅱ—④分布図（S=1/250）

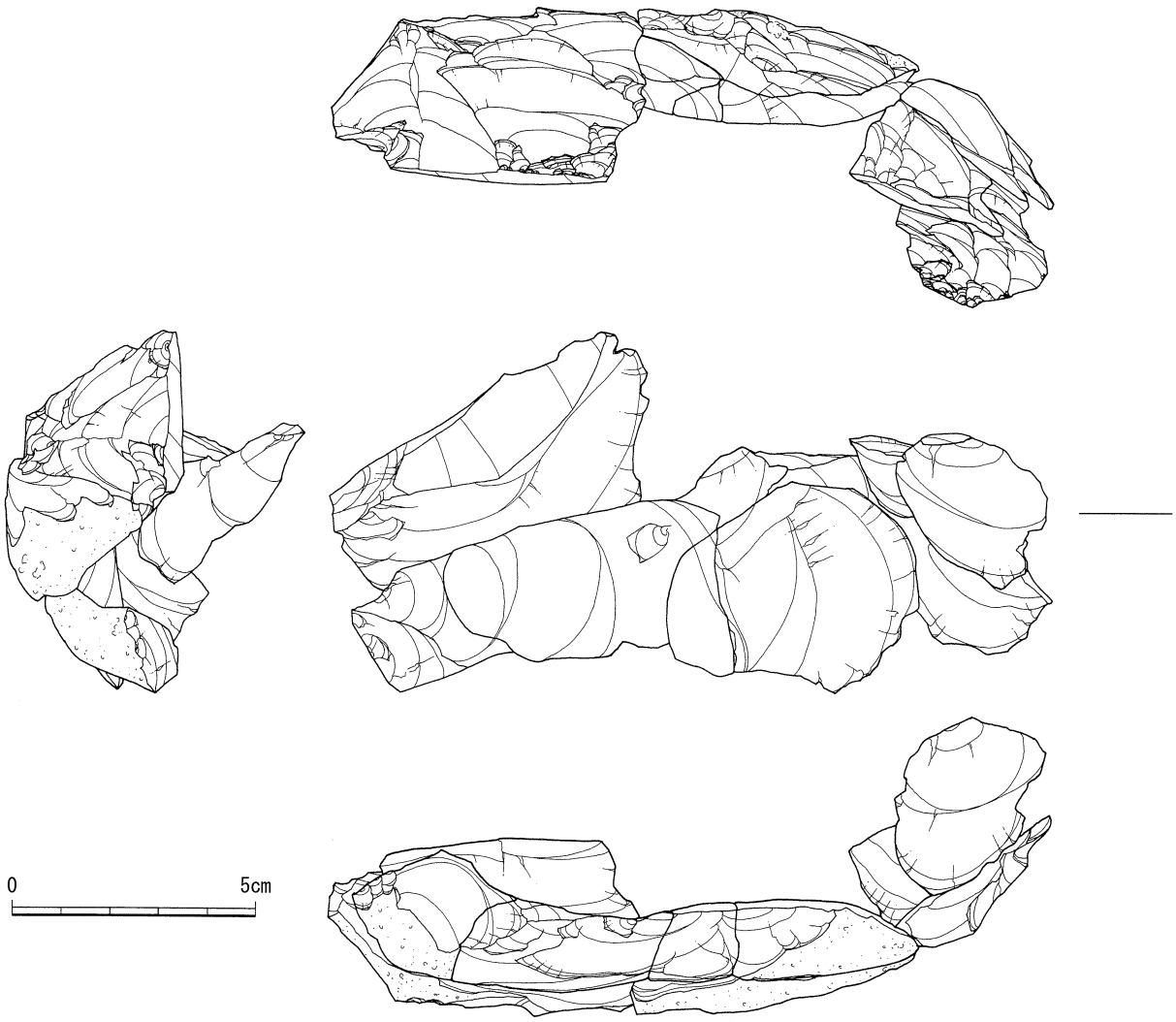
接合資料Ⅱ—⑤　接合No.24（第23～25図—57～65）

作業内容：細石刃核製作（ブランク）

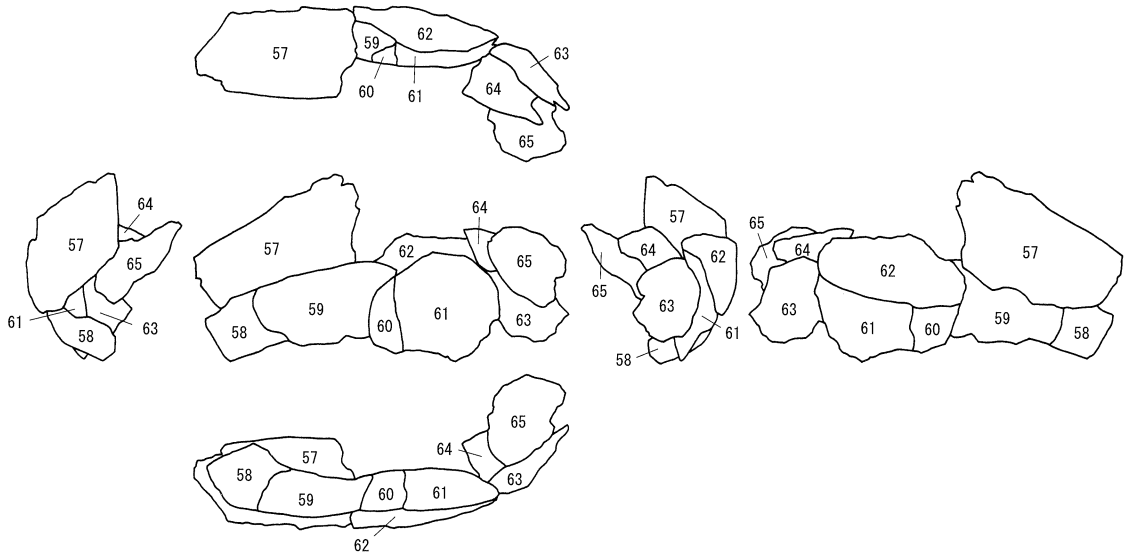
剥離作業の復元：［57→（58＋59＋60＋61＋62）→63→64→65］

まず、楕円形の円礫（長さ20.0cm、幅10.0cm、厚さ10.0cm＜推定＞）が分割される。次いで、石核整形が行われる。接合資料において下面を構成している剥片（58＋59＋60＋61＋62）は、剥離面の状態から、おそらく1回の打撃によって剥離されたものと考えられる。その後、礫の半割面を打面として側面調整が行われる。この際の打面は平坦打面である。これらの作業の後に、おそらく石核（ブランク）が製作されたと考えられるが、それは欠落している。

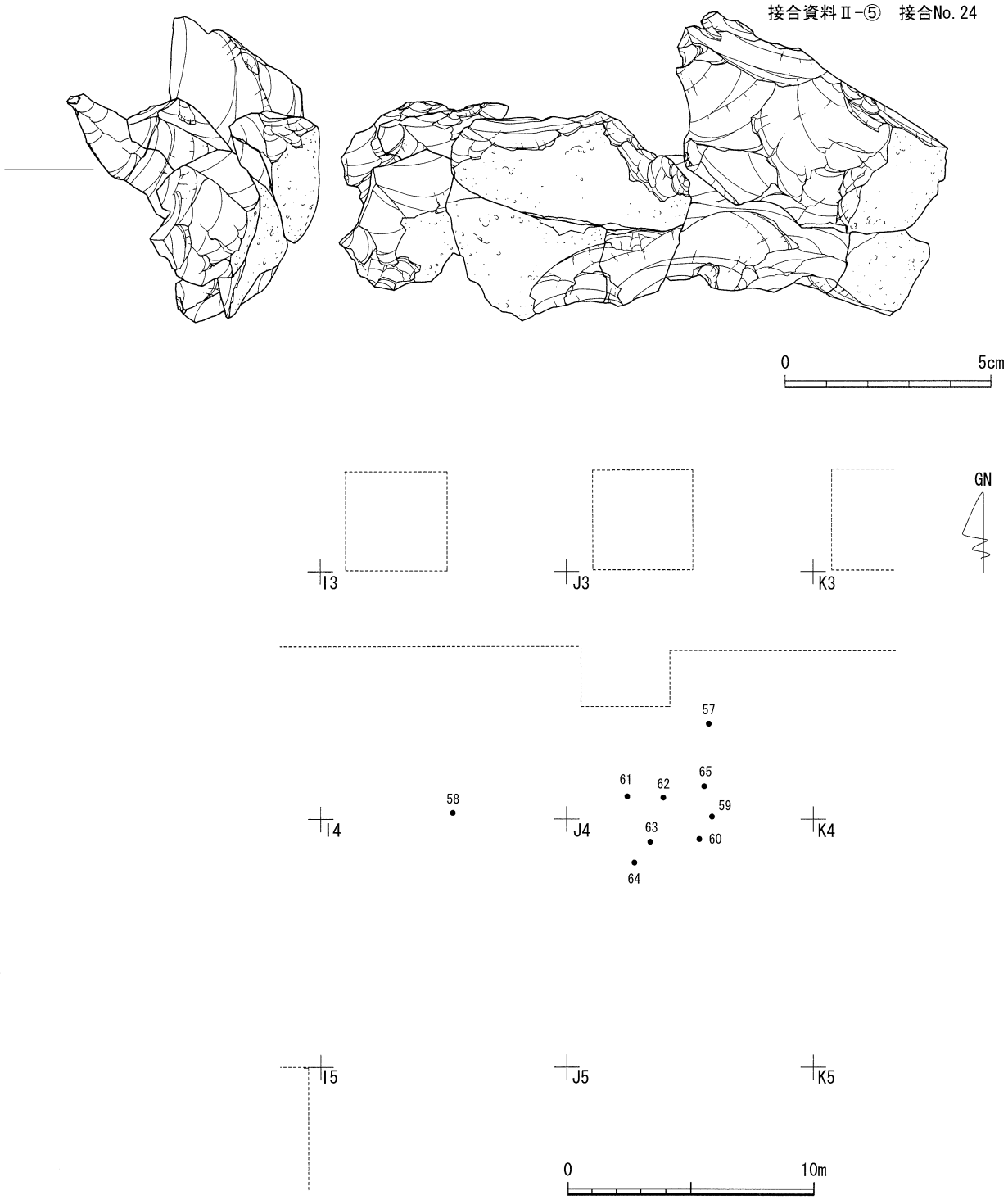
分布：Eブロックを中心に分布するが、Gブロックに1点分布する。剥離順序から見ると、E→G→Eと分布している。



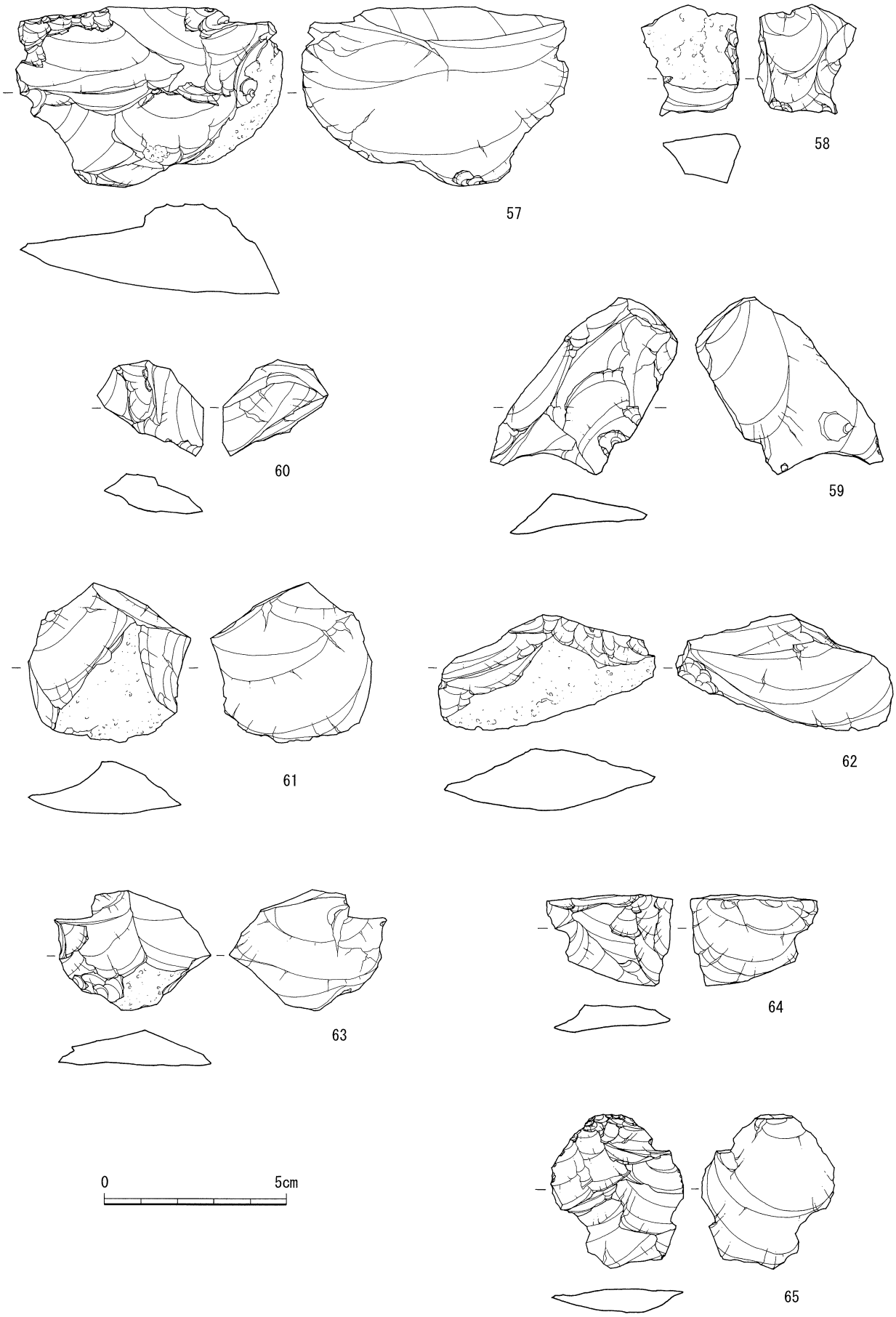
接合資料Ⅱ-⑤　接合No. 24



第23図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 11 (S=2/3)



第24図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図12（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑤分布図（S=1/250）



第25図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 13 (S=2/3)

接合資料Ⅱ—⑥　接合No.31（第26・27図—66～75）

作業内容：細石刃製作？

剥離作業の復元：［①66 ②67→68 ③69→70 ④71→72→73→74→75］

本接合資料は、4つの工程に区分される。

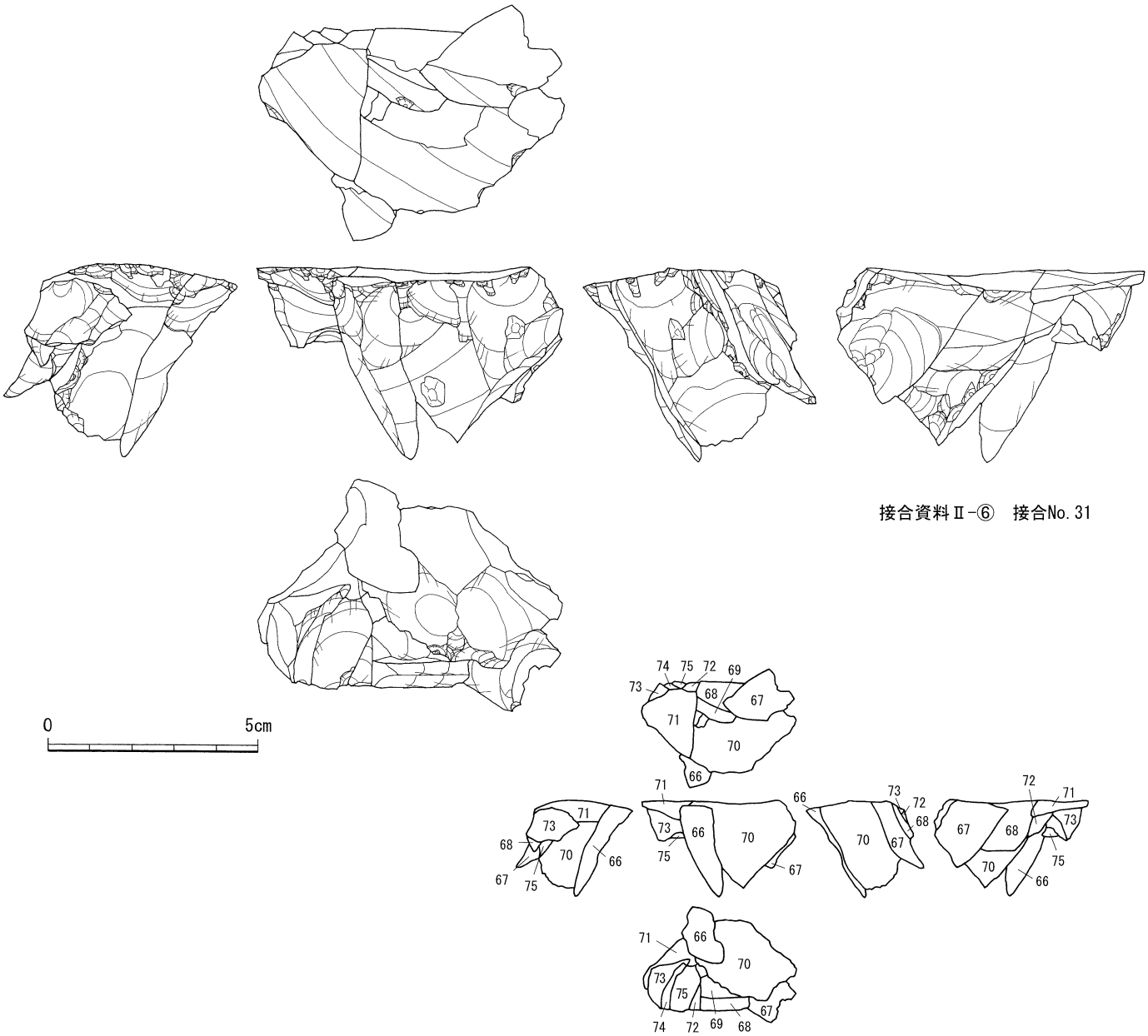
〈工程①〉まず、原礫あるいは大ぶりな剥片を半割する。そして、その半割面（ネガ面）を打面とした縦長剥片剥離作業が行われる。

〈工程②〉先の打面とは対極の面を打面として、大振りな剥片a（71＋72＋73＋74＋75＋α）、剥片b（67＋α）が剥離される。

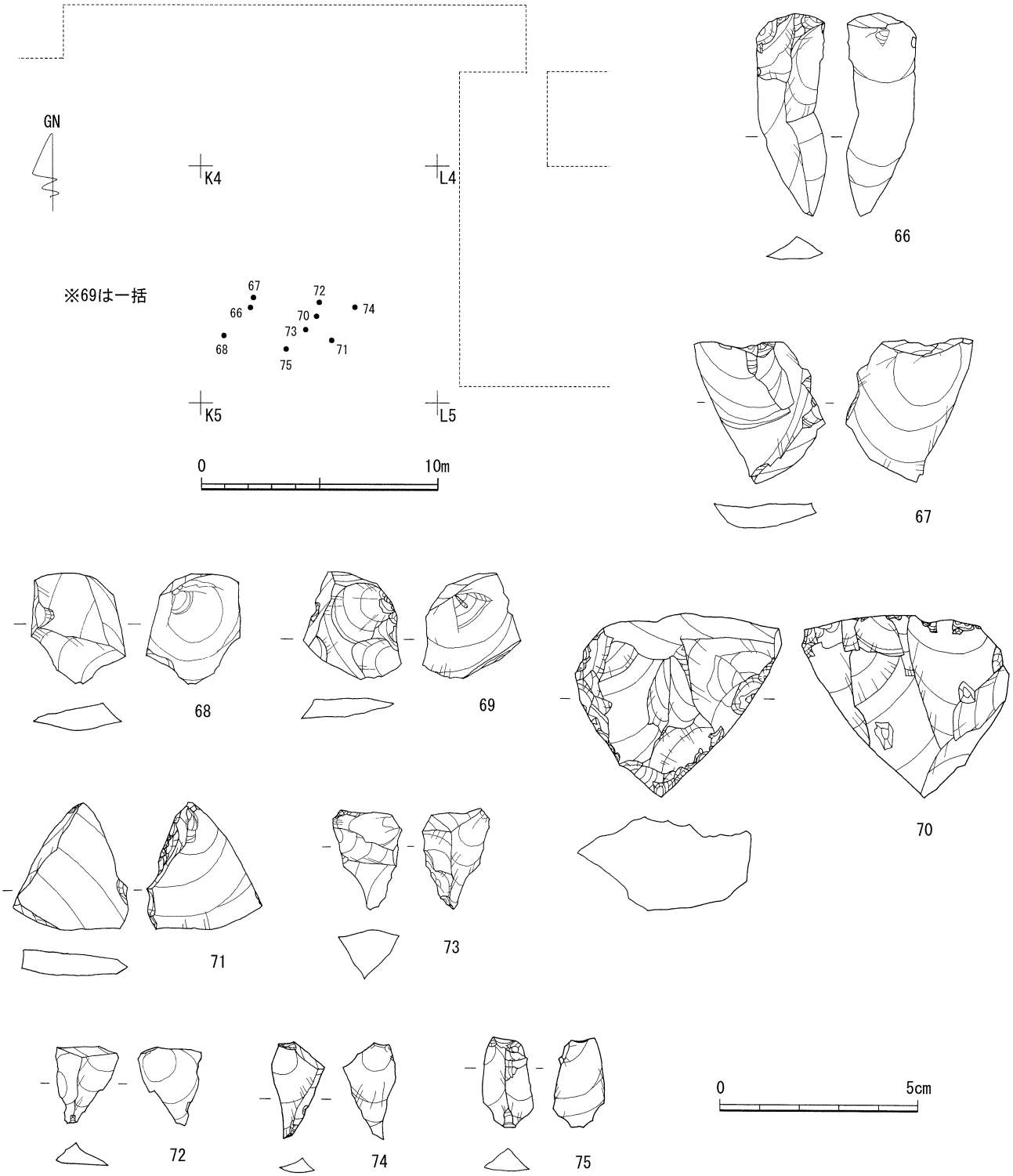
〈工程③〉次いで、剥片aの剥離によって生じた剥離面に打面転移が行われ、数枚の剥片が剥離される。

〈工程④〉剥片aが石核に転用される。剥片の主要剥離面を側面に設定した剥片剥離が行われる。剥片は全て小さいが、細石刃とは言えない。石核部分は欠落している。

分布：Aブロックに分布する。



第26図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図14（S=2/3）



第27図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図15（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑥分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑦　接合No.33（第28図—76～78）

作業内容：細石刃製作

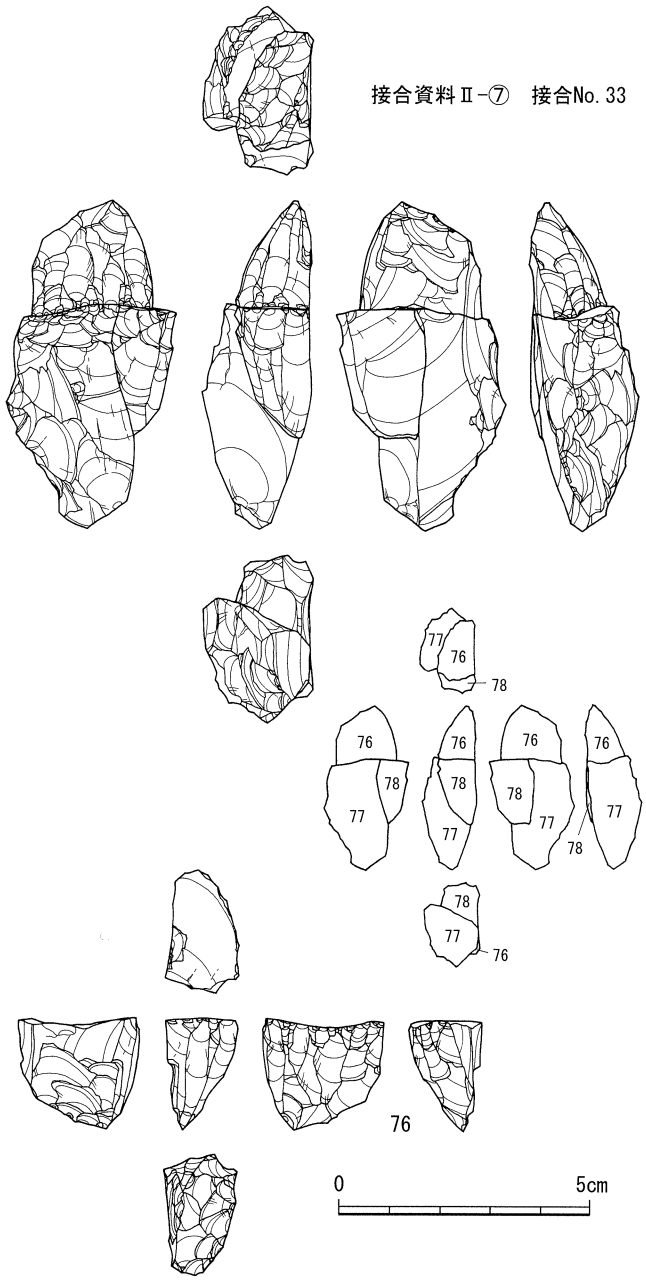
剥離作業の復元：［76｜77→78］

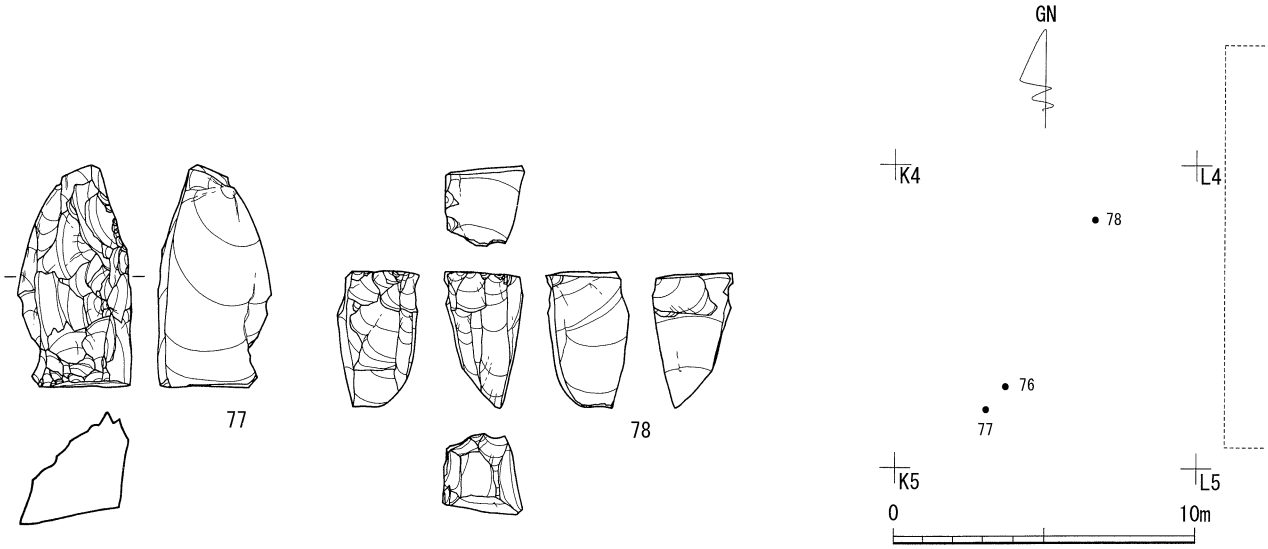
縦長で大振りな素材剥片が剥離される。この素材剥片剥離の方法は、剥離面が平坦で、リングが円形に回ることから、両極打撃である可能性がある。この素材剥片が２つに分割される。この分割面の長さは7.0～9.0㎝、幅は2.5～3.0㎝と推定される。この分割面によって２分された両方の剥片とも、細石刃核として利用される（①77＋78・②76）。以下、剥離作業を２つに分けて記述する。

①において、まず側面調整および稜上調整が行われる。この稜上調整部において細石刃剥離が行われるが、ヒンジ・フラクチャーによって１枚のみの細石刃剥離で剥離作業を終えている。この時点で、反対側の一端において細石刃剥離が行われている可能性があるものの定かではない。その後、剥片（77）が剥離され、細石刃核（78）が利用される。以前から利用されている打面が引き続き利用されるが、側面調整が介在している。さらに細石刃剥離が行われ、細石刃核が廃棄される。

②において、まず素材剥片の分割面を打面として、側面調整が施される。その後、断面形を完全なＶ字状にする下縁調整が行われる。細石刃剥離はまず側面において行われ、次に小口面において行われる。

分布：Ａブロックに分布するが、細石刃核（78）は、Ａブロックから北に5.0ｍ離れて分布している。





第28図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図16（S=2/3）接合資料Ⅱ—⑦分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑧　接合No.34（第29・30図—79～89）

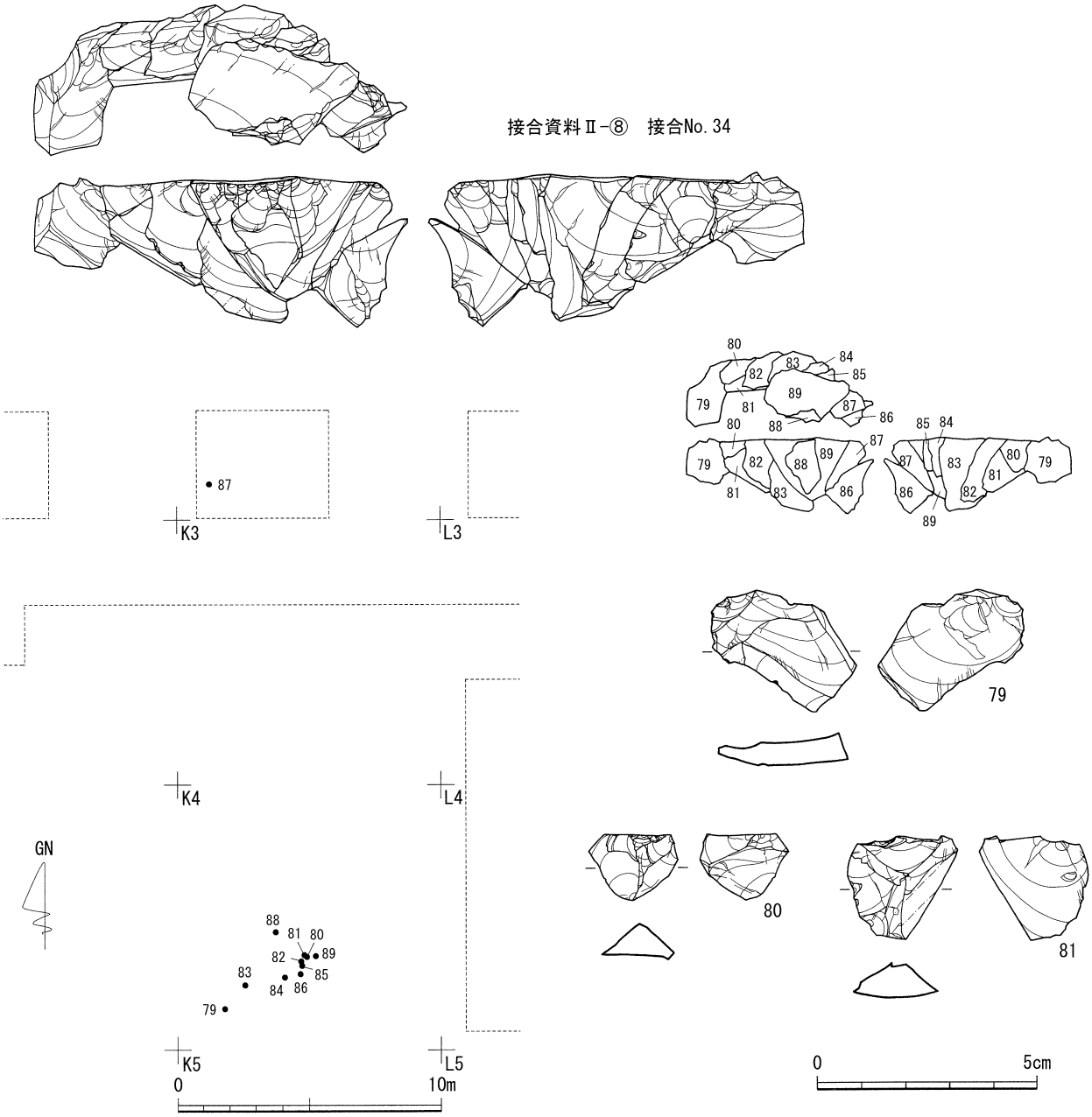
作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［79→80＋81→82→83→84→85→86→87→88→89］

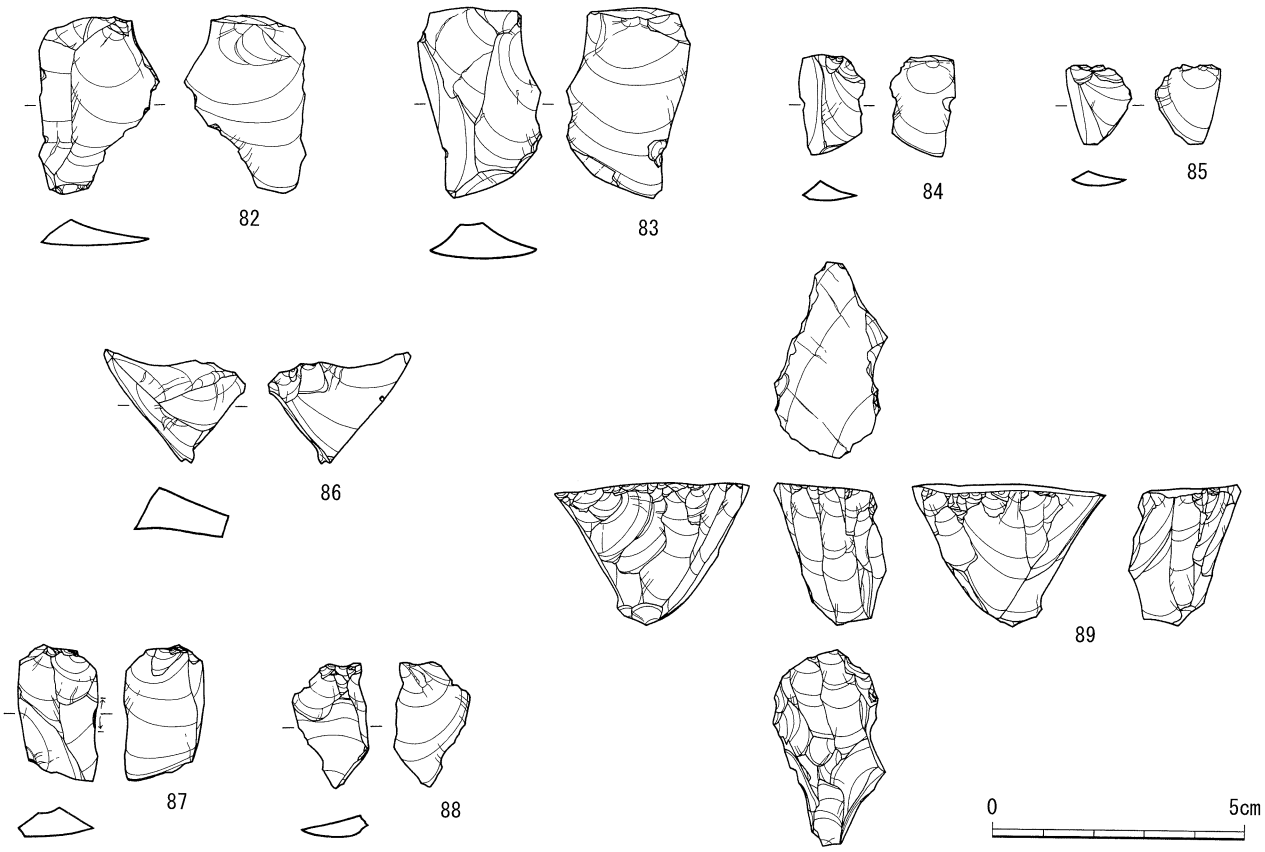
礫を素材として、自然面を打面として分割される。その剥離面のネガ面を将来の細石刃核打面に設定する。その打面から、側面調整が施される。この調整は、細石刃核の左側面においてほぼ連続的に行われている。わずかではあるが、この間に下面(縁)調整が施されている。その後、右側面において再び側面調整が行われ、細石刃が剥離される。

本資料には、細石刃核と側面調整剥片の接合によって生じた欠落部分が見られる。これは、細石刃剥離開始時から終了時までの縮小部分と考えられ、その長さは約3.0 cmと推定される。

分布：Aブロックに分布するが、剥片（87）のみ、それらから18.0 m離れたブロック外に存在している。なお、この剥片には微小剥離痕が認められる。



第29図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図17（S=2/3）接合資料Ⅱ—⑧分布図（S=1/250）



第30図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 18（S=2/3）

接合資料Ⅱ—⑨　接合No.37（第31・32図—90～92）

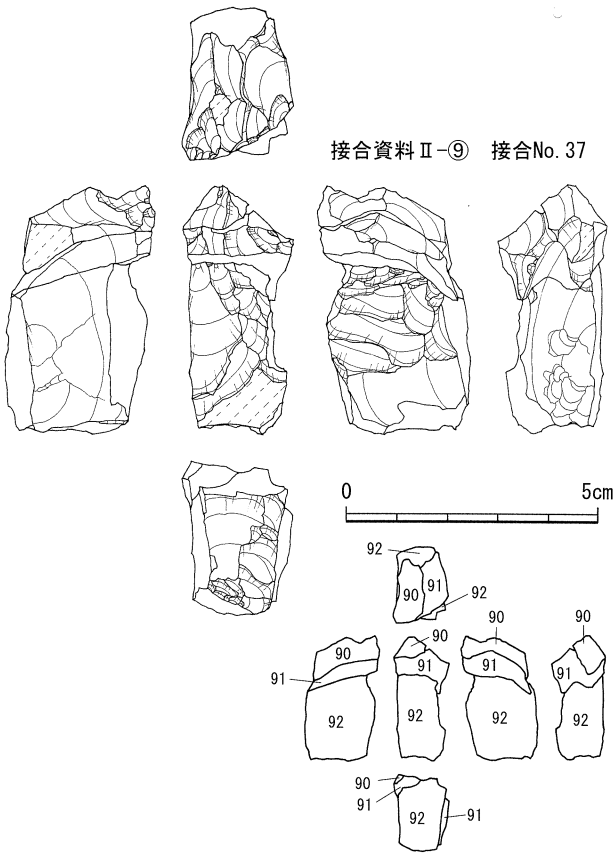
作業内容：一般剥片剥離か

剥離作業の復元：［90→91→92］

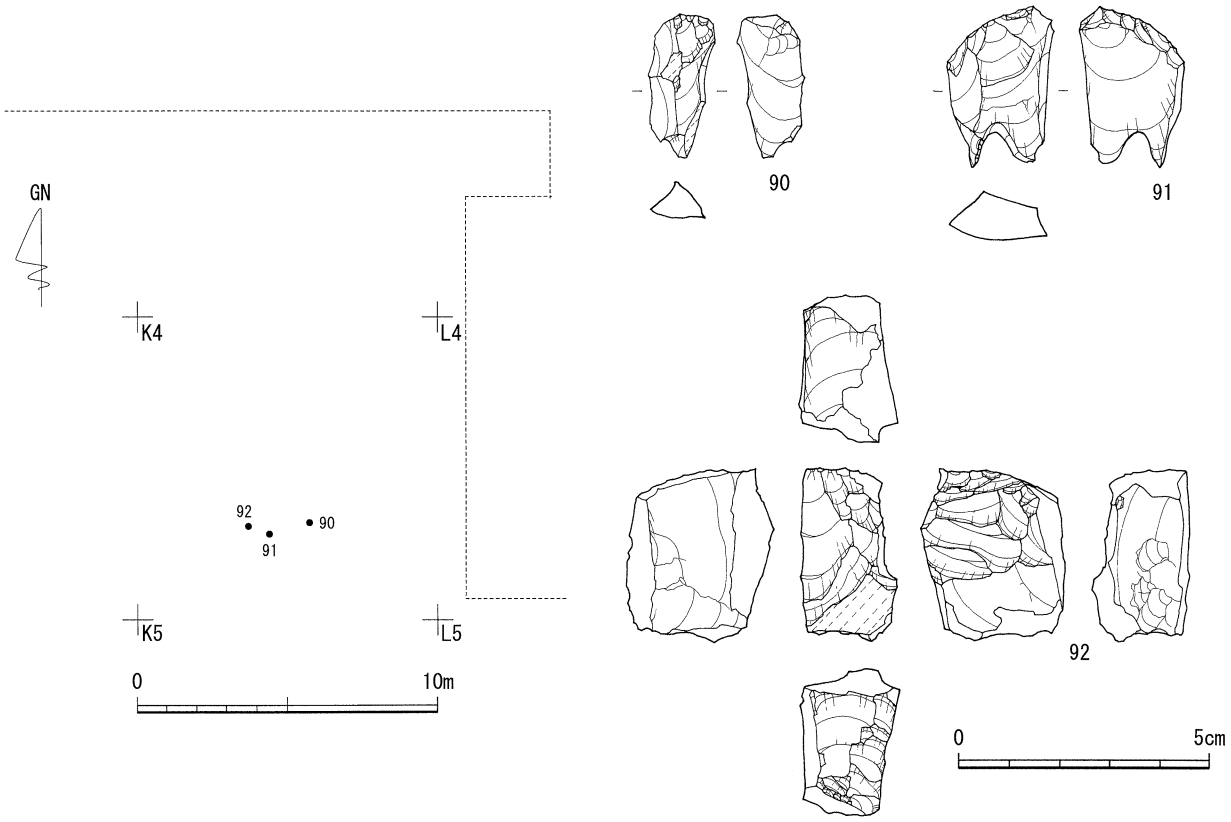
板状の剥片を素材とする。剥片剥離は3回の打面転移を経つつ進行する。まず、素材剥片の下面に打面が形成され、素材剥片の左側面において2枚の剥片が剥離される。次に、右側面において素材剥片剥離後に生じたと考えられる折断面を打面にした剥片剥離が行われ、最後に、最初の剥片剥離で生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

これらの作業面に認められる剥離痕は、幅は狭いものの一定しておらず、細石刃剥離によって生じたものとは考えられない。

分布：Aブロックに分布する。



第31図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 19（S=2/3）



第32図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 20（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑨分布図（S=1/250）

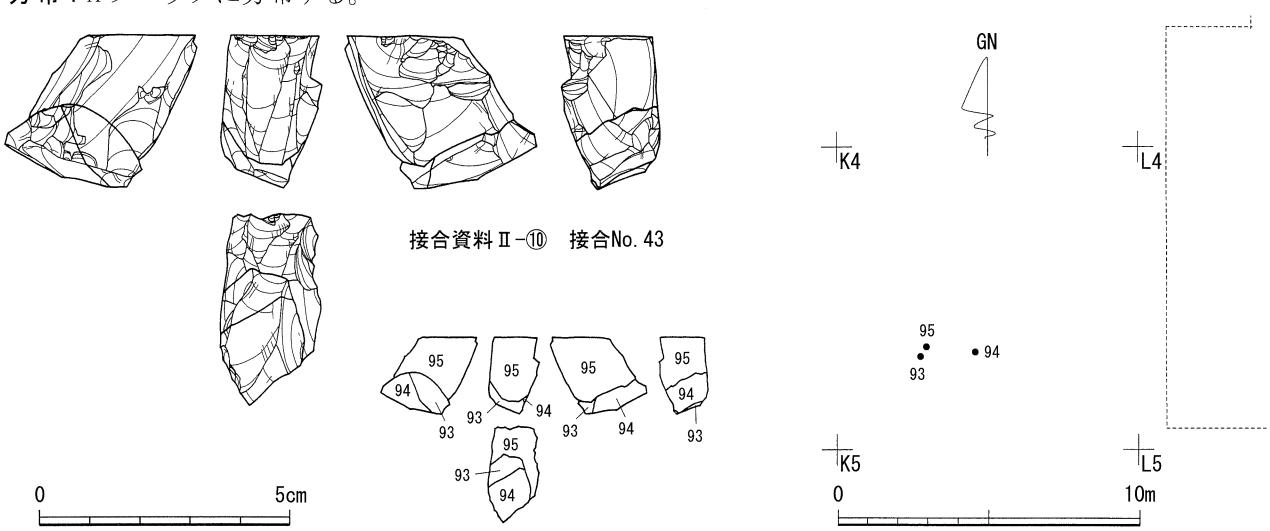
接合資料Ⅱ－⑩　接合No.43（第33・34図―93～95）

作業内容：細石刃製作

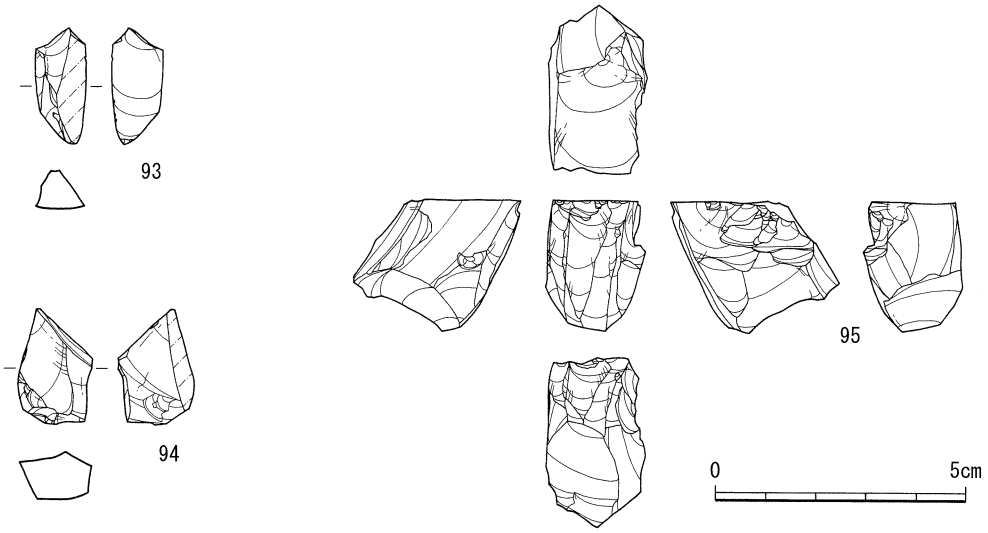
剥離作業の復元：［93＋94→95］

不定形で分厚い剥片を素材とする。その素材剥片が分割され、その分割面のポジ面が細石刃核の打面として利用される。次に、石核の下面からの調整が行われ、その下面において剥片（93＋94）が剥離される。この下面調整が行われている間に細石刃剥離が介在している可能性もある。その後、細石刃核打面から、側面調整、細石刃剥離が行われる。

分布：Aブロックに分布する。



第33図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 21（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑩分布図（S=1/250）



第34図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図22（S=2/3）

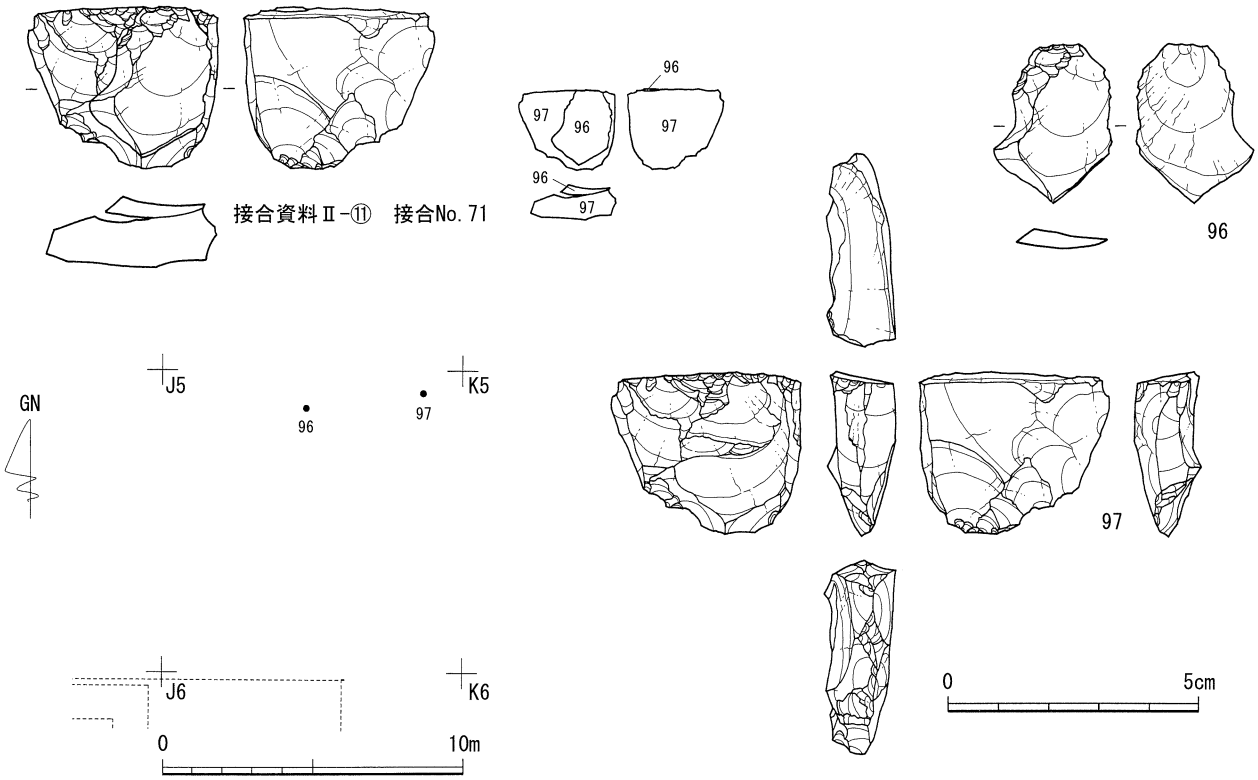
接合資料Ⅱ—⑪　接合No.71（第35図—96・97）

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［96→97］

素材剥片が剥離される。形状は不明であるが、厚みはさほどないものと考えられる。この素材剥片の主要剥離面が、石核の側面に設定される。次いで、素材剥片の背面側に打撃が加えられ、細石刃核の打面が形成される。その後、左右両側面において下縁調整が、左側面においては細石刃核打面からの側面調整も行われる。その際、剥片（96）も剥離される。最後に小口面において細石刃剥離が行われる。なお、その細石刃剥離作業面とは反対側の小口面にも、幅狭で縦長の剥離痕が認められ、細石刃剥離痕とも考えられるが1条のみであり、失敗の可能性もある。

分布：Bブロックに分布する。両者間の距離は3.5ｍである。



第35図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図23（S=2/3）接合資料Ⅱ—⑪分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑫　接合No.78（第36図—98～100）

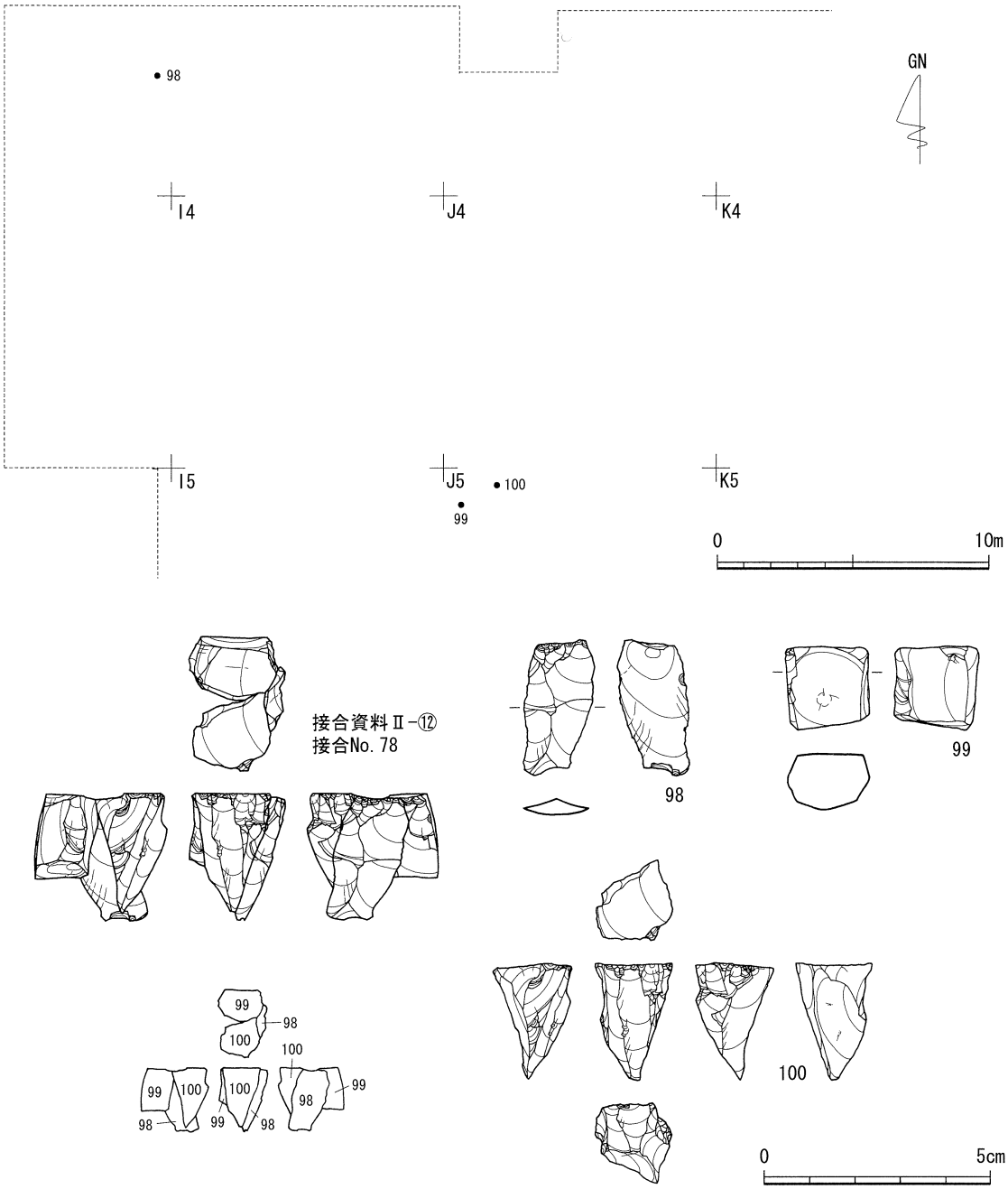
作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［98→99→100］

分厚い素材剥片が剥離される。しかし、その剥離面のリングが円形であることから、剥離というよりも分割と考えられる。この素材剥片の一端に打撃が加えられ、細石刃核打面が形成される。その打面からの側面調整が行われるが、どちらの側面から調整が行われたかは不明である。その後、細石刃剥離が行われ、最も右端の剥離がヒンジを起こしたことから、細石刃剥離が終えられる。

この細石刃剥離後に剥片（99）、さらに現在の欠落部分が剥離される。この２回の剥離は、あたかも細石刃核を分割するように行われているが、その意図は不明である。

分布：どのブロックにも属さない。細石刃核（100）はＢブロックの西 2.0 m の位置に分布している。



第36図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 24（S=2/3）接合資料Ⅱ—⑫分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑬　接合№79（第37～41図—101～123）

作業内容：細石刃核製作か

剥離作業の復元：

① ○→｛○→（101＋102）→103｝　②｛104→（105＋○）→○｝

③｛○→106→107→108→109→110→○→○→○→111→112｝

④｛113→○→○→114→115→116→117→118→119→120→（121＋122）→○→○→123｝

本接合資料は、4つの工程に区分される。接合№79ａ実測図正面の剥片（108）と接合№79ｂ実測図正面の剥片（113）とが接合し、第37図のようになるが、便宜上、作業工程①～③の接合№79ａと作業工程④の接合№79ｂの2つに分けて実測図展開を行っている。

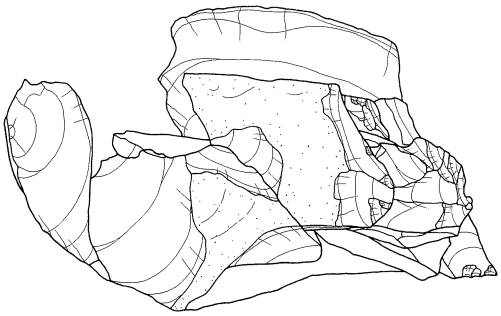
〈工程①〉径約10.0cm前後の亜円礫の一端に打撃が加えられ、石核打面が形成される。この打面から縦長剥片が少なくとも2枚は剥離される。このうち剥片（101）には、二次加工が施されているが、その加工は非常に粗い。

〈工程②〉工程①において剥離された剥片（101）によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。この工程においても、少なくとも2枚以上の剥片が剥離される。

〈工程③〉工程①②において利用されていた石核がそのまま利用される。石核の小口面側に稜上調整が施された後、打面が形成され、その打面から剥片剥離が行われる。その後、小口面における連続的な縦長剥片剥離が行われる。この連続的な縦長剥片剥離の途中に、作業面の更新が行われている。

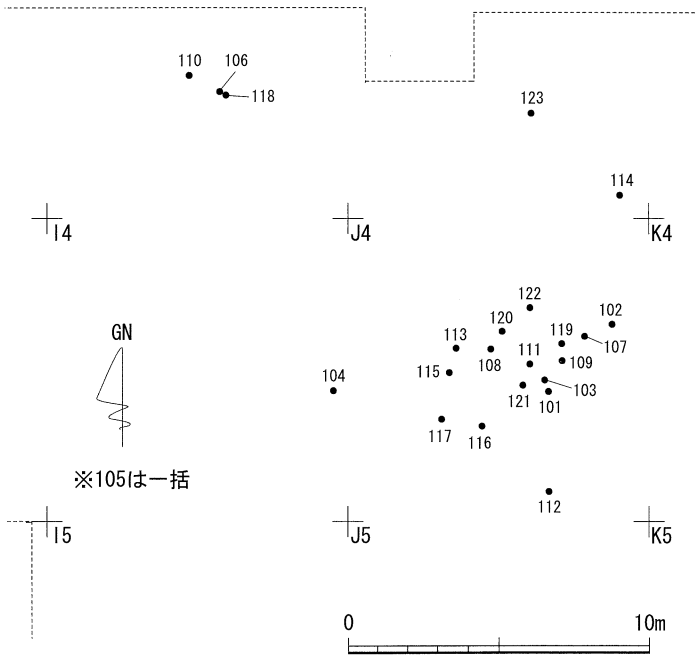
〈工程④〉工程③の作業面更新時の剥片を石核に転用して、剥片剥離が行われる。まず、小口面において剥片（113）が剥離される。その後、両側面において求心状に剥片剥離が行われる。この際、右側面が先行する。小口面において縦長剥片が剥離される。その後、下端に打面が形成され、少なくとも3枚の縦長剥片が剥離される。

分布：Ｄブロックを中心に分布する。しかしＧブロックに3点、Ｂ・Ｅ・Ｆブロックに1・2点分布している。とくに石核（112・123）の分布は特徴的で、112はＥブロックに、123はＢブロックに分布している。

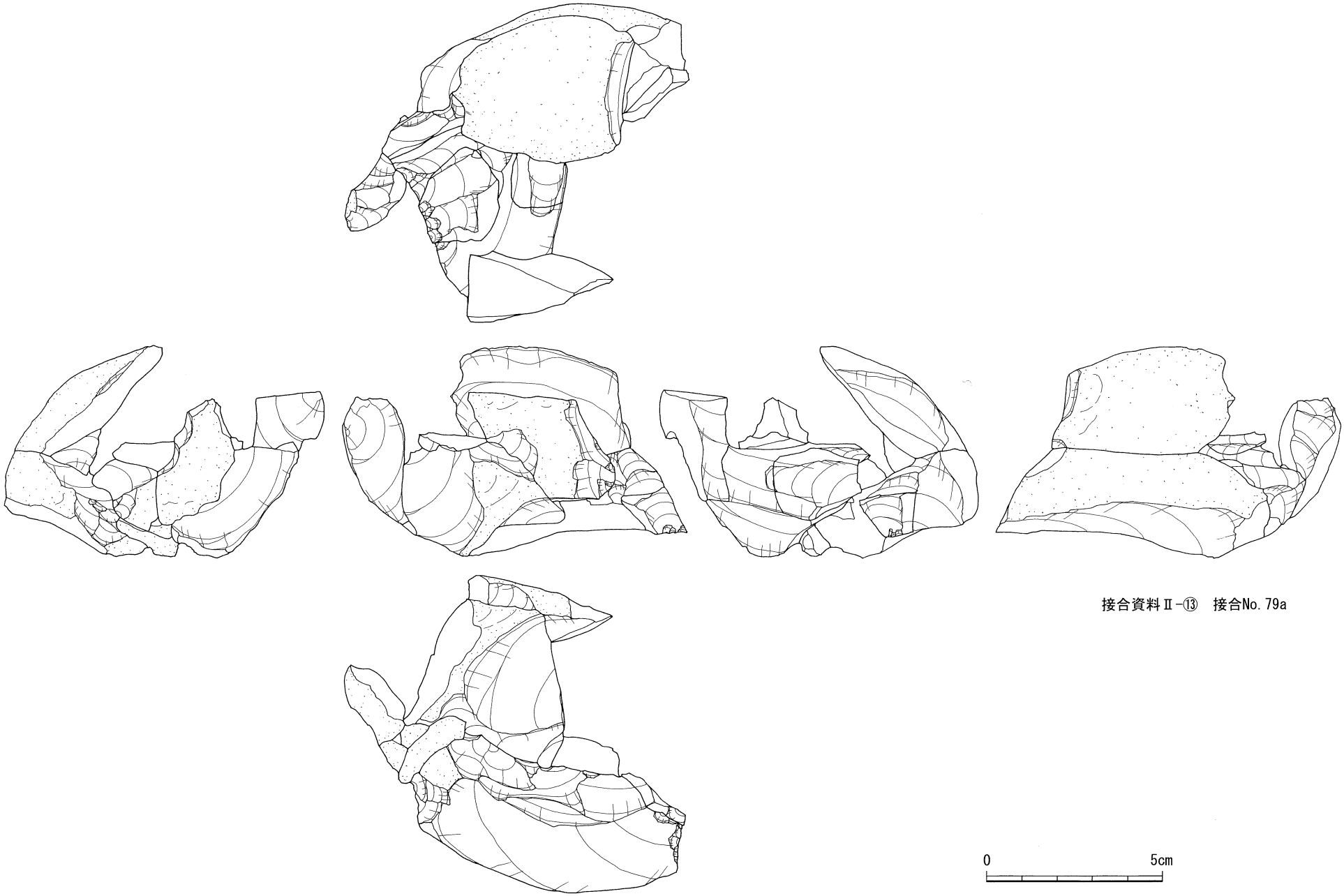


接合資料Ⅱ-⑬　接合No. 79

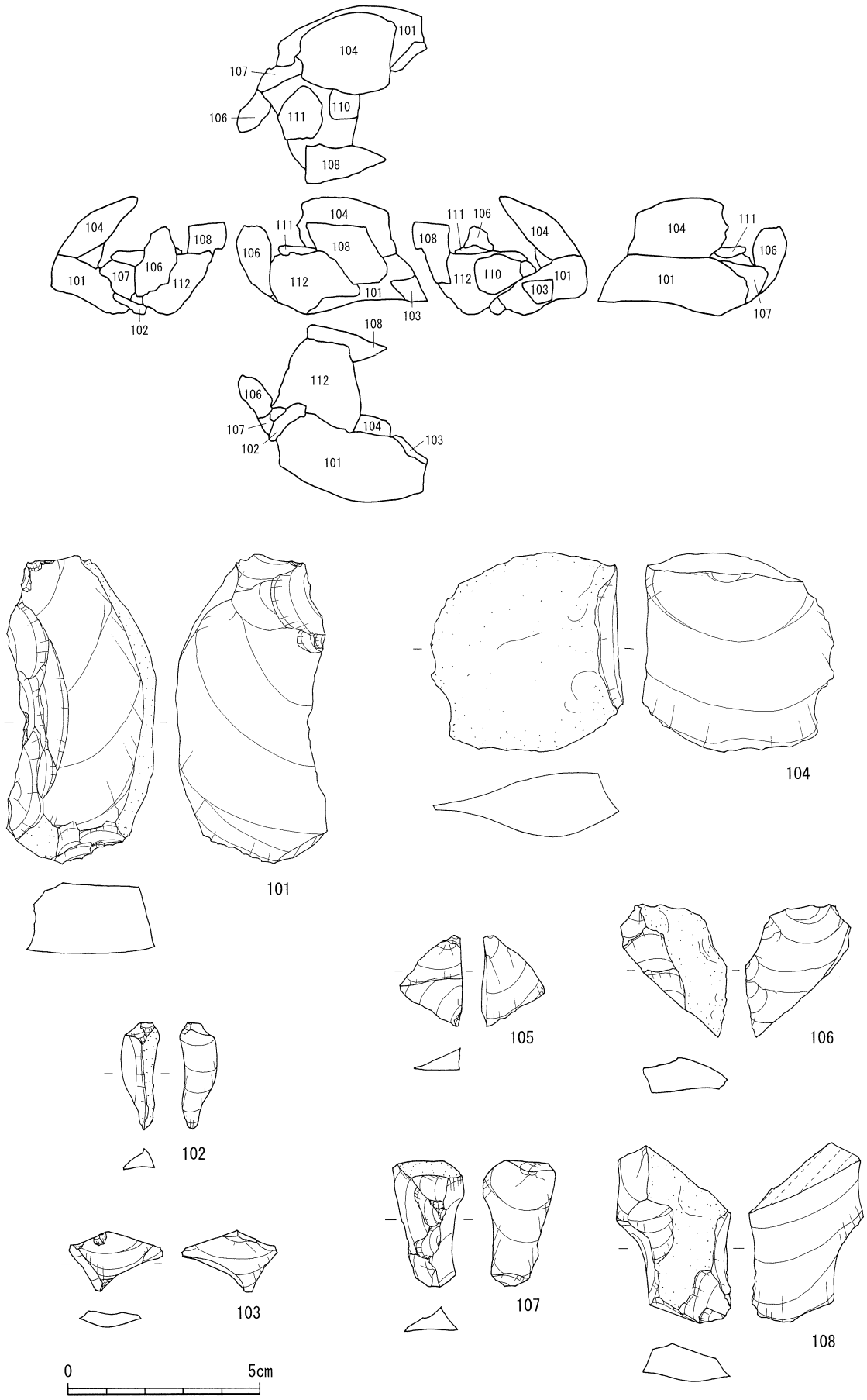
0　5cm



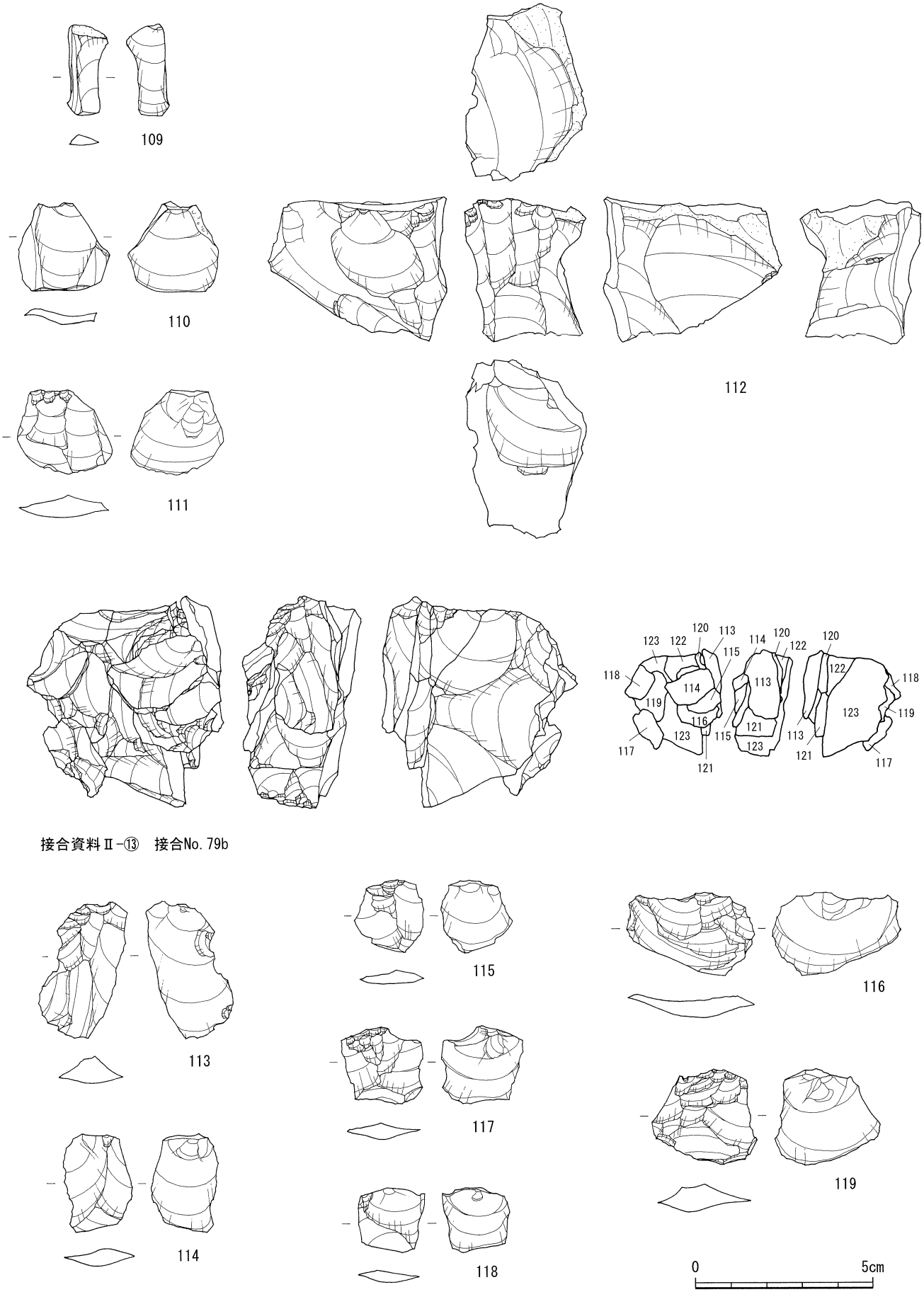
第37図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図25（S=2/3）接合資料Ⅱ—⑬分布図（S=1/250）



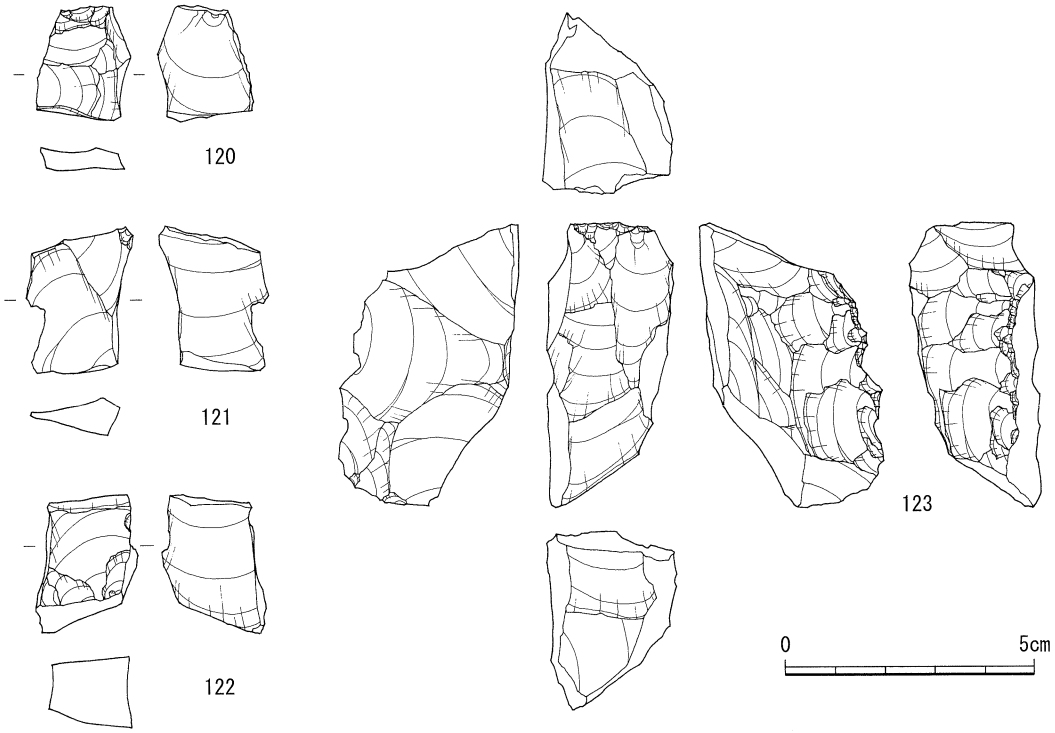
第38図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 26 (S=2/3)



第39図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 27 (S=2/3)



第40図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 28 (S=2/3)



第41図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 29（S=2/3）

接合資料Ⅱ—⑭　接合№80（第42～46図—124～162）

作業内容：細石刃核製作

剥離作業の復元：楕円礫を２つ（ａとｂ）に分割して、両者で剥片剥離が行われる。

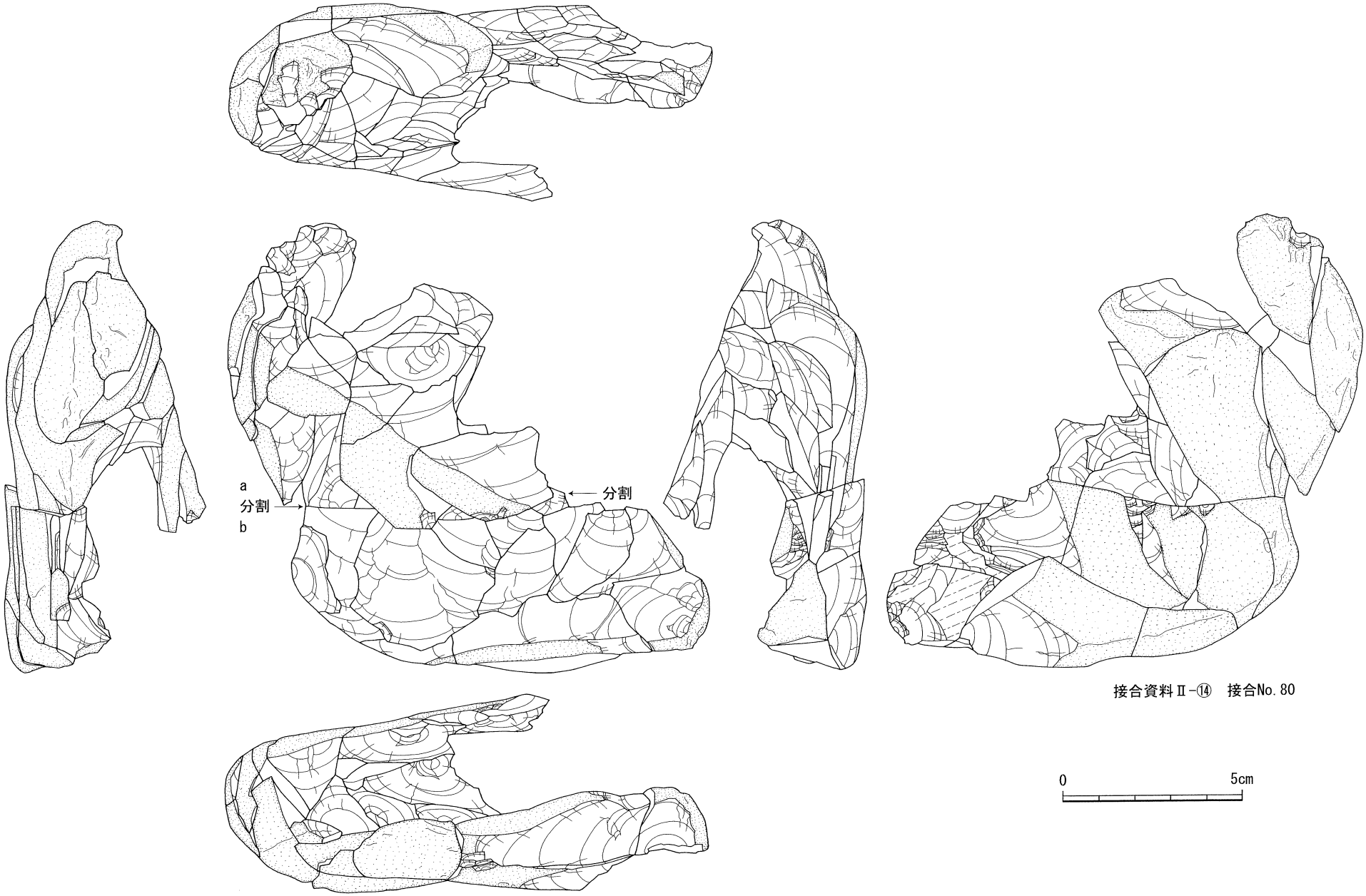
ａ：①なし ②124＋125→126→127→128→129→130 ③131＋132＋α→133＋134＋135＋136
④137＋138＋139 ⑤140→141→142＋143→144→145＋146

ｂ：①147＋148＋149＋150 ②151＋152→153→154→（155＋156＋157＋158＋159）→160→161→162

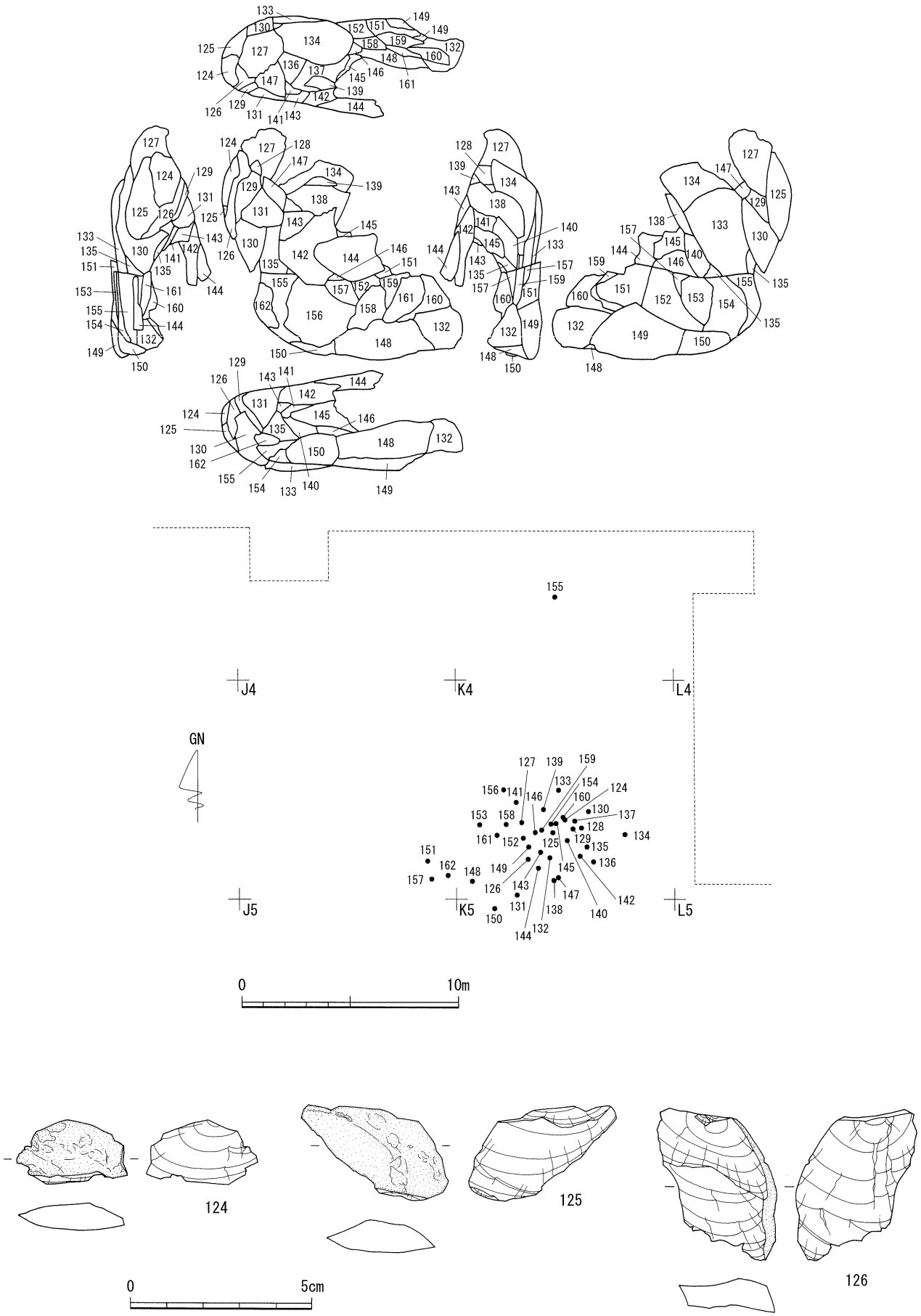
ａは、細石刃核ブランクの製作痕跡と想定される。分割礫の分割面とは対極する一端に打面が形成される。この打面から少なくとも６枚の剥片が剥離される。次に、打面を分割面に転移して剥片剥離が行われる。この２つの剥離作業が数回繰り返され、いずれかの段階に、細石刃核ブランクが形成されたものと考えられる。この細石刃核ブランクは欠落しているが、ブランクの左側面にあたる剥片（137＋138＋139→140→141）と右側面にあたる剥片（142＋143→144）との間に生じた欠落部分は、正面形Ｖ字状を呈し、分割面が打面に設定された細石刃核と想定される。復元される細石刃核の打面最大長は約 12.0 cm 、最大幅は約 5.0 cm、作業面の長さは約 4.5 cm と想定される。

ｂは、ａと同様に細石刃核ブランクの製作痕跡と想定される。まず、礫の下端における剥片剥離が行われる。この剥離に関しては、ａとｂとの分割以前である可能性が考えられる。次いで、分割面を打面にした剥片剥離が行われる。この剥離によって少なくとも６枚の剥片が剥離される。以上の剥離が行われたと考えられる石核部分は、平坦打面を有するものであり、その他の資料を加味すると、これは細石刃核として利用された可能性がある。

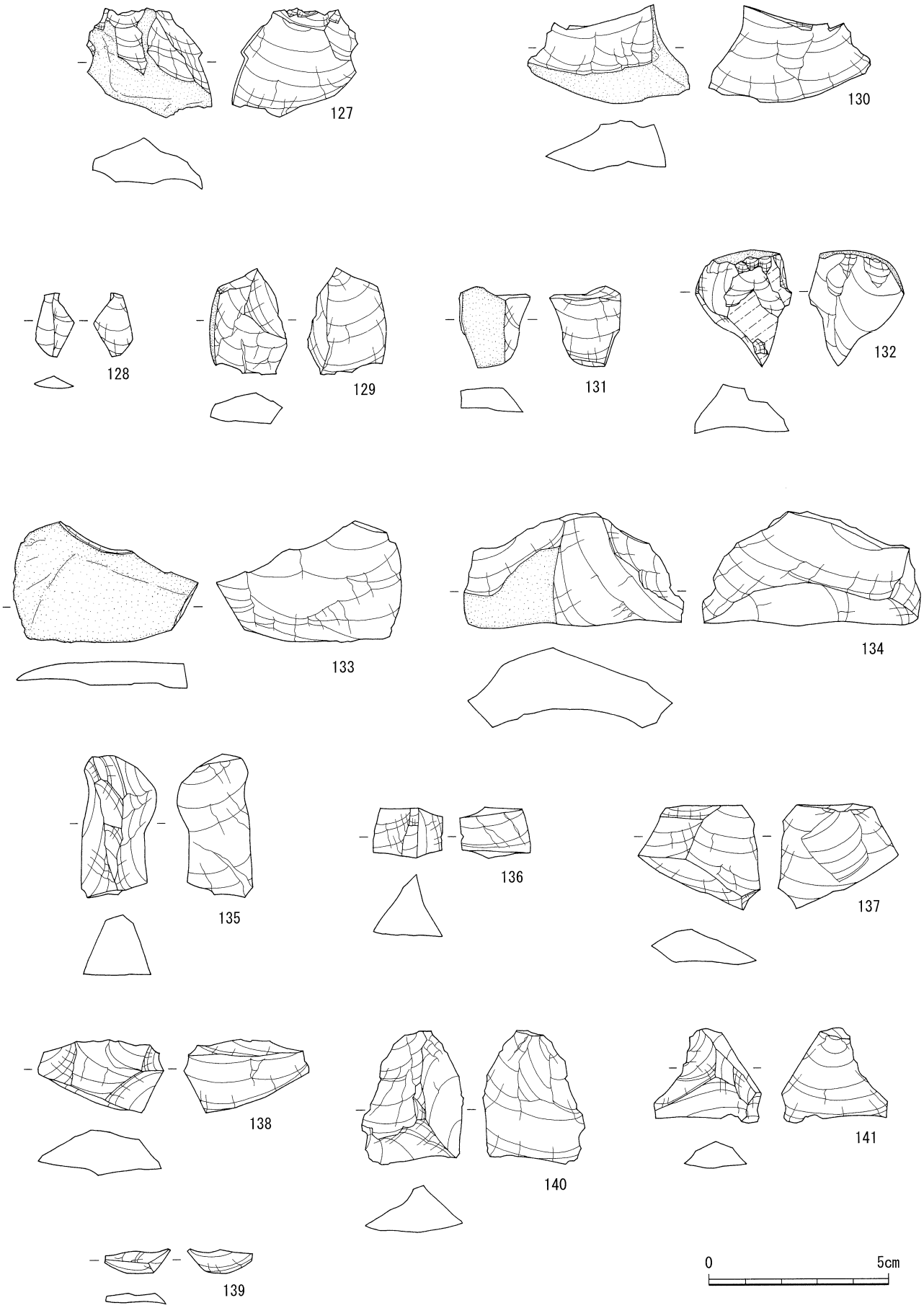
分布：Ａブロックを中心に分布する。このうち分割礫ａはＡブロックに集中するが、分割礫ｂは、Ｂブロックに５点、さらにＡブロックから北に約10.0m離れたブロック外に１点（155）分布する。



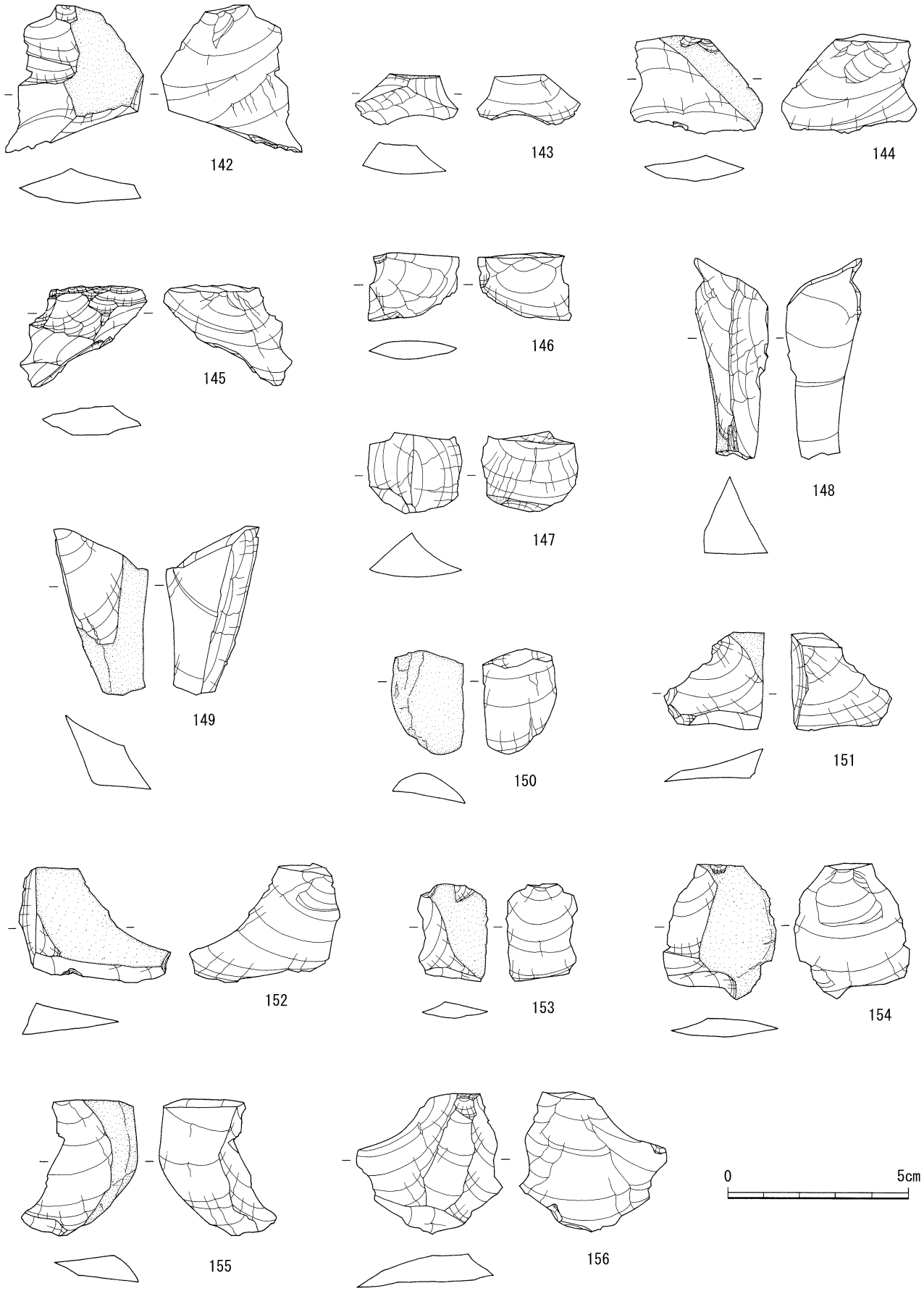
第42図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 30 (S=2/3)



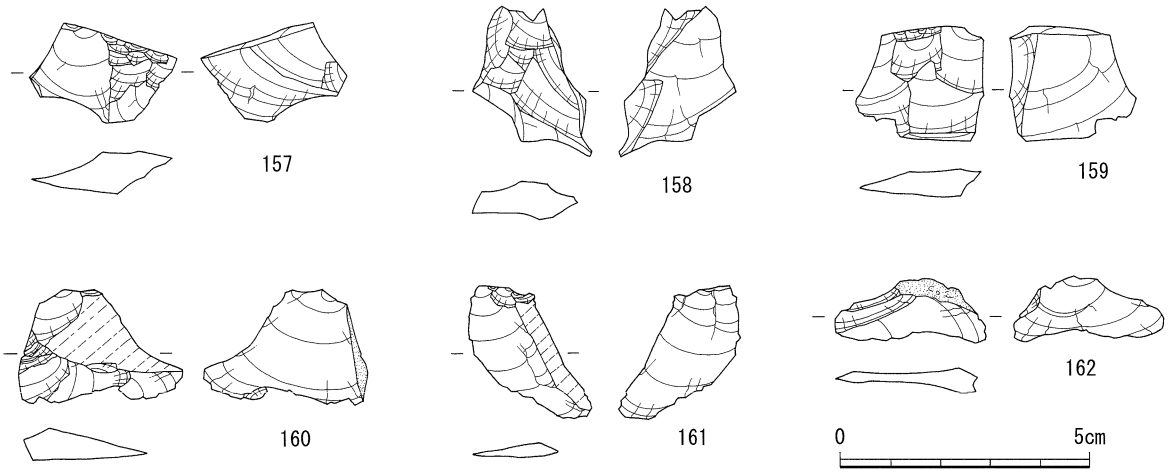
第43図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図31（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑭分布図（S=1/250）



第44図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 32（S=2/3）



第45図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 33 (S=2/3)



第46図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 34（S=2/3）

接合資料Ⅱ―⑮　接合№81（第47～53図―163～224）

作業内容：一般剥片剥離

剥離作業の復元：

①｛163→（164＋165＋166＋167）→（168＋169）→170＋171→172｝　② 173

③｛(174＋175）→176＋177｝　④ ○

⑤｛(178＋179）→180→181→182→183→（184＋185）→（186＋187）→188→189｝

⑥｛190→191→（192＋193）→194｝

⑦｛195→196→197→（198＋199＋200）→201→202→203→204→205｝

⑧ 206・207・208・209・210・211・212・213・214・215・216・217・218・219・220・221・222・223＋224

接合資料中最も多くの剥片が接合したものである。剥片剥離工程は大きく 4 つの工程に区分される。

〈工程①〉長軸約 28.0 ㎝、短軸約 15.0 ㎝、最大厚約 15.0 ㎝（推定）の楕円礫が長軸方向に分割される。この分割面を打面とした剥片が剥離される。

〈工程②〉礫の短軸の面を打面とした打面再生が行われる。この剥片（173）の下半部には、急角度の加工が施されている。

〈工程③〉②の打面再生によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

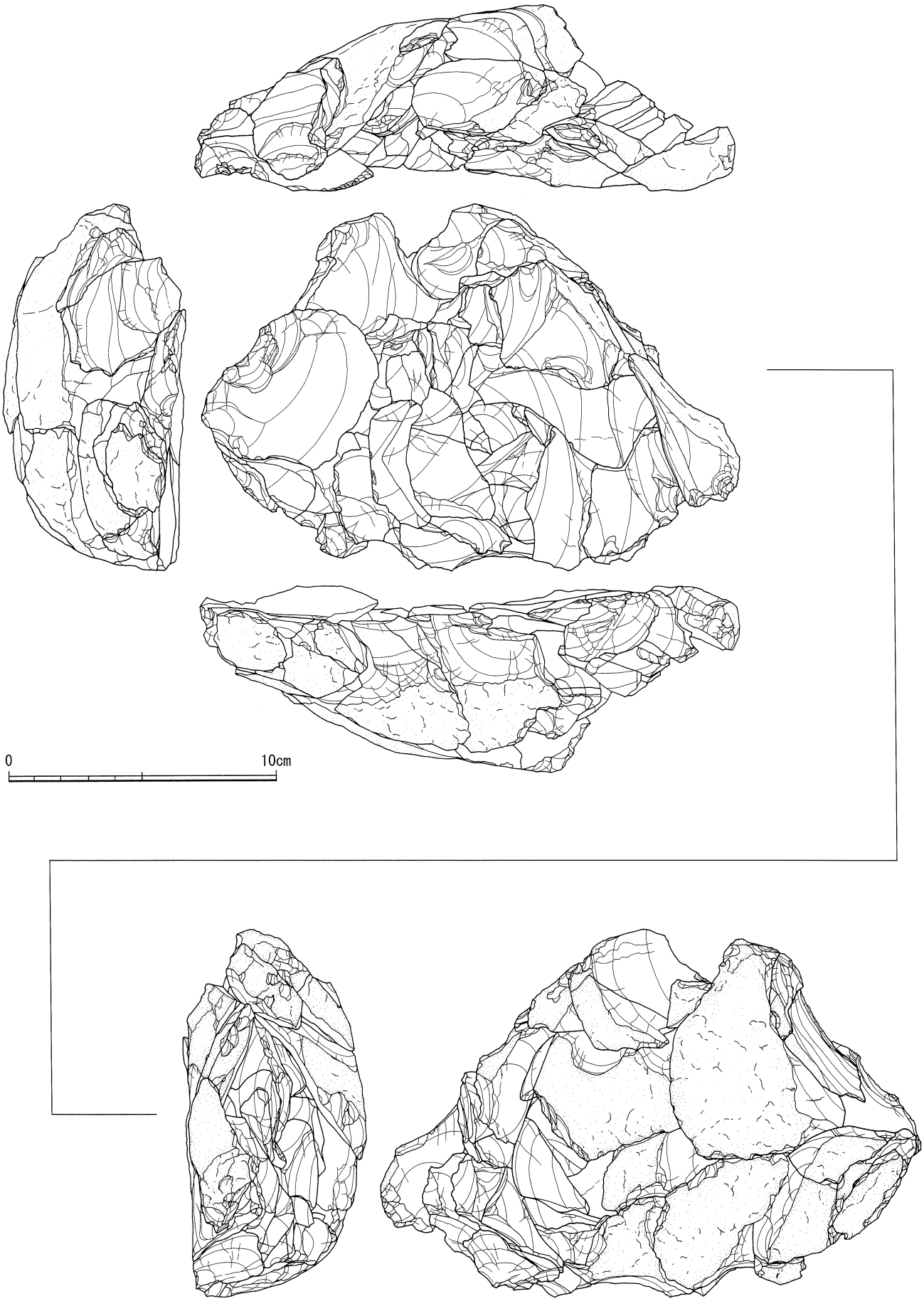
〈工程④〉さらに打面再生が行われる。この剥片は存在しないが剥離方向は工程②と同じである。

〈工程⑤〉④の打面再生によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

〈工程⑥〉⑤において生じた剥離面に打面が転移される。数枚の剥片が剥離される。

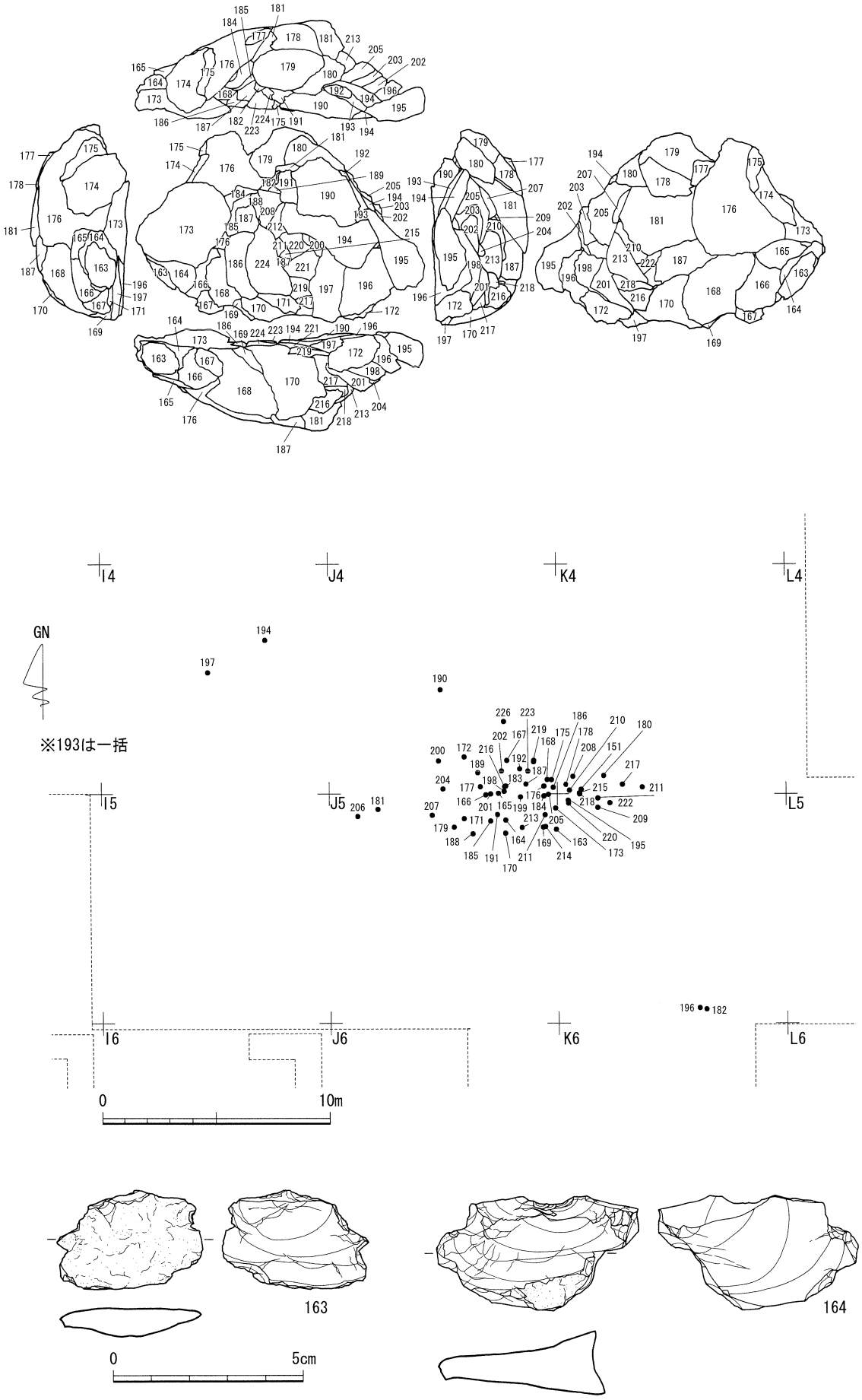
〈工程⑦〉①において生じた剥離面に打面が転移される。ここまでの剥片剥離をもって、目的剥片の剥離は終了している。最終的に残され石核は円形である。この石核は、19 点の剥片で構成されるが、明確な剥片剥離ではなく、全て偶発的な剥離による。

分布：工程①②は、B ブロックに分布する。径 3.0 m にまとまる。工程③は、B ブロックに分布する。径 2.0 m にまとまる。工程⑤は、B ブロックに分布する。全体が径 10.0 m 前後にまとまり、剥片（182）は南に 12.0 m 離れている。工程⑥は、B ブロックを中心に分布するが、構成点数 4 点中 2 点がブロック外（F ブロック）に分布する。最大 10.0 m 離れる。工程⑦は、工程中で最も広範囲に分布する。B ブロックを中心に分布するが、剥片（196・197）は、ともにブロックから 10.0 m 以上離れて分布する。工程⑧は、B ブロックを中心に分布するが、最大 12.0 m 離れて分布する。

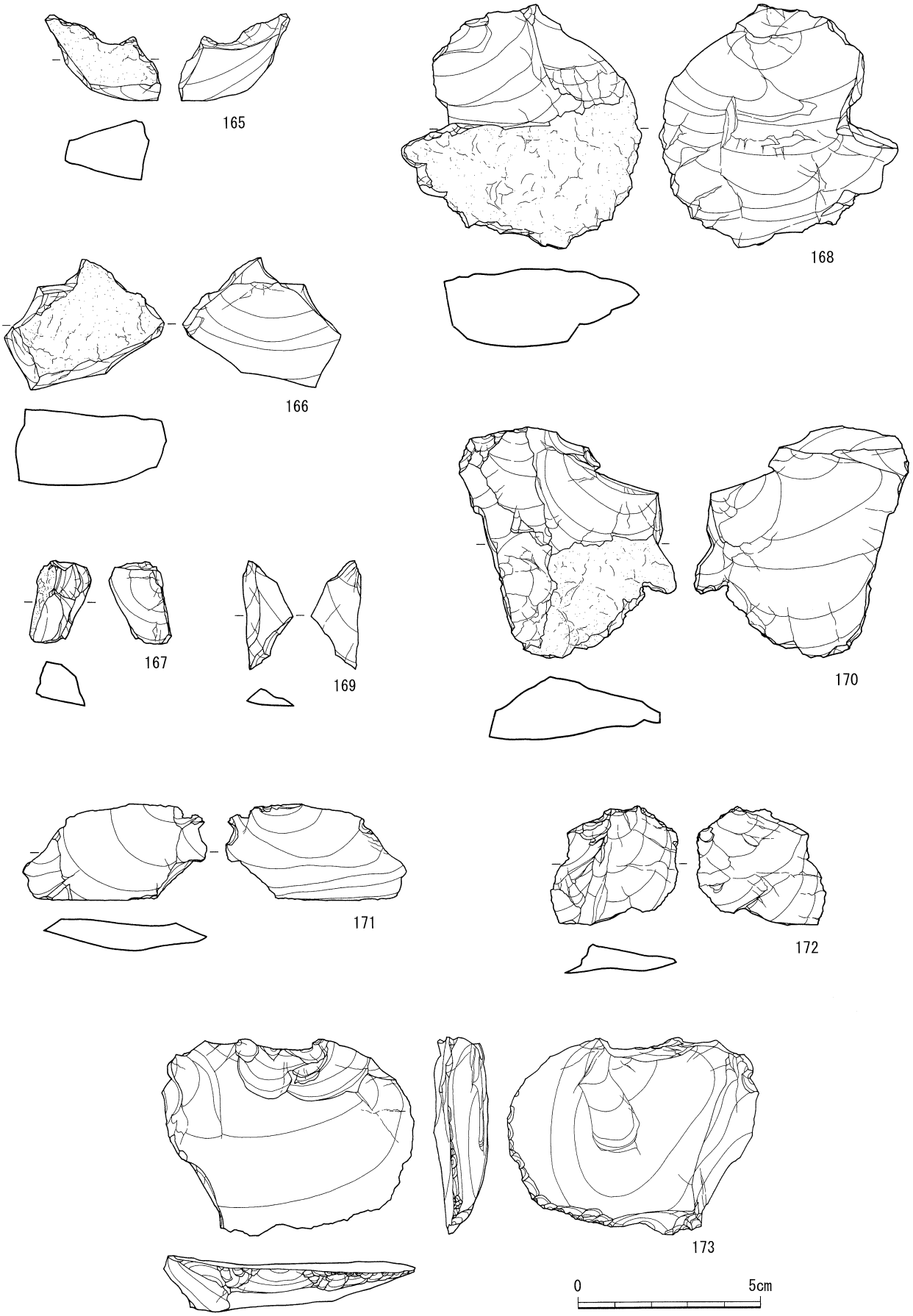


接合資料Ⅱ-⑮　接合No. 81

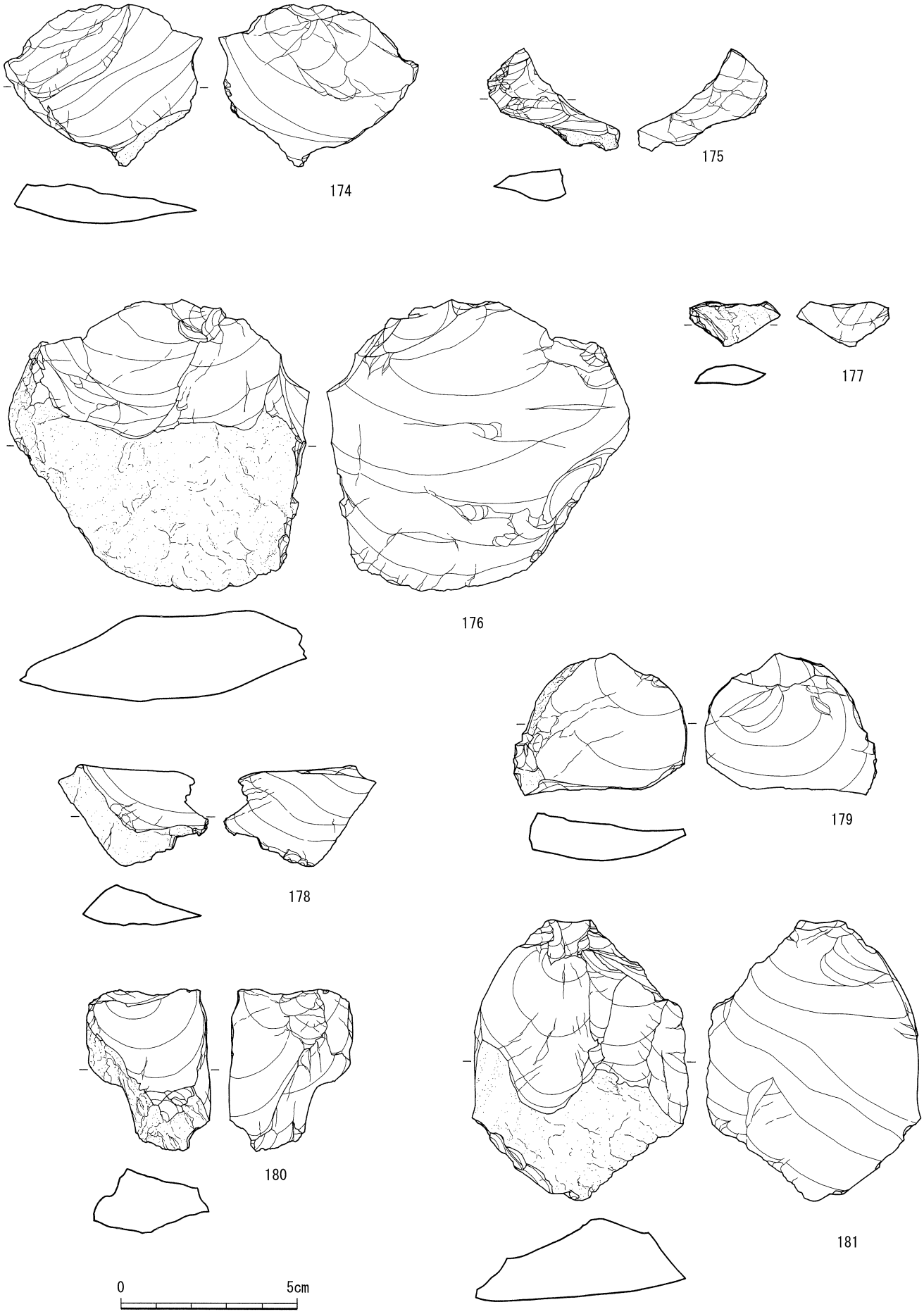
第47図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 35 (S=1/2)



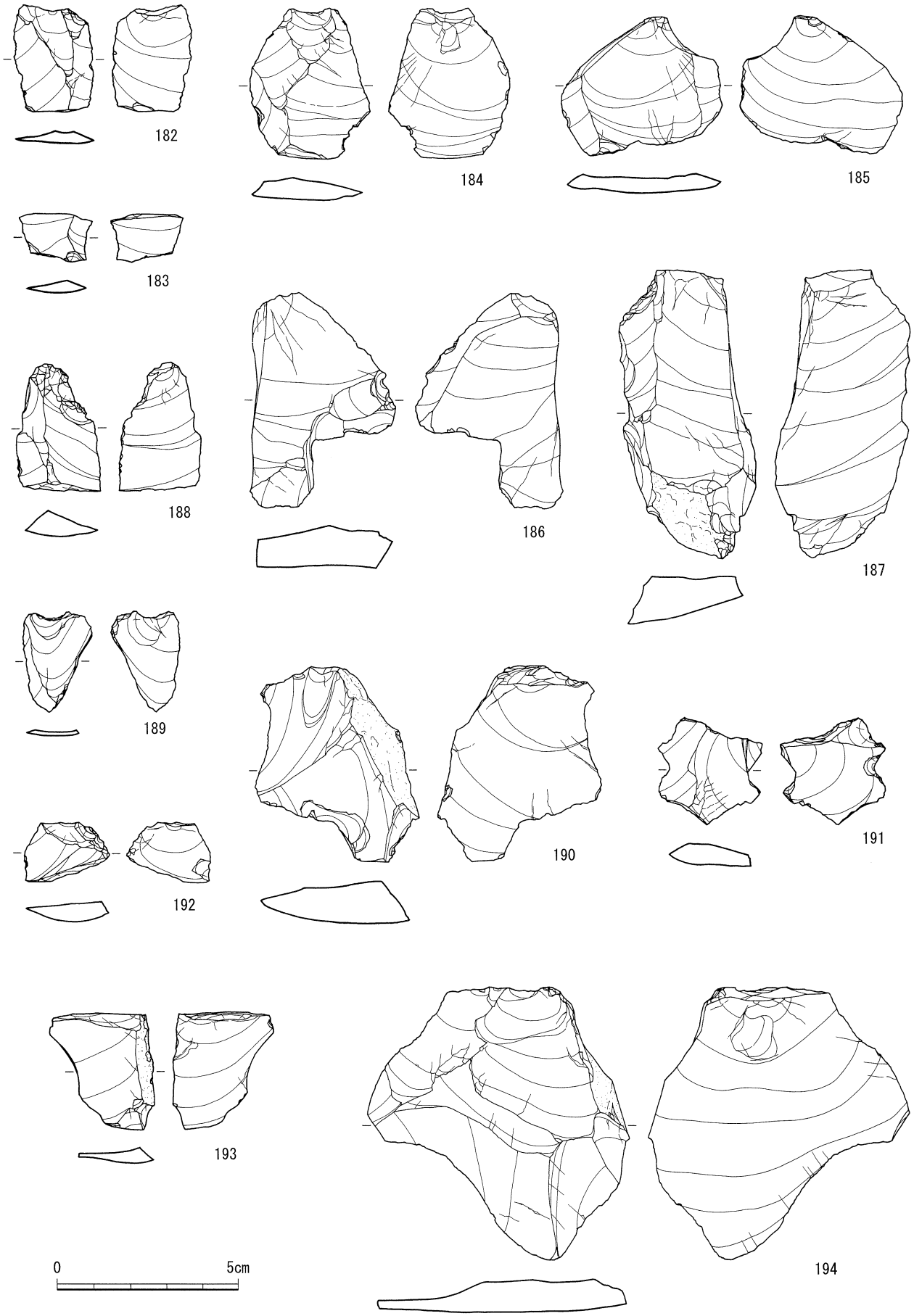
第48図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図36（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑮分布図（S=1/250）



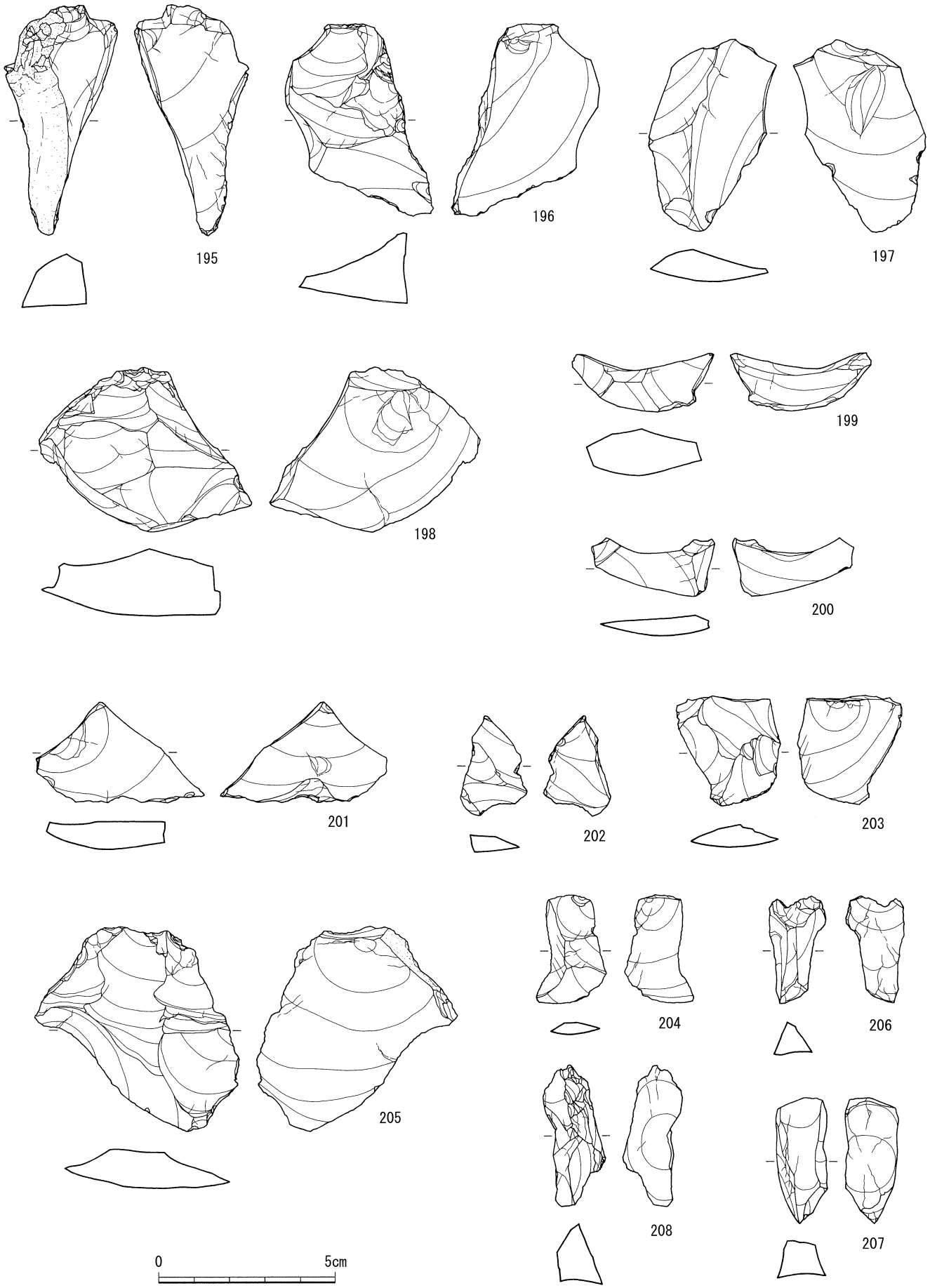
第49図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 37 (S=2/3)



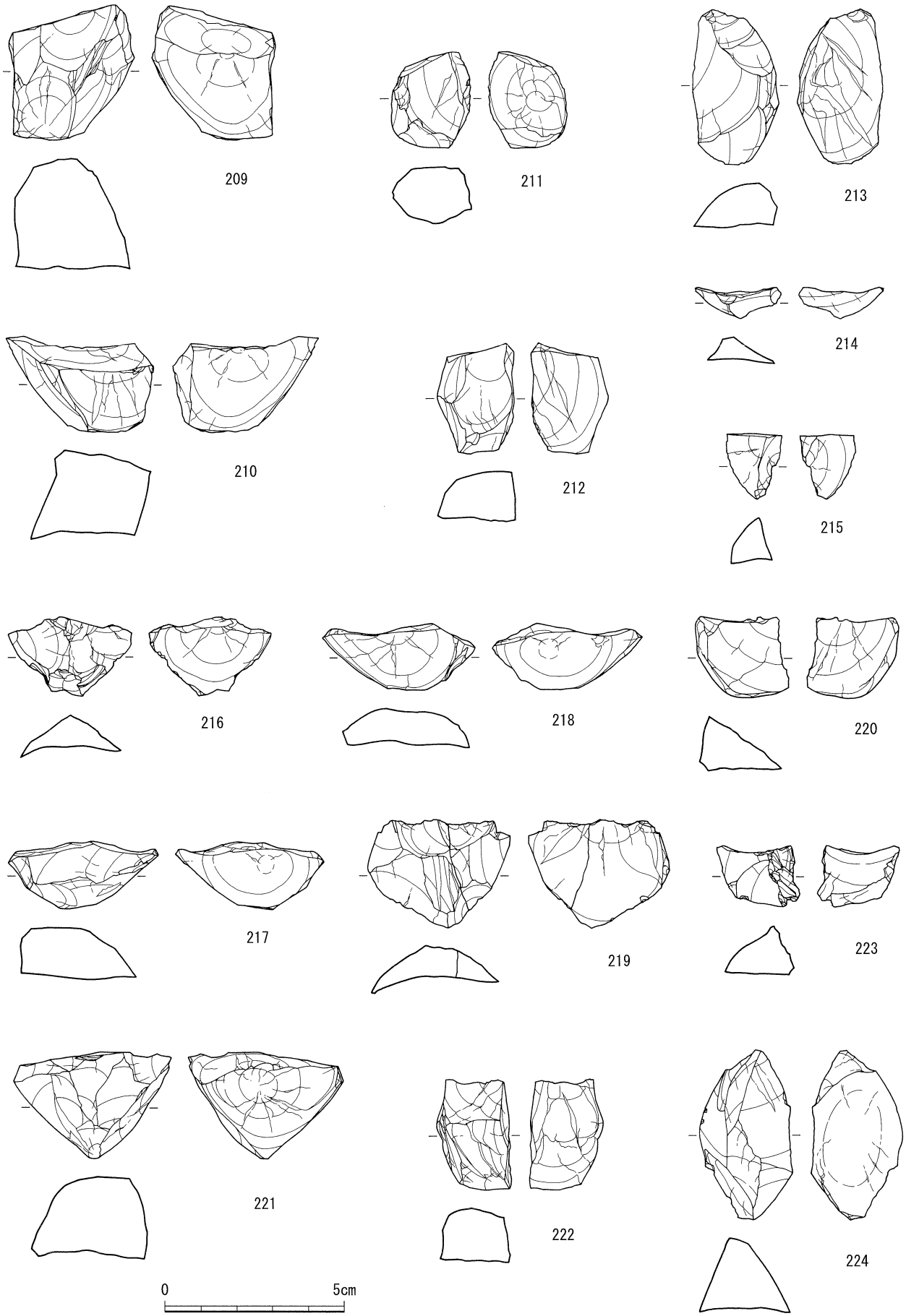
第50図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 38 (S=2/3)



第51図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 39 (S=2/3)



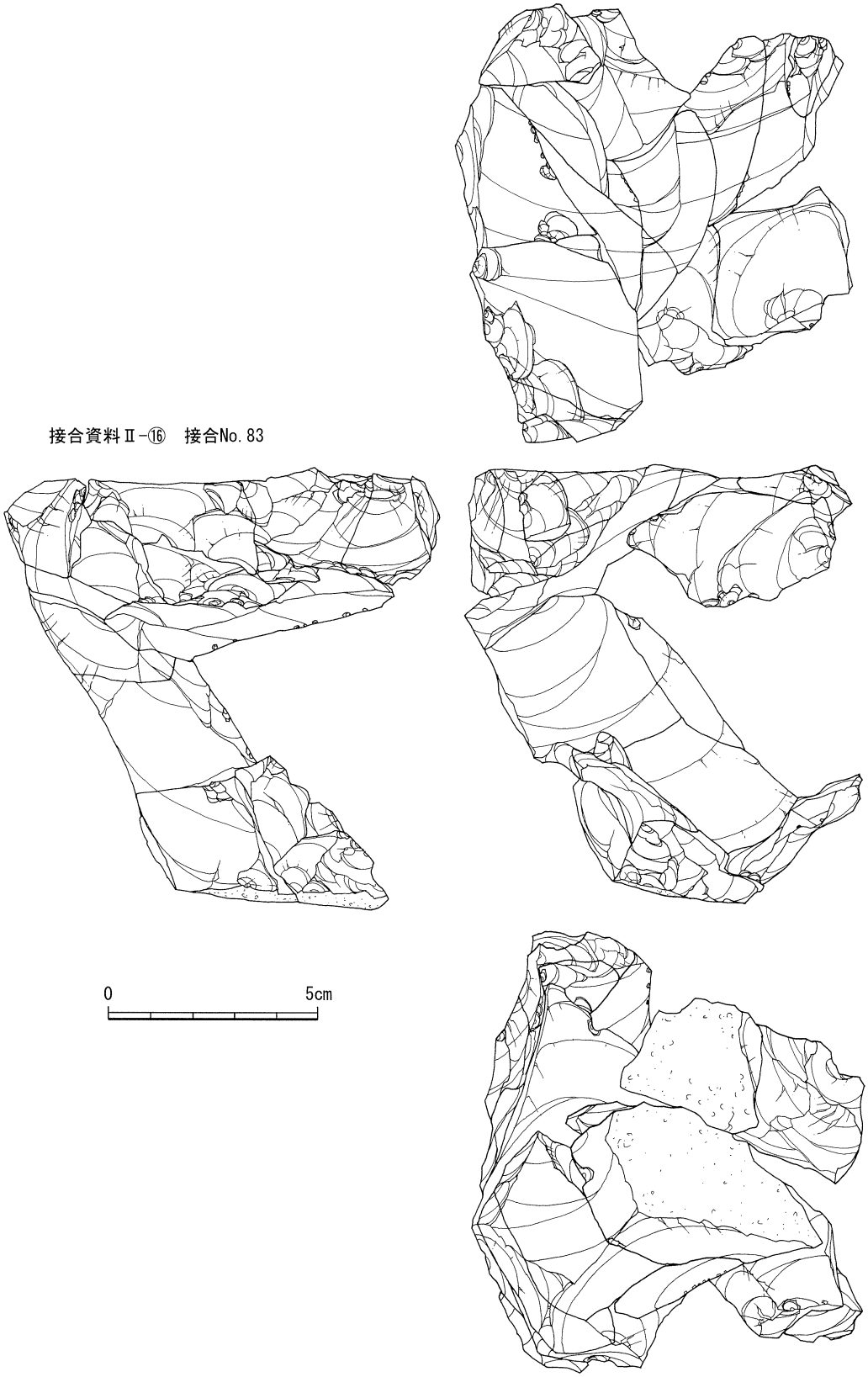
第52図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 40 (S=2/3)



第53図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図41（S=2/3）

接合資料Ⅱ―⑯　接合No.83（第54～58図―225～250）

作業内容：一般剥片剥離・細石刃製作か



第54図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 42（S=2/3）

剥離作業の復元：

①225→226→227＋228→229→230→231→232→233→234→235→236　②237＋238＋239＋240

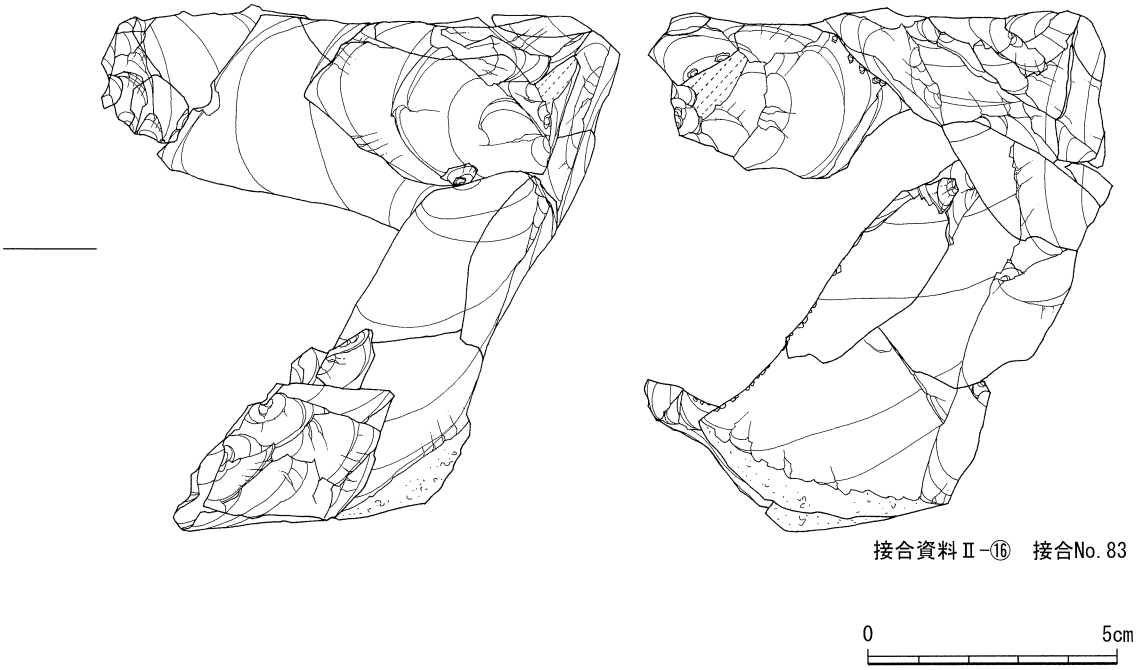
③241→242→243　④244＋245→246　⑤247＋248＋249→250

奥行 13.0 ～ 15.0 ㎝、長さ 12.0 ㎝以上、幅 10.0 ～ 12.0 ㎝の円礫を素材とし、これを分割する。この分割面は、ほぼ正円形である。これが打面として利用される。

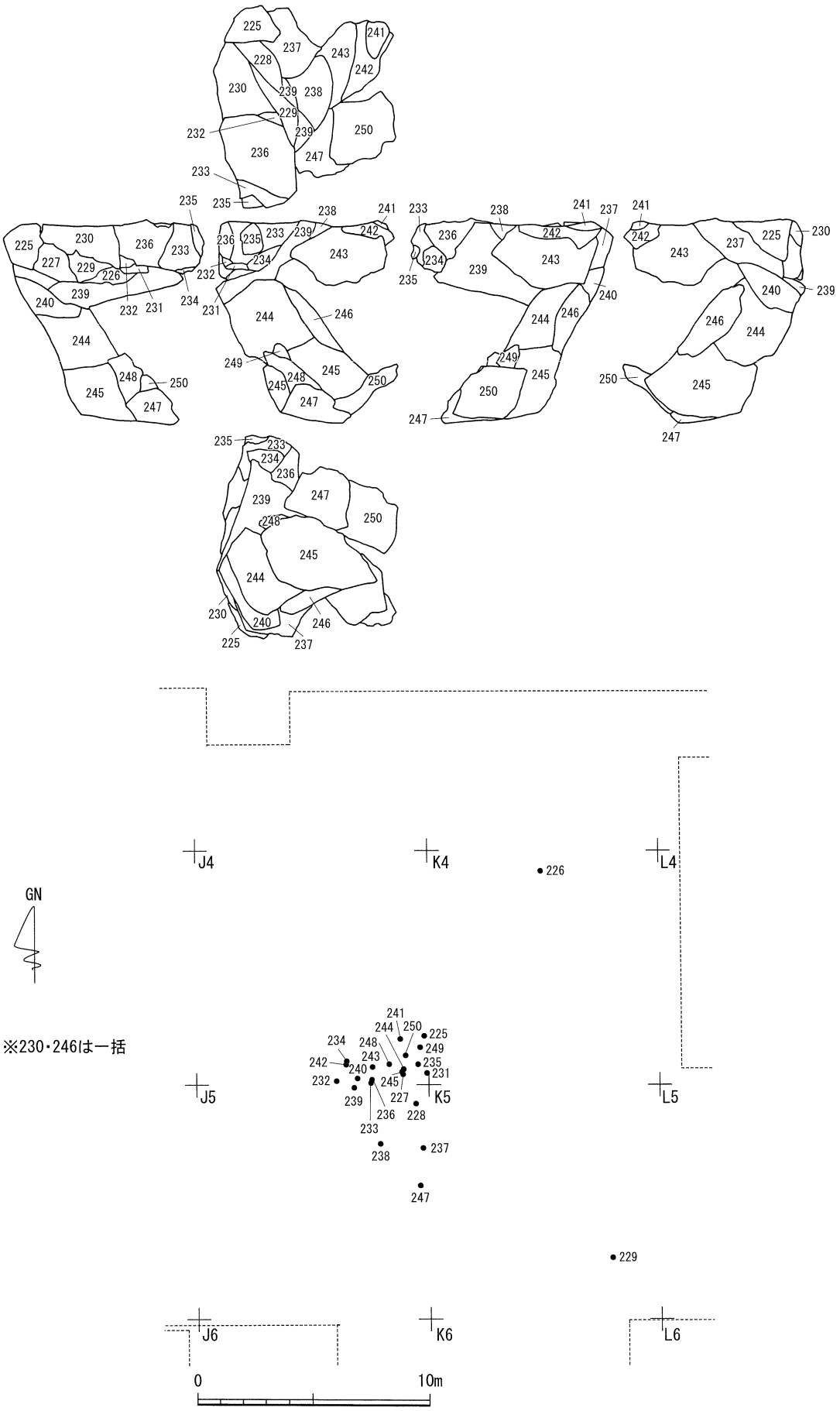
工程①②③での分割面を打面とした縦長剥片剥離が行われる。このうち 1 枚の縦長剥片（225→226→227＋228→229→230→231→232）は、細石刃核として利用されている。まず、素材剥片の腹面を打面として、側面調整が施される。この段階では、細石刃剥離は行われていない。その後、先の側面調整面を打面に変更し、その打面から側面調整が施される。その後、細石刃核の後方部分が折れる。さらに側面調整が施され、細石刃剥離が行われる。あまり多くの細石刃は剥離されていない。

工程④⑤は、工程①②③における剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。工程①②は、同一の石核で行われており、この石核は欠落している。残核形態は不明である。

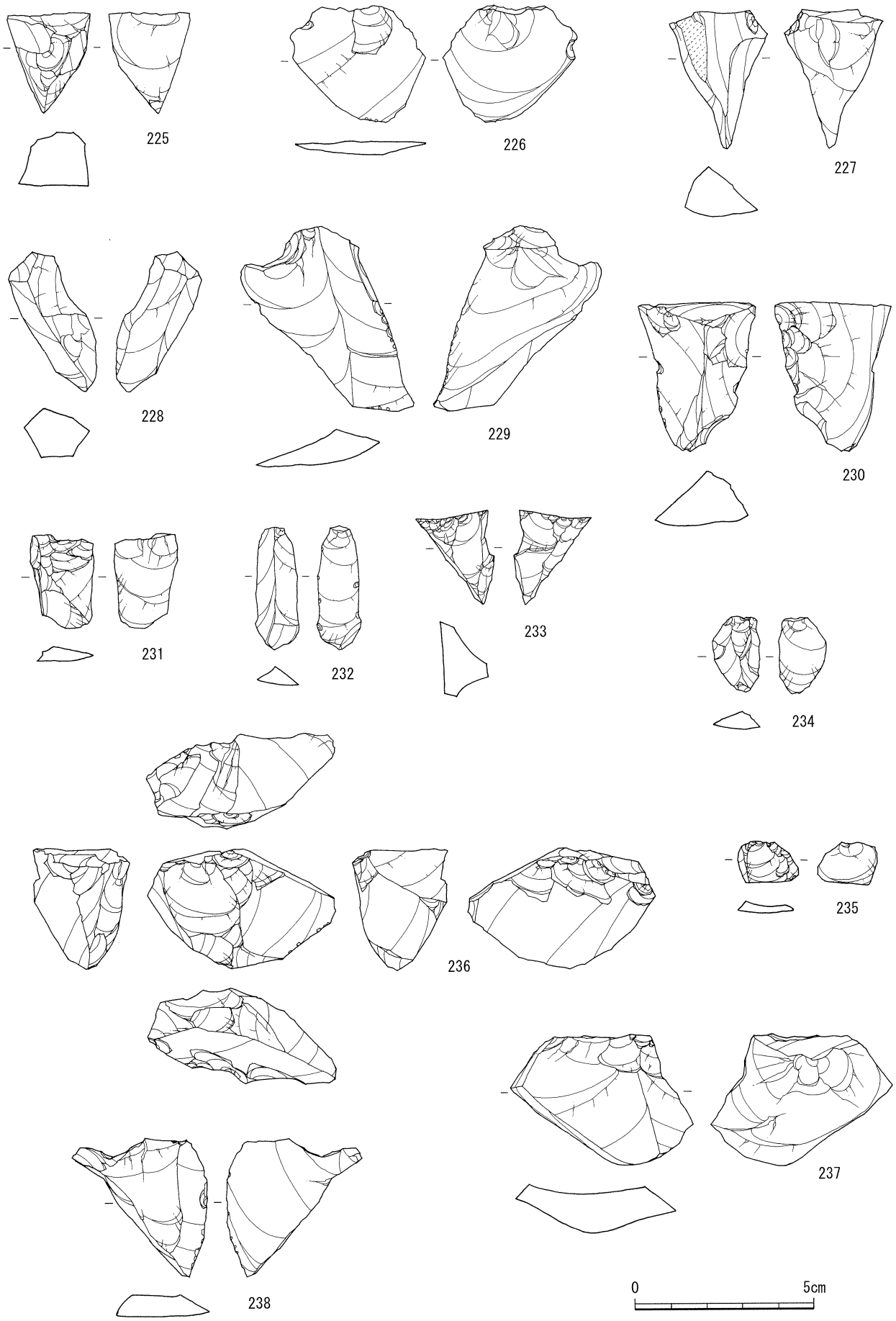
分布：B ブロックを中心に分布する。ただし、剥片（226・229）はブロック外に分布する。剥片（226）は北に 10.0 m、剥片（229）は南東に 8.0 m に位置する。



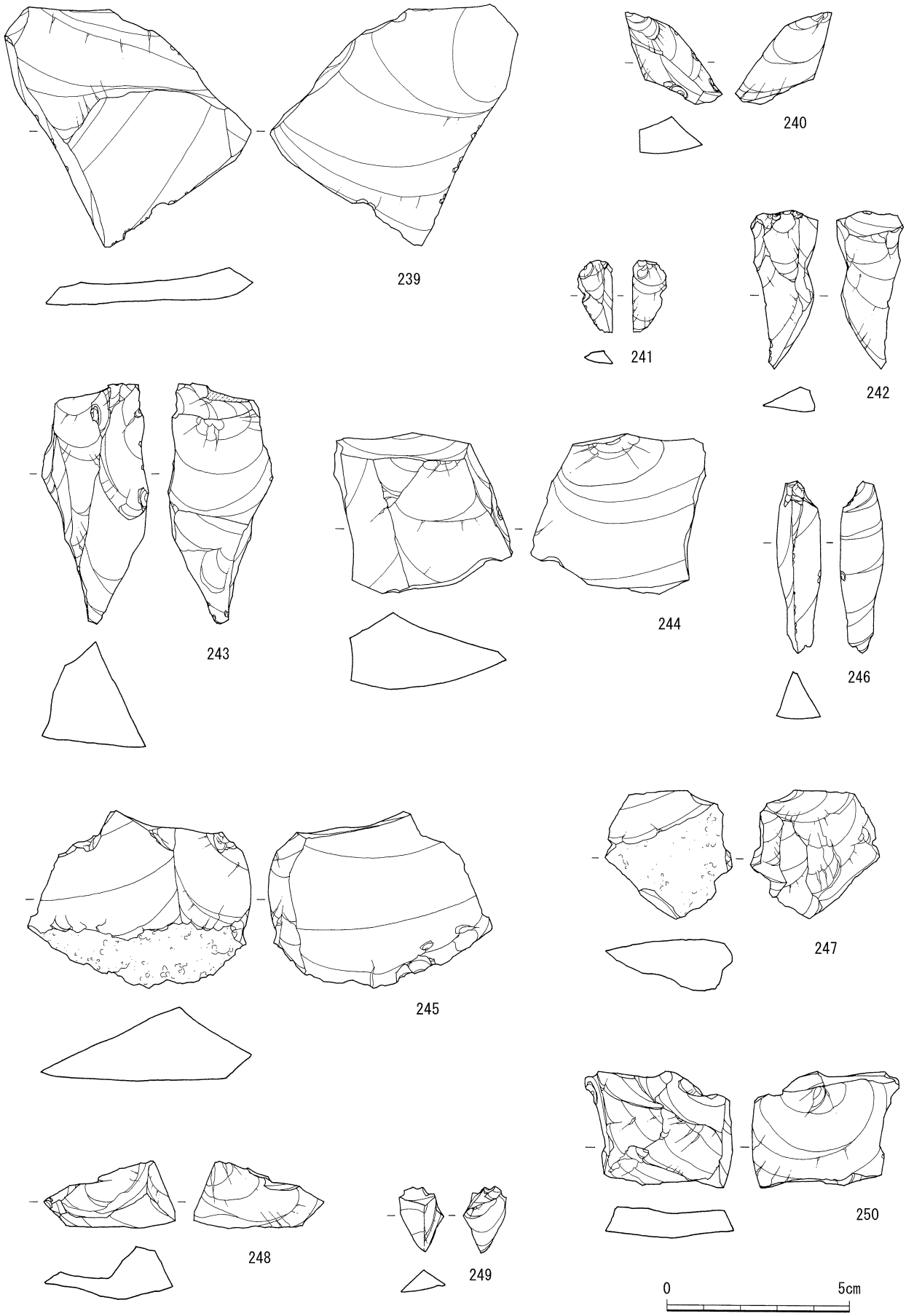
第55図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 43（S=2/3）



第56図　旧石器時代接合資料Ⅱ－⑯分布図（S=1/250）



第57図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図44（S=2/3）



第58図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図45（S=2/3）

黒曜石製石器

桑ノ木津留産黒曜石

＜単体資料＞

細石刃　1点（第59図―251）

251の部位は中間部である。背面左側辺と腹面右側辺に微小剥離痕が認められる（図版3）。

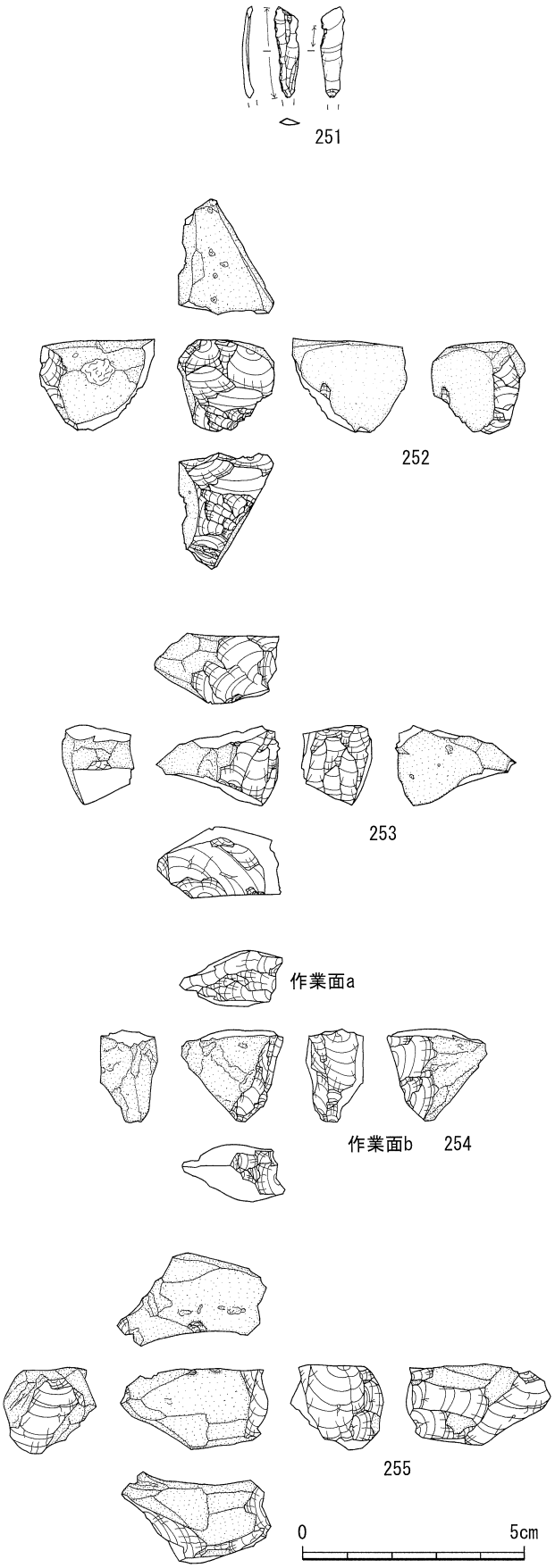
細石刃核　4点（第59図―252～255）

252は、角礫を素材とする。平坦な自然面を打面とする。石核調整の痕跡は認められない。作業面に見られる剥離面の形状は一定せず、これが細石刃かどうかは不明である。石核の下面においても剥片剥離が行われている。それぞれの剥離痕は離れており、それらの切り合い関係は不明である。

253は、角礫を素材とする。まず下面が形成され、次いで打面が形成される。石核調整はまったく行われていない。細石刃剥離は小口面の一端で行われる。

254は、薄い亜角礫を素材とする。細石刃剥離が亜角礫の2つの小口面で行われているが、その剥離は、双方の作業面を打面として行われている。切り合い関係からそれぞれの作業面を、先に剥離されているものを作業面a、後のものを作業面bとする。作業面bの右側にある剥離痕は、稜調整の可能性がある。しかし、それが作業面aでの細石刃剥離に先立つことから、作業面aを主体に考えた場合に、石核の側面調整とも考えられる。

255は、角礫を素材とする。平坦な自然面から細石刃に類似する剥片が剥離される。細石刃の剥離痕と確実に言えるものがなく、失敗品と考えられる。



第59図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図46（S=2/3）

桑ノ木津留産黒曜石製細石刃核単体資料の評価

素材の利用：小角礫素材。

打面の設定：角礫平坦面を打面に設定するものが多く、単剥離打面のもの（252）や、先行する細石刃作業面を打面とするもの（254）がある。

石核の調整：基本的には施されないが、稜上調整が見られるもの（254）がある。

作業面の設定：打面転移が行われるものが一定量認められる。異なる平坦面を打面とするもの（255）や、先行する細石刃作業面に打面を転移するもの（254）がある。

細石刃核は、打面の設定方法から見れば、船野型に近いが、側面調整が行われないことや打面転移を行うことなど異なる点もある。これらの特徴は、野岳・休場Ⅱ型（芝2007）に近いものである。

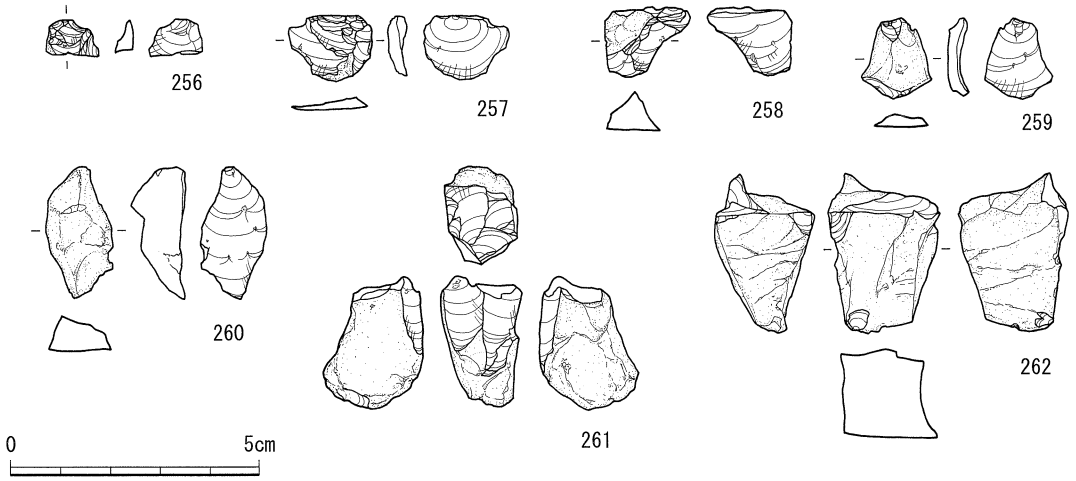
剥片　5点（第60図―256～260）

259・260は、自然面付きの剥片、その他は調整剥片と考えられる剥片である。出土した細石刃核は、細やかな石核調整が施されていないものであり、剥片剥離が行われたとすれば、打面形成あるいは調整に関連するものと予想される。これらの剥片もそうした類のものと想定される。

石核・原石　各1点（第60図―261・262）

261は石核である。石核調整は全く施されておらず、打面再生の痕跡が認められる。形態的に細石刃核に類似するが、作業面の剥離面がやや大きいことから、ここでは石核とした。

262は原石である。細石刃核、石核も同様のサイズであることから、こうした角礫を複数搬入していたものと考えられる。



第60図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図47（S=2/3）

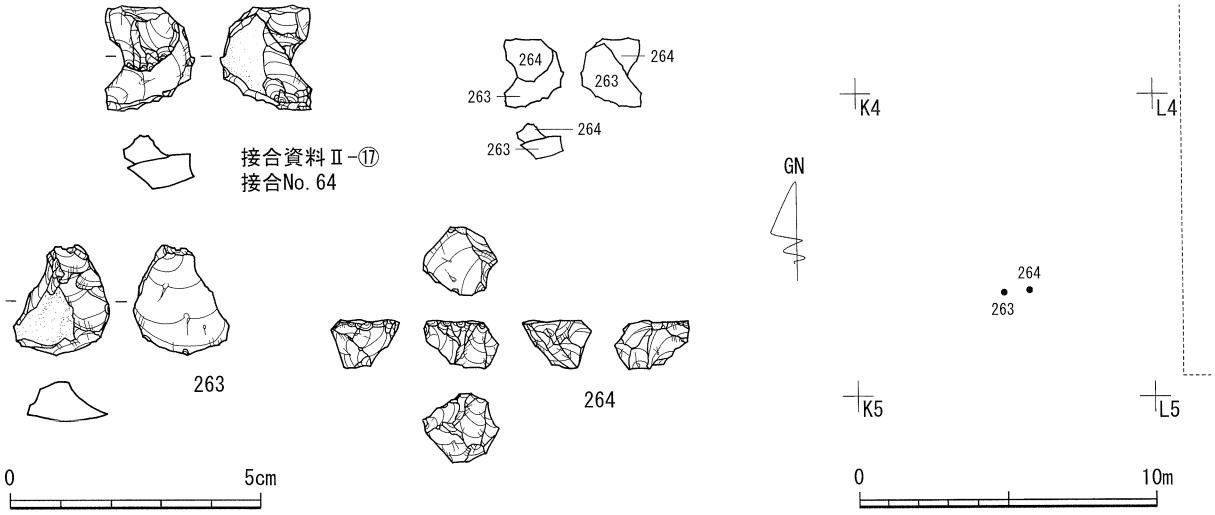
＜接合資料＞

接合資料Ⅱ―⑰　接合№64（第61図―263・264）

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［263→264］

角礫を素材とする。まず、2～3回の打撃によって打面が形成される。石核調整等は行われず、打面から細石刃と思われる小剥片が剥離されている。剥離面からみて2～3枚しか剥離されていない。その後打面再生が行われ、更新された打面（単剥離打面）から細石刃が剥離される。この細石刃は、かなり短く細い。最後に、意図は不明だが、右側面から作業面側へ、作業面から背面側への剥片剥離が行われている。



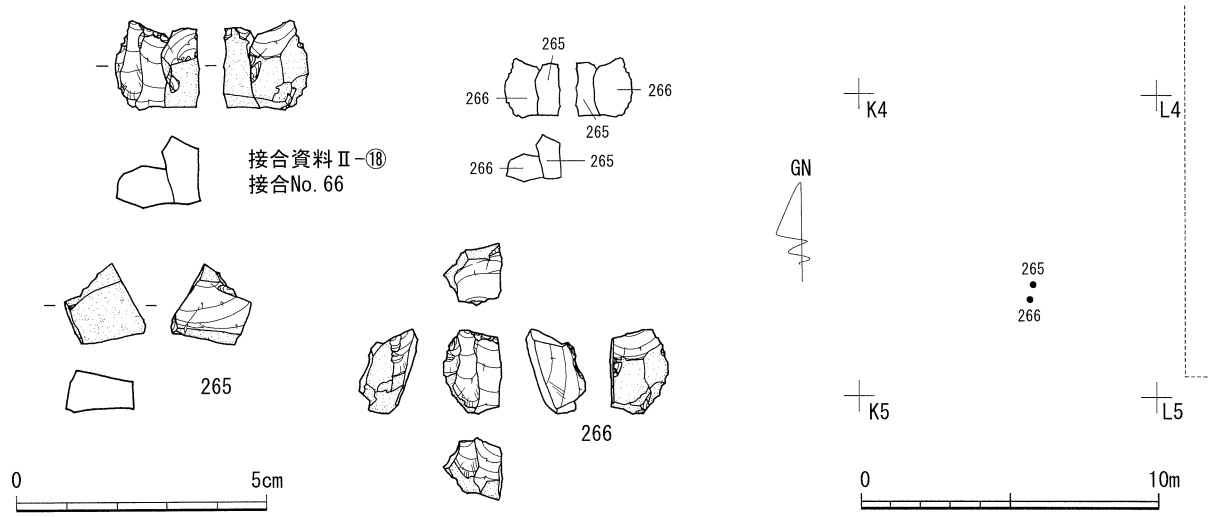
第61図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図48（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑰分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑱　接合No.66（第62図—265・266）

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［265→266］

角礫を素材とする。角礫が（265）と（266）の2つに分割される。265は剥離された後に折れている。以下は266における作業である。まず、1回の打撃によって打面が形成される。打面調整などは行われていない。最後に細石刃剥離が行われる。細石刃剥離痕は2条残っている。



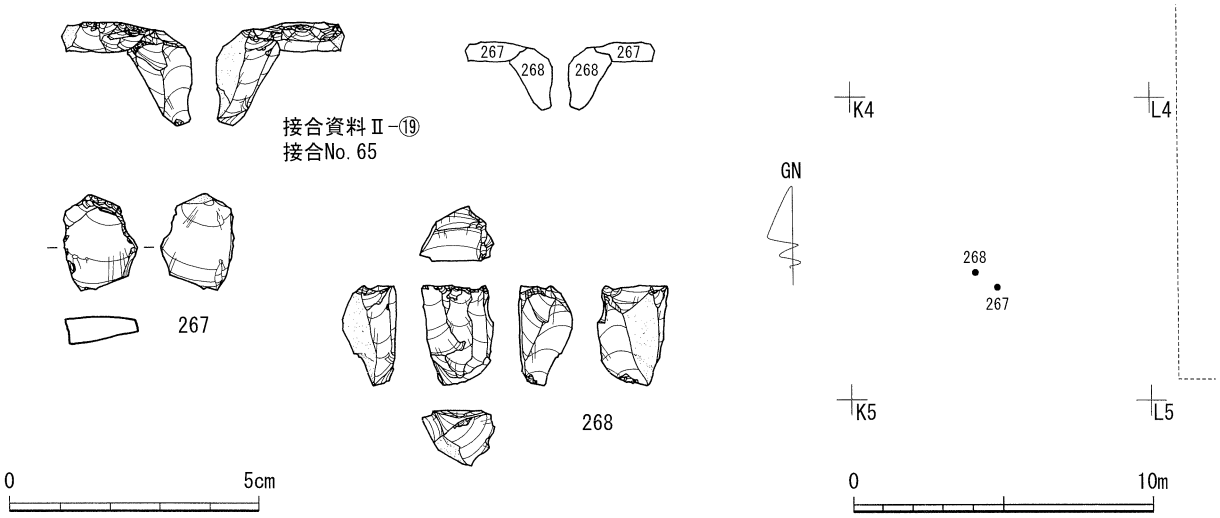
第62図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図49（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑱分布図（S=1/250）

接合資料Ⅱ—⑲　接合No.65（第63図—267・268）

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：［267→268］

角礫を素材とする。その他のものよりもやや大ぶりである。まず、石核調整が行われる。これは背面下端からの加撃によるもので、その他に調整は認められない。次いで、打面が形成される。打面と作業面の接触部には、細やかな調整が施される。これを打面とした細石刃剥離が行われるが、この剥離は細石刃核の側面部でのものである。その後打面再生が行われ、再び細石刃剥離が行われる。細石刃核の下部に大きな剥離面が認められることから、細石刃剥離の過程で作業面再生が行われた可能性がある。



第63図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図50（S=2/3）接合資料Ⅱ－⑲分布図（S=1/250）

腰岳系黒曜石

＜単体資料＞

細石刃　1点（第64図―269）

269の部位は中間部である。上下の端部に微小剥離痕が認められ、さらにそれとともに線状痕が認められる（図版3）。線状痕は、上下端部の全面に著しく認められ、その縁辺に直交している。腹面左側縁には刃部に平行する線状痕も認められるが、その他の刃部には認められない。

細石刃核　1点（第64図―270）

270は、本遺跡唯一の腰岳系黒曜石の細石刃核である。大きさからおそらく剥片素材と考えられるが、素材面が認められず、詳細は不明である。石核調整は側面において認められる。どちらの側面から調整したかは不明だが、両側面ともに、下面から打面へ向かう打撃によって側面が形成される。右側面では、下方および作業面側からの打撃による、やや細やかな側面調整も行われる。細石刃剥離は2面で行われ、両者は双方の作業面を打面としている。先に剥離されているものを作業面a、後のものを作業面bとすると、作業面aには細石刃剥離面が5条、作業面bには4条残る。

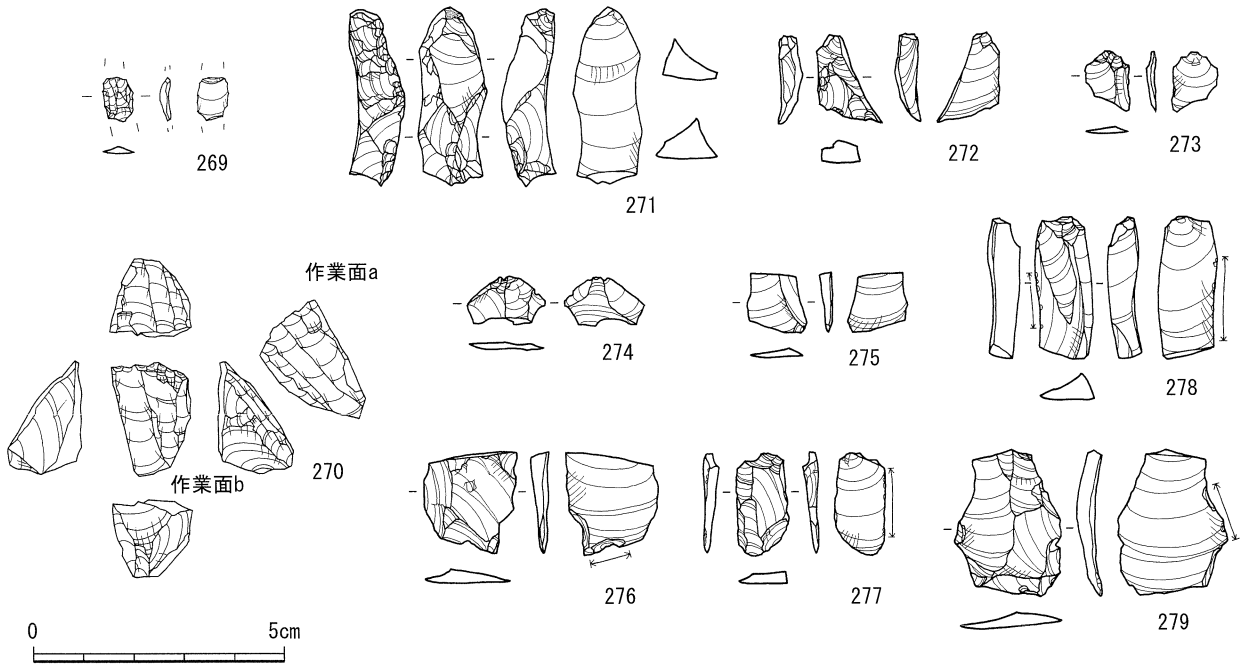
スポール　1点（第64図―271）

271は腰岳系黒曜石製のスポールである。背面側から細やかな調整が行われており、とさか状の稜が形成される。背面には、同一方向の剥離面が認められることから、スポール剥離以前にも同様のスポールが剥離されたものと想定される。左側面下部の稜線には潰れが認められる。下半部を欠損する。

なお、このスポールの打面部全体に横方向の擦痕が認められる。こうした資料は、唐津市の上場台地の細石刃石器群（田島編）や泉福寺洞穴（麻生1984）において特徴的に認められるものである。

剥片　8点（第64図―272～279）

調整剥片と見られる小さな剥片（272～275）と、形態的に整ったもの（276～279）とに分類される。後者には、微小剥離痕が認められる。特に、278には左側縁の表裏両面に認められる（図版3）。276と279は、厚さが0.3cmに満たない薄手の剥片である。製作された痕跡が認められず、この状態で搬入されたものと考えられる。その他の剥片は非常に小さな剥片で、何らかの調整剥片と考えられるが、実態は定かではない。



第64図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 51（S=2/3）

不明黒曜石

色調や質感は腰岳系黒曜石に類似するが、蛍光X線分析の結果（第Ⅳ章第1節）、化学組成が腰岳系とは異なり産地不明と考えられるので、ここでは腰岳系黒曜石とは分けて記述する。

＜単体資料＞

剥片　3点（第65図―281～282）

剥片全てのものに折れ、稜上のつぶれが認められる。かなり消費されたものと考えられる。

第65図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 52（S=2/3）

その他の石材製石器

スクレイパー　2点（第66図―283・284）

283は、ホルンフェルス製の縦長剥片を素材とする。剥片の右側縁には、連続的な二次加工が認められる。刃部角は30～40°である。

284は、砂岩製の厚みのある剥片を素材とする。腹面のほとんどが自然面で構成され、打面は単剥離打面である。剥片の下部に粗い二次加工が施されている。刃部角は30～40°である。

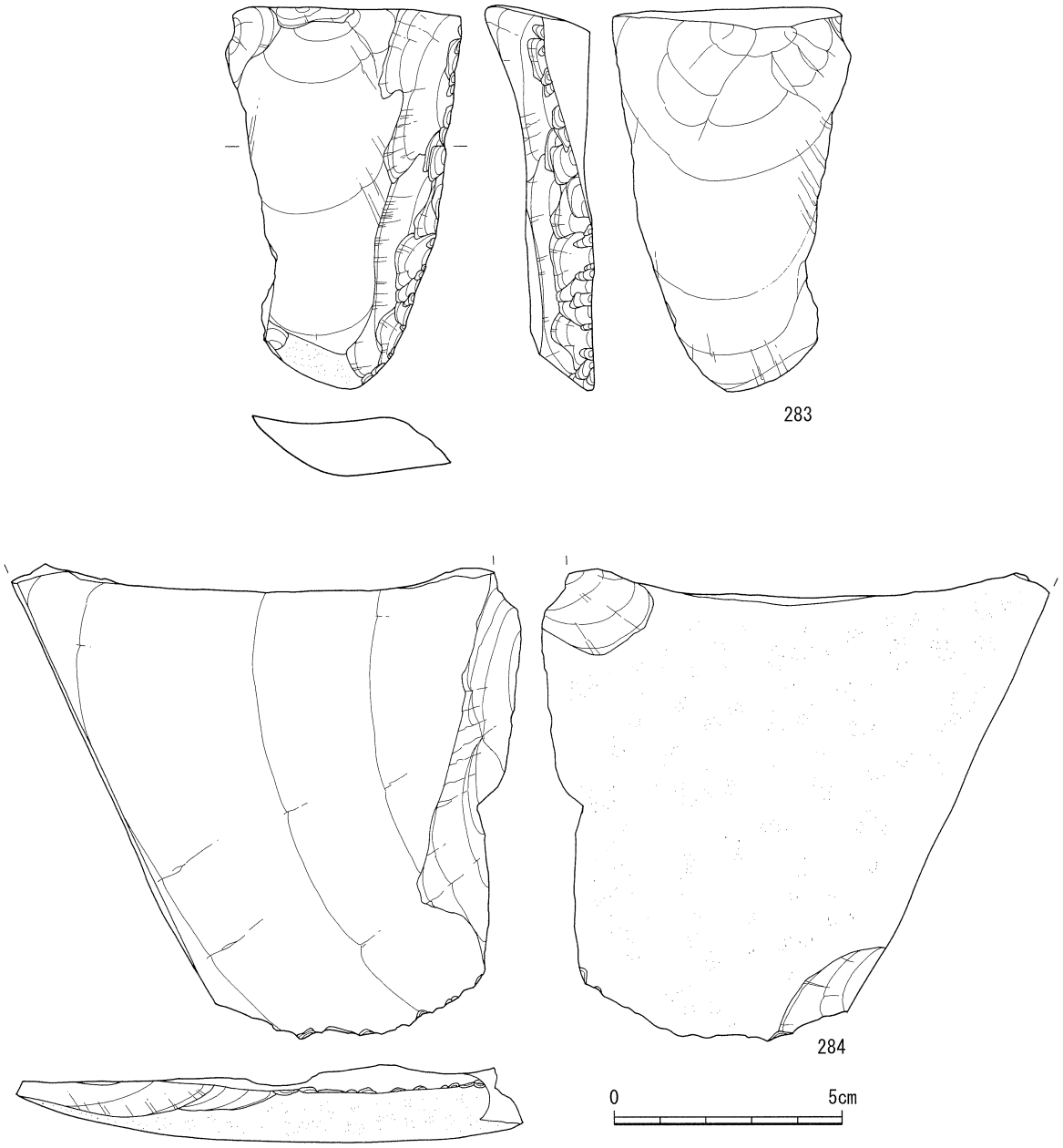
敲石　2点（第67図―285・286）

285は、拳大よりもやや大きい礫岩（長軸10.0 cm、短軸8.0 cm）を素材とする。長軸の両端部にあばた状のつぶれ痕が認められるが、先端部には痕跡がなく、斜辺部に径2.0 cm前後の大きさで認められる。

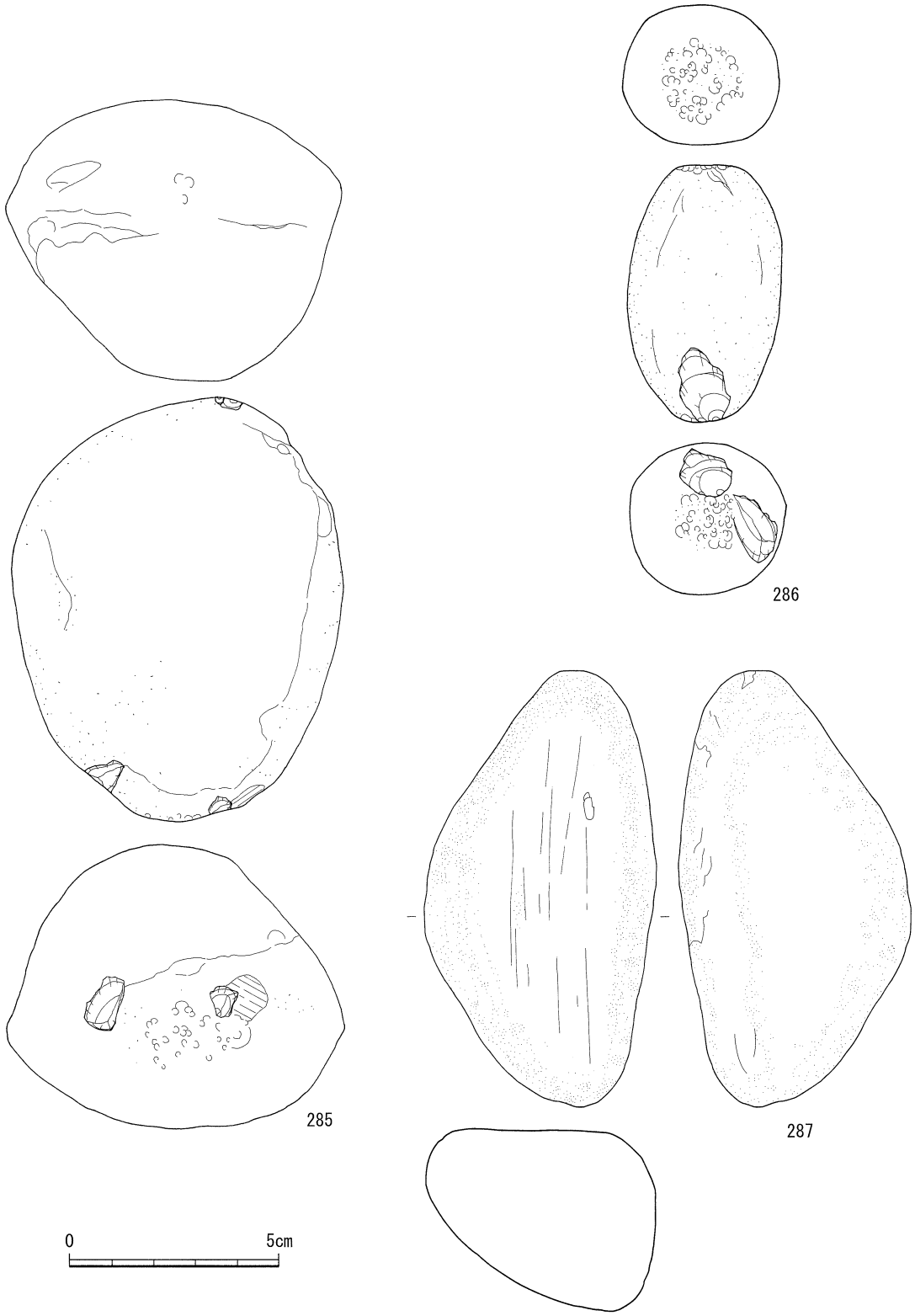
286は、楕円形のチャート礫（長さ6.1 cm、幅3.5 cm）を素材とする。両端部が敲打部として使用され、中央部にあばた上の敲打痕が認められる。そのつぶれの範囲は、上部が13.5 cm×14.7 cm、下部が21.5 cm×19.5 cmであり、下部においてつぶれが著しい。

磨石　1点（第67図―287）

287は、拳大の硬砂岩（長軸10.5㎝、短軸5.5㎝）を素材とする。礫の平坦面に擦痕が認められ、特にその上部から中央部にかけて著しい。その平坦面は、使用のためかやや凹んでいる。



第66図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図53（S=2/3）



第67図　旧石器時代第Ⅱ期石器実測図54（S=2/3）

【参考文献】

麻生優編1984『泉福寺洞穴の発掘記録』築地書館、東京.

岩谷史記1998「狸谷遺跡Ⅴ層石器群における特徴的なナイフ形石器について－狸谷型ナイフ形石器研究（１）－」『肥後考古』第11号、p.81-102、肥後考古学会、熊本.

芝康次郎2007「九州細石刃石器群編年の再検討」『古文化談叢』第56号、p.1-23、九州古文化研究会、福岡.

田島龍太編1992『中尾二ッ枝遺跡（２）』唐津市埋蔵文化財調査報告第50集 唐津市教育委員会、佐賀.

松藤和人1992「南九州における姶良Tn火山灰直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』同志社大学文学部生活文化学科、京都.

番号	器　種	注記番号	石 材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No.	備　考
1	ナイフ形石器	789	流紋岩	-47679.071	51738.817	67.684	M4	3.8	1.6	1.0	4.7		
2	ナイフ形石器	835	流紋岩	-47678.409	51736.509	67.119	M4	3.9	1.7	1.2	5.4		
3	剥片尖頭器	136	流紋岩	-47688.932	51711.423	66.335	K5	8.2	3.3	1.5	31.5		
4	剥片尖頭器	638	流紋岩	-47668.708	51698.012	65.389	I3	5.8	3.1	1.1	15.4		
5	スクレイパー	134	流紋岩	-47689.392	51709.533	66.160	J5	5.0	3.3	0.8	9.3		
6	剥片	773	流紋岩	-47682.669	51738.854	67.185	M5	3.2	8.4	1.9	34.1		
7	剥片	780	流紋岩	-47683.991	51737.371	67.214	M5	4.0	7.7	1.4	34.9		
8	剥片	782	流紋岩	-47684.774	51739.283	67.174	M5	6.5	3.9	0.8	30.2		
9	剥片	836	流紋岩	-47677.480	51736.798	67.138	M4	6.9	4.2	0.5	25.3		
10	石核	781	流紋岩	-47684.169	51737.418	67.135	M5	5.7	5.8	5.2	176.3	30	接合資料Ⅰ－①
11	剥片	783	流紋岩	-47685.078	51738.802	67.202	M5	4.8	5.2	1.4	37.2	30	接合資料Ⅰ－①
12	細石刃	408	流紋岩	-47677.760	51712.722	66.792	K4	2.0	0.7	0.3	0.4		
13	細石刃	809	流紋岩	-47673.152	51705.210	66.233	J4	1.8	0.8	0.2	0.3		
14	細石刃	331	流紋岩	-47677.182	51715.581	66.916	K4	1.7	0.8	0.3	0.4		
15	細石刃	561	流紋岩	-47676.538	51713.127	66.466	K4	1.2	0.5	0.2	0.1以下		
16	細石刃	618	流紋岩	-47669.157	51706.405	66.354	J3	1.3	0.5	0.2	0.1		微小剥離
17	細石刃	720	流紋岩	-47674.651	51707.464	66.199	J4	1.3	0.6	0.2	0.1		微小剥離
18	細石刃	325	流紋岩	-47676.353	51713.823	66.714	K4	0.6	0.5	0.2	0.1以下		
19	細石刃様剥片	199	流紋岩	-47679.082	51702.821	66.149	J4	2.0	0.8	0.4	0.9		
20	細石刃様剥片	278	流紋岩	-47676.853	51711.116	66.722	K4	2.7	0.9	0.5	1.1		
21	細石刃様剥片	433	流紋岩	-47676.546	51713.131	66.757	K4	2.4	0.9	0.3	0.4		
22	細石刃核	7	流紋岩	-47679.583	51708.656	66.410	J5	2.7	4.4	2.7	30.1		
23	細石刃核	237	流紋岩	-47678.968	51708.127	66.526	J4	2.3	4.1	1.3	24.5		
24	細石刃核	451	流紋岩	-47676.347	51715.832	66.583	K4	2.4	1.5	1.7	7.7		
25	細石刃核	488	流紋岩	-47676.614	51714.705	66.732	K4	3.5	3.0	1.3	14.9		
26	細石刃核	556	流紋岩	-47676.145	51712.972	66.633	K4	2.9	2.4	1.5	10.0		
27	細石刃核	749・811	流紋岩	-47674.565	51706.090	66.452	J4	2.5	2.7	1.1	7.2		
28	細石刃核	766	流紋岩	-47673.170	51718.166	66.549	K4	2.3	4.5	1.7	18.2		
29	細石刃核	870	流紋岩	-47674.495	51697.412	66.018	I4	2.8	2.6	1.9	9.9		
30	スクレイパー	176	流紋岩	-47682.177	51711.673	66.530	K5	8.7	6.0	2.1	108.3		
31	スクレイパー	645	流紋岩	-47667.430	51737.096	67.394	M3	4.6	4.2	1.3	21.9		
32	スクレイパー	100	流紋岩	-47685.068	51709.504	66.396	J5	5.7	5.9	2.8	77.0		
33	スクレイパー	643	流紋岩	-47669.198	51735.290	67.399	M3	3.0	4.2	1.0	9.1		
34	スクレイパー	657・659	流紋岩	-47658.673	51702.500	66.364	J2	10.5	8.0	3.0	242.5		
35	剥片	57	流紋岩	-47680.594	51706.023	66.352	J5	1.7	5.2	1.4	16.3		
36	剥片	168	流紋岩	-47686.859	51719.753	66.830	K5	8.2	5.0	1.2	54.7		微小剥離
37	剥片	10	流紋岩	-47680.181	51708.689	66.389	J5	4.9	3.0	1.5	17.4	7	接合資料Ⅱ－①
38	剥片	592	流紋岩	-47679.440	51708.701	66.335	J4	5.1	3.1	1.7	21.6	7	接合資料Ⅱ－①
39	剥片	61	流紋岩	-47681.008	51704.791	66.301	J5	4.4	1.7	1.0	5.7	7	接合資料Ⅱ－①
40	細石刃核	29	流紋岩	-47680.726	51708.757	66.506	J5	2.6	1.9	4.0	20.0	7	接合資料Ⅱ－①
41	二次加工剥片	531	流紋岩	-47675.908	51714.030	66.664	K4	5.1	2.7	2.0	24.9	16	接合資料Ⅱ－②
42	剥片	335	流紋岩	-47677.272	51714.417	66.781	K4	2.2	2.4	1.2	5.5	16	接合資料Ⅱ－②
43	剥片	280	流紋岩	-47676.486	51710.979	66.674	K4	1.9	2.3	0.6	2.0	16	接合資料Ⅱ－②
44	剥片	401	流紋岩	-47676.998	51711.882	66.747	K4	1.3	1.0	0.3	0.3	16	接合資料Ⅱ－②
45	剥片	416	流紋岩	-47677.255	51712.559	66.712	K4	3.3	4.9	1.2	14.4	16	接合資料Ⅱ－②
46	剥片	409	流紋岩	-47677.686	51712.729	66.765	K4	2.1	2.1	0.9	2.6	16	接合資料Ⅱ－②
47	剥片	423	流紋岩	-47677.636	51713.296	66.795	K4	2.3	1.6	0.5	2.0	16	接合資料Ⅱ－②
48	細石刃核	317	流紋岩	-47676.694	51715.401	66.859	K4	2.2	3.8	1.6	9.9	16	接合資料Ⅱ－②
49	剥片	740	流紋岩	-47673.781	51715.109	66.807	K4	4.7	4.1	1.9	19.5	17	接合資料Ⅱ－③
50	剥片	516	流紋岩	-47676.210	51715.227	66.607	K4	1.2	2.5	0.5	1.0	17	接合資料Ⅱ－③
51	二次加工剥片	271	流紋岩	-47676.792	51710.092	66.616	J4	4.5	3.5	1.1	16.6	17	接合資料Ⅱ－③
52	スクレイパー	365	流紋岩	-47678.647	51713.801	66.771	K4	4.3	3.0	1.2	18.4	17	接合資料Ⅱ－③
53	剥片	253	流紋岩	-47677.718	51709.515	66.632	J4	2.4	2.2	0.7	2.6	18	接合資料Ⅱ－④
54	剥片	487	流紋岩	-47676.679	51714.444	66.691	K4	3.1	1.8	0.5	2.5	18	接合資料Ⅱ－④
55	剥片	680	流紋岩	-47676.660	51714.453	66.592	K4	1.4	1.1	0.4	0.4	18	接合資料Ⅱ－④
56	細石刃核	707	流紋岩	-47677.444	51716.353	66.929	K4	2.8	1.6	2.5	9.6	18	接合資料Ⅱ－④
57	剥片	607	流紋岩	-47666.154	51705.772	66.400	J3	4.9	7.3	2.9	74.6	24	接合資料Ⅱ－⑤
58	剥片	634	流紋岩	-47669.746	51695.376	65.985	I3	3.0	2.7	1.4	10.3	24	接合資料Ⅱ－⑤
59	剥片	619	流紋岩	-47669.909	51705.902	66.434	J3	4.8	5.0	1.4	21.9	24	接合資料Ⅱ－⑤
60	剥片	823	流紋岩	-47670.813	51705.385	66.510	J4	2.0	2.9	1.2	6.1	24	接合資料Ⅱ－⑤
61	剥片	847	流紋岩	-47669.094	51702.466	66.268	J3	4.4	4.4	1.6	25.1	24	接合資料Ⅱ－⑤
62	剥片	848	流紋岩	-47669.142	51703.925	66.414	J3	3.1	5.9	1.8	23.9	24	接合資料Ⅱ－⑤
63	剥片	824	流紋岩	-47670.925	51703.398	66.396	J4	3.3	4.3	1.0	11.4	24	接合資料Ⅱ－⑤
64	剥片	840	流紋岩	-47671.765	51702.756	66.294	J4	2.5	3.5	0.7	6.1	24	接合資料Ⅱ－⑤
65	剥片	611	流紋岩	-47668.686	51705.586	66.389	J3	4.2	3.6	0.7	8.8	24	接合資料Ⅱ－⑤
66	剥片	564	流紋岩	-47675.977	51712.103	66.644	K4	5.1	1.7	0.6	5.8	31	接合資料Ⅱ－⑥
67	剥片	286	流紋岩	-47675.554	51712.231	66.829	K4	3.5	3.3	0.6	6.5	31	接合資料Ⅱ－⑥
68	剥片	274	流紋岩	-47677.158	51710.989	66.703	K4	2.8	2.4	0.6	4.0	31	接合資料Ⅱ－⑥
69	剥片	一括	流紋岩					2.7	2.5	0.5	4.2	31	接合資料Ⅱ－⑥
70	剥片	505	流紋岩	-47676.347	51714.904	66.710	K4	4.6	5.2	2.8	51.5	31	接合資料Ⅱ－⑥
71	剥片	333	流紋岩	-47677.367	51715.542	66.907	K4	3.2	2.9	0.5	6.8	31	接合資料Ⅱ－⑥
72	剥片	299	流紋岩	-47675.756	51715.020	66.781	K4	1.9	1.6	0.5	1.4	31	接合資料Ⅱ－⑥

第１表　旧石器時代石器計測表１

番号	器　種	注記番号	石 材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No.	備　考
73	剥片	337	流紋岩	-47676.911	51714.445	66.851	K4	2.5	1.7	1.2	4.8	31	接合資料Ⅱ－⑥
74	剥片	739	流紋岩	-47675.965	51716.531	66.762	K4	2.4	1.3	0.3	1.4	31	接合資料Ⅱ－⑥
75	剥片	349	流紋岩	-47677.726	51713.614	66.697	K4	2.3	1.3	0.6	1.3	31	接合資料Ⅱ－⑥
76	細石刃核	520	流紋岩	-47677.320	51713.673	66.666	K4	2.2	1.5	2.4	7.8	33	接合資料Ⅱ－⑦
77	剥片	373	流紋岩	-47678.084	51713.025	66.718	K4	4.4	2.3	2.1	20.4	33	接合資料Ⅱ－⑦
78	細石刃核	713	流紋岩	-47671.812	51716.636	66.957	K4	2.7	1.5	1.6	8.0	33	接合資料Ⅱ－⑦
79	剥片	393	流紋岩	-47678.452	51711.791	66.670	K4	2.7	3.3	0.8	5.6	34	接合資料Ⅱ－⑧
80	剥片	507	流紋岩	-47676.491	51714.908	66.732	K4	1.5	2.0	0.9	1.9	34	接合資料Ⅱ－⑧
81	剥片	501	流紋岩	-47676.423	51714.811	66.711	K4	2.3	2.5	0.8	3.8	34	接合資料Ⅱ－⑧
82	剥片	702	流紋岩	-47676.660	51714.692	66.592	K4	3.5	2.4	0.5	4.2	34	接合資料Ⅱ－⑧
83	剥片	410	流紋岩	-47677.561	51712.563	66.769	K4	3.8	2.5	0.8	6.4	34	接合資料Ⅱ－⑧
84	剥片	341	流紋岩	-47677.261	51714.070	66.813	K4	2.0	1.3	0.4	0.9	34	接合資料Ⅱ－⑧
85	剥片	485	流紋岩	-47676.823	51714.727	66.729	K4	1.6	1.3	0.3	0.5	34	接合資料Ⅱ－⑧
86	二次加工剥片	478	流紋岩	-47677.136	51714.663	66.690	K4	2.2	2.8	1.0	3.2	34	接合資料Ⅱ－⑧
87	剥片	698	流紋岩	-47658.652	51711.232	66.759	K2	2.7	1.6	0.6	2.8	34	接合資料Ⅱ－⑧
88	剥片	291	流紋岩	-47675.558	51713.730	66.754	K4	2.5	1.5	0.6	1.3	34	接合資料Ⅱ－⑧
89	細石刃核	512	流紋岩	-47676.456	51715.248	66.730	K4	2.8	2.2	3.8	20.1	34	接合資料Ⅱ－⑧
90	剥片	330	流紋岩	-47676.794	51715.731	66.870	K4	2.8	1.3	0.8	2.8	37	接合資料Ⅱ－⑨
91	剥片	671	流紋岩	-47677.176	51714.391	66.704	K4	3.2	2.1	0.6	6.1	37	接合資料Ⅱ－⑨
92	石核	526	流紋岩	-47676.921	51713.687	66.698	K4	3.5	1.9	2.9	23.3	37	接合資料Ⅱ－⑨
93	剥片	417	流紋岩	-47676.934	51712.774	66.818	K4	2.3	1.0	0.8	1.6	43	接合資料Ⅱ－⑩
94	剥片	494	流紋岩	-47676.788	51714.598	66.708	K4	2.3	1.5	1.0	3.7	43	接合資料Ⅱ－⑩
95	細石刃核	430	流紋岩	-47676.612	51712.973	66.818	K4	2.6	2.0	3.3	17.8	43	接合資料Ⅱ－⑩
96	剥片	87	流紋岩	-47681.262	51704.793	66.171	J5	3.1	2.3	0.4	2.1	71	接合資料Ⅱ－⑪
97	細石刃核	30	流紋岩	-47680.757	51708.695	66.508	J5	3.2	1.3	3.8	18.7	71	接合資料Ⅱ－⑪
98	剥片	852	流紋岩	-47665.585	51689.490	65.853	H3	3.0	1.5	4.0	1.7	78	接合資料Ⅱ－⑫
99	剥片	85	流紋岩	-47681.358	51700.651	66.002	J5	1.9	1.8	1.3	7.3	78	接合資料Ⅱ－⑫
100	細石刃核	82	流紋岩	-47680.638	51701.968	65.987	J5	2.6	1.7	1.7	5.4	78	接合資料Ⅱ－⑫
101	二次加工剥片	225	流紋岩	-47675.717	51706.666	66.281	J4	7.9	3.9	1.8	79.6	79	接合資料Ⅱ－⑬
102	剥片	725	流紋岩	-47673.504	51708.770	66.377	J4	2.7	0.9	0.5	1.5	79	接合資料Ⅱ－⑬
103	剥片	224	流紋岩	-47675.344	51706.539	66.372	J4	1.5	2.4	0.4	1.5	79	接合資料Ⅱ－⑬
104	剥片	865	流紋岩	-47675.691	51699.514	65.987	I4	5.1	4.9	1.7	45.2	79	接合資料Ⅱ－⑬
105	剥片	一括	流紋岩					2.3	1.6	0.8	1.9	79	接合資料Ⅱ－⑬
106	剥片	661	流紋岩	-47665.808	51695.754	65.827	I3	3.4	2.2	1.2	9.1	79	接合資料Ⅱ－⑬
107	剥片	723	流紋岩	-47673.898	51707.860	66.342	J4	3.2	1.8	1.0	5.2	79	接合資料Ⅱ－⑬
108	剥片	763	流紋岩	-47674.321	51704.751	66.353	J4	4.6	3.0	1.8	16.6	79	接合資料Ⅱ－⑬
109	剥片	721	流紋岩	-47674.704	51707.119	66.230	J4	2.6	1.2	0.3	1.4	79	接合資料Ⅱ－⑬
110	剥片	856	流紋岩	-47665.274	51694.738	66.039	I3	2.5	2.6	0.3	2.9	79	接合資料Ⅱ－⑬
111	剥片	750	流紋岩	-47674.814	51706.045	66.420	J4	2.4	2.6	0.6	4.2	79	接合資料Ⅱ－⑬
112	石核	598	流紋岩	-47679.017	51706.675	66.185	J4	4.0	3.6	4.6	61.7	79	接合資料Ⅱ－⑬
113	剥片	761	流紋岩	-47674.298	51703.602	66.437	J4	3.8	3.5	0.8	5.1	79	接合資料Ⅱ－⑬
114	剥片	796	流紋岩	-47669.235	51709.030	66.515	J3	2.8	1.9	0.4	2.2	79	接合資料Ⅱ－⑬
115	剥片	191	流紋岩	-47675.102	51703.378	66.294	J4	2.0	1.9	0.5	1.5	79	接合資料Ⅱ－⑬
116	剥片	195	流紋岩	-47676.861	51704.460	66.225	J4	2.3	3.5	0.6	3.9	79	接合資料Ⅱ－⑬
117	剥片	189	流紋岩	-47676.633	51703.127	66.277	J4	2.2	2.3	0.4	2.2	79	接合資料Ⅱ－⑬
118	剥片	622	流紋岩	-47665.922	51695.960	65.984	J3	1.8	1.8	0.4	1.1	79	接合資料Ⅱ－⑬
119	剥片	722	流紋岩	-47674.143	51707.106	66.302	J4	2.7	2.9	0.7	4.3	79	接合資料Ⅱ－⑬
120	剥片	769	流紋岩	-47673.734	51705.120	66.057	J4	2.3	1.9	0.4	2.6	79	接合資料Ⅱ－⑬
121	剥片	223	流紋岩	-47675.515	51705.815	66.255	J4	2.9	2.1	0.9	4.3	79	接合資料Ⅱ－⑬
122	剥片	807	流紋岩	-47672.957	51706.040	66.323	J4	2.7	2.0	1.5	9.8	79	接合資料Ⅱ－⑬
123	石核	608	流紋岩	-47666.527	51706.080	66.349	J3	5.6	2.6	3.2	48.0	79	接合資料Ⅱ－⑬
124	剥片	307	流紋岩	-47676.374	51715.011	66.783	K4	1.7	2.9	0.8	4.2	80	接合資料Ⅱ－⑭
125	剥片	336	流紋岩	-47676.960	51714.454	66.791	K4	2.6	4.1	0.9	6.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
126	剥片	369	流紋岩	-47678.176	51713.314	66.702	K4	4.2	3.4	1.0	10.2	80	接合資料Ⅱ－⑭
127	剥片	435	流紋岩	-47676.502	51713.028	66.795	K4	3.0	3.5	1.5	14.1	80	接合資料Ⅱ－⑭
128	剥片	314	流紋岩	-47676.750	51715.764	66.878	K4	1.8	1.1	0.4	0.5	80	接合資料Ⅱ－⑭
129	剥片	318	流紋岩	-47676.794	51715.378	66.800	K4	2.9	2.2	0.8	5.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
130	剥片	446	流紋岩	-47675.992	51716.080	66.621	K4	2.7	4.5	1.3	15.0	80	接合資料Ⅱ－⑭
131	剥片	160	流紋岩	-47679.810	51712.801	66.763	K5	2.2	2.0	0.7	3.6	80	接合資料Ⅱ－⑭
132	剥片	359	流紋岩	-47678.111	51714.314	66.855	K4	3.2	2.7	1.4	11.5	80	接合資料Ⅱ－⑭
133	剥片	297	流紋岩	-47675.018	51714.728	66.796	K4	3.3	5.1	0.9	12.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
134	剥片	747	流紋岩	-47677.048	51717.725	66.819	K4	3.1	6.1	2.2	38.9	80	接合資料Ⅱ－⑭
135	剥片	456	流紋岩	-47677.613	51716.006	66.715	K4	3.9	2.1	1.1	14.4	80	接合資料Ⅱ－⑭
136	剥片	706	流紋岩	-47678.297	51716.305	66.598	K4	1.3	1.9	1.7	5.0	80	接合資料Ⅱ－⑭
137	剥片	309	流紋岩	-47676.431	51715.464	66.757	K4	2.9	3.3	1.0	8.8	80	接合資料Ⅱ－⑭
138	剥片	362	流紋岩	-47679.143	51714.495	66.845	K4	2.0	3.5	1.2	7.1	80	接合資料Ⅱ－⑭
139	剥片	699	流紋岩	-47675.905	51714.035	66.588	K4	0.7	1.8	0.4	0.4	80	接合資料Ⅱ－⑭
140	剥片	517	流紋岩	-47677.322	51715.114	66.700	K4	3.7	2.8	1.3	9.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
141	剥片	552	流紋岩	-47675.575	51712.778	66.592	K4	2.6	3.0	0.9	4.2	80	接合資料Ⅱ－⑭
142	剥片	350	流紋岩	-47678.035	51715.693	66.944	K4	4.1	3.8	1.0	11.0	80	接合資料Ⅱ－⑭
143	剥片	348	流紋岩	-47677.857	51713.890	66.821	K4	1.4	2.9	1.3	3.5	80	接合資料Ⅱ－⑭
144	剥片	366	流紋岩	-47678.584	51713.782	66.796	K4	2.7	3.7	0.8	7.0	80	接合資料Ⅱ－⑭

第２表　旧石器時代石器計測表２

番号	器　種	注記番号	石 材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No.	備　考
145	剥片	683	流紋岩	-47676.541	51714.599	66.643	K4	2.8	3.5	0.8	5.6	80	接合資料Ⅱ－⑭
146	剥片	527	流紋岩	-47676.955	51713.648	66.633	K4	1.9	2.5	0.6	3.2	80	接合資料Ⅱ－⑭
147	剥片	579	流紋岩	-47679.007	51714.698	66.599	K4	2.2	2.6	1.3	7.5	80	接合資料Ⅱ－⑭
148	剥片	390	流紋岩	-47679.176	51710.736	66.697	K4	5.5	2.1	2.1	19.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
149	剥片	422	流紋岩	-47677.617	51713.342	66.795	K4	4.6	2.5	2.1	19.3	80	接合資料Ⅱ－⑭
150	剥片	156	流紋岩	-47680.428	51711.759	66.696	K5	2.9	2.1	1.0	4.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
151	剥片	240	流紋岩	-47678.268	51708.681	66.533	J4	2.7	2.8	0.8	4.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
152	剥片	425	流紋岩	-47677.216	51713.098	66.737	K4	3.2	4.2	0.9	8.6	80	接合資料Ⅱ－⑭
153	剥片	696	流紋岩	-47676.606	51711.084	66.311	K4	2.7	1.9	0.5	2.0	80	接合資料Ⅱ－⑭
154	剥片	682	流紋岩	-47676.572	51714.370	66.521	K4	3.7	3.2	0.5	6.4	80	接合資料Ⅱ－⑭
155	剥片	793	流紋岩	-47666.212	51714.620	66.871	K3	3.7	3.2	0.8	8.7	80	接合資料Ⅱ－⑭
156	剥片	566	流紋岩	-47675.004	51712.201	66.602	K4	3.8	3.9	0.9	11.6	80	接合資料Ⅱ－⑭
157	剥片	249	流紋岩	-47679.081	51708.865	66.483	J4	2.0	3.0	0.9	3.5	80	接合資料Ⅱ－⑭
158	剥片	419	流紋岩	-47676.588	51712.307	66.755	K4	3.0	2.4	0.8	3.8	80	接合資料Ⅱ－⑭
159	剥片	342	流紋岩	-47676.845	51713.943	66.889	K4	2.3	3.5	0.6	3.3	80	接合資料Ⅱ－⑭
160	剥片	506	流紋岩	-47676.264	51714.927	66.711	K4	2.3	3.3	0.7	3.6	80	接合資料Ⅱ－⑭
161	剥片	570	流紋岩	-47677.081	51711.886	66.564	K4	2.6	2.4	0.3	1.2	80	接合資料Ⅱ－⑭
162	剥片	258	流紋岩	-47678.918	51709.621	66.685	J4	1.3	3.0	0.5	1.4	80	接合資料Ⅱ－⑭
163	剥片	18	流紋岩	-47681.551	51709.955	66.646	J5	2.6	3.8	0.8	8.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
164	剥片	69	流紋岩	-47681.151	51707.747	66.447	J5	3.0	5.3	1.9	24.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
165	剥片	40	流紋岩	-47679.984	51707.437	66.286	J5	2.3	3.1	1.7	8.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
166	剥片	48	流紋岩	-47680.049	51706.878	66.388	J5	3.5	4.3	2.0	32.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
167	剥片	238	流紋岩	-47678.547	51707.812	66.505	J4	2.2	1.7	1.5	4.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
168	剥片	263	流紋岩	-47679.385	51709.566	66.414	J4	6.6	6.4	2.1	58.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
169	剥片	23	流紋岩	-47681.458	51709.393	66.450	J5	2.9	1.4	0.6	1.3	81	接合資料Ⅱ－⑮
170	剥片	71	流紋岩	-47681.721	51707.736	66.485	J5	6.2	5.8	1.9	53.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
171	剥片	60	流紋岩	-47681.086	51705.921	66.391	J5	2.6	4.9	0.8	9.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
172	剥片	605	流紋岩	-47678.394	51705.940	66.107	J4	3.2	3.5	0.8	6.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
173	スクレイパー	13	流紋岩	-47680.630	51709.934	66.431	J5	5.3	6.9	1.5	54.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
174	剥片	248	流紋岩	-47679.013	51708.742	66.448	J4	4.6	5.6	1.0	21.6	81	接合資料Ⅱ－⑮
175	剥片	262	流紋岩	-47679.390	51709.760	66.564	J4	2.9	3.7	0.9	4.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
176	剥片	4	流紋岩	-47679.670	51709.425	66.404	J5	8.1	8.5	2.9	186.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
177	剥片	46	流紋岩	-47679.697	51706.640	66.332	J5	1.2	2.6	0.6	1.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
178	剥片	387	流紋岩	-47679.594	51710.391	66.644	K4	2.8	4.2	1.2	10.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
179	剥片	74	流紋岩	-47681.456	51705.479	66.289	J5	3.9	4.9	1.2	28.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
180	剥片	380	流紋岩	-47679.212	51712.021	66.730	K4	4.5	3.5	1.9	26.1	81	接合資料Ⅱ－⑮
181	剥片	83	流紋岩	-47680.679	51702.145	65.927	J5	7.8	6.1	2.3	93.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
182	剥片	5	流紋岩	-47680.096	51709.424	66.541	J5	4.1	3.3	0.8	9.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
183	剥片	67	流紋岩	-47681.187	51707.080	66.457	J5	3.7	4.4	0.7	8.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
184	剥片	172	流紋岩	-47689.391	51716.459	66.685	K5	2.9	2.2	0.4	2.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
185	剥片	34	流紋岩	-47679.663	51707.757	66.391	J5	1.3	2.0	0.3	0.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
186	剥片	265	流紋岩	-47679.721	51709.831	66.518	J4	5.9	4.0	1.0	25.3	81	接合資料Ⅱ－⑮
187	剥片	245	流紋岩	-47679.579	51708.651	66.302	J4	7.9	3.7	1.7	47.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
188	剥片	72	流紋岩	-47681.747	51706.302	66.430	J5	3.5	2.3	0.7	5.2	81	接合資料Ⅱ－⑮
189	剥片	599	流紋岩	-47679.082	51706.528	66.206	J4	2.7	1.9	0.4	1.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
190	剥片	192	流紋岩	-47675.467	51704.902	66.377	J4	5.3	4.5	1.6	24.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
191	剥片	65	流紋岩	-47680.908	51707.386	66.445	J5	2.9	2.9	0.8	4.4	81	接合資料Ⅱ－⑮
192	剥片	597	流紋岩	-47678.916	51708.375	66.300	J4	1.6	2.3	0.5	1.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
193	剥片	一括	流紋岩					3.2	2.9	0.6	4.1	81	接合資料Ⅱ－⑮
194	剥片	862	流紋岩	-47673.302	51697.236	65.987	I4	7.4	7.2	1.3	47.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
195	剥片	384	流紋岩	-47680.291	51710.482	66.510	K4	6.5	3.2	1.6	27.2	81	接合資料Ⅱ－⑮
196	剥片	173	流紋岩	-47689.334	51716.155	66.675	K5	5.4	4.2	2.0	24.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
197	剥片	439	流紋岩	-47674.715	51694.737	66.051	I4	5.4	3.6	1.0	15.6	81	接合資料Ⅱ－⑮
198	剥片	38	流紋岩	-47679.897	51707.690	66.458	J5	4.6	6.0	1.9	49.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
199	剥片	32	流紋岩	-47680.141	51708.403	66.392	J5	1.6	4.0	1.4	8.0	81	接合資料Ⅱ－⑮
200	剥片	212	流紋岩	-47678.567	51704.800	66.442	J4	1.6	3.5	0.8	3.6	81	接合資料Ⅱ－⑮
201	剥片	47	流紋岩	-47680.007	51707.090	66.320	J5	2.8	4.7	1.0	9.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
202	剥片	231	流紋岩	-47679.008	51707.576	66.476	J4	2.8	1.9	0.5	2.2	81	接合資料Ⅱ－⑮
203	剥片	226	流紋岩	-47676.853	51707.683	66.460	J4	3.1	3.0	0.7	5.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
204	剥片	203	流紋岩	-47679.791	51704.988	65.965	J4	3.1	2.0	0.5	1.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
205	剥片	266	流紋岩	-47680.029	51709.622	66.469	J4	5.8	5.7	1.1	28.1	81	接合資料Ⅱ－⑮
206	剥片	84	流紋岩	-47680.989	51701.253	66.006	J5	3.0	1.6	1.2	3.3	81	接合資料Ⅱ－⑮
207	剥片	62	流紋岩	-47680.937	51704.510	66.239	J5	3.5	1.5	1.1	6.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
208	剥片	389	流紋岩	-47679.245	51710.693	66.675	K4	4.0	1.7	2.1	6.2	81	接合資料Ⅱ－⑮
209	剥片	157	流紋岩	-47680.603	51711.762	66.708	K5	3.7	3.4	3.0	46.5	81	接合資料Ⅱ－⑮
210	剥片	150	流紋岩	-47679.850	51710.543	66.601	K5	2.6	4.1	2.9	26.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
211	剥片	162	流紋岩	-47679.711	51713.690	66.902	K5	2.7	2.2	1.6	11.3	81	接合資料Ⅱ－⑮
212	剥片	151	流紋岩	-47679.811	51711.056	66.686	K5	3.0	2.1	1.9	11.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
213	剥片	26	流紋岩	-47681.473	51708.467	66.472	J5	4.3	2.4	1.5	12.3	81	接合資料Ⅱ－⑮
214	剥片	21	流紋岩	-47681.432	51709.483	66.429	J5	0.9	2.3	0.7	0.8	81	接合資料Ⅱ－⑮
215	剥片	385	流紋岩	-47679.971	51710.977	66.537	K4	1.8	1.5	1.7	3.4	81	接合資料Ⅱ－⑮
216	剥片	35	流紋岩	-47679.693	51707.711	66.387	J5	2.1	3.4	1.3	4.5	81	接合資料Ⅱ－⑮

第３表　旧石器時代石器計測表３

番号	器　種	注記番号	石 材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No.	備　考
217	剥片	377	流紋岩	-47679.597	51712.829	66.696	K4	1.8	4.0	1.6	12.1	81	接合資料Ⅱ－⑮
218	剥片	152	流紋岩	-47680.012	51710.986	66.621	K5	1.8	4.1	1.3	8.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
219	剥片	252・259	流紋岩	-47678.549	51708.998	66.552	J4	2.9	3.7	1.0	9.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
220	剥片	383	流紋岩	-47680.409	51710.497	66.584	K4	2.2	2.5	1.7	8.1	81	接合資料Ⅱ－⑮
221	剥片	16	流紋岩	-47680.916	51709.467	66.563	J5	2.9	4.3	2.4	27.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
222	剥片	158	流紋岩	-47680.401	51712.290	66.660	K5	3.0	2.1	1.6	10.6	81	接合資料Ⅱ－⑮
223	剥片	251	流紋岩	-47678.605	51708.992	66.585	J4	1.6	2.3	1.7	3.9	81	接合資料Ⅱ－⑮
224	剥片	155	流紋岩	-47680.195	51711.767	66.522	K5	4.6	2.5	2.3	19.7	81	接合資料Ⅱ－⑮
225	剥片	268	流紋岩	-47677.919	51709.821	66.507	J4	2.8	2.3	1.7	9.8	83	接合資料Ⅱ－⑯
226	剥片	792	流紋岩	-47670.881	51714.873	66.724	K4	3.2	3.7	0.5	4.5	83	接合資料Ⅱ－⑯
227	剥片	593	流紋岩	-47679.559	51708.920	66.084	J4	3.8	2.8	1.5	9.0	83	接合資料Ⅱ－⑯
228	剥片	15	流紋岩	-47680.811	51709.457	66.496	J5	3.8	2.4	1.4	9.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
229	剥片	169	流紋岩	-47687.393	51717.893	66.678	K5	5.1	4.8	1.1	14.6	83	接合資料Ⅱ－⑯
230	剥片	一括	流紋岩					4.0	3.3	1.8	16.2	83	接合資料Ⅱ－⑯
231	剥片	589	流紋岩	-47679.508	51709.924	66.382	J4	2.6	1.8	0.4	2.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
232	剥片	52	流紋岩	-47679.844	51706.069	66.367	J5	3.4	1.2	0.6	2.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
233	剥片	39	流紋岩	-47679.930	51707.542	66.297	J5	2.6	2.2	2.3	8.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
234	剥片	601	流紋岩	-47679.001	51706.509	66.202	J4	2.1	1.3	0.5	1.2	83	接合資料Ⅱ－⑯
235	剥片	260	流紋岩	-47679.137	51709.558	66.612	J4	1.1	1.7	0.3	0.5	83	接合資料Ⅱ－⑯
236	石核	36	流紋岩	-47679.786	51707.586	66.437	J5	3.3	5.2	2.6	33.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
237	剥片	91	流紋岩	-47682.706	51709.742	66.448	J5	3.6	5.0	1.4	20.0	83	接合資料Ⅱ－⑯
238	剥片	90	流紋岩	-47682.527	51707.926	66.502	J5	3.8	3.8	1.0	8.4	83	接合資料Ⅱ－⑯
239	剥片	49	流紋岩	-47680.131	51706.820	66.288	J5	0.5	6.7	1.1	35.9	83	接合資料Ⅱ－⑯
240	剥片	45	流紋岩	-47679.732	51706.961	66.461	J5	3.4	3.6	1.4	10.2	83	接合資料Ⅱ－⑯
241	剥片	588	流紋岩	-47678.051	51708.809	66.236	J4	2.0	1.0	0.4	0.6	83	接合資料Ⅱ－⑯
242	剥片	210	流紋岩	-47679.147	51706.480	66.456	J4	4.3	1.8	1.1	5.3	83	接合資料Ⅱ－⑯
243	剥片	230	流紋岩	-47679.247	51707.614	66.469	J4	6.6	2.9	2.9	48.0	83	接合資料Ⅱ－⑯
244	剥片	591	流紋岩	-47679.339	51708.946	66.272	J4	4.1	4.8	2.3	52.3	83	接合資料Ⅱ－⑯
245	剥片	246	流紋岩	-47679.460	51708.873	66.407	J4	4.9	6.1	2.2	55.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
246	剥片	一括	流紋岩					4.7	1.2	1.8	6.6	83	接合資料Ⅱ－⑯
247	剥片	98	流紋岩	-47684.308	51709.615	66.578	J5	3.5	3.5	1.7	17.1	83	接合資料Ⅱ－⑯
248	剥片	596	流紋岩	-47679.132	51708.328	66.271	J4	1.8	3.6	1.5	4.6	83	接合資料Ⅱ－⑯
249	剥片	254	流紋岩	-47678.404	51709.648	66.438	J4	1.8	1.2	0.8	0.8	83	接合資料Ⅱ－⑯
250	剥片	250	流紋岩	-47678.753	51709.031	66.536	J4	3.2	4.1	1.0	11.0	83	接合資料Ⅱ－⑯
251	細石刃	609	桑ノ木Ob	-47667.673	51705.302	66.379	J3	2.0	0.5	0.2	0.1以下		微小剥離
252	細石刃核	54	桑ノ木Ob	-47680.082	51705.884	66.454	J5	2.0	2.1	2.5	9.1		
253	細石刃核	232	桑ノ木Ob	-47678.811	51707.503	66.289	J4	1.8	2.7	1.6	6.5		
254	細石刃核	473	桑ノ木Ob	-47677.315	51714.305	66.408	K4	2.0	2.3	1.2	4.5		
255	細石刃核	603	桑ノ木Ob	-47678.919	51706.258	66.171	J4	1.8	3.2	2.1	11.1		
256	剥片	247	桑ノ木Ob	-47679.446	51708.742	66.457	J4	0.7	1.1	0.4	0.3		
257	剥片	539	桑ノ木Ob	-47675.507	51714.484	66.617	K4	1.3	1.2	0.2	0.5		
258	剥片	746	桑ノ木Ob	-47676.050	51716.458	66.619	K4	1.3	1.7	0.8	1.2		
259	剥片	356	桑ノ木Ob	-47678.013	51714.977	66.777	K4	1.5	0.9	0.2	0.5		
260	剥片	755	桑ノ木Ob	-47672.919	51713.394	66.780	K4	2.6	1.3	0.7	2.6		
261	石核	548	桑ノ木Ob	-47676.195	51713.143	66.616	K4	2.4	1.9	1.9	7.7		
262	原石	86	桑ノ木Ob	-47682.608	51702.539	66.082	J5	3.0	2.2	1.7	11.0		
263	剥片	508	桑ノ木Ob	-47676.574	51714.941	66.732	K4	2.2	1.9	0.9	2.4	64	接合資料Ⅱ－⑰
264	細石刃核	310	桑ノ木Ob	-47676.493	51715.801	66.743	K4	0.9	1.5	1.3	1.4	64	接合資料Ⅱ－⑰
265	剥片	449	桑ノ木Ob	-47676.292	51715.850	66.585	K4	1.6	1.6	0.8	1.7	66	接合資料Ⅱ－⑱
266	細石刃核	315	桑ノ木Ob	-47676.785	51715.743	66.872	K4	1.6	1.2	1.2	1.9	66	接合資料Ⅱ－⑱
267	剥片	504	桑ノ木Ob	-47676.279	51714.878	66.738	K4	1.9	1.5	0.6	1.7	65	接合資料Ⅱ－⑲
268	細石刃核	302	桑ノ木Ob	-47675.799	51714.141	66.849	K4	2.0	1.5	1.1	2.7	65	接合資料Ⅱ－⑲
269	細石刃	867	腰岳Ob	-47676.599	51695.095	66.013	I4	0.9	0.6	0.3	0.1以下		線状痕
270	細石刃核	850	腰岳Ob	-47666.149	51703.933	66.395	J3	2.2	1.6	1.5	4.2		
271	スポール	610	腰岳Ob	-47669.102	51702.201	66.184	J3	3.5	1.2	0.9	0.2		擦痕
272	剥片	63	腰岳Ob	-47680.549	51707.235	66.427	J5	1.6	1.0	0.4	0.6		
273	剥片	208	腰岳Ob	-47679.826	51706.115	66.152	J4	1.0	0.9	0.2	0.1		
274	剥片	411	腰岳Ob	-47677.490	51712.571	66.816	K4	0.9	1.6	0.2	0.2		
275	剥片	851	腰岳Ob	-47668.513	51705.732	66.389	J3	1.0	1.2	0.2	3.9		
276	剥片	79	腰岳Ob	-47679.970	51703.995	66.234	J5	2.1	1.8	0.4	0.9		微小剥離
277	剥片	97	腰岳Ob	-47684.124	51707.518	66.302	J5	2.1	1.0	0.3	0.5		微小剥離
278	剥片	653	腰岳Ob	-47656.770	51711.366	66.831	K2	2.8	1.1	0.6	1.9		微小剥離・線状痕
279	剥片	845	腰岳Ob	-47671.238	51699.253	66.121	I4	2.9	2.1	0.4	1.8		微小剥離
280	剥片	355	不明Ob	-47679.426	51714.703	66.824	K4	1.7	0.5	0.4	0.2		
281	剥片	613	不明Ob	-47668.913	51707.150	66.387	J3	0.8	1.1	0.3	0.2		
282	剥片	625	不明Ob	-47668.392	51696.842	65.867	I3	1.3	1.2	0.3	0.4		
283	スクレイパー	652	ho	-47656.777	51711.447	66.842	K2	8.3	5.2	2.3	64.9		
284	スクレイパー	183	砂岩	-47684.511	51721.597	66.967	L5	10.2	11.1	1.7	228.0		
285	敲石	175	礫岩	-47681.833	51712.515	66.588	K5	9.8	7.9	6.5	653.9		
286	敲石	515	チャート	-47676.215	51715.223	66.607	K4	6.1	3.5	3.3	117.3		
287	磨石	166	砂岩	-47682.651	51716.137	66.811	K5	10.3	5.5	4.3	351.5		

第４表　旧石器時代石器計測表４

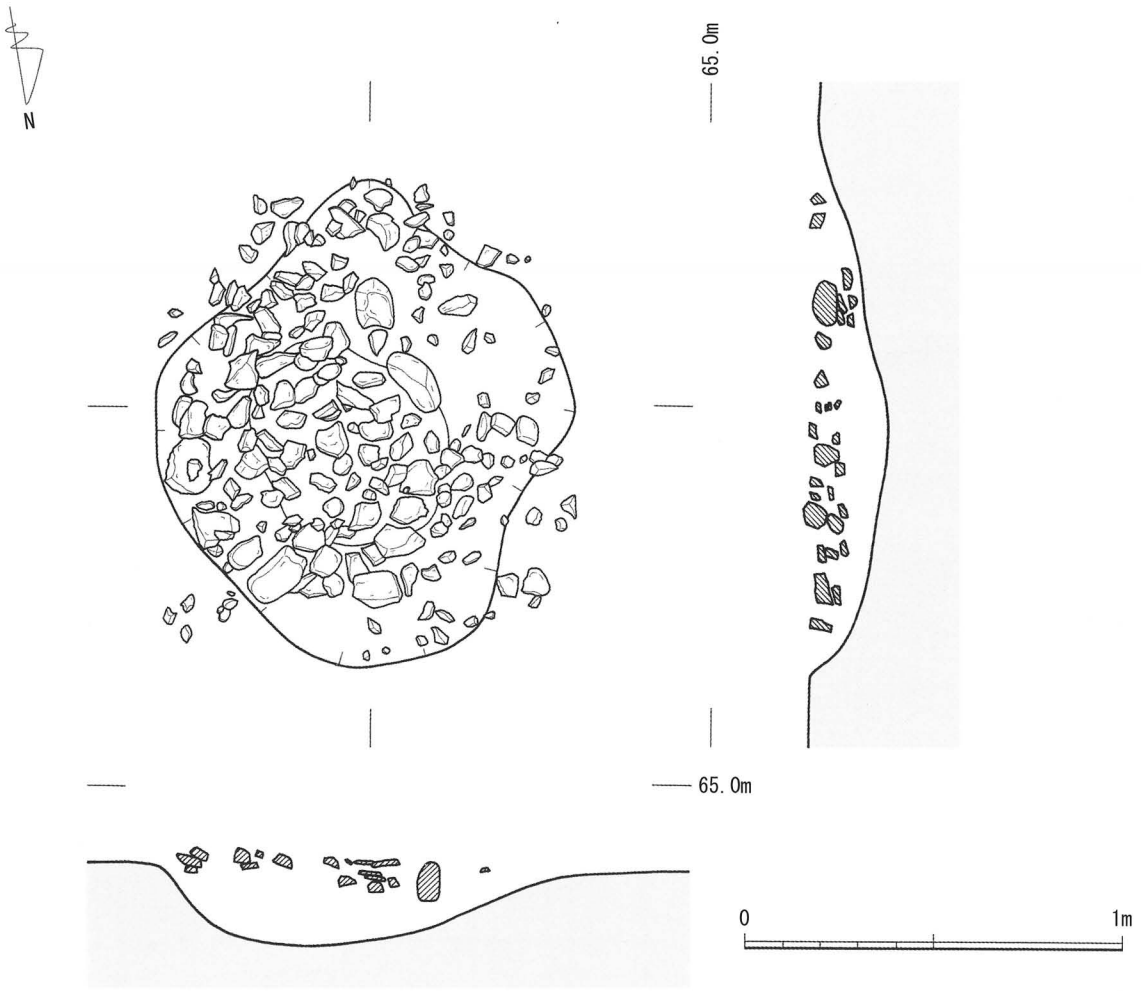
第２節 縄文時代早期の調査（第68～71図）

１　遺構（第68～70図）

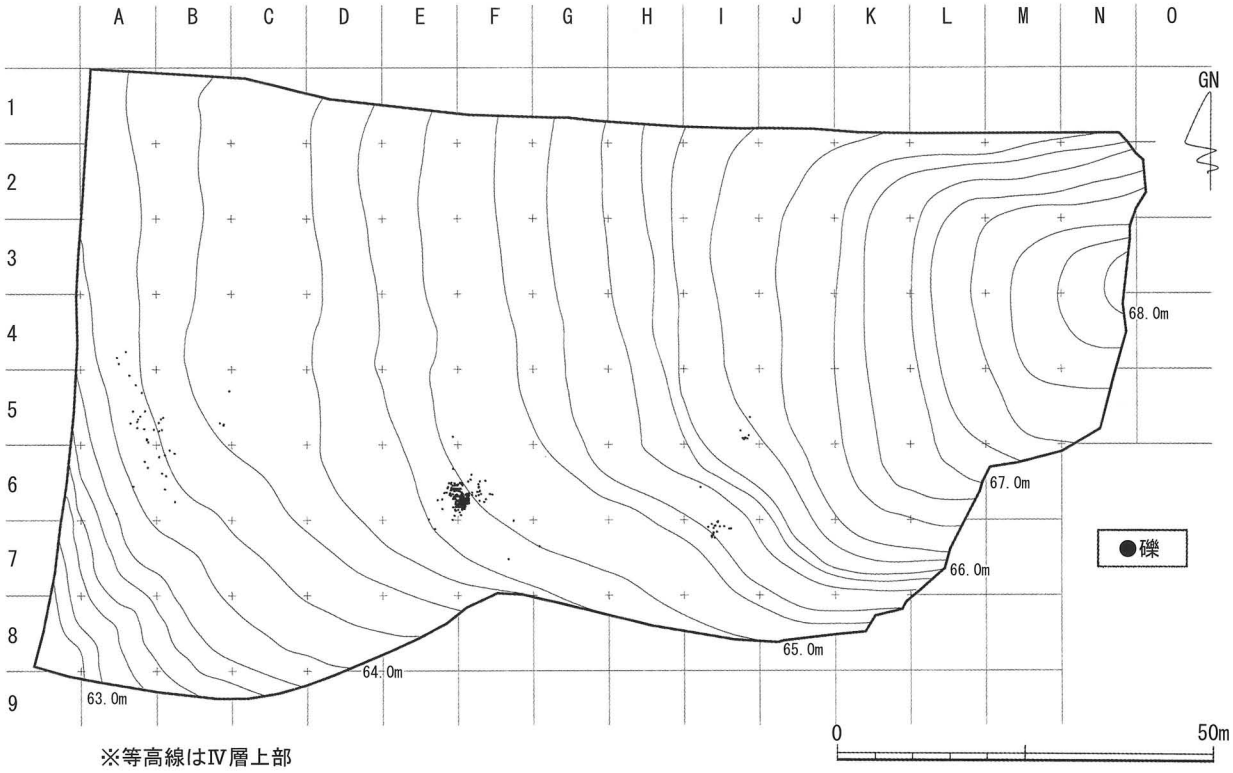
(1) 集石遺構

調査区西側Ａ５グリッド、中央部Ｆ７グリッド、東側Ｉ６グリッド付近の３群の散礫（第69図）を、Ⅳ層上部において検出した。３群いずれも散漫な状態で、礫総数は289個、総重量は29.25kgである。利用石材は、砂岩、泥岩、緑色岩等があり、親指大から拳大の大きさがほとんどである。赤化している割合は、総重量の約15％と低かったが、中央部Ｆ７グリッドで検出した散礫群は、そのほとんどが赤化しており、その下層からは、集石遺構（第70図）を検出している。

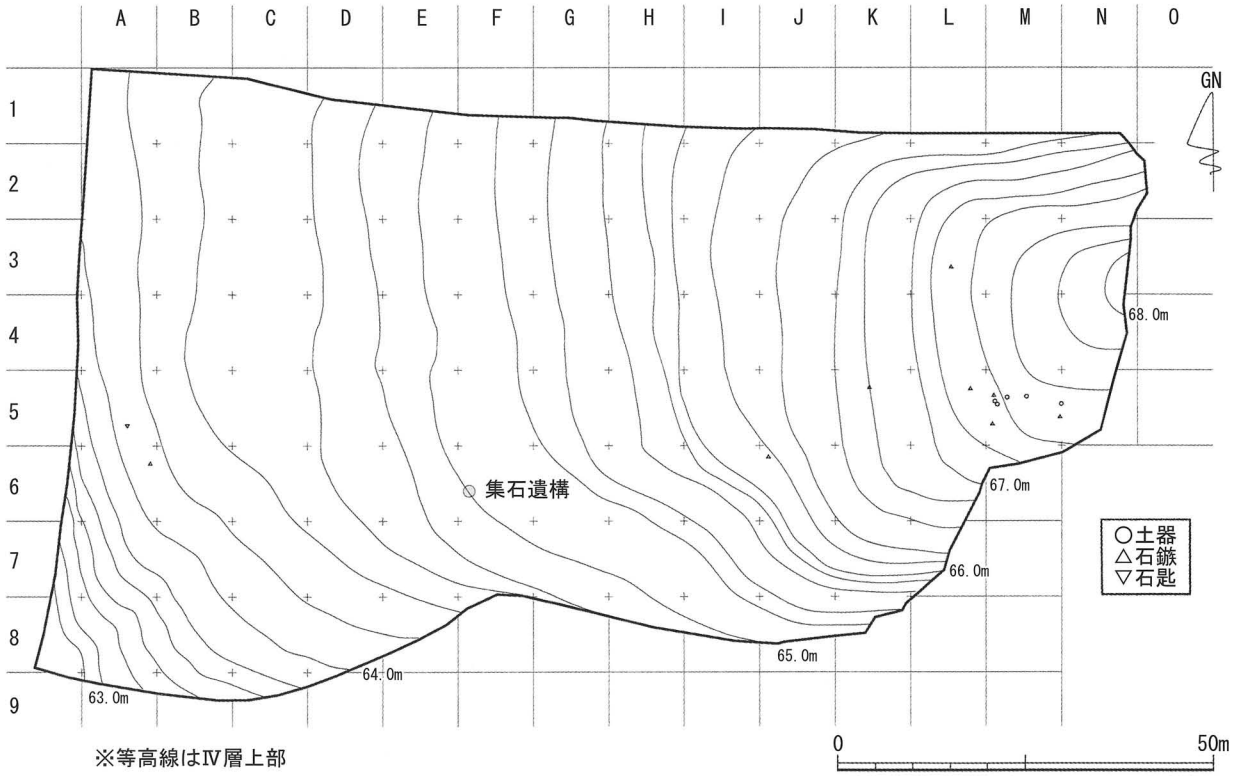
１号集石遺構（第68図）は、調査区中央部Ｆ６グリッドで検出した。検出面はＶ層上部である。長軸は1.27ｍ、短軸は1.12ｍ、深さ0.22ｍの規模で、掘り込みがあり、構成される礫は密集していた。礫は597個使用されており総重量は83.90ｋｇである。花崗斑岩が13個（うち１個は完形）、砂岩549個、泥岩４個、凝灰岩11個、礫岩20個で、全て赤化しており、完形礫は花崗斑岩１点（6.10ｋｇ）のみで、他は全て破砕礫であった。また、炭化物粒・焼土が埋土中に見られた。遺物は含まれていなかった。



第68図　縄文時代早期１号集石遺構実測図（S＝1/20）



第69図　散礫検出状況図（S=1/1,000）



第70図　縄文時代早期遺構検出状況図（S=1/1,000）

2　遺物（第71図―288～299）

(1) 土器（第71図―288～290）

調査区中央部Ｍ５グリッド、検出面はＶ層上部で検出したが、いずれも現代の耕作による攪乱部分である。288は深鉢の口縁部である。直立しやや丸みをおびている。口縁部に貝殻腹縁刺突文を、口縁下に貝殻条痕文を、その上から列点状の刺突文を施している。289・290は、深鉢の胴部である。外面に荒い条痕文を施し、内面はナデ調整である。胎土に繊維を含んでいる。

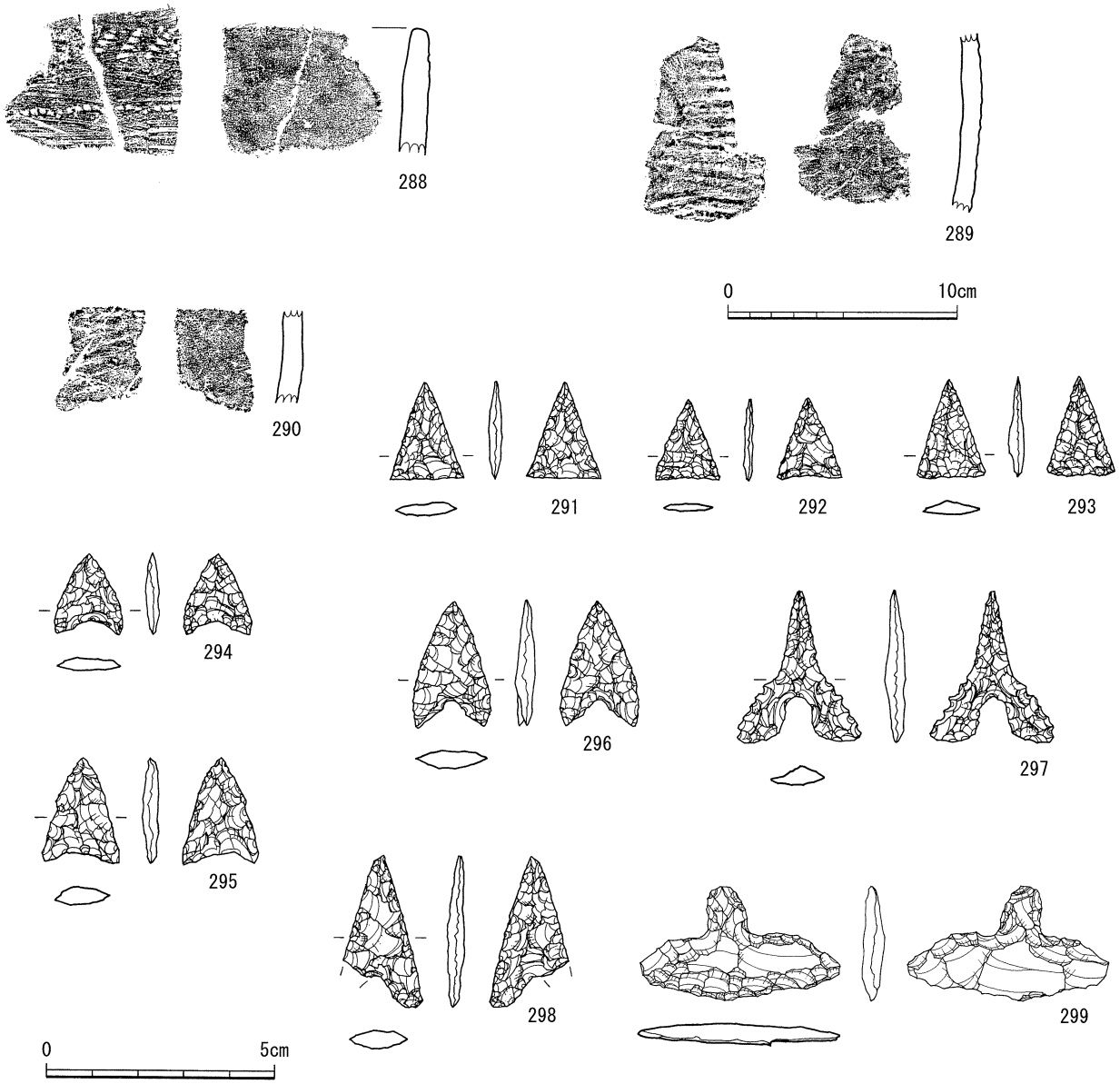
(2) 石器（第71図―291～299）

石鏃　８点（第71図―291～298）

石材は全てチャートである。二等辺三角形の形状で、平基のもの(291～293)、正三角形に近い形状で、基部に浅い抉りのあるもの（294・295)、二等辺三角形の形状で、抉りのあるもの（296～298）がある。

石匙　１点（第71図―299）

石材はサヌカイトで、つまみから身が横に広がる横型である。遺跡周辺には採取不可能な石材のため、持ち込まれたものと考えられる。



第71図　縄文時代早期土器実測図（S=1/3）石器実測図（S=2/3）

番号	出土地点	器種	部位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴
				外面	内面	外面	内面	
288	M5G	深鉢	口縁部	貝殻腹縁刺突文、貝殻条痕文、刺突文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1.5mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒・橙色・灰白色・明赤褐色、4mm以下のにぶい黄橙色・明褐色・にぶい褐色粒を含む。
289	M5G	深鉢	胴部	条痕文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	1mm以下のにぶい橙色・灰白色、6mm以下のにぶい黄橙色・褐灰色・灰黄褐色粒を含む。繊維を含む。
290	M5G	深鉢	胴部	条痕文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下のにぶい黄橙色・灰白色・褐灰色粒を含む。繊維を含む

第５表　縄文時代土器観察表

番号	器種	注記番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
291	石鏃	641	チャート	-47666.392	51725.396	67.320	Ｌ３	2.1	1.6	0.3	0.7
292	石鏃	797	チャート	-47687.176	51730.862	67.382	Ｍ５	1.7	1.3	0.2	0.4
293	石鏃	165	チャート	-47682.347	51714.539	66.660	Ｋ５	2.1	1.4	0.3	0.7
294	石鏃	182	チャート	-47686.225	51739.771	67.680	Ｍ５	1.7	1.4	0.3	0.7
295	石鏃	179	チャート	-47682.522	51727.952	67.352	Ｌ５	2.2	1.6	0.4	1.2
296	石鏃	1	チャート	-47691.535	51701.173	66.293	Ｊ６	2.7	1.7	0.4	1.6
297	石鏃	2	チャート	-47692.397	51619.145	64.039	Ａ６	3.3	2.6	0.4	1.7
298	石鏃	180	チャート	-47683.390	51731.046	67.514	Ｍ５	3.2	1.7	0.4	1.6
299	石匙	3	サヌカイト	-47687.324	51616.107	63.969	Ａ５	2.4	4.2	0.5	2.7

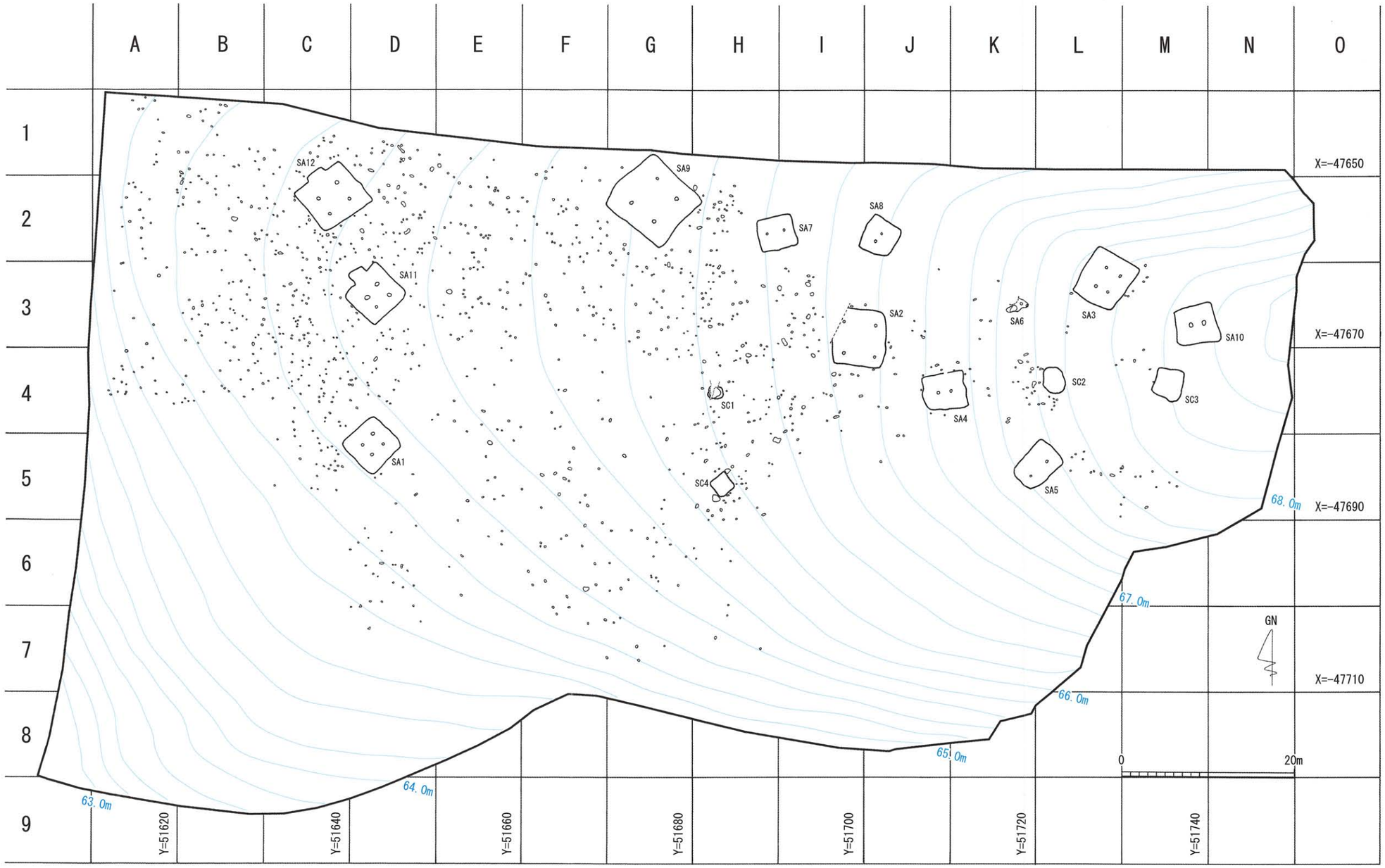
第６表　縄文時代石器計測表

第３節 弥生時代・古墳時代の調査（第72～125図）

第Ⅲ層の鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）上面において、弥生時代・古墳時代のものと考えられる遺構（第72図）として竪穴住居跡が12軒、土坑４基と、それに伴う遺物を検出した。掲載している遺物は遺構堆積土の下位～床面のものであるが、堆積土中においても、床面で取り上げたものと接合した遺物を取り扱っている。ピット状の穴は多数検出したが、掘立柱建物跡に結びつくものはなかった。

後述する遺構番号は、整理の都合上、調査時点で付与した番号を用いている。また、報告する順番は、時期別に「弥生時代終末から古墳時代初頭」として竪穴住居跡４軒（SA5→SA7→SA8→SA2）、土坑１基（SC2）の順番で、「古墳時代前期から中期」として竪穴住居跡７軒（SA9→SA1→SA3→SA4→SA10→SA11→SA12）、土坑３基（SC4→SC3→SC1）の順番で、「古墳時代後期」として６号竪穴住居跡（SA6）の地床炉のみと、それぞれ時期の古い順となっている。なお、大きく３時期に設定しているが、各時期において、さらに細分することが可能であると考えられる。しかし、時間的な制約上、行っていない。

掲載遺物の器種名の中で、鉢については、松永幸寿氏（松永2001）の分類を用いている。鉢の形態によって、器高が体部径と等しいか凌駕し、内湾しながら立ち上がる直口のものを「深鉢」、体部径が器高を凌駕し、外傾口縁を有する椀状のものを「浅鉢」に分類し、本文中の呼称に用いている。



第72図　弥生時代・古墳時代遺構配置図（S=1/500）

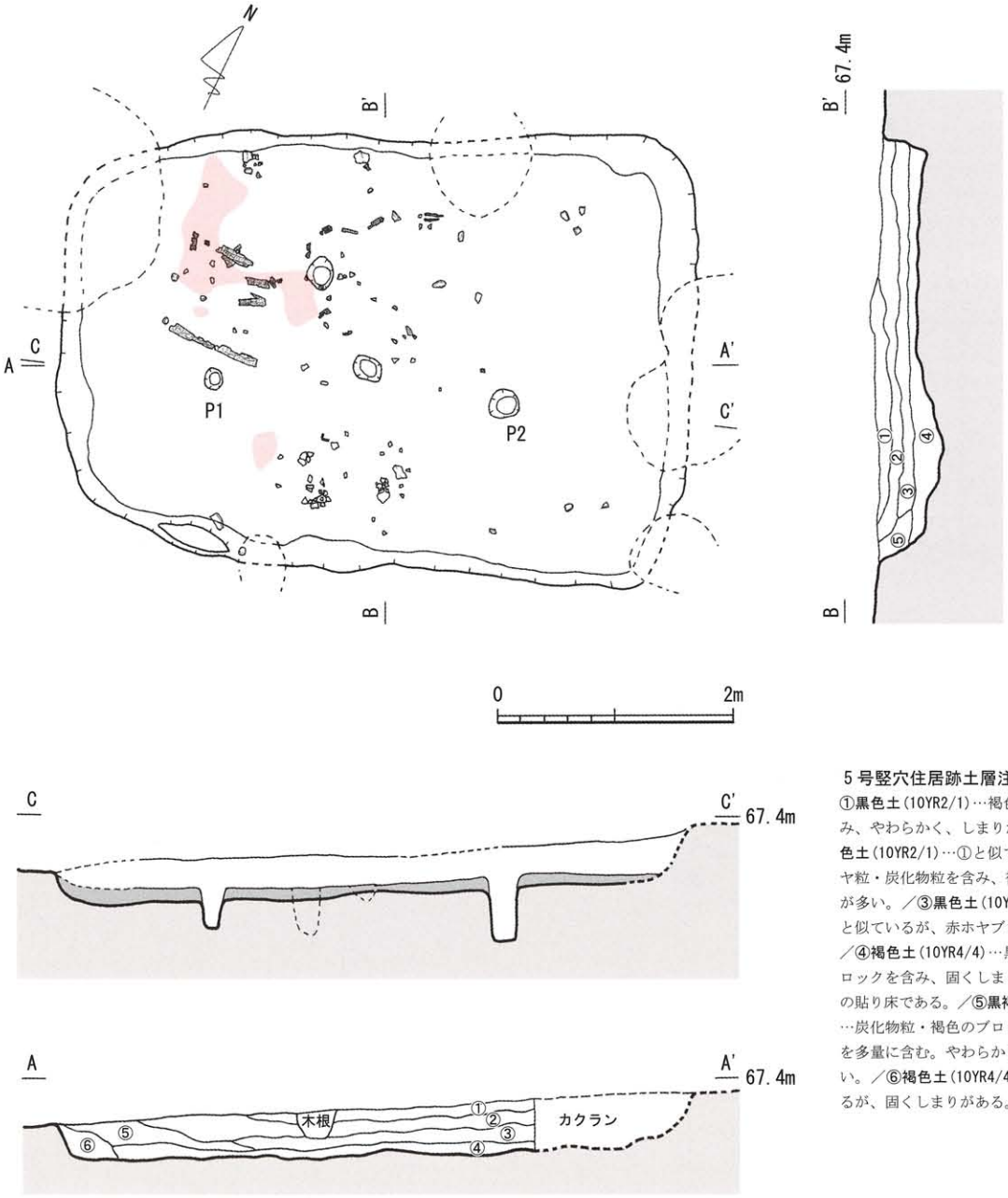
1　弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構と遺物（第73～85図）

竪穴住居

5号竪穴住居跡（SA5）

遺構（第73図）

調査区K5グリッドに位置し、長軸5.40ｍ、短軸3.60ｍ、推定床面積は19.44㎡の長方形である。検出面からの深さは最深で0.55ｍである。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は2本（深さ0.35ｍ～0.55ｍ）で、柱穴の距離は東西2.50ｍで長軸方向にならんでいる。西側部分の貼り床面柱穴付近には、炭化材を良好な状態で検出し、焼失住居の可能性も考えられる。樹種同定の結果（第Ⅳ章第2節）ツブラジイ、コナラ属コナラ節、放射性炭素年代分析の補正値は1760±40年BP、1790±40年BPであった。

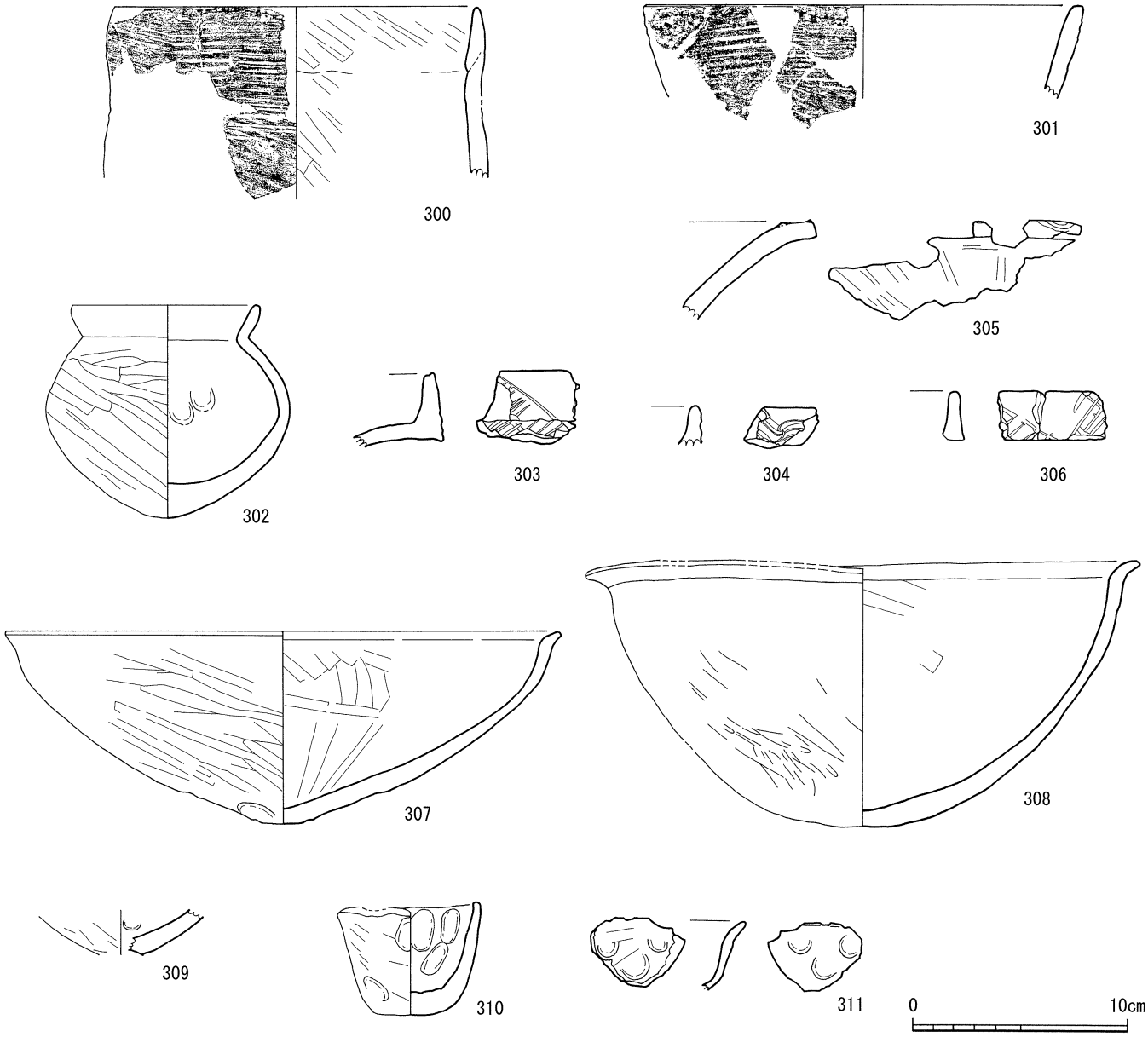


5号竪穴住居跡土層注記（SA5）
①黒色土(10YR2/1)…褐色の粒を少量含み、やわらかく、しまりがない。／②黒色土(10YR2/1)…①と似ているが、赤ホヤ粒・炭化物粒を含み、褐色の粒の割合が多い。／③黒色土(10YR2/1)…①・②と似ているが、赤ホヤブロックを含む。／④褐色土(10YR4/4)…黒色・赤ホヤブロックを含み、固くしまりがあり、住居の貼り床である。／⑤黒褐色土(2.5Y3/1)…炭化物粒・褐色のブロック・赤ホヤ粒を多量に含む。やわらかく、しまりがない。／⑥褐色土(10YR4/4)…④と似ているが、固くしまりがある。

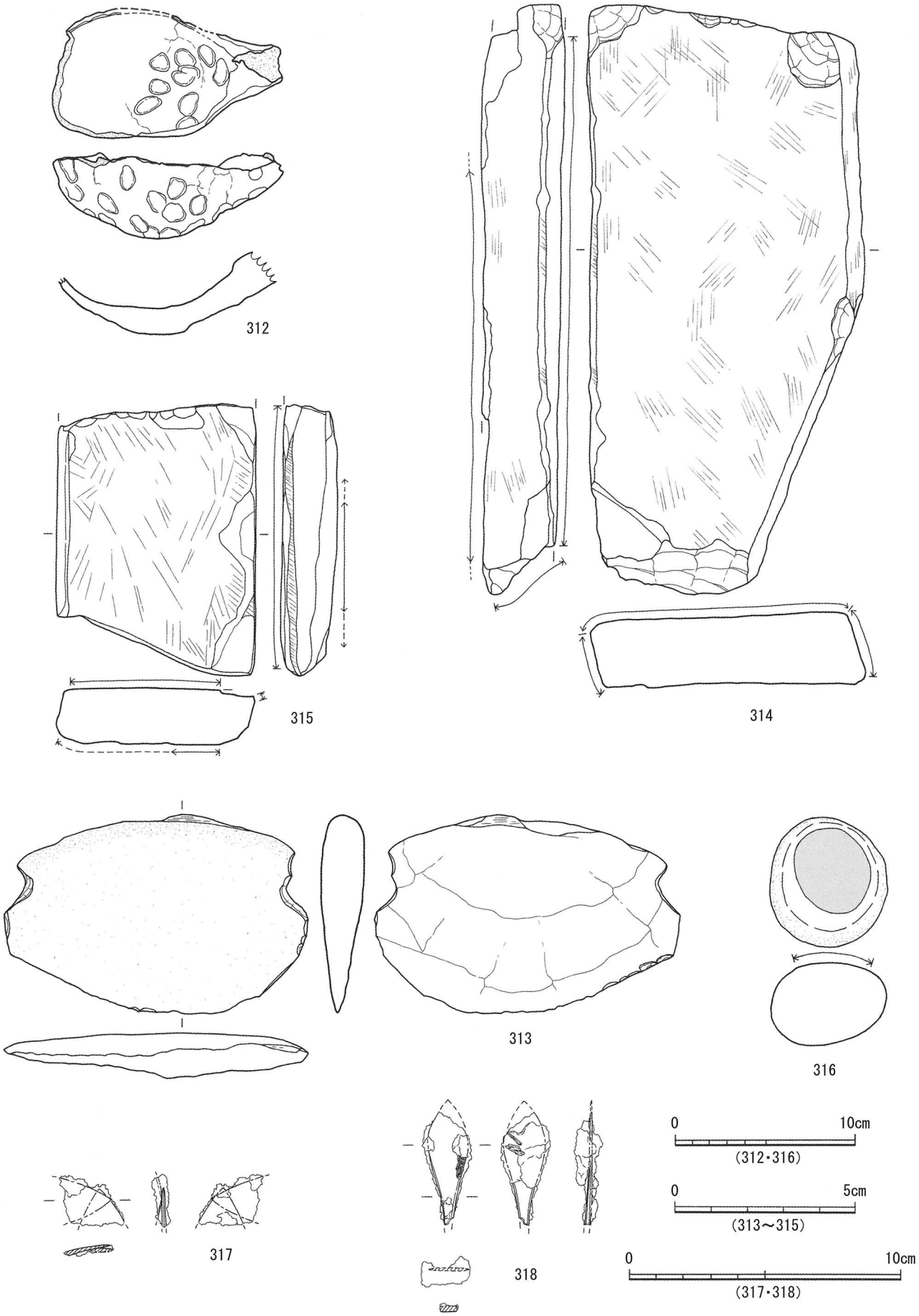
第73図　5号竪穴住居跡（SA5）実測図（S=1/60）

遺物（第74・75図―300～318）

300～312は弥生土器である。300・301は甕で、どちらも表面にタタキ目を施してある。302～306は壺である。302は口縁部が短く外傾し、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。303～306は、櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部である。307～309は鉢である。口縁部は短くしっかりと外傾しており、底部は丸底、貼付円盤状の平底、平底がある。310・311は内外面に指頭痕がある手捏土器である。312は杓子状土器で、内外面に指頭痕がある。313は抉りのある砂岩製の石庖丁である。314・315は擦痕の残る砥石である。314は砂岩製、315は頁岩製である。316は花崗斑岩製の磨石である。317・318は鉄製品である。317は鉄鏃の刃部が2枚重なった状態の破片である。318は残存長4.1cm、鏃身部最大幅1.5cmの小型の柳葉鏃である。鏃身部には布・木質が付着している。



第74図　5号竪穴住居跡（SA5）出土遺物実測図1（S=1/3）



第75図　5号竪穴住居跡（SA5）出土遺物実測図２（S=1/3、2/3、1/2）

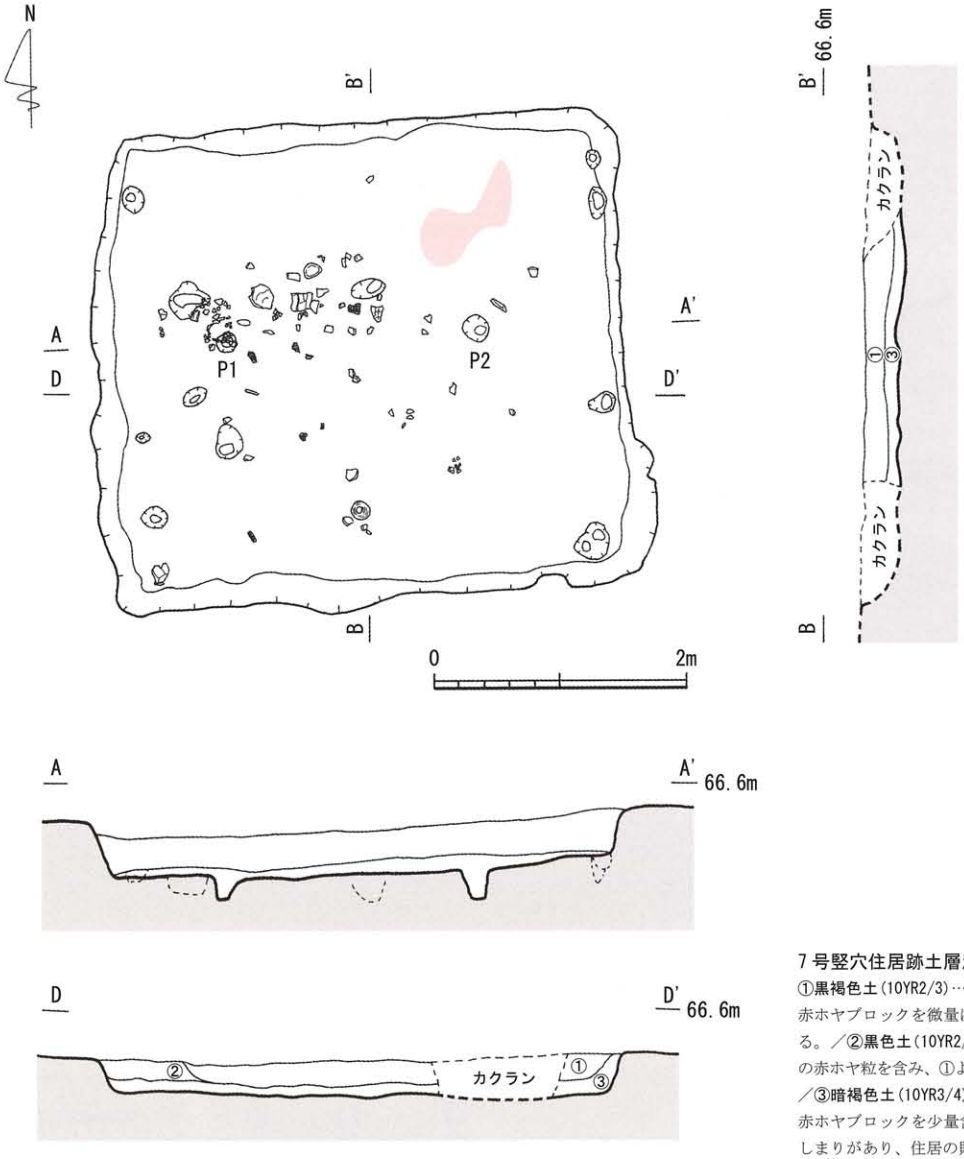
7号竪穴住居跡（SA7）

遺構（第76図）

調査区H2グリッドに位置し、長軸4.20m、短軸3.80m、推定床面積は15.96㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.30mである。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は2本（深さ0.20m～0.25m）で、柱穴の距離は東西2.00mで長軸方向にならんでいる。貼り床面北東側に焼土が広がり、主柱穴付近には炭化材が少量検出され、樹種同定の結果（第Ⅳ章第2節）サカキ、放射性炭素年代分析の補正値は1860±40年BPであった。

遺物（第77図―319～337）

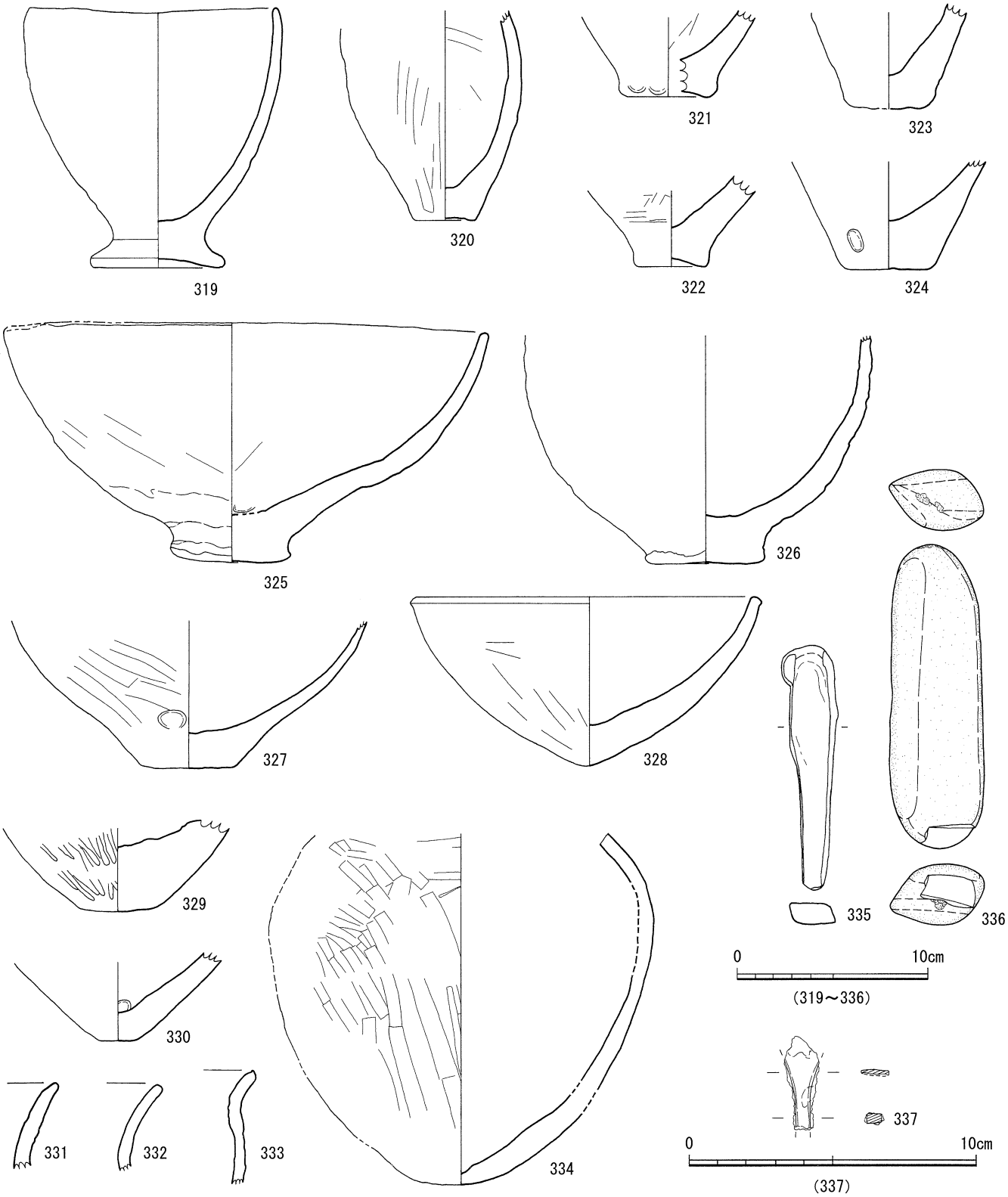
319～328は弥生土器の鉢である。319～324は深鉢、325～328は浅鉢である。深鉢の底部は、上げ底で端部がわずかに張り出すもの（319）、張り出さないもの（320～322）、平底で端部が張り出さないもの（323・



7号竪穴住居跡土層注記（SA7）
①黒褐色土(10YR2/3)…径5～10mm程の赤ホヤブロックを微量に含み、粘性がある。／②黒色土(10YR2/1)…径1mm以下の赤ホヤ粒を含み、①よりも粘性がある。／③暗褐色土(10YR3/4)…径1cm以上の赤ホヤブロックを少量含む。非常に固くしまりがあり、住居の貼り床である。

第76図　7号竪穴住居跡（SA7）実測図（S=1/60）

324）がある。浅鉢の底部は、貼付円盤状の平底（325～327）、尖底（328）がある。329～333は土師器の甕である。329・330は底部で、内面が平坦ではない平底である。331～333は口縁部で、ゆるやかに外反している。334は土師器の壺である。長形胴で、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。335は頁岩製の棒状石製品である。敲打痕等はない。336はホルンフェルス製の敲石で、両端に敲打痕が残る。337は鉄鏃の茎部片で、圭頭鏃、柳葉鏃、両方の可能性が考えられる。



第77図　7号竪穴住居跡（SA7）出土遺物実測図（S=1/3、1/2）

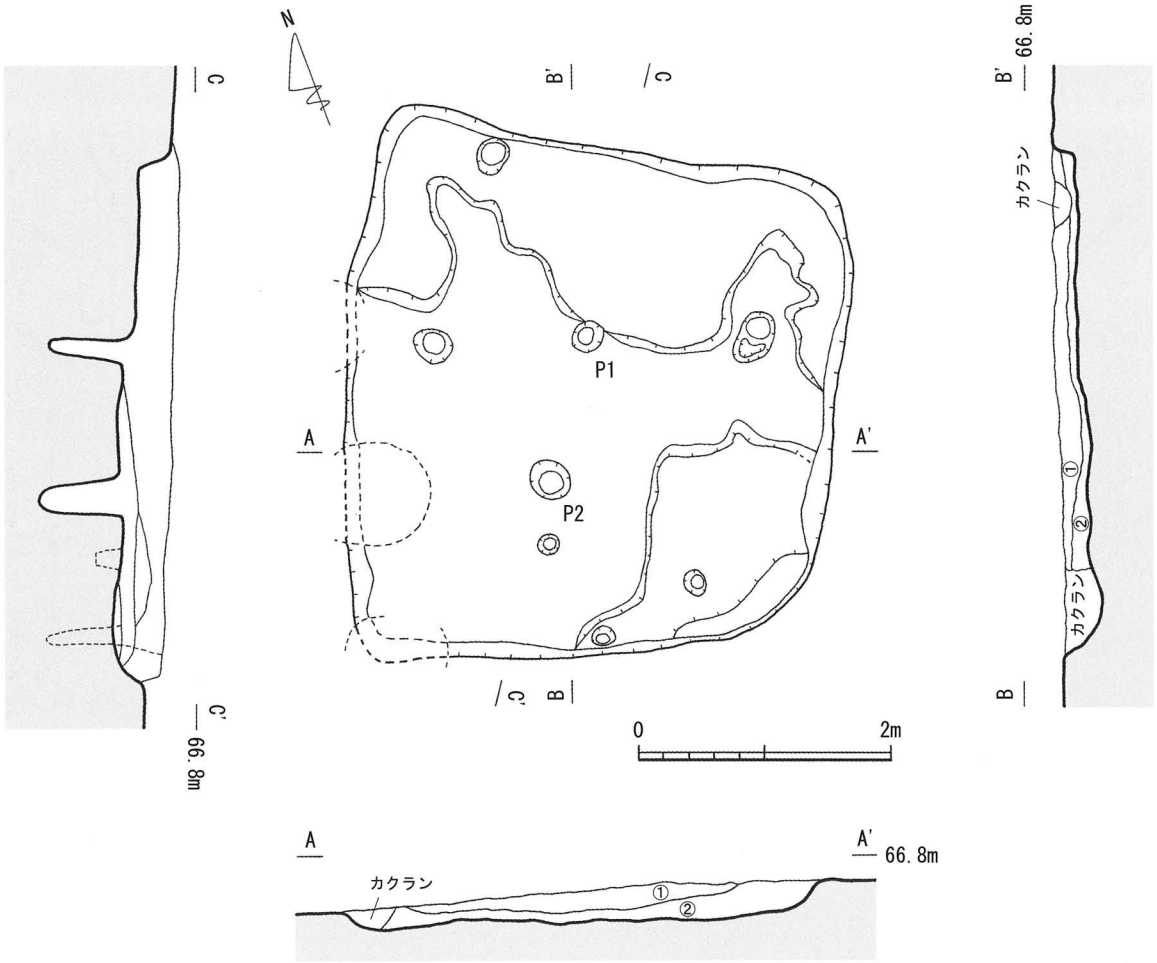
8号竪穴住居跡（SA8）

遺構（第78図）

調査区Ｊ２グリッドに位置し、長軸4.10ｍ、短軸3.40ｍ、推定床面積は13.94㎡の長方形である。検出面からの深さは最深で0.30ｍである。赤ホヤ粒の混じる黒褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は２本（深さ0.60ｍ～0.65ｍ）で、柱穴の距離は南北1.20ｍで長軸方向にならんでいる。

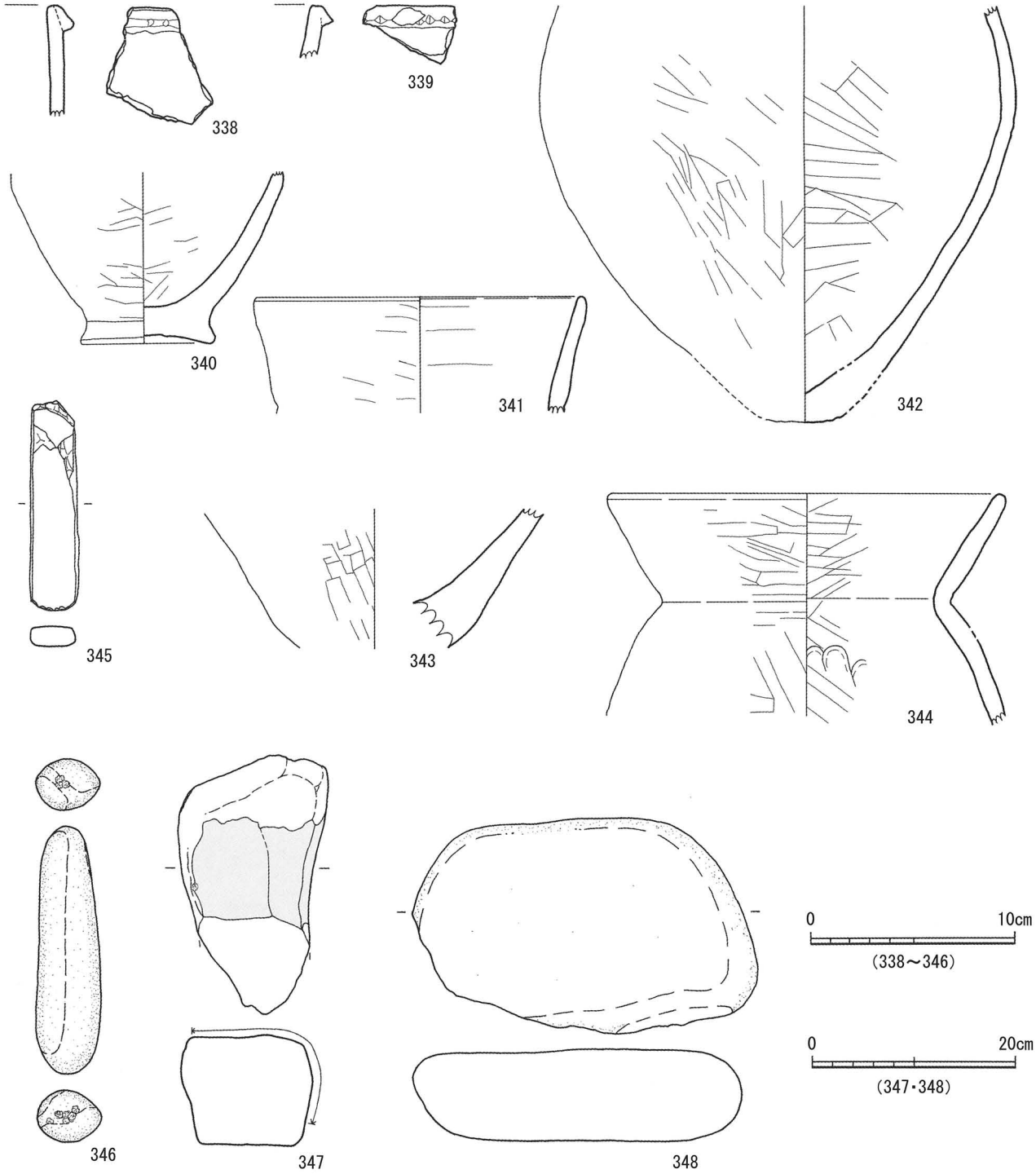
遺物（第79図―338～348）

338～340は弥生土器である。338・339は甕の口縁部である。端部に貼付突帯があり、弥生前期末～中期前半の亀の甲系土器と考えられ、堆積土の下位出土であるが、流入したものと考えられる。突帯には縦位の刻目をもつ。340は鉢である。深鉢の底部で、上げ底で端部がわずかに張り出している。341～344は土師器である。341～343は甕で、口縁部は直線的に開き（341）、底部は平底（342・343）である。344は外反する口縁部をもつ壺である。345は頁岩製の棒状石製品で、前述したSA7においても出土した。346は砂岩製の敲石で、両端に敲打痕が残る。347・348は台石である。347は磨り面の残る砂岩製で、348は花崗斑岩製である。



8号竪穴住居跡土層注記（SA8）
①黒色土(10YR2/1)…径１mm以下の赤ホヤ粒を少量含む。
②黒褐色土(10YR2/3)…径２～５mm程の赤ホヤ粒の混じる割合が①より多い。固くしまりがあり、住居の貼り床である。

第78図　8号竪穴住居跡（SA8）実測図（S=1/60）

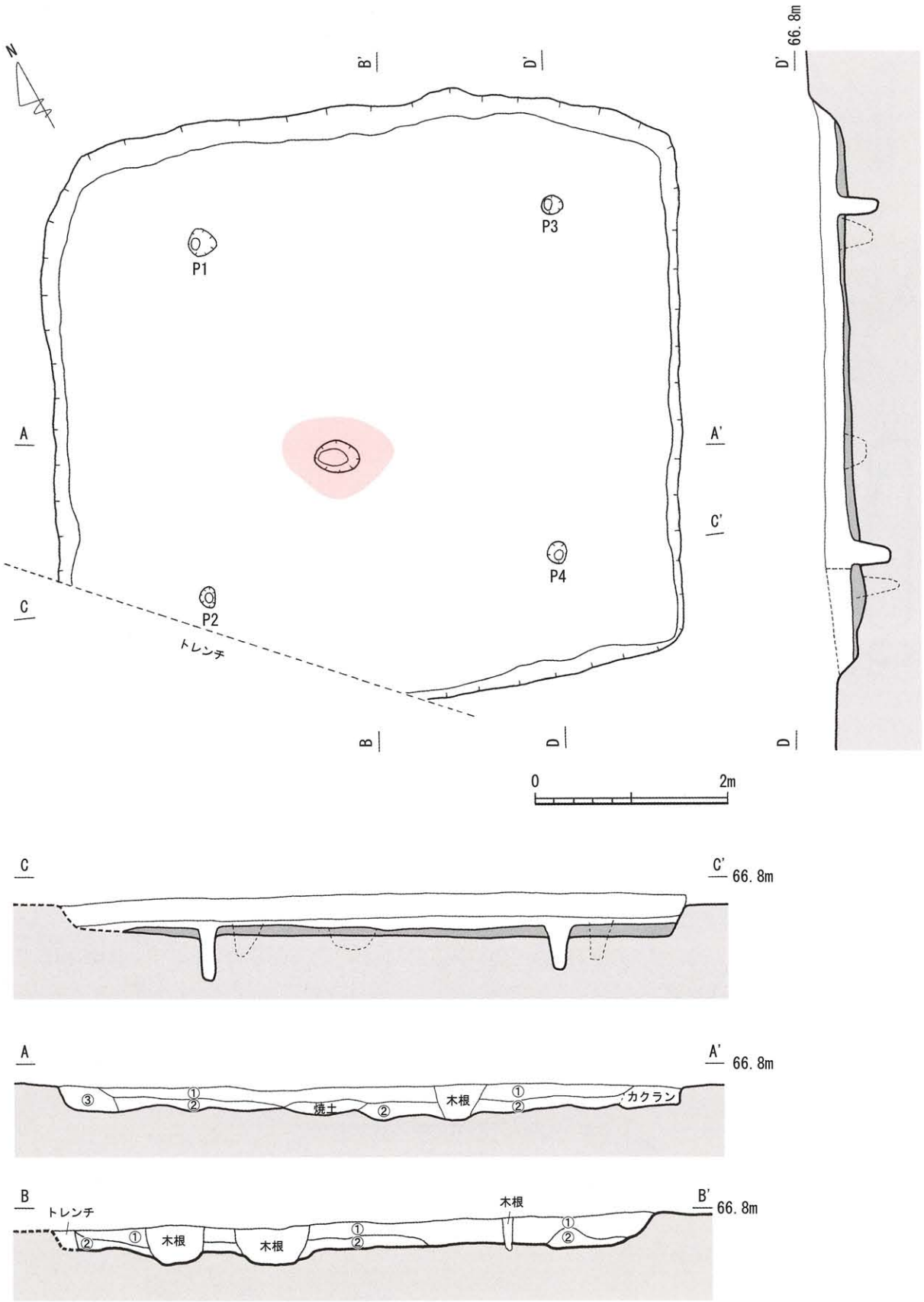


第79図　8号竪穴住居跡（SA8）出土遺物実測図（S=1/3、1/6）

2号竪穴住居跡（SA2）

遺構（第80図）

調査区Ｉ３グリッドに位置し、長軸6.55ｍ、短軸6.22ｍ、推定床面積は40.93㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.40ｍである。赤ホヤブロックの混じる黒褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は４本（深さ0.45ｍ～0.50ｍ）で、柱穴の距離は東西3.65ｍ～3.70ｍ、南北3.65ｍの、ほぼ対角線上の配置である。中央部の貼り床面では、柱穴間に焼土が広がり、0.51ｍ×0.35ｍ程の地床炉がある。



2号竪穴住居跡土層注記（SA2）

①黒色土(7.5YR2/1)…竹根に覆われ、やわらかく、しまりがない。

②黒褐色土(7.5YR2/2)…径5～10㎜程の赤ホヤブロックを含む。固くしまりがあり、住居の貼り床である。

③黒色土(7.5YR2/1)…①と似ているが、極小の赤ホヤ粒を少量含む。

第80図　2号竪穴住居跡（SA2）実測図（S=1/60）

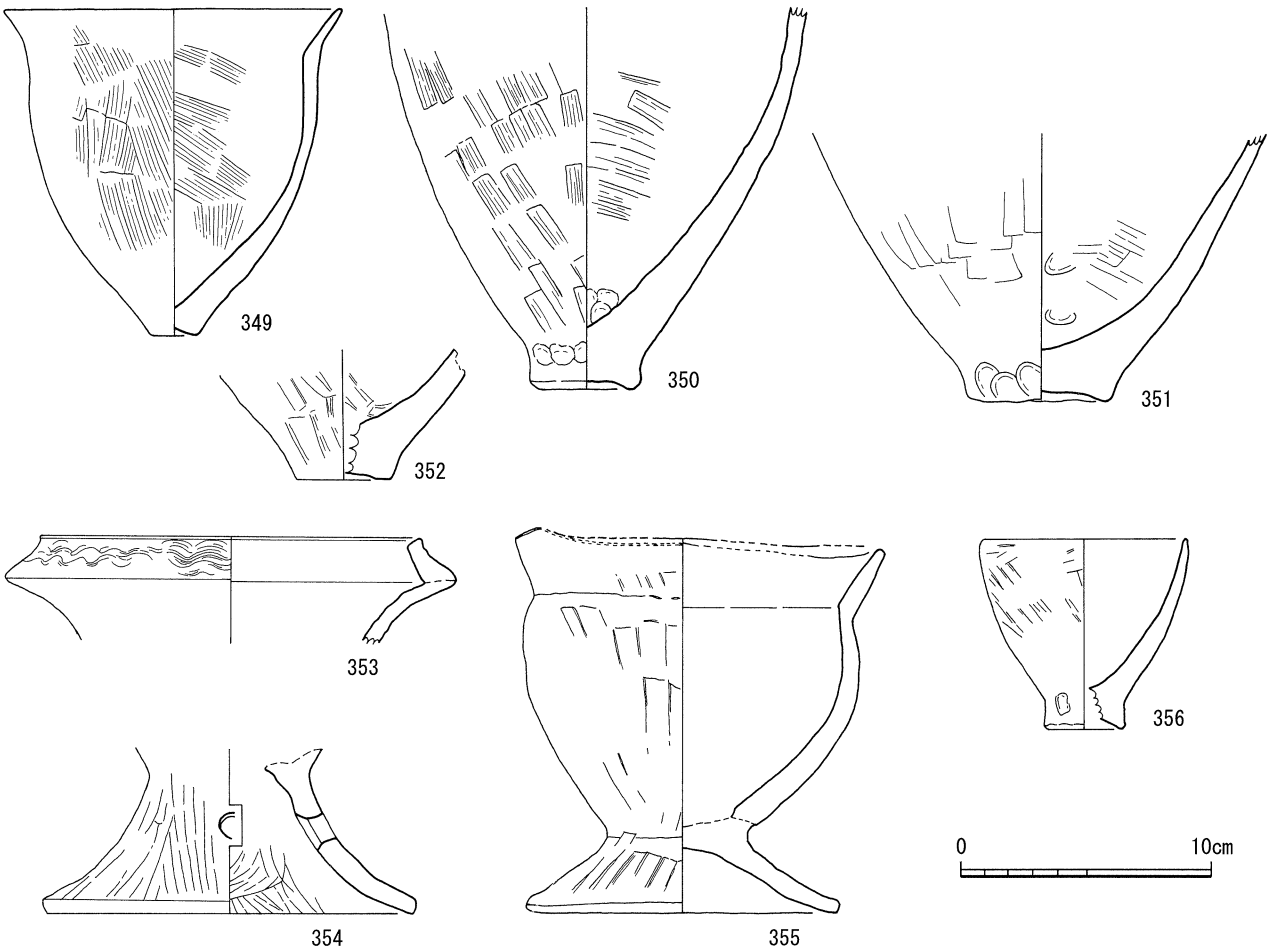
遺物（第81～84図―349～378）

349～359は弥生土器である。349～352は甕である。口縁部がゆるやかに外反し（349）、底部は、上げ底で端部がわずかに張り出すもの（350）、わずかな上げ底のもの（349・351・352）がある。353は櫛描波状文の文様のある二重口縁壺の口縁部である。354は円形透かしをもち、ラッパ状に開く高坏の脚部である。355～359は鉢である。355は高台脚付きの鉢である。356～358は深鉢で、ゆるやかなに内湾する口縁部をもち（356）、底部は、上げ底で端部がわずかに張り出すもの（357・358）、わずかな上げ底のもの（356）がある。359は浅鉢である。頸部で屈曲し外反する口縁部をもち、底部は小さな平底である。

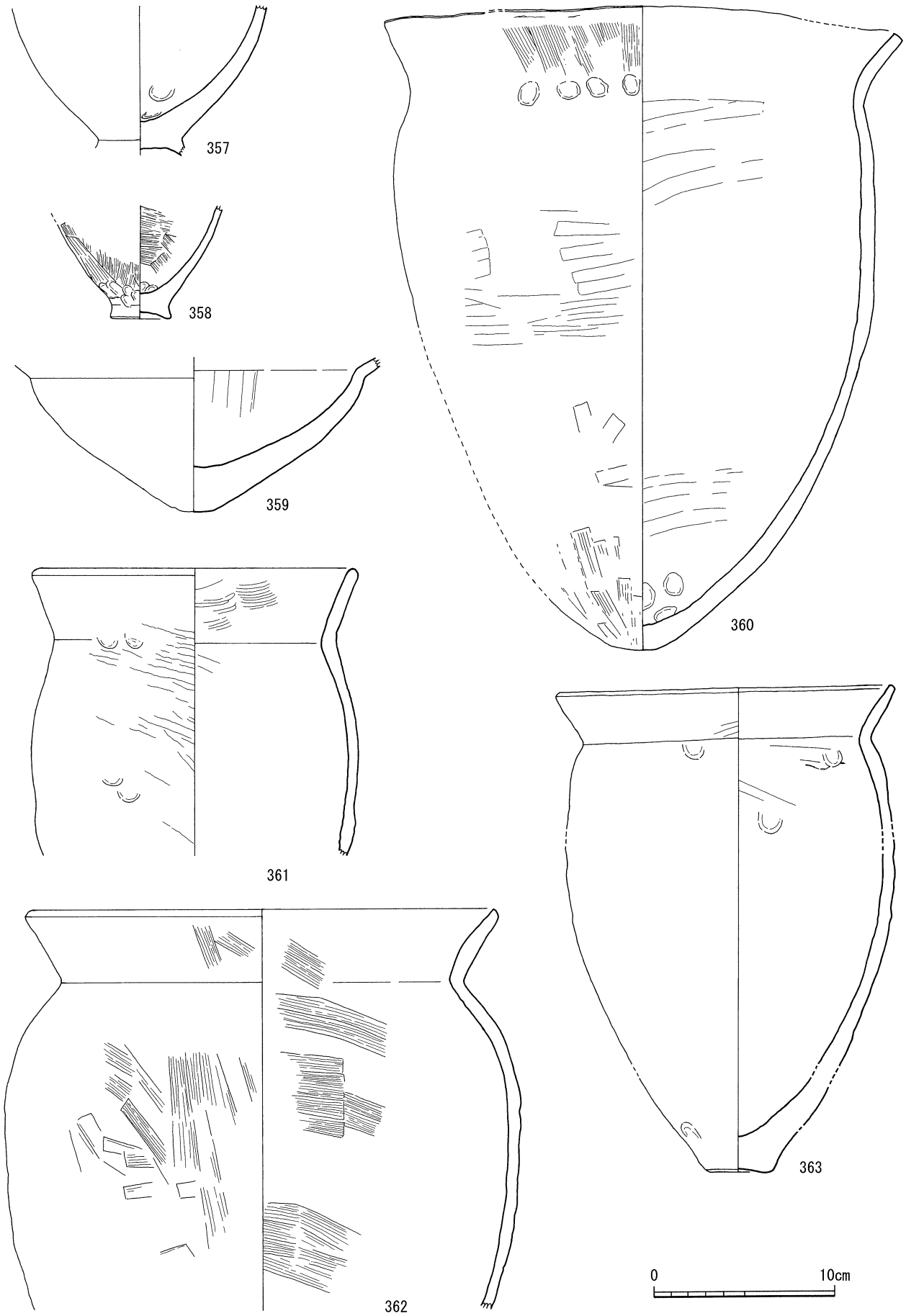
360～369は土師器である。360～366は甕である。表面の所々にタタキ目の残るもの（360・361）がある。口縁部は、ゆるやかに外反するもの（360・362・363）、やや直線的に開くもの（361）がある。底部は平底のもの（360・365・366）、わずかな上げ底のもの（363・364）がある。367はラッパ状に開く高坏の脚部である。368・369は鉢である。368は深鉢の底部で、平底である。369はレンズ状の底部に、内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ浅鉢である。

370・371は石庖丁である。抉りのある砂岩製（370）と頁岩製（371）である。372は砂岩製の石錘である。373は砂岩製の棒状石製品で、前述したSA7・SA8においても出土した。374～376は磨・敲石である。全て砂岩製で、敲打痕や磨り面が残る。377は砂岩製の台石である。

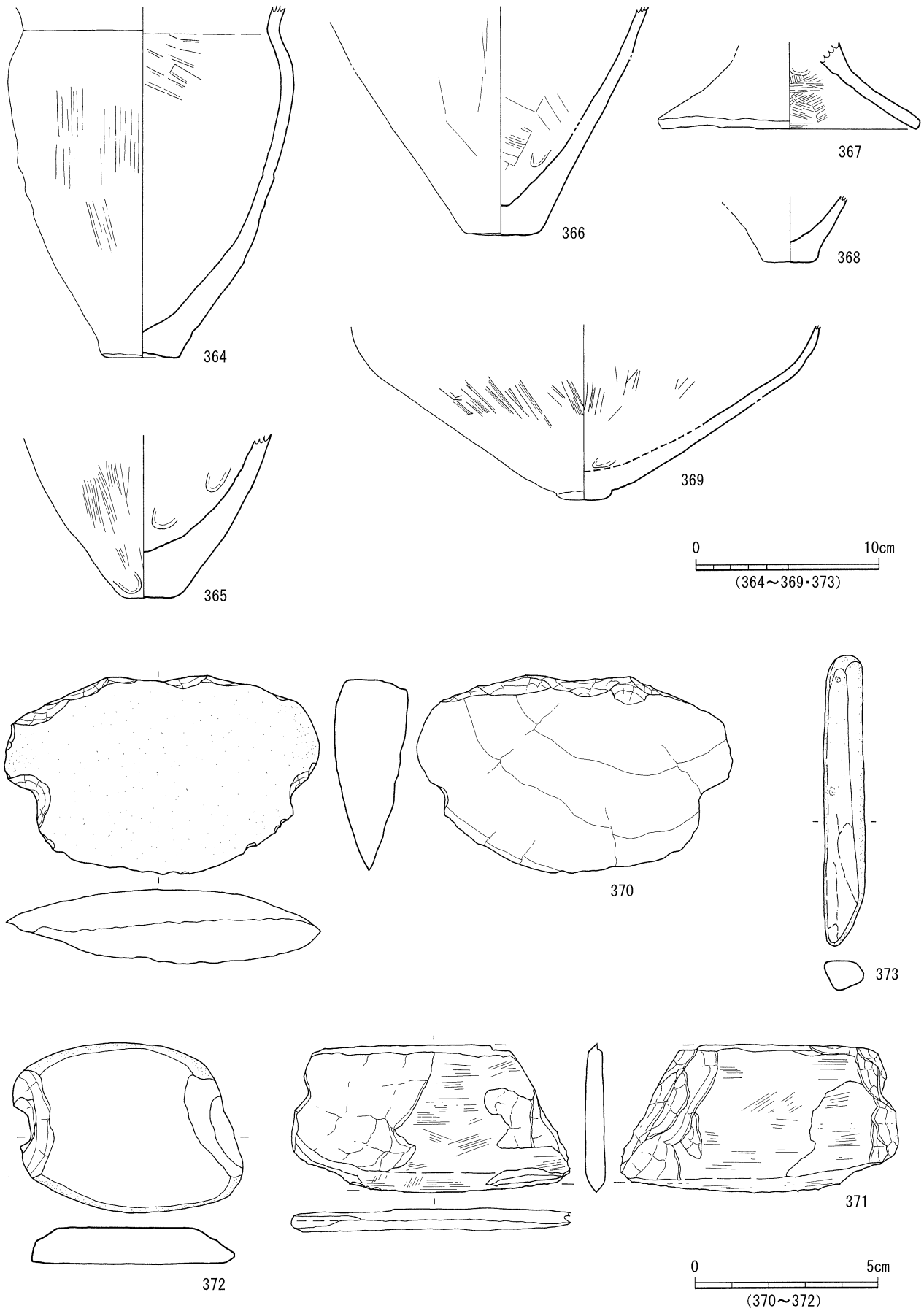
378は小型の圭頭鏃である。全長5.5cm、刃部長1.0cm、鏃身部最大幅1.8cmで、鏃身部には布の付着が認められる。茎部に繊維が見られるが、表皮は残っていない。口巻きに桜の皮が用いられていた可能性が考えられる。



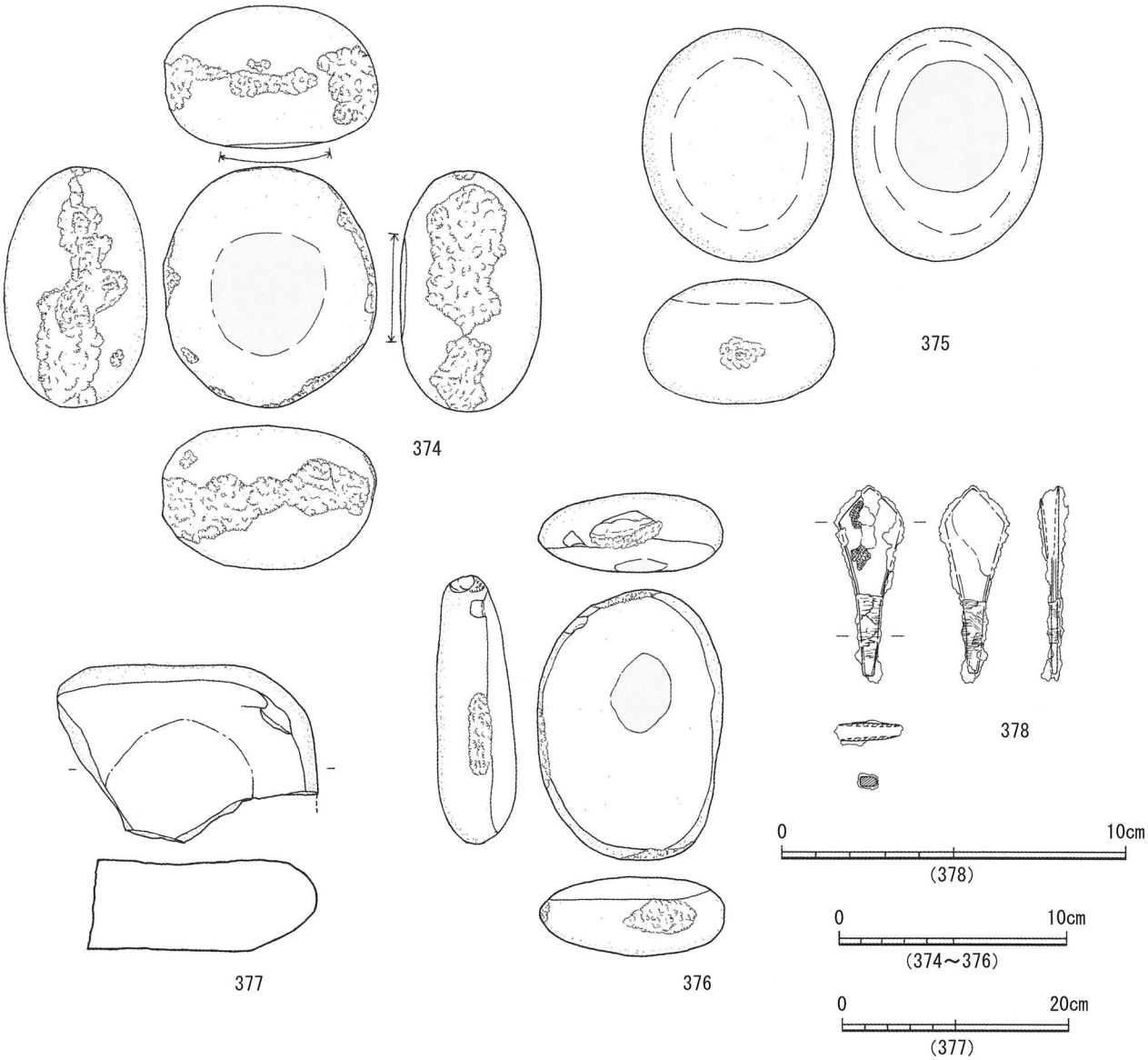
第81図　2号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図1（S=1/3）



第82図　2号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図2（S=1/3）



第83図　2号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図3（S=1/3、2/3）



第84図　2号竪穴住居跡（SA2）出土遺物実測図4（S=1/2、1/3、1/6）

土坑

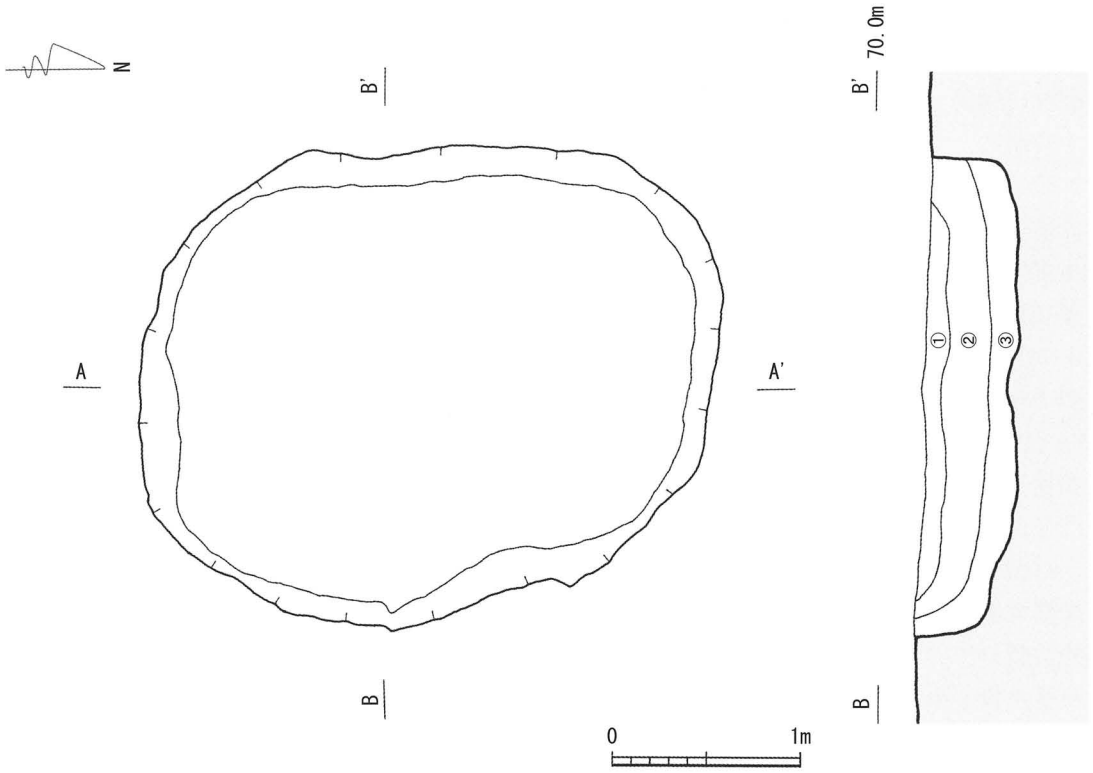
2号土坑（SC2）

遺構（第85図）

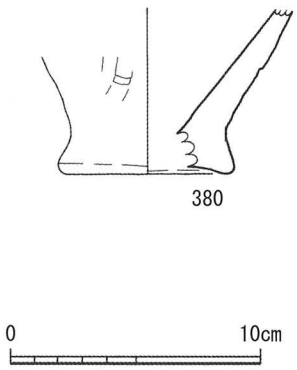
調査区L4グリッドに位置し、長軸3.02m、短軸2.50m、深さは最深で0.50mの楕円形である。

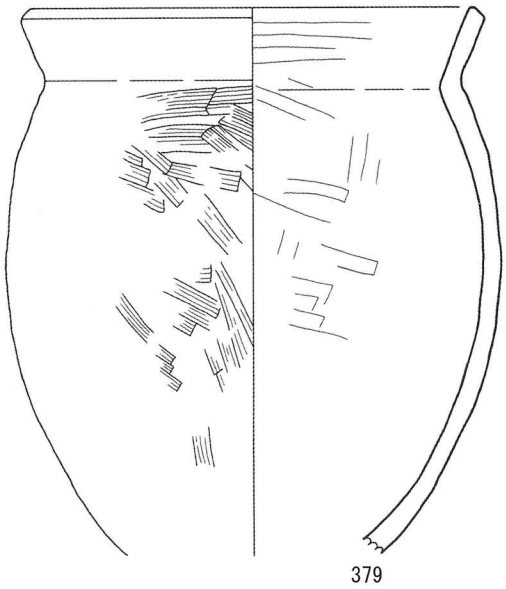
遺物（第85図―379・380）

379・380は弥生土器の甕である。379は内外面をハケメ・ナデ調整しており、口縁部は短くしっかりと外傾している。380は底部で、上げ底であるが、端部の張り出しが小さく、上げ底の度合いも小さい。



2号土坑土層注記（SC2）
①黒色土(10YR2/1)…やわらかく、しまりがない。
②黒色土(10YR2/1)…径1㎜以下の赤ホヤ粒を少量含む。
③暗褐色土(10YR3/3)…径1～2㎜程の赤ホヤ粒を少量含む。ややしまりがある。
④黒色土(10YR1.7/1)…径5～10㎜程の赤ホヤブロックを微量に含む。





第85図　2号土坑（SC2）実測図（S=1/40）出土遺物実測図（S=1/3）

2　古墳時代前期～中期の遺構と遺物（第86～124図）

竪穴住居

9号竪穴住居跡（SA9）

遺構（第86・87図）

調査区G2グリッドに位置し、長軸8.20m、短軸7.80m、推定床面積は63.96㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.75mである。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていたが、住居跡の北東側壁から南東側は1.50m程傾斜しており、その部分は、貼り床ではなく掘り底をそのまま利用していた。主柱穴は4本（深さ1.20m～1.45m）で、柱穴の距離は東西3.60m～4.15m、南北3.20m～3.40mの、ほぼ対角線上の配置である。貼り床面主柱穴間に焼土を検出した。住居跡内には土坑（第87図）があり、そこから完形の状態で二重口縁壺（394）が出土した。土坑の規模は長軸0.70m、短軸0.65mで、貼り床面から0.25m程掘り込んでいる。その埋土は自然堆積ではない黒色土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。西側部分には炭化材を良好な状態で検出し、樹種同定の結果（第Ⅳ章第2節）ハイノキ属、放射性炭素年代分析の補正値は1800±40年BPであった。

遺物（第88～91図―381～410）

381～393は甕である。381～383は大型の甕で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底（381）である。384～386は中型の甕で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底（385）である。387・388は底部で、外面にタタキ目を施してあり、側面が直線的に立ち上がる平底である。389～393は小型の甕で、外面にタタキ目の施してあるもの（389・390）、一部タタキ目の残るもの（391）、ハケメ・ナデ主体のもの（392・393）がある。口縁部は、「く」の字状で直線的に開いているもの（389・391・393）、短く直立気味のもの（390・392）がある。

394は、外面にタタキ目を施してある大型の二重口縁壺である。直立気味に立ち上がる二次口縁全体に、櫛描波状文が描かれている。底部は粗雑な作りであるが、平底またはレンズ状の平底だと考えられる。出土状況は、住居跡内の土坑から、完形の状態で出土（第87図）しており、何らかの活動目的で壺を意図的に据えていたものと考えられる。

395は甕または壺の底部で、外面にタタキ目を施してあり、レンズ状の平底である。

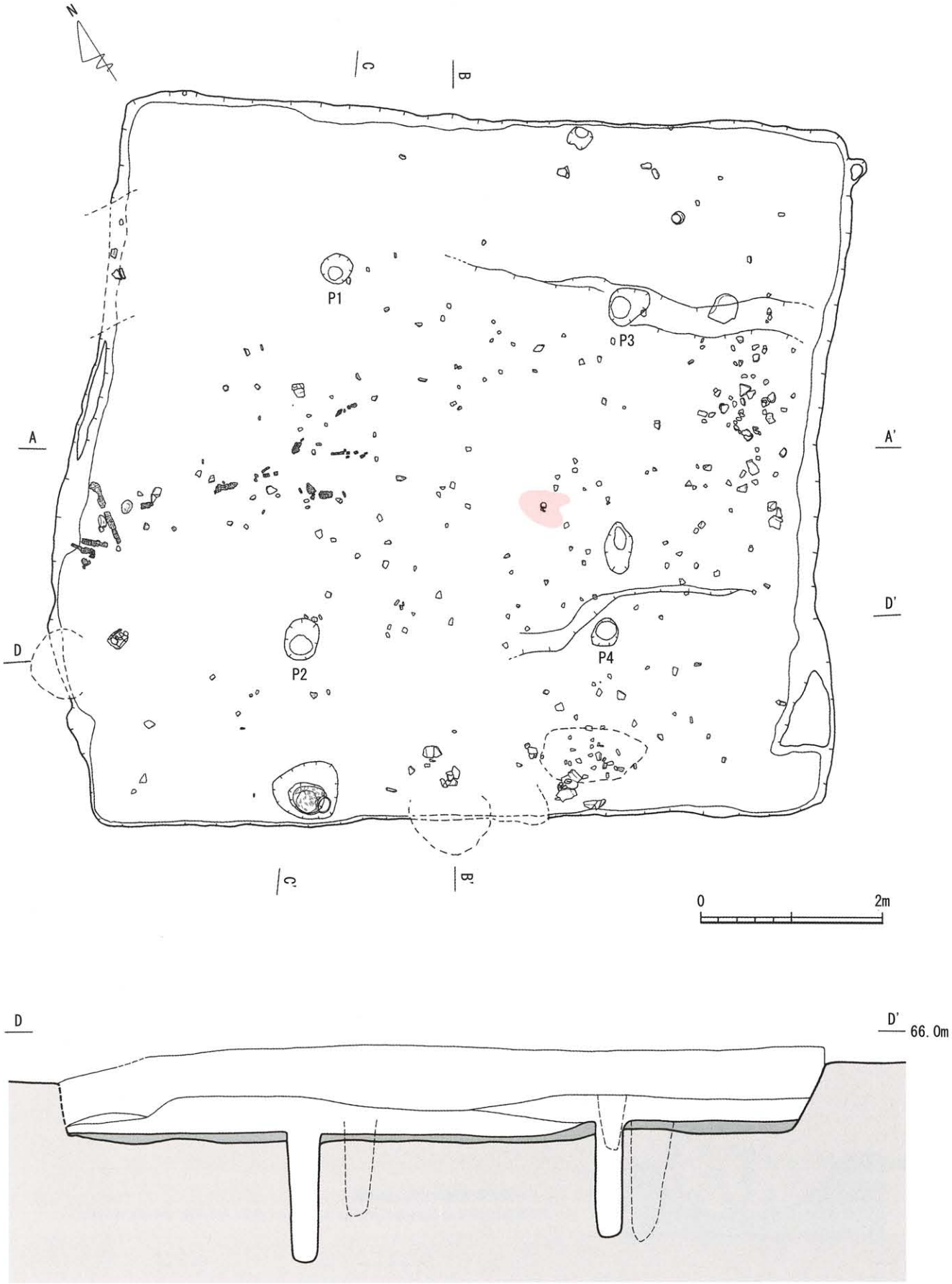
396～400は壺である。口縁部は外反するもの（396）、直立気味のもの（397）がある。底部は尖底に近い平底のもの（396）、レンズ状の平底のもの（400）がある。398・399は小型の壺で、短く外傾する口縁部（398）で、頸部付近にミガキが施されており、ソロバン玉状の胴部に底部は丸底のもの（399）がある。400は、SA9とSA12で接合した遺構間接合の壺である。外面にはタタキ目を施してある。ちょうど真ん中から半截した形がそれぞれの住居跡から出土し、接合したものである。意図的に分割された可能性が高く、なんらかの行為性が考えられる。しかし、SA9では南西側壁付近から土器破片として出土、SA12では東側から土器破片として出土と、両住居跡間の出土位置に意図的な共通性は見られなかった。

401～403は鉢である。口縁部は外傾のゆるいもの（401・402）、ゆるやかに内湾するもの（403）がある。402にはミガキが、403にはタタキ目が外面に施されている。

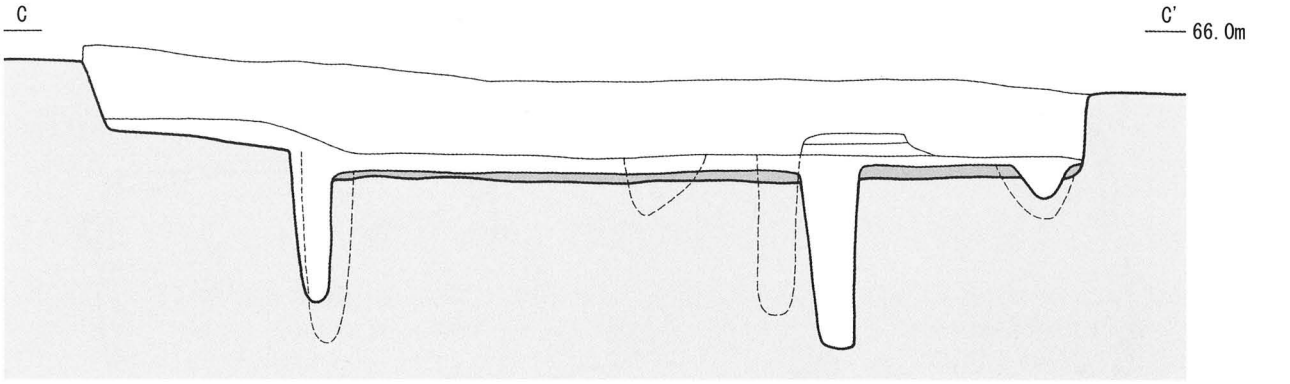
404は木葉痕のある甕または鉢の底部である。405は手捏土器で、内外面に指頭痕がある。

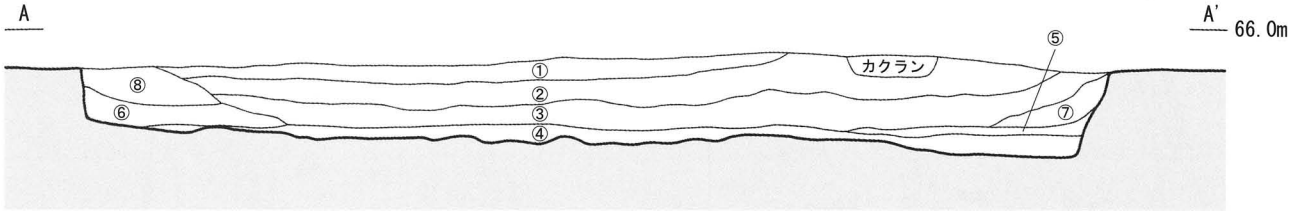
406は石庖丁で、抉りのある頁岩製である。407は砥石で、表裏面に擦痕の残る砂岩製である。408は磨・敲石で、各端に敲打痕、下面に磨り面の残る砂岩製である。409は砂岩製の台石である。

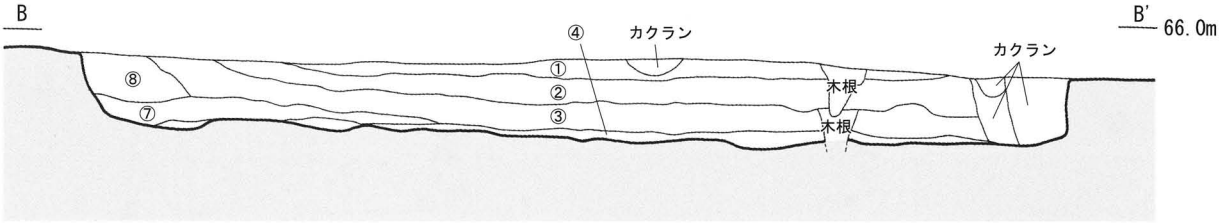
410は、残存長3.7cm、鏃身部最大幅1.8cmの柳葉鏃である。ただし、両面に木質が残っており、無茎鏃のように矢柄で鏃身部を挟み込んだ状態である。矢柄の着装を強化する目的があったものと考えられる。

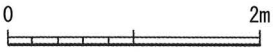


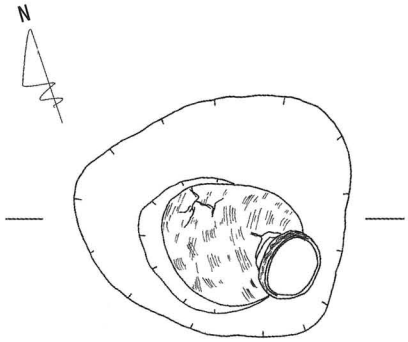
第86図　9号竪穴住居跡（SA9）実測図1（S=1/60）





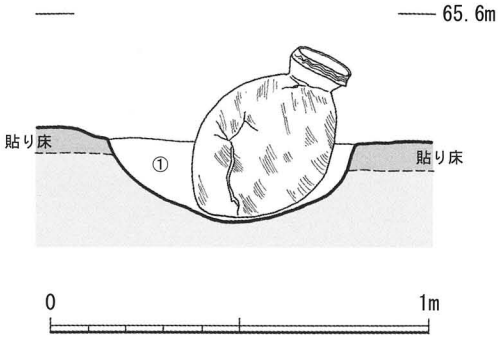






9号竪穴住居跡土層注記（SA9）

①**黒色土**(10YR2/1)…極小の赤ホヤ粒・炭化物粒を微量に含む。やわらかく、しまりがない。
②**黒色土**(10YR2/1)…①と似ているが、赤ホヤ粒を含む割合が多い。
③**黒色土**(10YR2/1)…径3cm程の赤ホヤブロックと暗褐色の粒が混じる。炭化物・土器片を多量に含む。
④**暗褐色土**(10YR3/3)…径1cm程の黒色・赤ホヤブロックを少量含む。非常に固くしまりがあり、住居の貼り床である。
⑤**黒色土**(2.5Y2/1)…暗褐色ブロックを少量含む。やわらかく、しまりがない。
⑥**黒褐色土**(10YR2/2)…暗褐色ブロックを多量に含み、赤ホヤ粒が少量混じる。粘性があり、固くしまっている。
⑦**黒褐色土**(10YR2/2)…⑥と似ているが、暗褐色ブロックを含む割合が少ない。
⑧**黒色土**(10YR2/1)…③と似ているが、赤ホヤ粒を含む割合が多い。

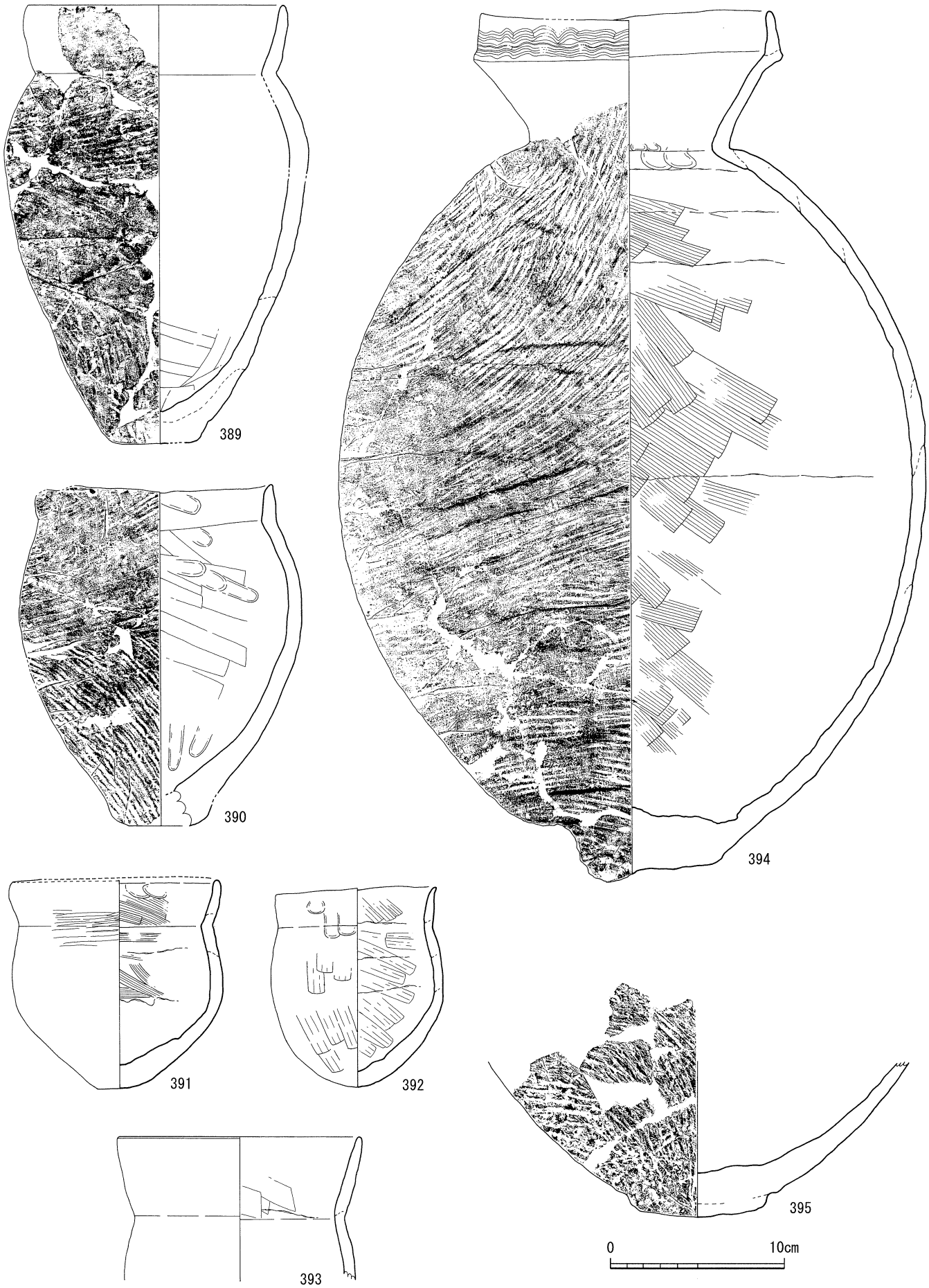


9号竪穴住居跡内土坑土層注記

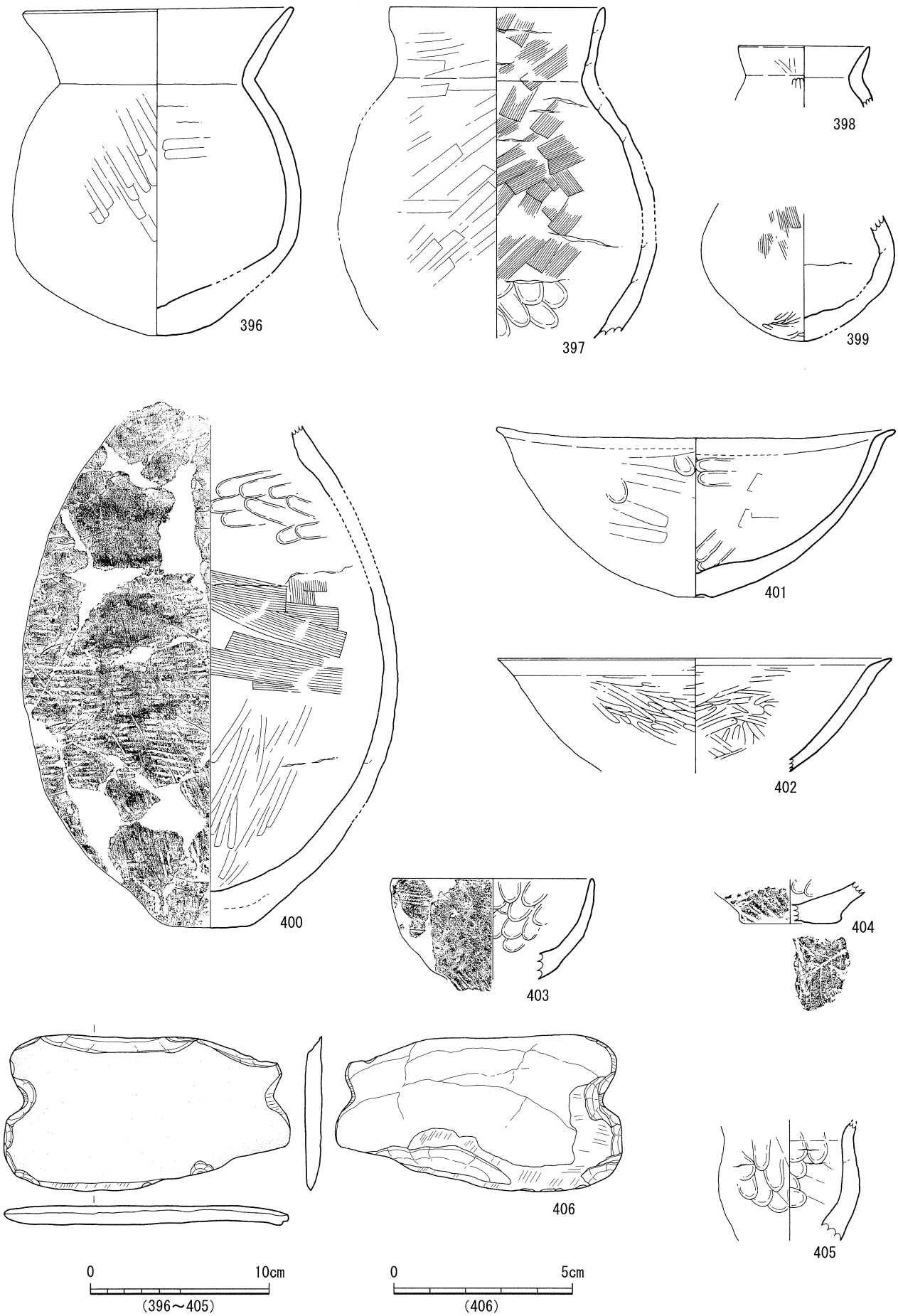
①**黒色土**(10YR1/2)…径5mmの暗褐色ブロックを多く含み、赤ホヤ粒、炭化粒を少量含む。

第87図　9号竪穴住居跡（SA9）実測図2（S=1/60）住居跡内土坑実測図（S=1/20）

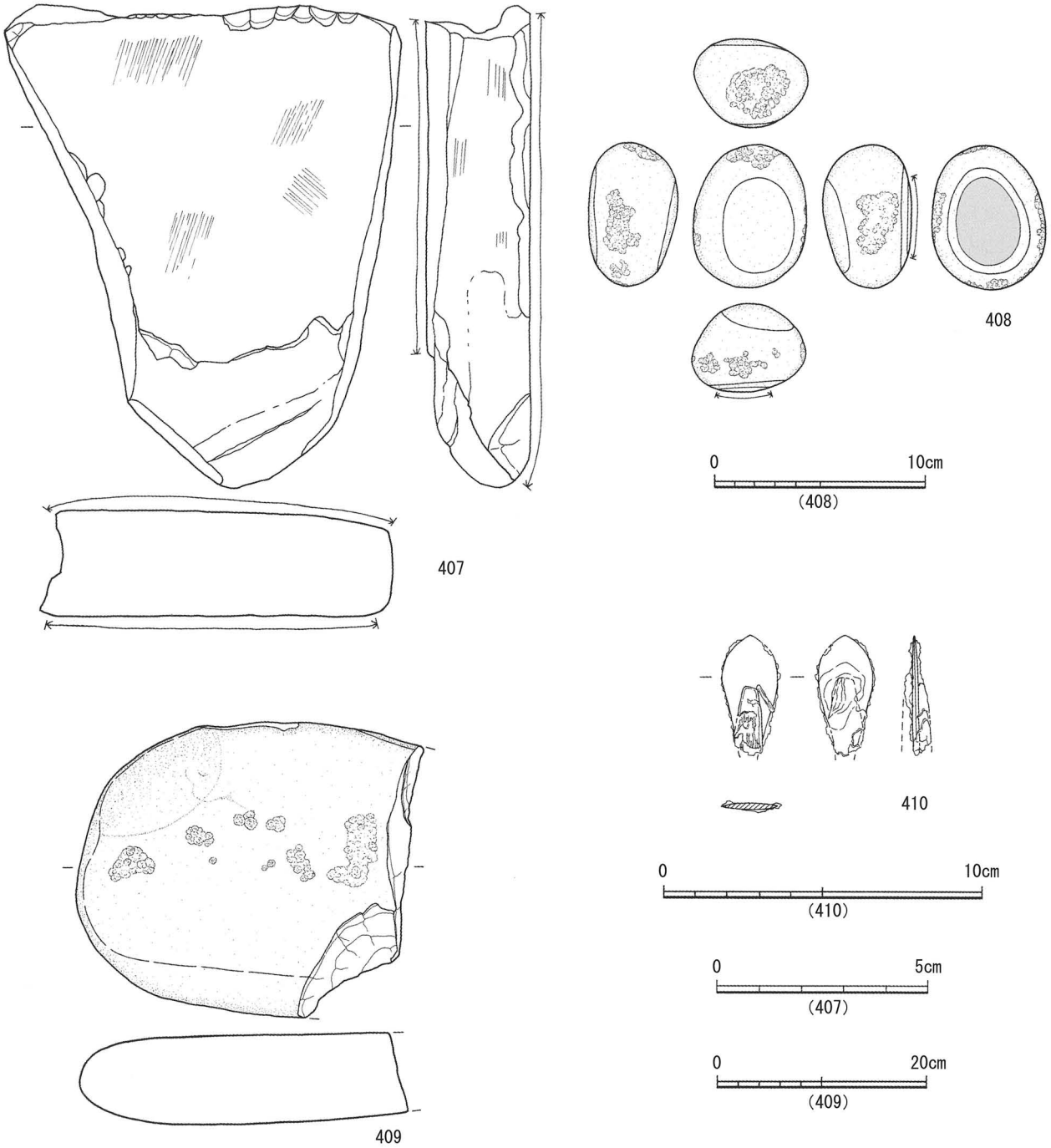
第88図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図1（S=1/3）



第89図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図2（S=1/3）



第90図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図3（S=1/3、2/3）

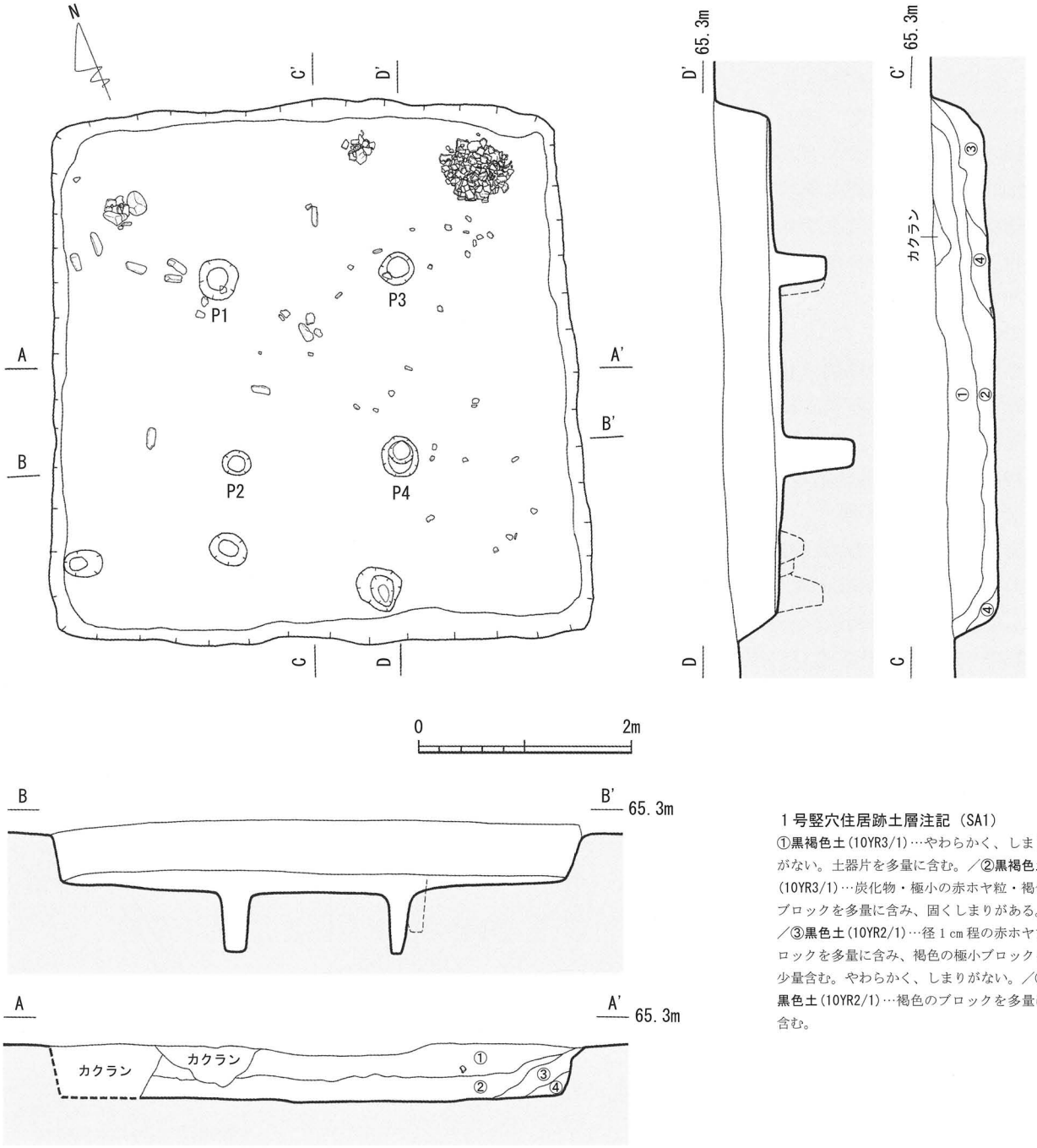


第91図　9号竪穴住居跡（SA9）出土遺物実測図4（S=1/3、1/2、2/3、1/6）

１号竪穴住居跡（SA1）

遺構（第92図）

調査区Ｄ５グリッドに位置し、長軸5.05ｍ、短軸4.95ｍ、推定床面積は24.99㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.55ｍである。土層ベルトでは確認できなかったが、赤ホヤ粒の混じる黒褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は４本（深さ0.50ｍ～0.70ｍ）で、柱穴の距離は東西1.55ｍ～1.70ｍ、南北1.75ｍの、ほぼ対角線上の配置である。北東部の壁際に貼り床面より10cm程上面で検出した土器片の集中部分がある。その部分で出土した土器は高い接合率で、完形近くまで復元できる個体も多く見られた。住居廃絶後の埋没過程の中で一括して廃棄された可能性もある。



１号竪穴住居跡土層注記（SA1）
①黒褐色土(10YR3/1)…やわらかく、しまりがない。土器片を多量に含む。／②黒褐色土(10YR3/1)…炭化物・極小の赤ホヤ粒・褐色ブロックを多量に含み、固くしまりがある。／③黒色土(10YR2/1)…径１cm程の赤ホヤブロックを多量に含み、褐色の極小ブロックを少量含む。やわらかく、しまりがない。／④黒色土(10YR2/1)…褐色のブロックを多量に含む。

第92図　１号竪穴住居跡（SA1）実測図（S=1/60）

遺物（第93～96図―411～441）

411～424は甕である。411～421は大型の甕で、頸部下の表面所々にタタキ目が残るもの（411・414・415）がある。

口縁部は直線的に外反している。その中でも418・419は、他の口縁部に比べより長く伸びている。底部（411～416、420・421）は、側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底で、わずかに平坦面がある。

中型の甕は長胴形（422）と球胴に近いもの（423）があり、422は口縁部が直線的に外反し、底部は丸みをもつ尖底である。

425～427は壺である。425は球形胴で、口縁部は短く直立している。

小型丸底壺は半球形（426）と球形（427）があり、427の底部は平底である。

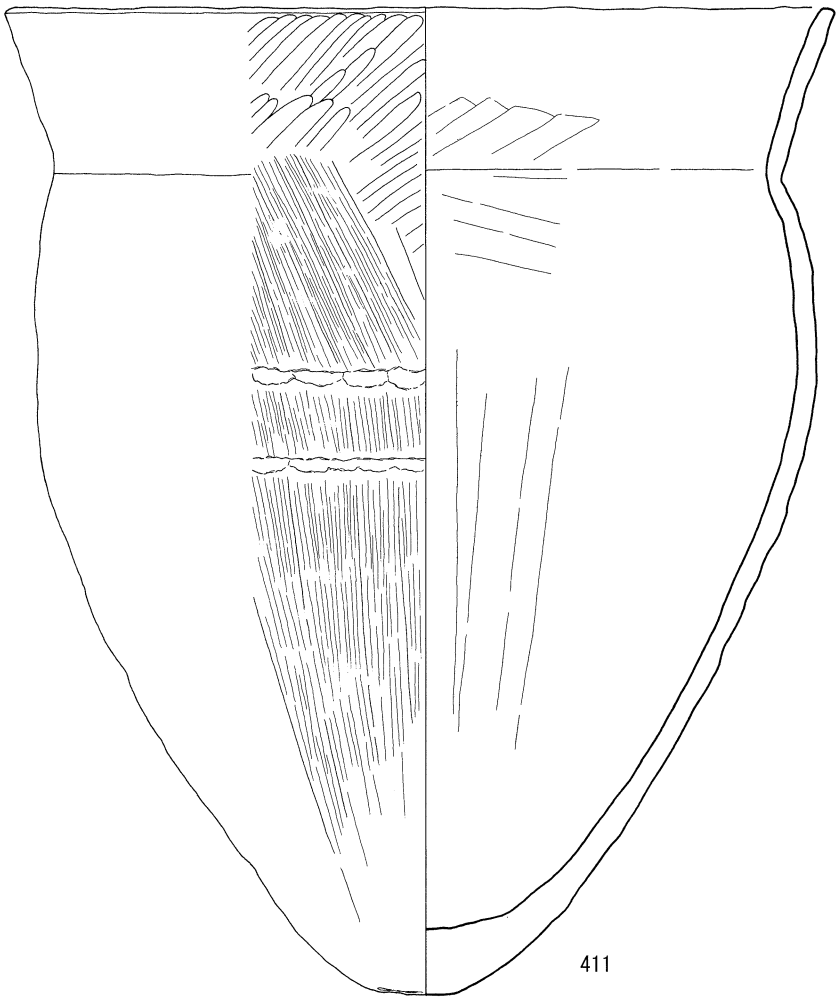
428～433は高坏である。口縁部は直線的に外傾し、受部内面は平らに近いもの（428・429）がある。428は小さく屈曲して開く裾部がつく。

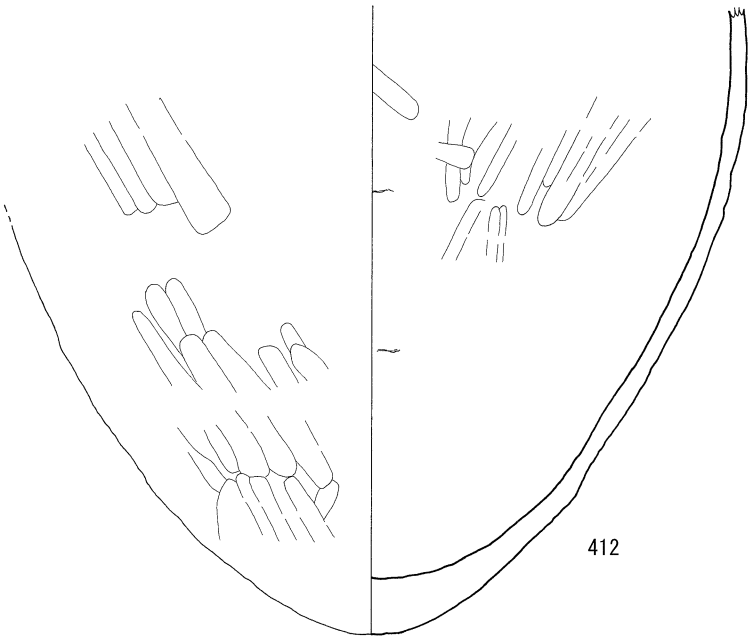
434～438は鉢である。いずれも深鉢で、口縁部が巻き込み気味に立ち上がるもの（434）、ゆるやかに内湾するもの（435～437）、外傾するもの（438）がある。底部は平底（434～436）である。

439は手捏土器で、内外面に指頭痕がある。

440は抉りのある砂岩製の石庖丁である。

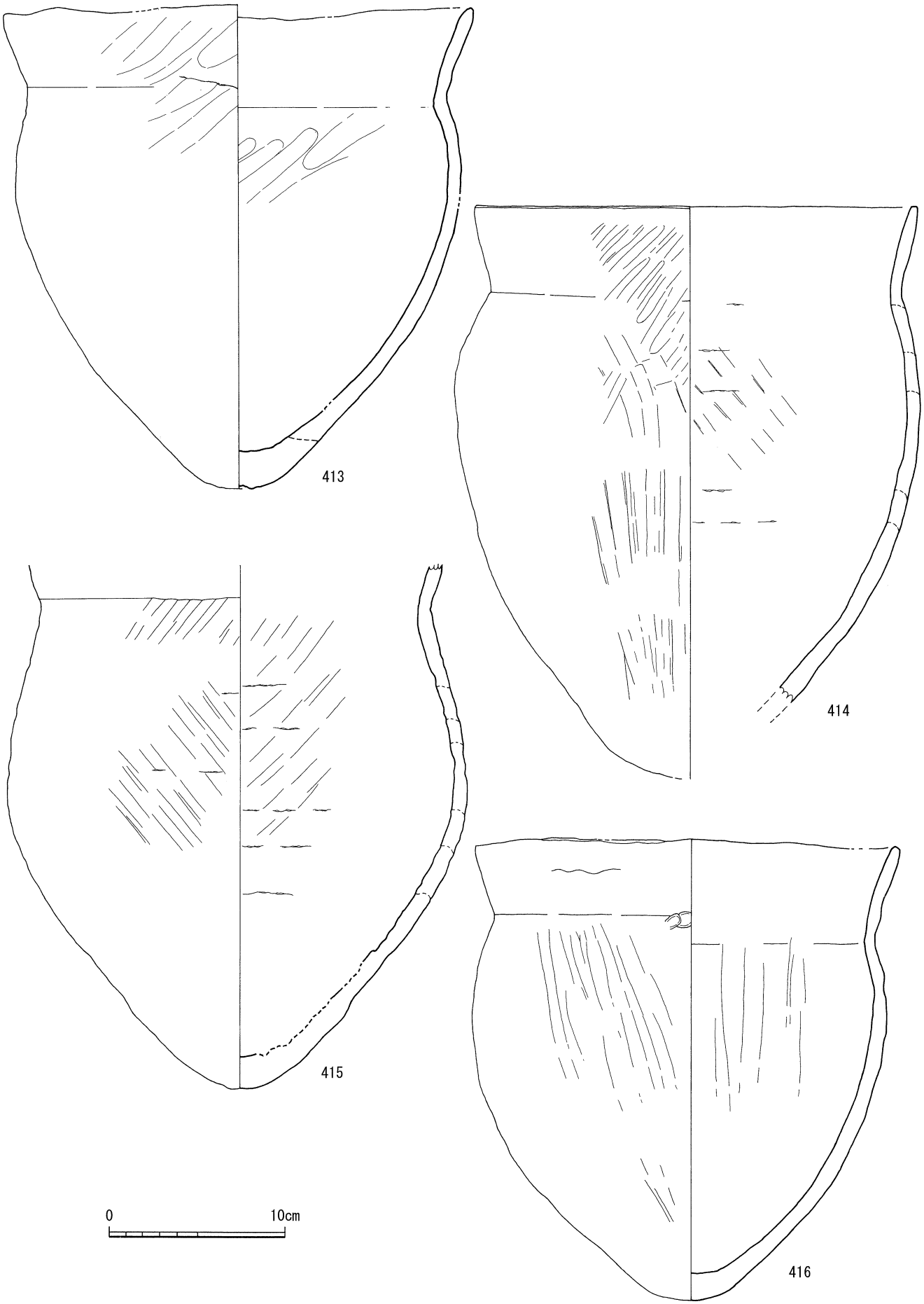
441は千枚岩製の敲石で下端に敲打痕が残る。



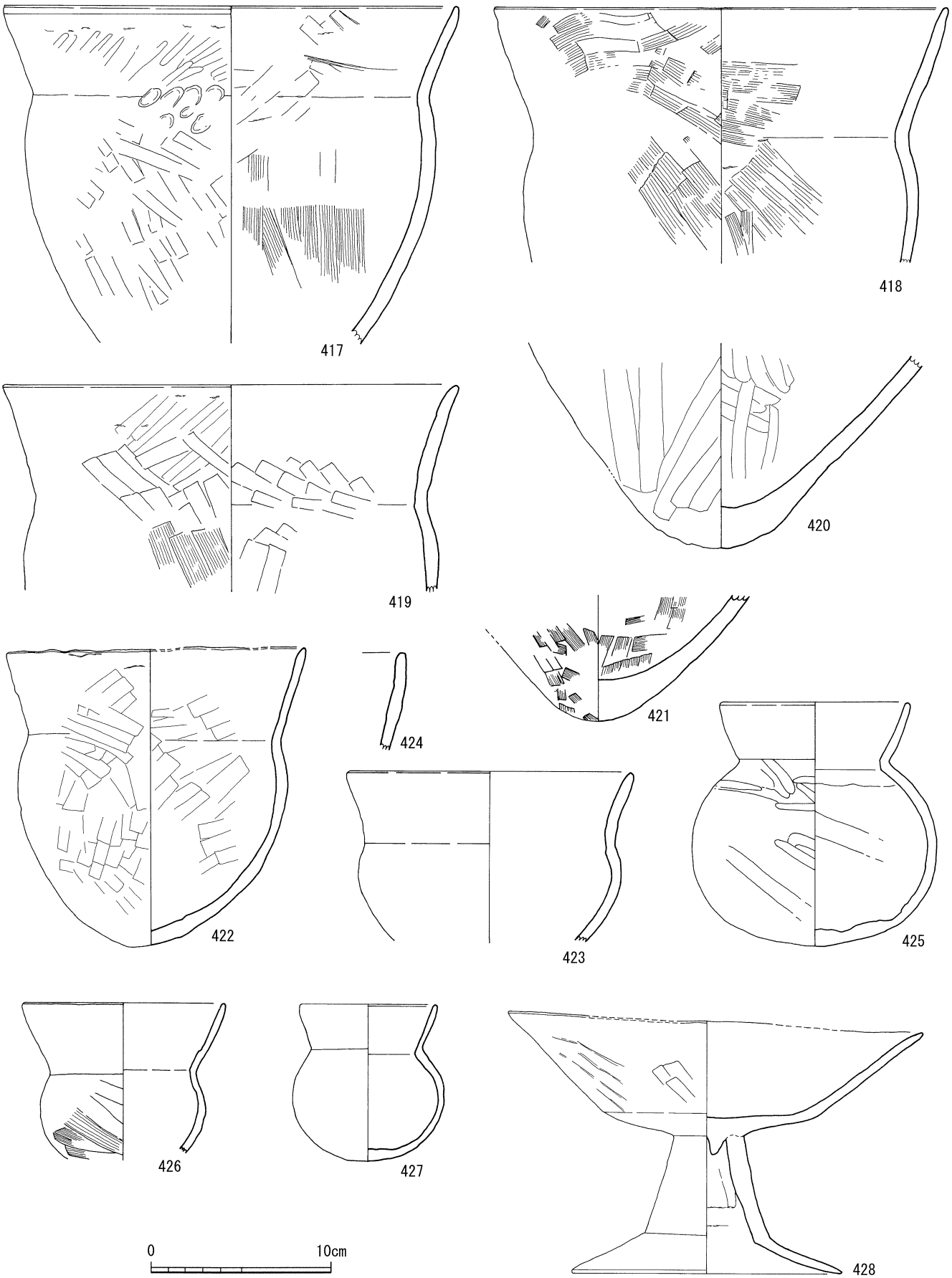


0　10cm

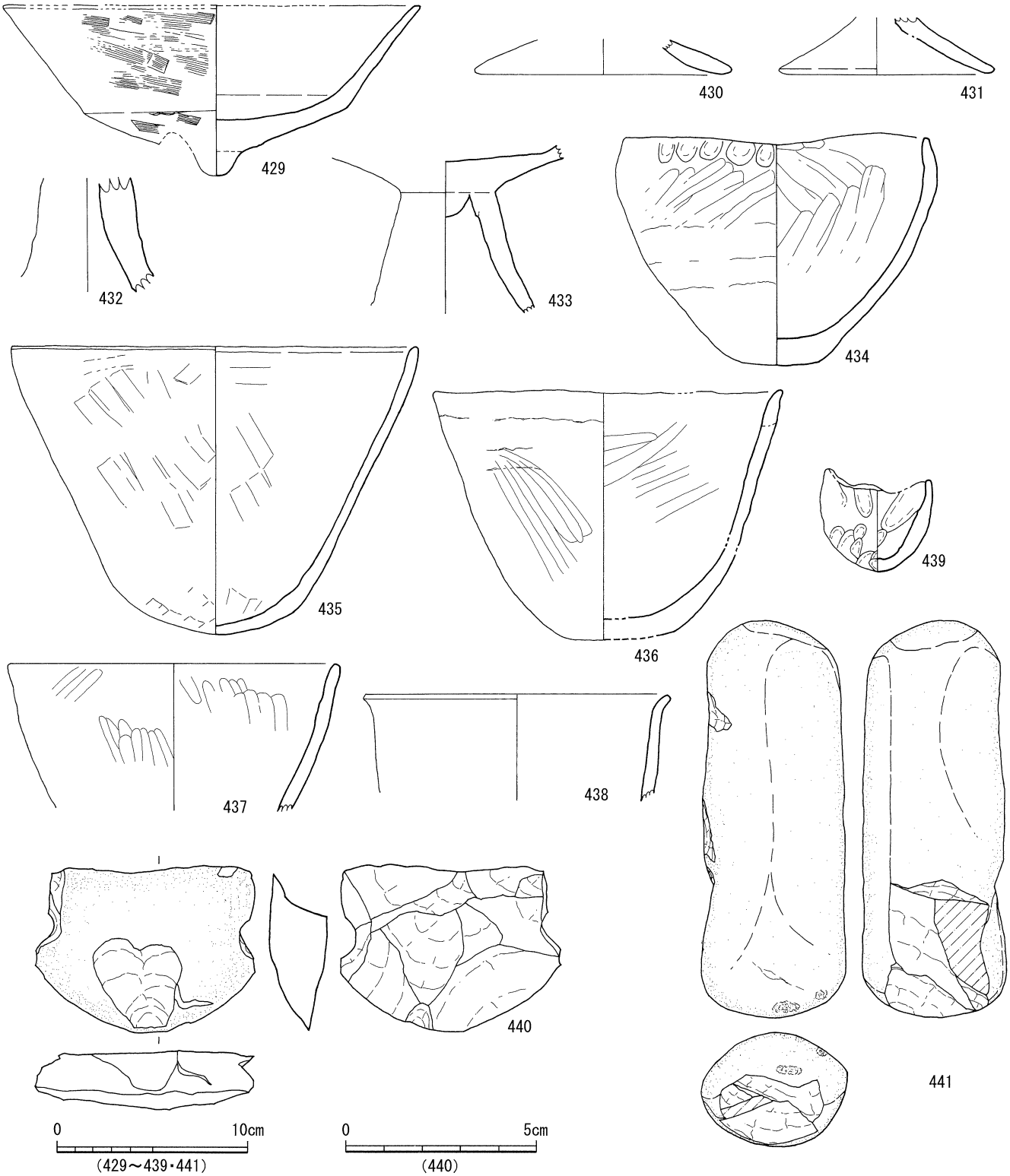
第93図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図1（S=1/3）



第94図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図2（S=1/3）



第95図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図3（S=1/3）

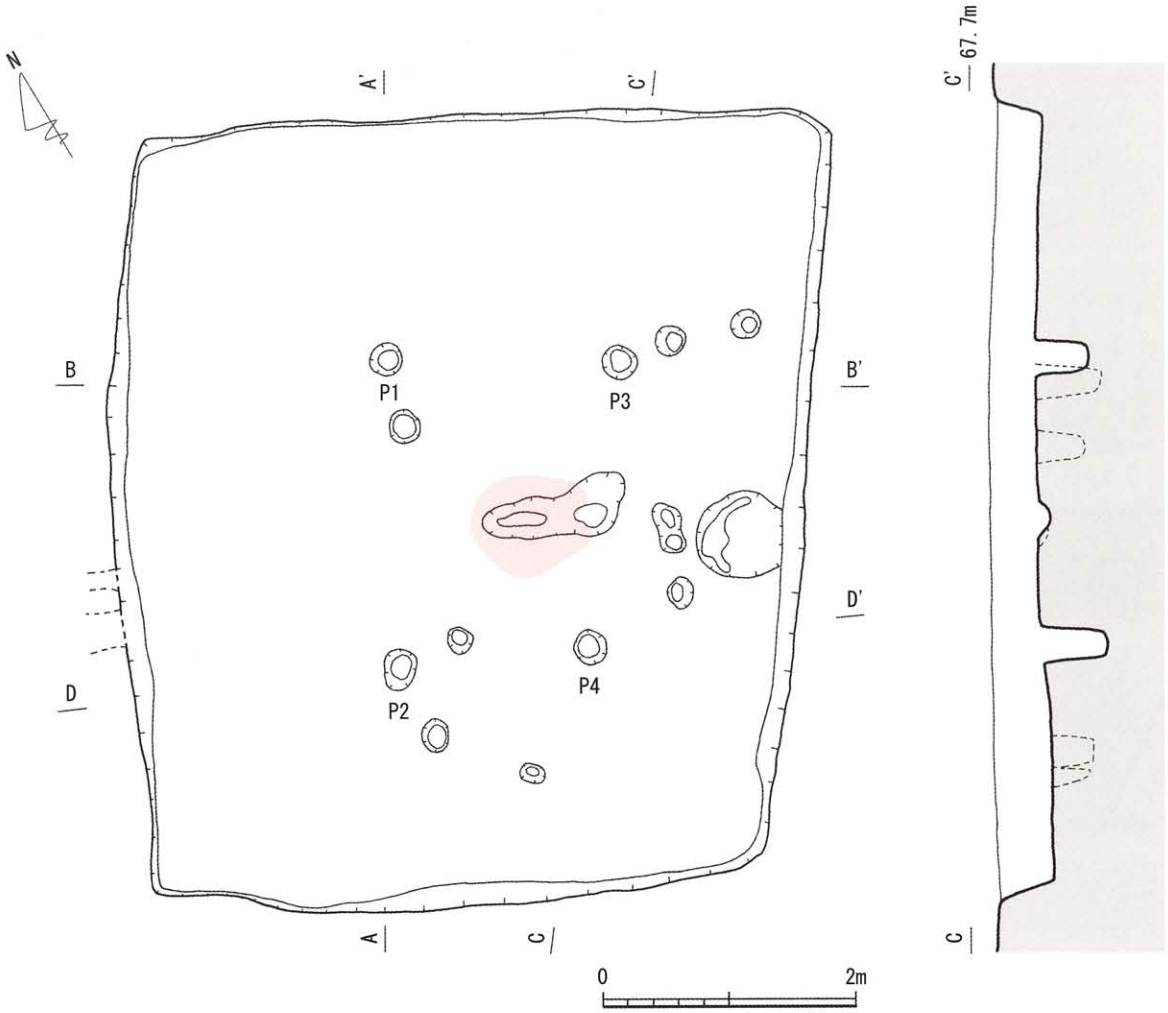


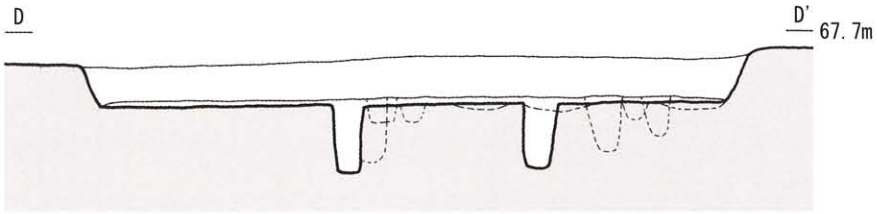
第96図　1号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図4（S=1/3、2/3）

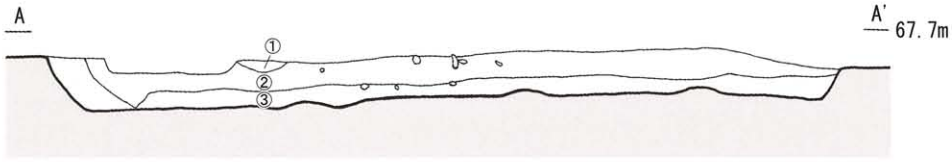
3号竪穴住居跡（SA3）

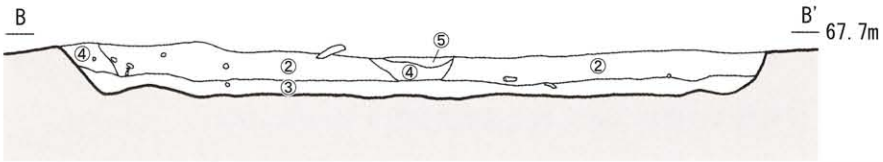
遺構（第97図）

調査区L3グリッドに位置し、長軸6.25m、短軸5.60m、推定床面積は35.00㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.45mである。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は4本（深さ0.45m～0.55m）で、柱穴の距離は東西1.50m～1.85m、南北2.30m～2.45m









3号竪穴住居跡土層注記（SA3）

①黒色土(10YR2/1)…極小の赤ホヤ粒を少量含む。やや粘性がある。

②黒褐色土(5YR2/1)…径1～2㎜程の赤ホヤ粒を少量含む。

③暗褐色土(7.5YR3/3)…径1㎝程の赤ホヤブロックを少量含む。固くしまりがあり、住居の貼り床である。

④黒色土(7.5YR1.7/1)…径1～2㎜程の赤ホヤ粒を多量に含む。

⑤黒色土(10YR2/1)…やわらかく、しまりがない。

⑥黒褐色土(7.5YR3/2)…径1～2㎝程の赤ホヤブロックを含み、固くしまっている。

第97図　3号竪穴住居跡（SA3）実測図（S=1/60）

の、ほぼ対角線上の配置である。中央部の貼り床面では、柱穴間に焼土が広がり、1.15 m×0.51 m 程の地床炉がある。

遺物（第98～101図―442～485）

442～458は甕である。446・447は大型の甕で、口縁部がややゆるやかに外反している。中型の甕（442～445・448～458）は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、外面全体にタタキ目の残るもの（442）、一部にミガキを施しているもの（443・444・455・457・458）がある。口縁部は直線的に外反しているもの（442～445・458）、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反しているもの（456）、短く屈曲するもの（457）がある。底部は、丸みをもつ尖底やわずかに平坦面やくぼみのあるもの（448・454・455）、厚みのある平底のもの（444）がある。449は球形胴の甕で、口縁部が直線的に伸びている。

459・460は甕または壺の口縁部である。

461～473は壺である。口縁部は、やや外反するもの（461）、直立に近く立ち上がるもの（462～464）、頸部に格子目状の突帯があるもの（465）がある。462は表面の一部にタタキ目が残る。466は胴部から底部付近ではあるが、丸底に近い底部形態をしている。467～470は櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部である。471も同じく二重口縁壺の口縁部であるが、内湾の度合いが強く、波状文もない。これは3号住居跡内と遺構外からとが接合したものであり、流入の可能性が高い。472・473は小型の壺である。472の口縁部は長く直立気味に外傾している。

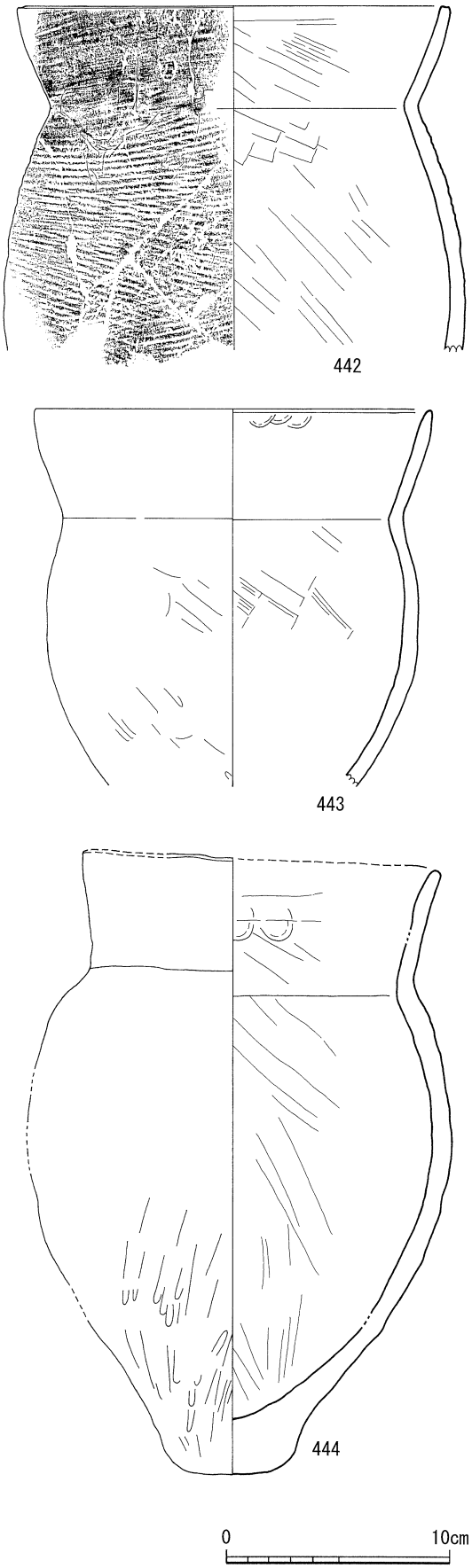
474・475は高坏である。どちらもミガキが施してある。474は二段の円形透かしが施されており、同遺構遺物時期の中ではほとんど見られない。

476・477は鉢である。476は深鉢の底部で平底である。477は浅鉢の底部で平底である。

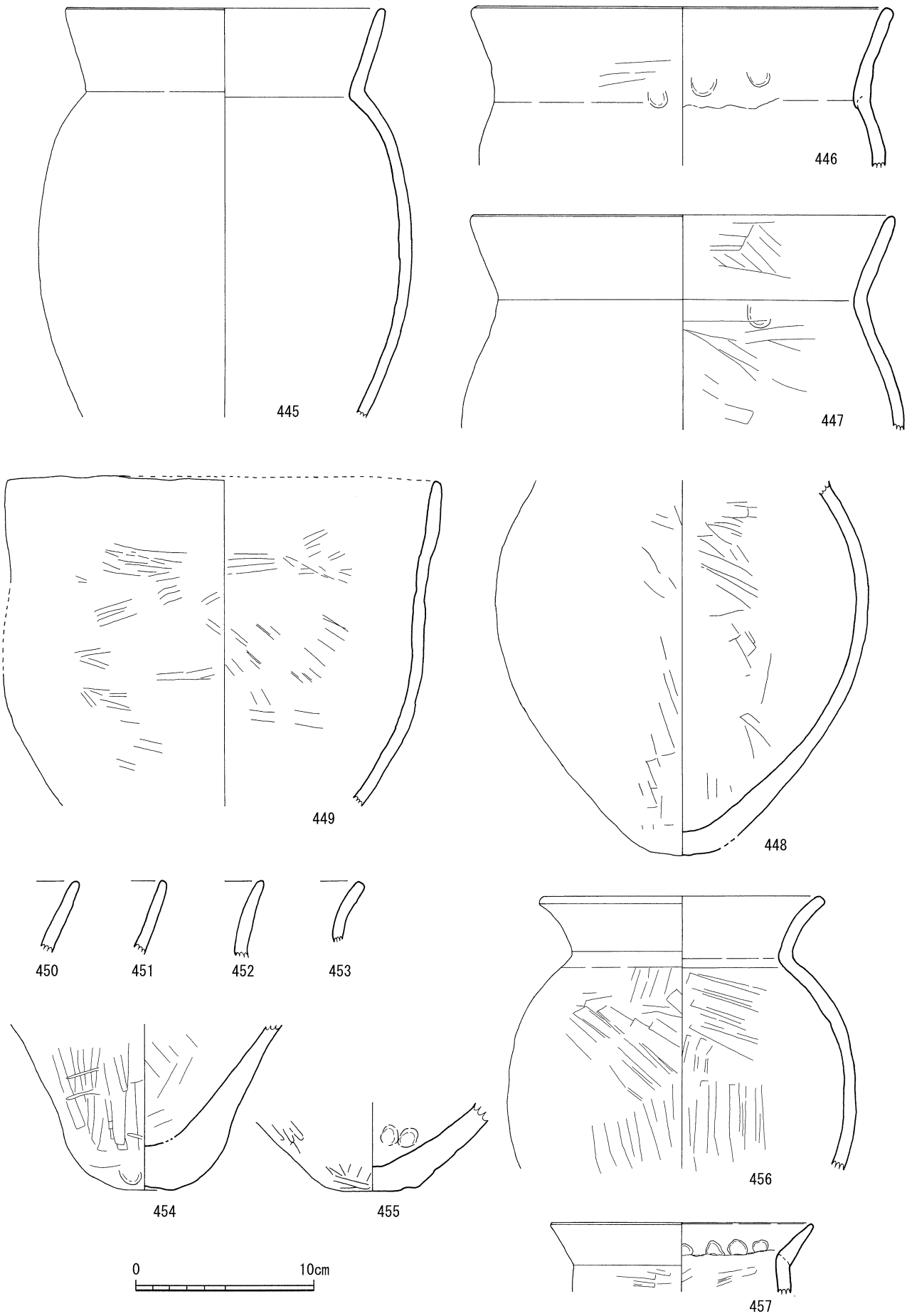
478・479は手捏土器で内外面に指頭痕がある。

480は抉りのある頁岩製の石庖丁である。481は花崗斑岩製の敲・磨石で、敲打痕や磨り面が残る。

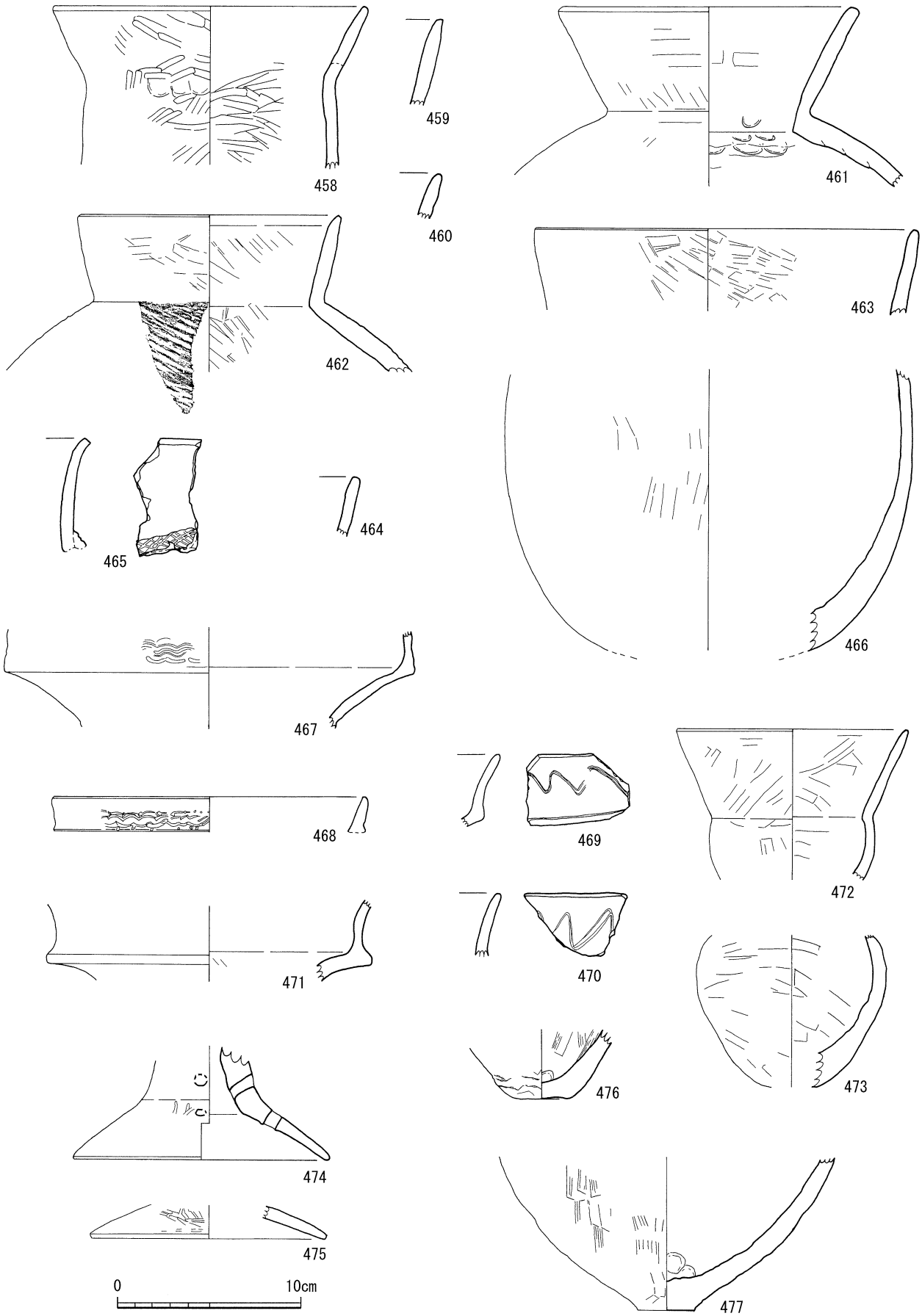
482～485は鉄製品である。482は破損・変形をしているが、残存長 6.8 cm の柳葉鏃である。483は鉄鏃の茎部である。484は鉈の一部で、片方の面に径 2 mm の棒状の鉄が付着しており、両者を巻き合わせるかのような帯状の有機質も認められる。残存長は 4.4 cm である。485は鉈の先端部付近の破片で、残存長 5.3 cm である。厚さは 3 cm 前後、裏すきの深さは約 0.1 cm で、断面観は両側が丸みを帯びた形状である。



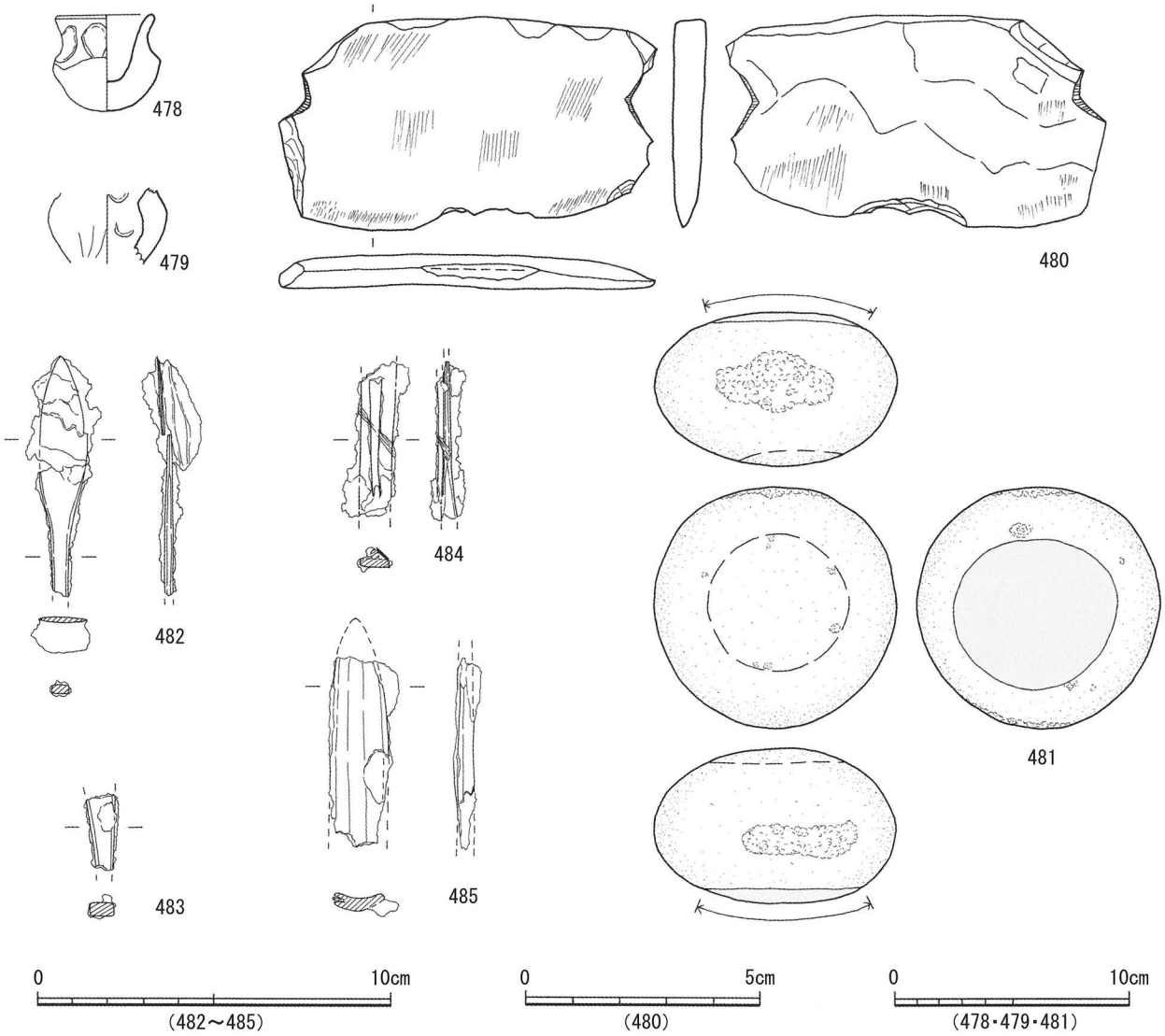
第98図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図1（S=1/3）



第99図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図2（S=1/3）



第100図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図3（S=1/3）



第101図　3号竪穴住居跡（SA3）出土遺物実測図4（S=1/2、2/3、1/3）

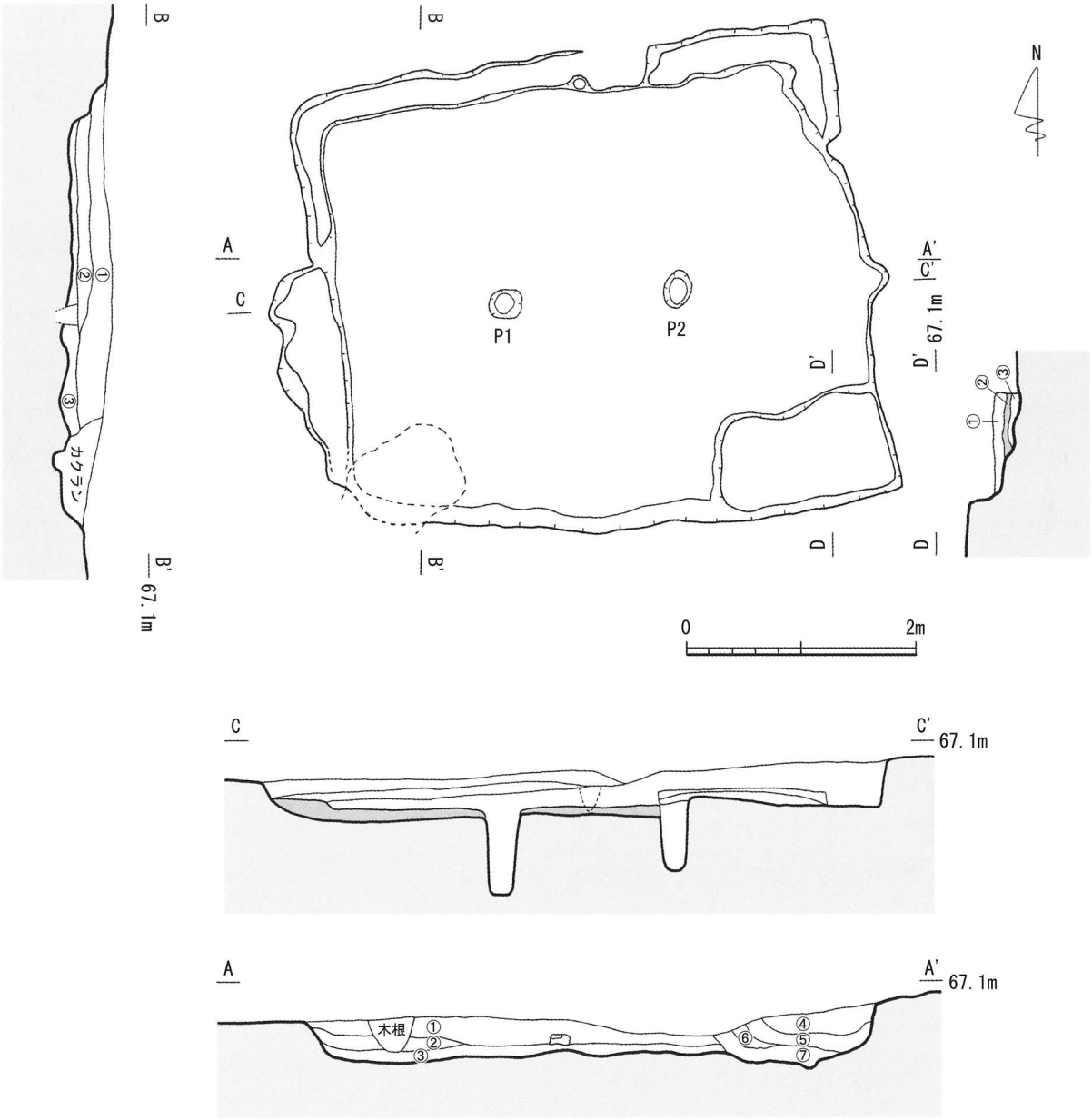
4号竪穴住居跡（SA4）

遺構（第102図）

調査区J4グリッドに位置し、長軸4.90ｍ、短軸4.00ｍ、推定床面積は19.60㎡の長方形である。検出面からの深さは最深で0.50ｍである。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は2本（深さ0.70ｍ～0.75ｍ）で、柱穴の距離は東西1.50ｍで長軸方向にならんでいる。北東側、西側、南東側部分の壁には、幅0.30ｍ～0.90ｍのベッド状遺構がある。そのうち南東側部分のベッド状遺構には赤ホヤ粒の混じる暗褐色の貼り床が施されていた。

遺物（第103・104図―486～509）

486～496は甕である。486～491は長胴形の甕の口縁部である。直立気味に長くゆるやかに外反している。491には外面にミガキが施され、口縁端部に盛り上がりがある。492は球形胴の甕で、外面頸部下にミガキが施され、口縁部が直線的に伸びている。493は長胴形の甕の胴部で、底部付近は丸みをもつ尖底の底部形態をしている。494～496は底部で、丸みをもつ尖底である。494には外面にミガキが施されている。



4号竪穴住居跡土層注記（SA4）

①黒色土(10YR2/1)…SA4の埋土。径2㎜程の赤ホヤ粒を少量含む。炭化物粒を多量に含み、やわらかく、しまりがない。
②黒褐色土(10YR3/1)…SA4の埋土。径1㎝程の赤ホヤブロックを多量に含む。やわらかく、しまりがない。
③暗褐色土(10YR3/3)…SA4の埋土。黒色・暗褐色・赤ホヤブロックを含む。粘性があり固くしまっており、住居の貼り床である。
④黒褐色土(10YR3/1)…土坑の埋土。褐色・赤ホヤ粒を多量に含み、やわらかく、しまりがない。
⑤黒褐色土(10YR3/1)…土坑の埋土。④と似ているが、褐色・赤ホヤ粒が大きい。
⑥黒褐色土(10YR3/1)…土坑の埋土。④と似ているが、褐色の粒の割合が多い。
⑦暗褐色土(10YR3/3)…土坑の埋土。黒色・暗褐色・赤ホヤブロックを含み、しまりがある。

ベッド状遺構土層注記

①暗褐色土(10YR3/3)…径1㎜以下の赤ホヤ粒と黒褐色ブロックを少量含む。
②暗褐色土(10YR3/3)…径4㎜程の赤ホヤ粒と黒褐色ブロックを多く含む。住居の貼り床の土と同じものと思われる。①よりも固く硬化している。
③暗褐色土(10YR3/3)…①と似ているが、赤ホヤ粒と黒褐色ブロックの割合が多い。

第102図　4号竪穴住居跡（SA4）実測図（S=1/60）

497～500は壺である。口縁部は、外反するもの（497）、直立に近く立ち上がるもの（498）がある。498の外面にはミガキが施されている。499・500は小型丸底壺の直線的に開く口縁部である。

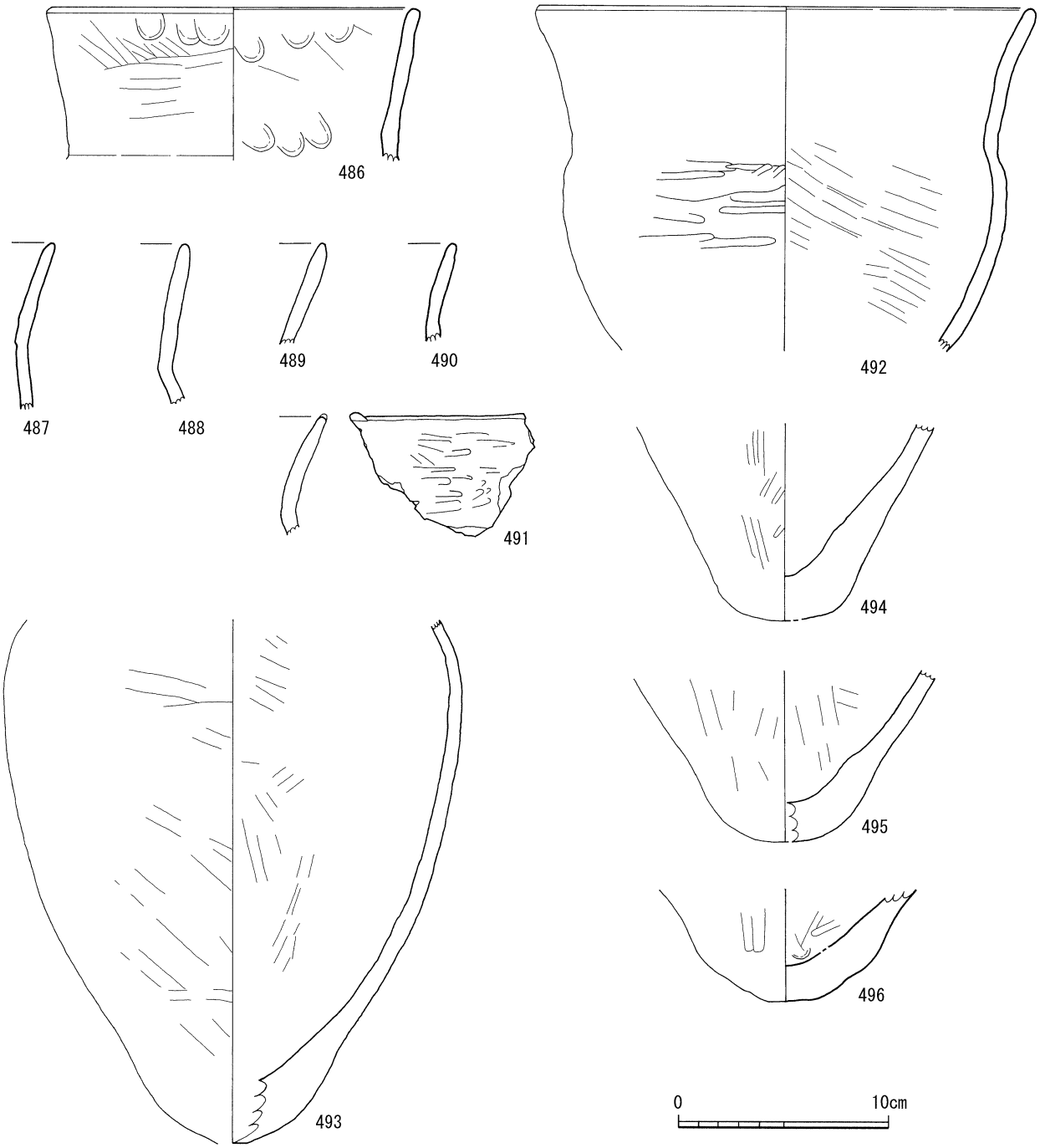
501・502は高坏である。501はいわゆる有段高坏の坏部と考えられ、有段部が外に張り出している。502は脚部で外面にミガキが施されている。

503は鉢である。ゆるやかに内湾する口縁部をもつ深鉢である。

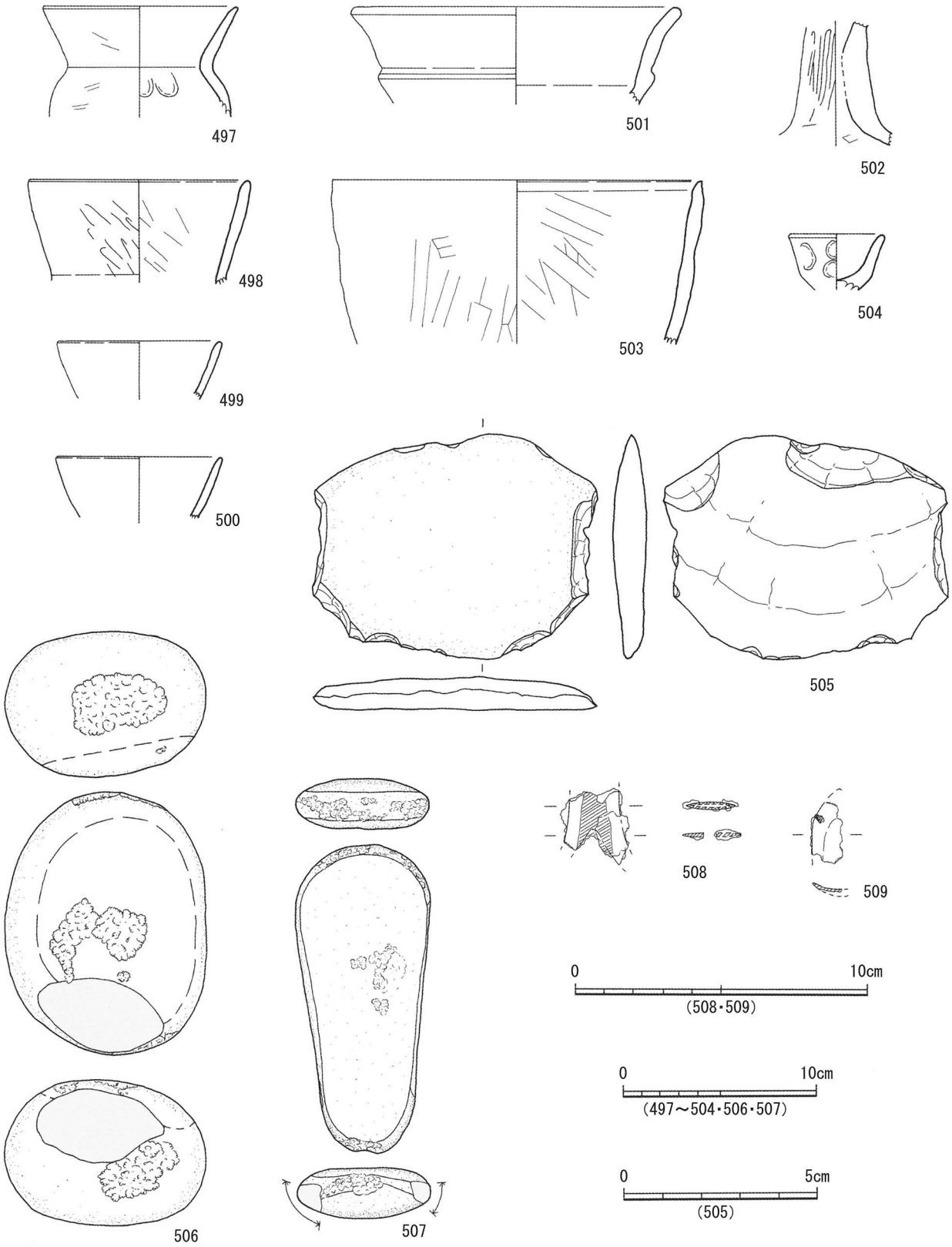
504は手捏土器で内外面に指頭痕がある。

505は抉りのある砂岩製の石庖丁である。506・507は敲・磨石で、敲打痕や磨り面が残る。花崗斑岩製（506）と砂岩製（507）である。

508・509は鉄製品である。508は逆刺が外側に開く形状の無茎鏃の破片である。中央部は明褐色に変色しており、矢柄の木質痕跡と考えられる。509は断面観がカーブする薄い鉄片で、鉋の先端付近と考えられる。



第103図　4号竪穴住居跡（SA4）出土遺物実測図1（S=1/3）

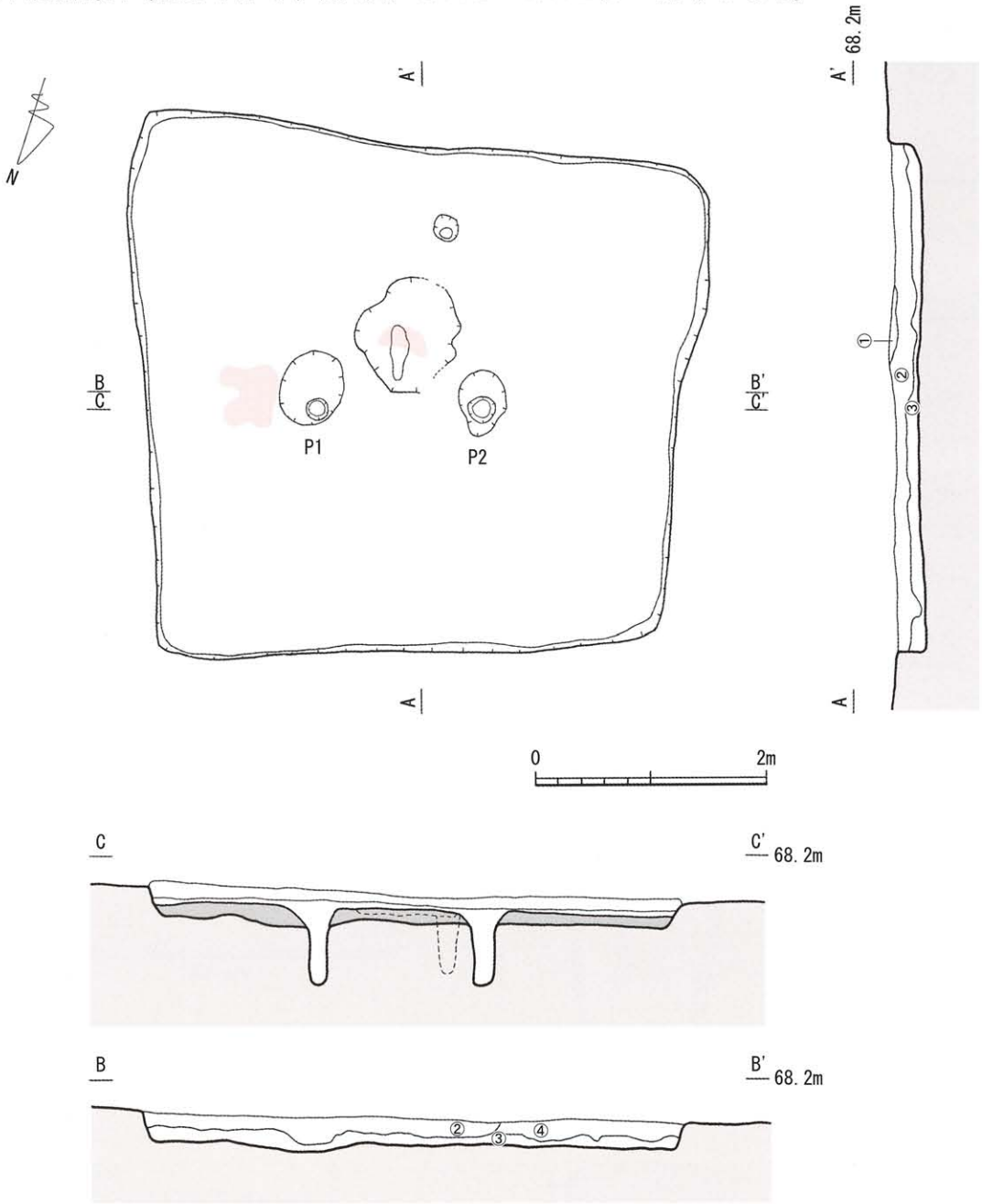


第104図　4号竪穴住居跡（SA4）出土遺物実測図2（S=1/2、1/3、2/3）

10号竪穴住居跡（SA10）

遺構（第105図）

調査区M3グリッドに位置し、長軸4.65ｍ、短軸4.40ｍ、推定床面積は20.46㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.30ｍである。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は2本（深さ0.70ｍ～0.75ｍ）で、柱穴の距離は東西1.45ｍで長軸方向にならんでいる。中央部の貼り床面では、柱穴間や東側部分に焼土が広がり、柱穴間に1.00ｍ×0.90ｍ程の地床炉がある。



10号竪穴住居跡土層注記（SA10）

①黒褐色土（7.5YR2/2）…やわらかく、しまりがない。

②黒褐色土（10YR2/2）…粘性があり、径5～10㎜程の赤ホヤブロックを微量に含む。

③褐色土（10YR4/4）…径1㎝以上の赤ホヤブロックを少量含む。粘性があり、固くしまっており、住居の貼り床である。

④褐色土（10YR4/6）…赤ホヤブロックや黒褐色土を少量含み、固くしまりがある。

第105図　10号竪穴住居跡（SA10）実測図（S=1/60）

遺物（第106・107図―510～521）

510～512は甕である。外面は工具によるナデ調整主体で、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反するもの（510）と、「く」の字状で直線的に開くもの（512）とがある。

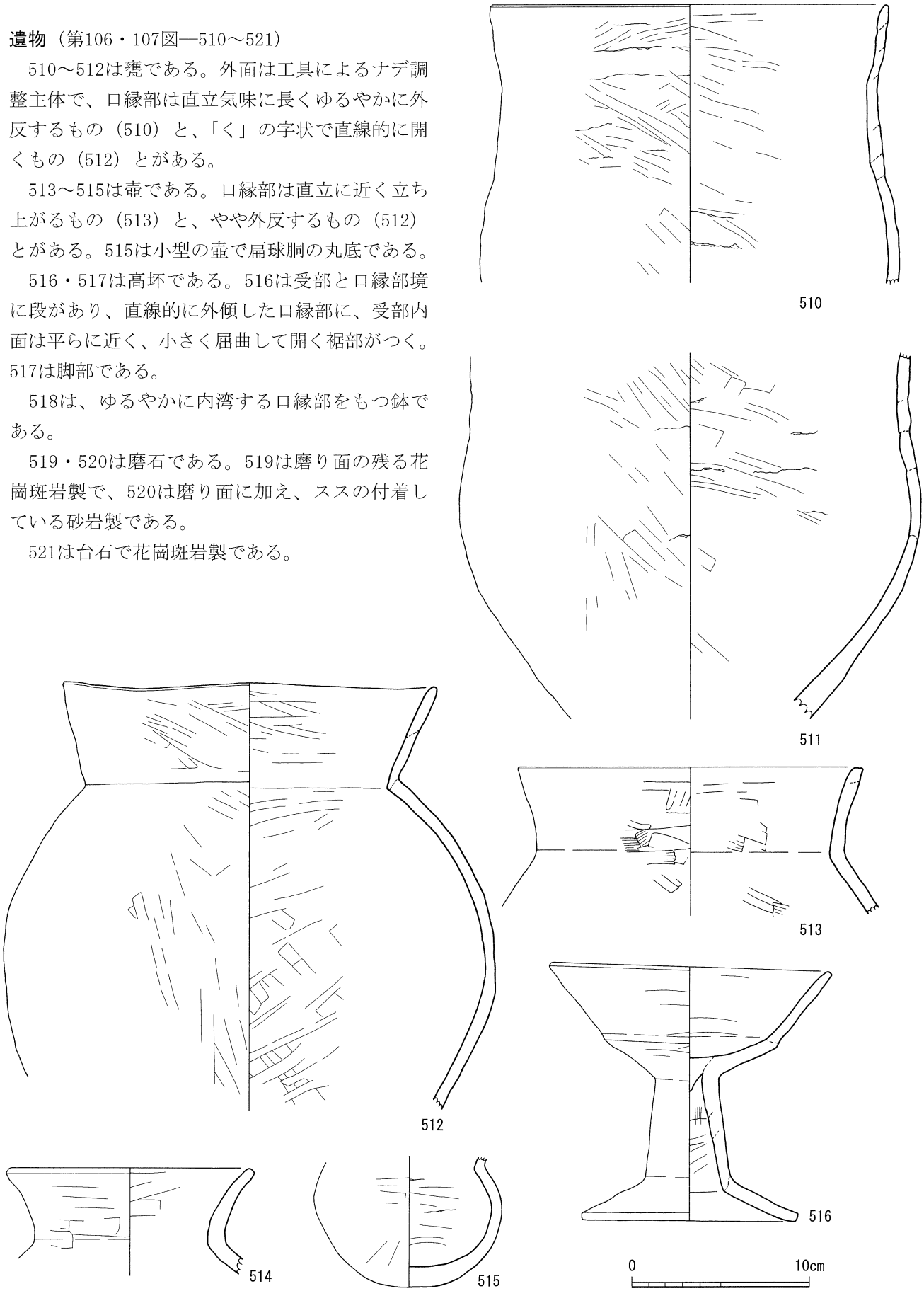
513～515は壺である。口縁部は直立に近く立ち上がるもの（513）と、やや外反するもの（512）とがある。515は小型の壺で扁球胴の丸底である。

516・517は高坏である。516は受部と口縁部境に段があり、直線的に外傾した口縁部に、受部内面は平らに近く、小さく屈曲して開く裾部がつく。517は脚部である。

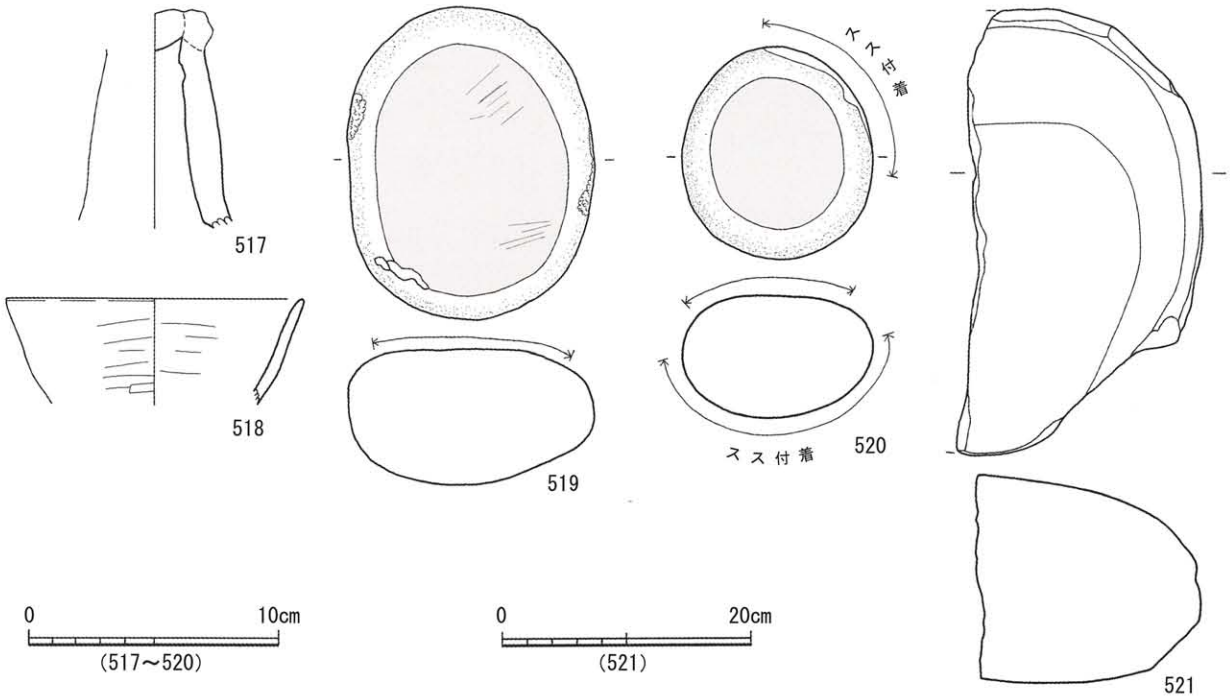
518は、ゆるやかに内湾する口縁部をもつ鉢である。

519・520は磨石である。519は磨り面の残る花崗斑岩製で、520は磨り面に加え、ススの付着している砂岩製である。

521は台石で花崗斑岩製である。



第106図　10号竪穴住居跡（SA10）出土遺物実測図１（S=1/3）



第107図　10号竪穴住居跡（SA10）出土遺物実測図２（S=1/3、1/6）

11号竪穴住居跡（SA11）

遺構（第108図）

調査区Ｄ３グリッドに位置し、長軸6.35ｍ、短軸5.35ｍ、推定床面積33.97㎡の長方形である。検出面からの深さは最深で0.55ｍである。床面は、掘り底をそのまま利用したと考えられる。主柱穴は４本（深さ0.65ｍ～0.70ｍ）で、柱穴の距離は東西2.05ｍ、南北1.65ｍ～1.85ｍの、ほぼ対角線上の配置である。北側部分には1.30ｍ×2.00ｍの張り出しがあり、西側部分に焼土を検出した。

遺物（第109・110図―522～539）

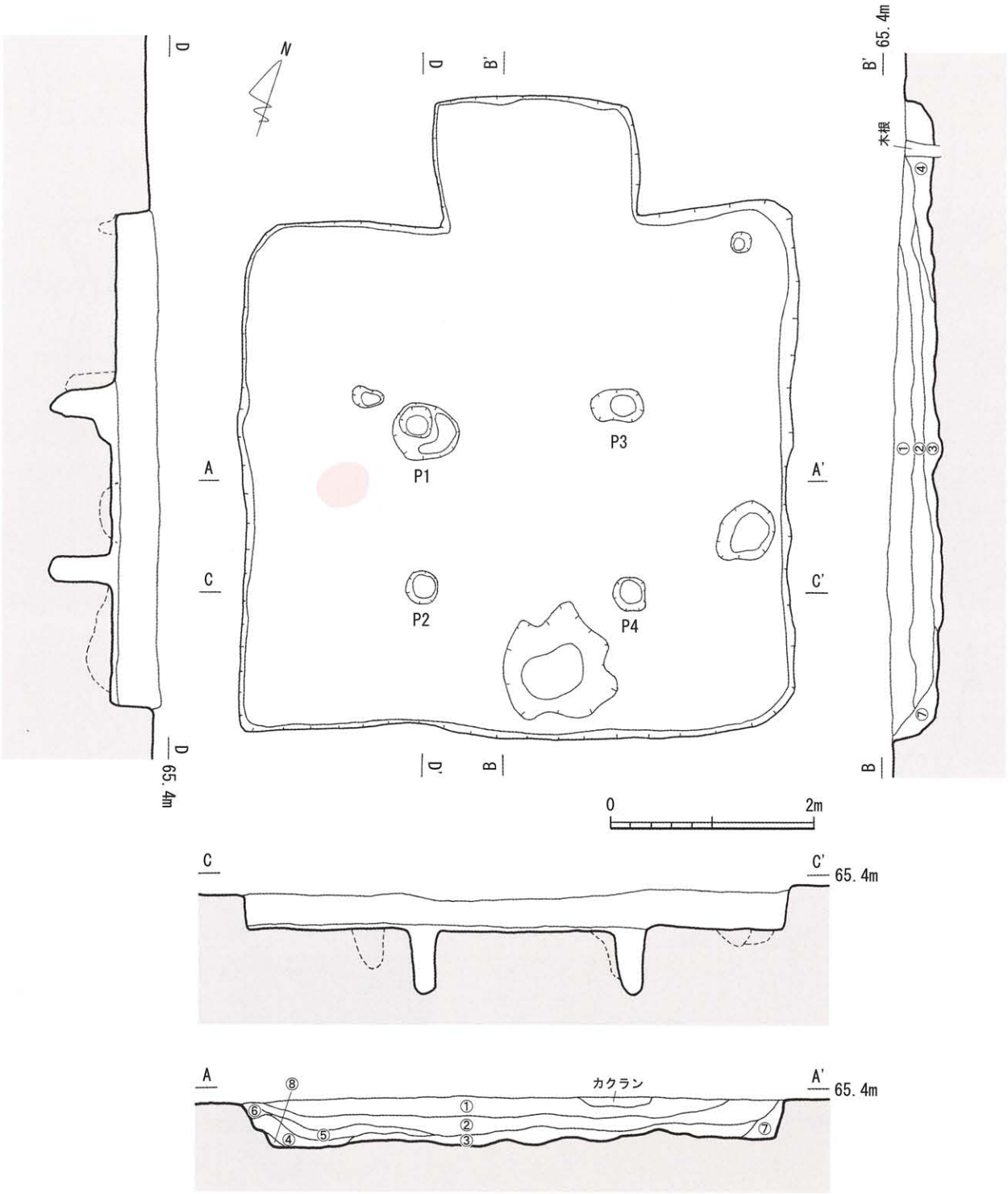
522～529は甕である。522・523はナデ調整主体の大型の甕で、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反している。524・525は中型の甕で、524はナデ調整主体に、口縁部は短く直立気味に外反し、底部は、わずかに平坦面のある尖底に近い平底である。525はハケメ調整主体に、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反し、底部は丸みをもつ尖底である。526は口縁部である。527は底部で、丸みをもつ尖底である。528は底部で、外面にタタキ目を施しており、平底である。529は、ナデ調整主体の小型の甕で、口縁部は短く直立気味に外反し、底部はわずかに平坦面のある尖底に近い平底である。

530・531は壺である。530は外面にタタキ目を施してあり、口縁部は外反し、底部はわずかに平坦面のある尖底に近い平底である。531は外面にミガキを施してあり、口縁部は長く直立している。

532～537は鉢である。532～535は深鉢である。532はハケメ調整主体に、口縁部はゆるやかに内湾し、底部は丸底である。533はナデ調整主体に、口縁部はゆるやかに内湾し、底部は丸底である。また、底部内面中央部は、押圧により凹んでいる。534は平坦面のある尖底に近い平底である。535はレンズ状の平底と考えられる。536・537は浅鉢である。536は外面にタタキ目を施してあり、口縁部はゆるやかに外傾している。537はゆるやかに内湾する口縁部である。

538は手捏土器である。

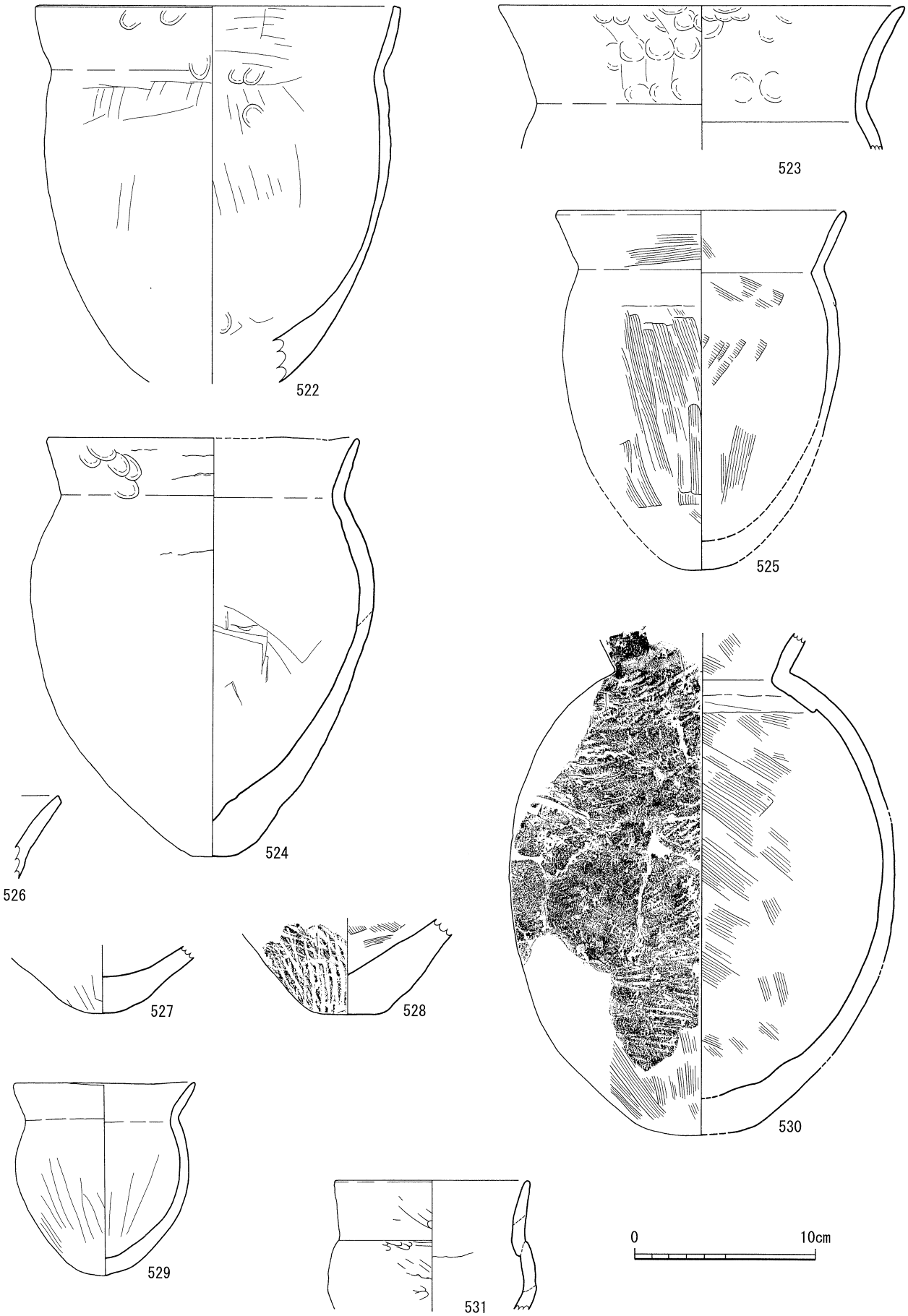
539は敲・磨石で、左側面に磨り面、両端に敲打痕が残る。砂岩製である。



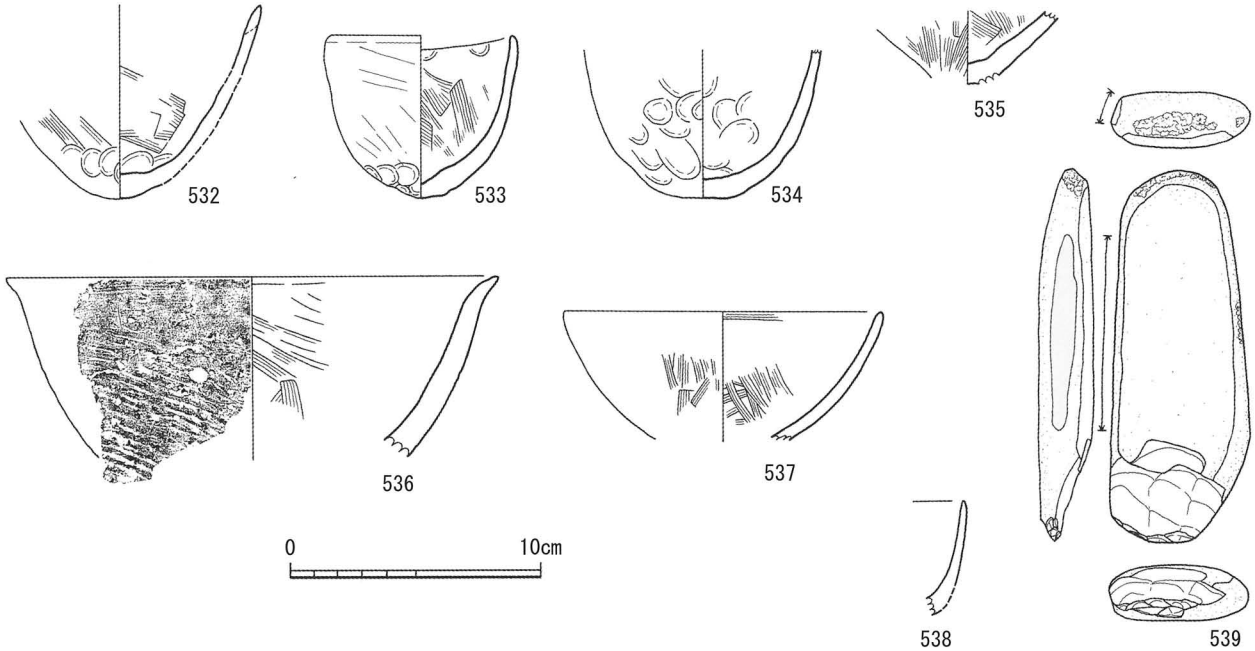
11号竪穴住居跡土層注記（SA11）

①黒色土(10YR2/1)…赤ホヤ粒を微量に含み、やわらかく、しまりがない。
②黒色土(10YR2/1)…①と似ているが、赤ホヤ粒を含む割合が多い。
③暗褐色土(10YR3/3)…径3cm程の赤ホヤブロック・土器片を少量含む。粘性があり、固くしまりがある。
④黒色土(10YR1.7/1)…赤ホヤブロックを多量に含み、固くしまりがある。
⑤黒色土(10YR1.7/1)…①と似ているが、赤ホヤ粒を含む割合が少ない。
⑥黒色土(10YR1.7/1)…①と似ているが、暗褐色ブロックを微量に含む。
⑦黒色土(10YR1.7/1)…径2cm程の赤ホヤブロックを少量含む。
⑧黒色土(10YR1.7/1)…炭化物粒を多量に含む。

第108図　11号竪穴住居跡（SA11）実測図（S=1/60）



第109図　11号竪穴住居跡（SA11）出土遺物実測図１（S=1/3）



第110図　11号竪穴住居跡（SA11）出土遺物実測図２（S=1/3）

12号竪穴住居跡（SA12）

遺構（第111図）

調査区Ｃ２グリッドに位置し、長軸6.60ｍ、短軸6.60ｍ、推定床面積は43.56㎡の方形である。検出面からの深さは最深で0.65ｍである。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は４本（深さ0.65ｍ～0.70ｍ）で、柱穴の距離は東西2.35ｍ～2.30ｍ、南北2.20ｍ～2.40ｍの、ほぼ対角線上の配置である。北側部分には1.80ｍ×2.20ｍの張り出しがあり、中央部の貼り床面では、柱穴間に焼土を検出した。東側部分の貼り床面主柱穴付近には、炭化材を良好な状態で検出し、焼失住居の可能性も考えられる。樹種同定の結果（第Ⅳ章第２節）サカキ、放射性炭素年代分析の補正値は1870±40年BPであった。貼り床面除去後の床面において、それぞれの主柱穴の近くに、同じような柱穴（深さ0.25ｍ～0.72ｍ）を確認した。柱の位置を変えたか、柱の補強を行った可能性が考えられる。

遺物（第112～115図―540～575）

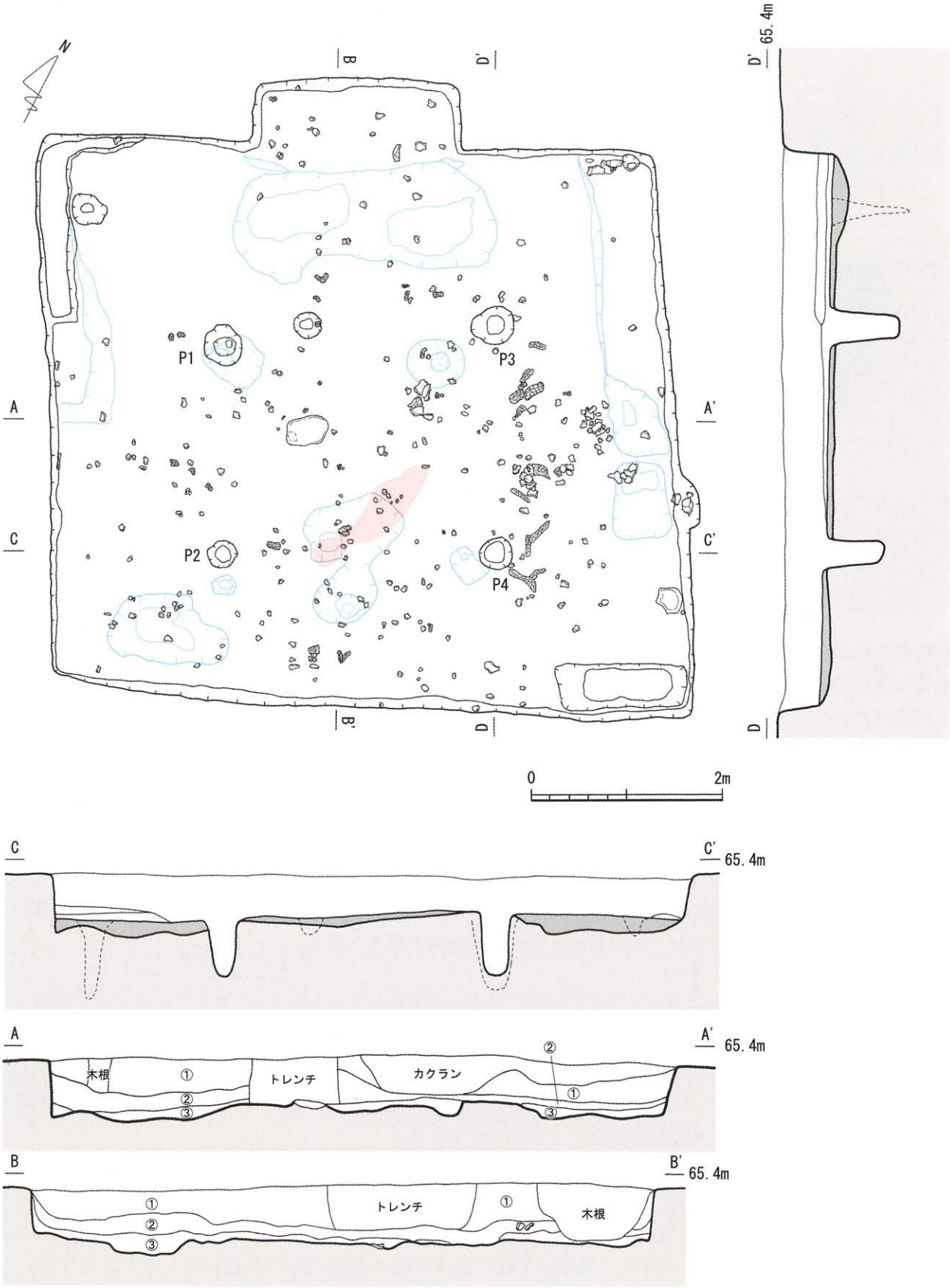
540～549は甕である。540～543は大型の甕で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、丸みをもつ尖底（543）である。544・545は中型の甕で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、丸みをもつ尖底（544）である。546・547は胴部で、外面にタタキ目を施してある。548・549は底部で、548は外面にタタキ目を施してある。両者とも、側面が直線的に立ち上がる平底である。

550は、壺または甕の底部である。

551～561は壺である。口縁部は、直立気味のもの（551・552）、二重口縁のもの（553）、やや外傾するもの（554～557）、大きく外反するもの（558）がある。553は櫛描波状文のある二重口縁壺の口縁部である。554の外面にはタタキ目を施してあり、底部は尖底に近い平底である。555の外面にはミガキを施してある。559・560は底部で、尖底に近い平底である。559の外面には、ミガキを施してある。561は、頸部付近に櫛描波状文がある。

562は壺または鉢の口縁部である。

563は高坏の裾部である。



12号竪穴住居跡土層注記（SA12）

①褐色土(10YR4/1)…やわらかく、しまりがない。

②黒褐色土(7.5YR3/1)…極小の赤ホヤ粒を微量に含む。やや粘性があり、しまりがない。

③暗褐色土(7.5YR3/4)…径1cm以上の赤ホヤブロックを少量含む。非常に固くしまりがあり、住居の貼り床である。

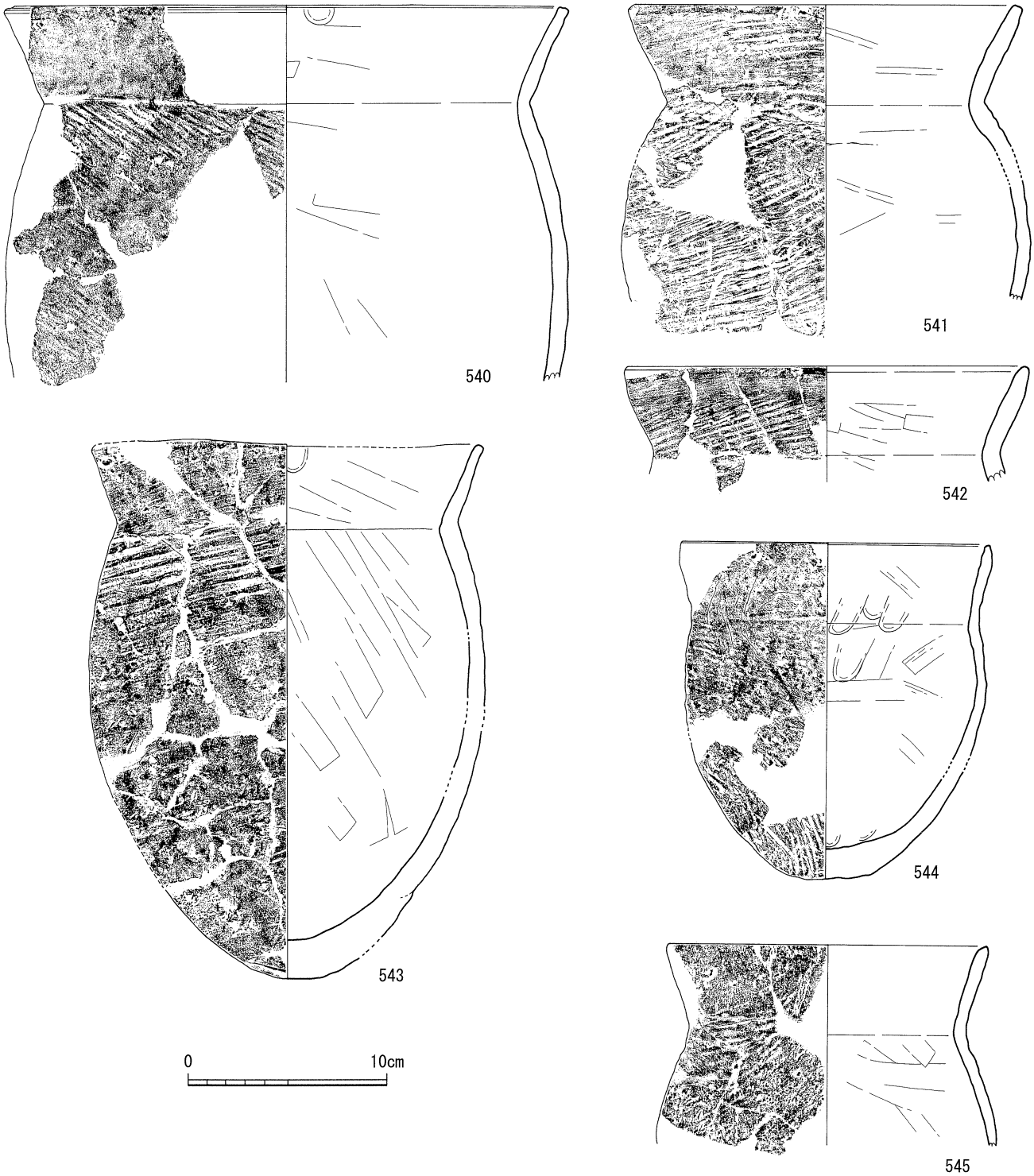
第111図　12号竪穴住居跡（SA12）実測図（S=1/60）

564・565は鉢である。564は浅鉢で、外面にタタキ目を施してあり、口縁部はゆるやかに外傾している。565は浅鉢で、ゆるやかに内湾する口縁部に、底部は平底である。

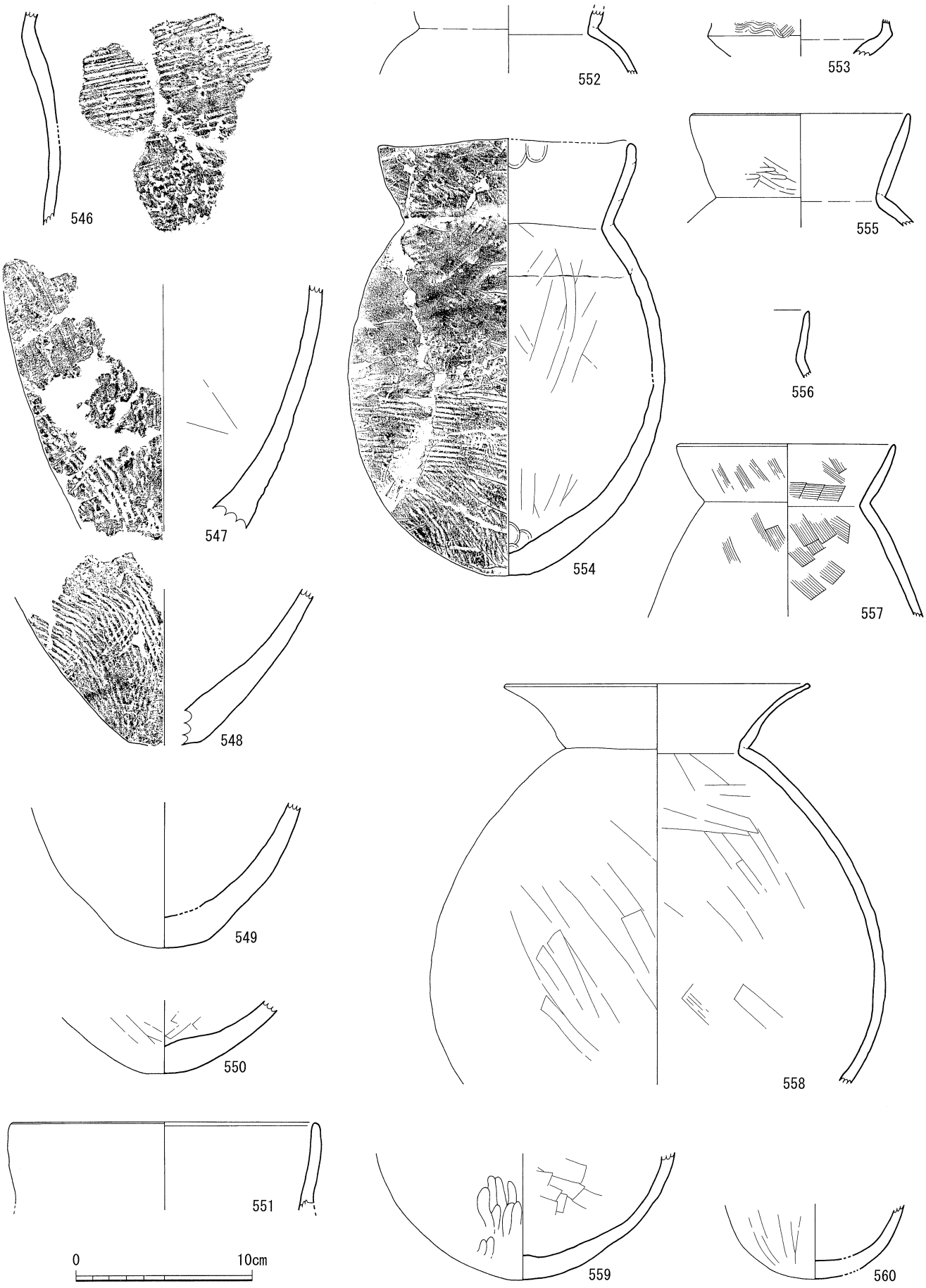
566は不明土器で、口縁部は大きく開いており、底部付近は注口に似た様相である。円形透かしと考えられるものが一か所ある。

567・568は、擦痕の残る砂岩製の砥石である。569は、敲打痕や磨り面の残る砂岩製の敲・磨石である。570～572は花崗斑岩製の台石で、572は中央部がやや凹んでいる。

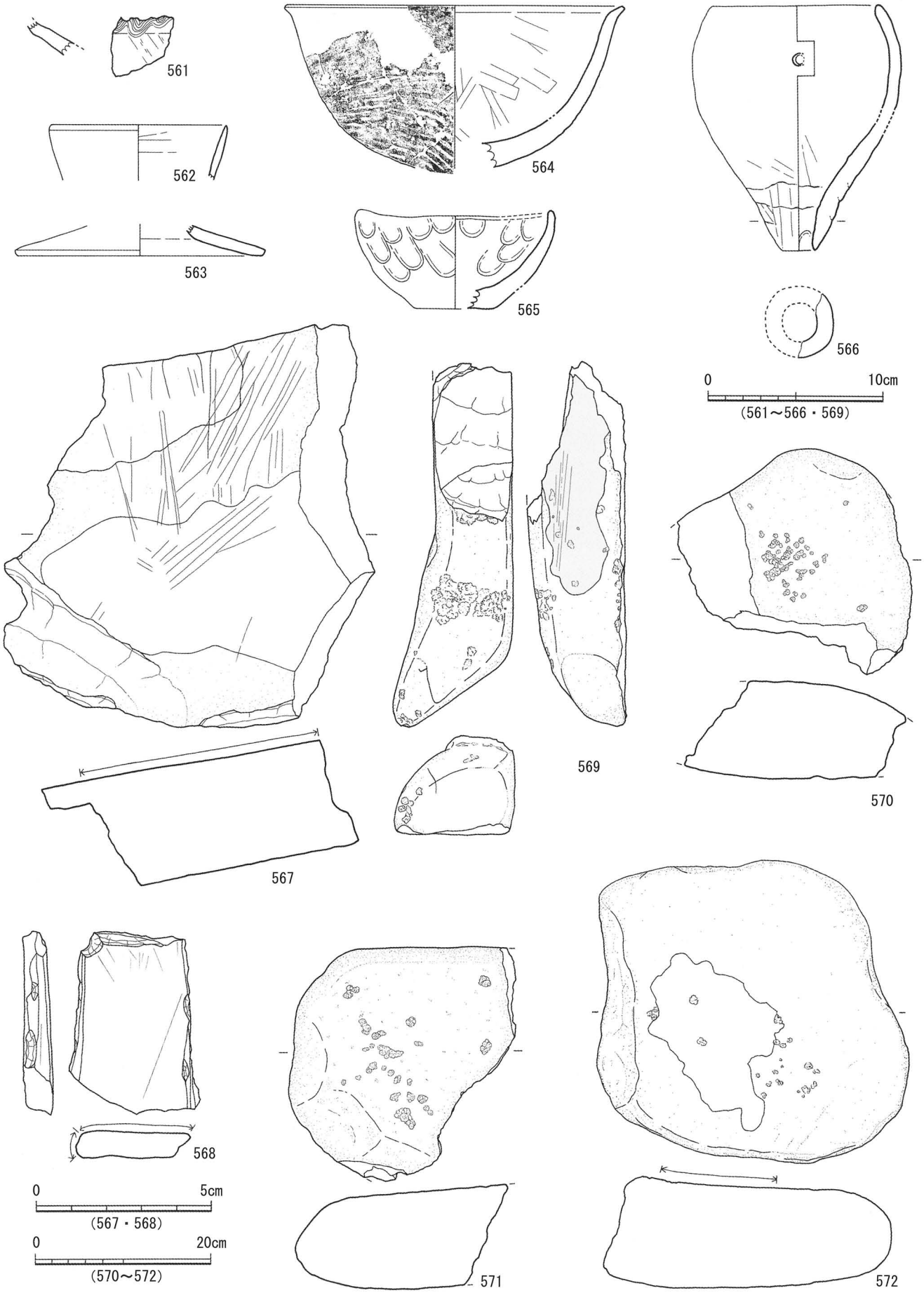
573～575は鉄製品である。573は、残存長4.9cmの腸抉鏃である。刃部に布の付着が認められる。574・575は、鉄鏃の茎部片であるが、詳細は不明である。



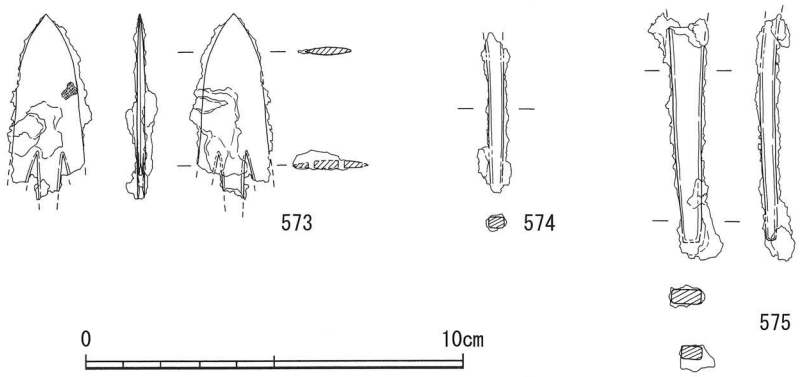
第112図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図1（S=1/3）



第113図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図２（S=1/3）



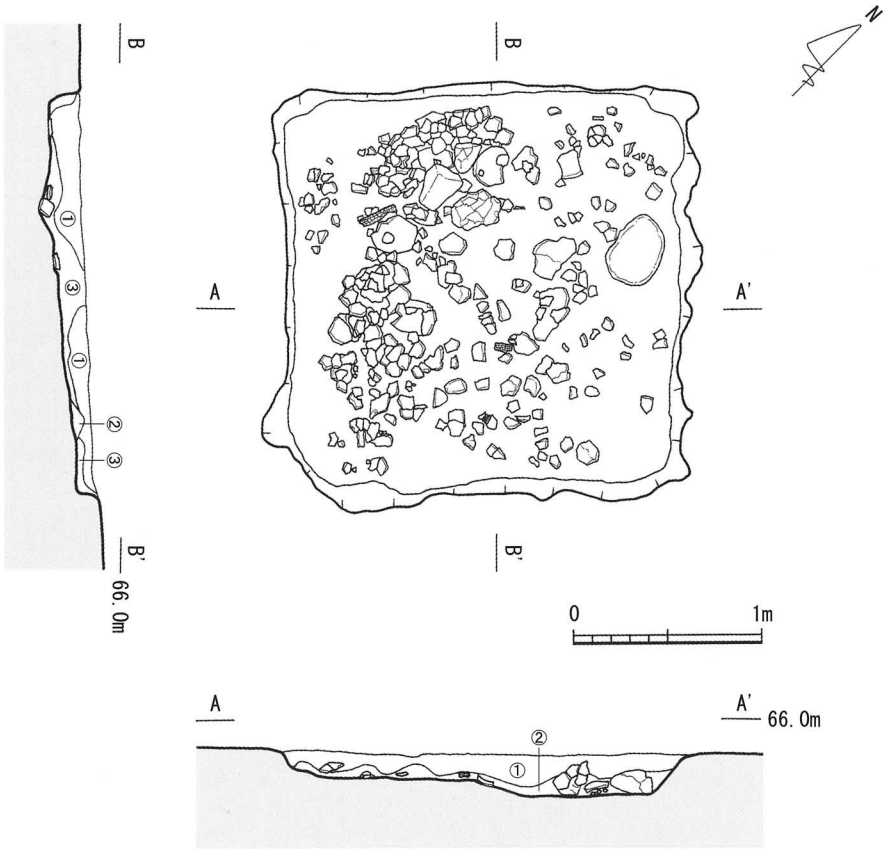
第114図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図３（S=1/3、2/3、1/6）



第115図　12号竪穴住居跡（SA12）出土遺物実測図４（S=1/2）

土坑

４号土坑（SC4）



４号土坑土層注記（SC4）
①黒色土（7.5YR1.7/1）…木根に覆われ、やわらかく、しまりがない。
②黒褐色土（10YR2/2）…粘性があり、固くしまっている。
③黒色土（10YR2/1）…径５～10㎜程の赤ホヤブロックを少量含む。

第116図　４号土坑（SC4）実測図（S=1/40）

遺構（第116図）

調査区Ｈ５グリッドに位置し、長軸2.20ｍ、短軸2.20ｍ、深さは最深で0.20ｍの方形である、床面全体に土器片が折り重なって出土し、完形近くまで復元できる個体も多く見られた。土器一括廃棄の目的をもつものと考えられる。床面の埋土を採取し、フローテーション後に炭化物を検出した。種実同定の結果（第Ⅳ章第３節）ムギ類、放射性炭素年代分析の補正値は257±34年BPであった。これは後世のものが遺構内に混入したものと考えられる。

遺物（第117～120図―576～601）

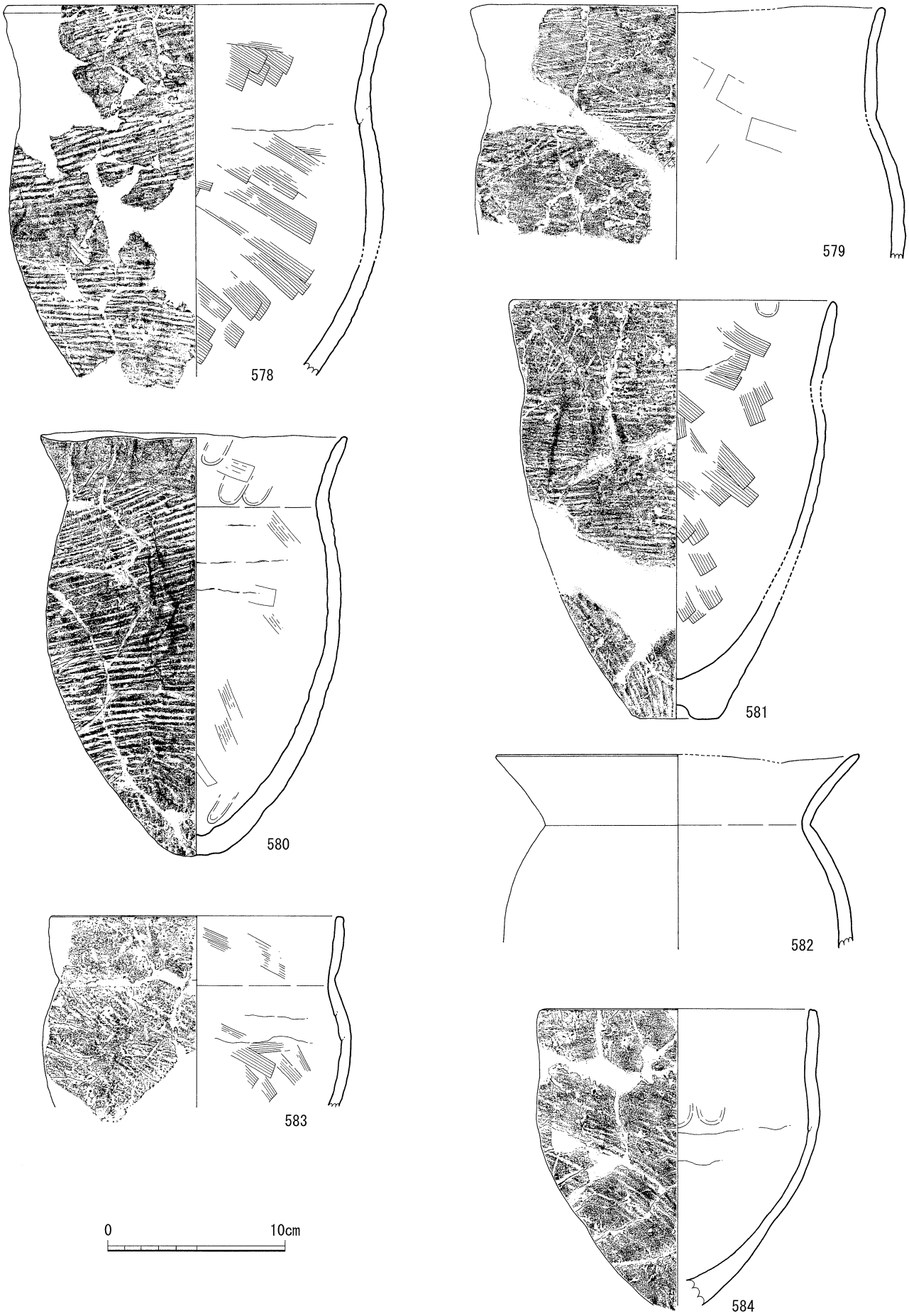
576～589は甕である。576～579は大型の甕で、外面にタタキ目を施してある。口縁部は、「く」の字状であるが、直線的に開いているもの（576・577）、直立気味にゆるやかに外反するもの（578・579）がある。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底（576）である。580～584は中型の甕で、外面にタタキ目を施してあるもの（580・581・583・584）がほとんどである。口縁部は、「く」の字状であるが、直線的に開いているもの（580～582）、直線気味に伸びていくもの（583・584）がある。底部はわずかに平坦面を残す尖底に近い平底のもの（580）と、側面が直線的に立ち上がる平底のもの（581）がある。後者の底部外面中央部は、押圧により凹んでいる。585・586は小型の甕で、外面にタタキ目を施してある。口縁部は、直立気味にゆるやかに外反するもので、底部は、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。587～589は底部で、外面にタタキ目を施してあり、側面が直線的に立ち上がる平底である。

590～592は甕または壺である。590は口縁部で、ゆるやかに外反している。591・592は外面にタタキ目を施してある。

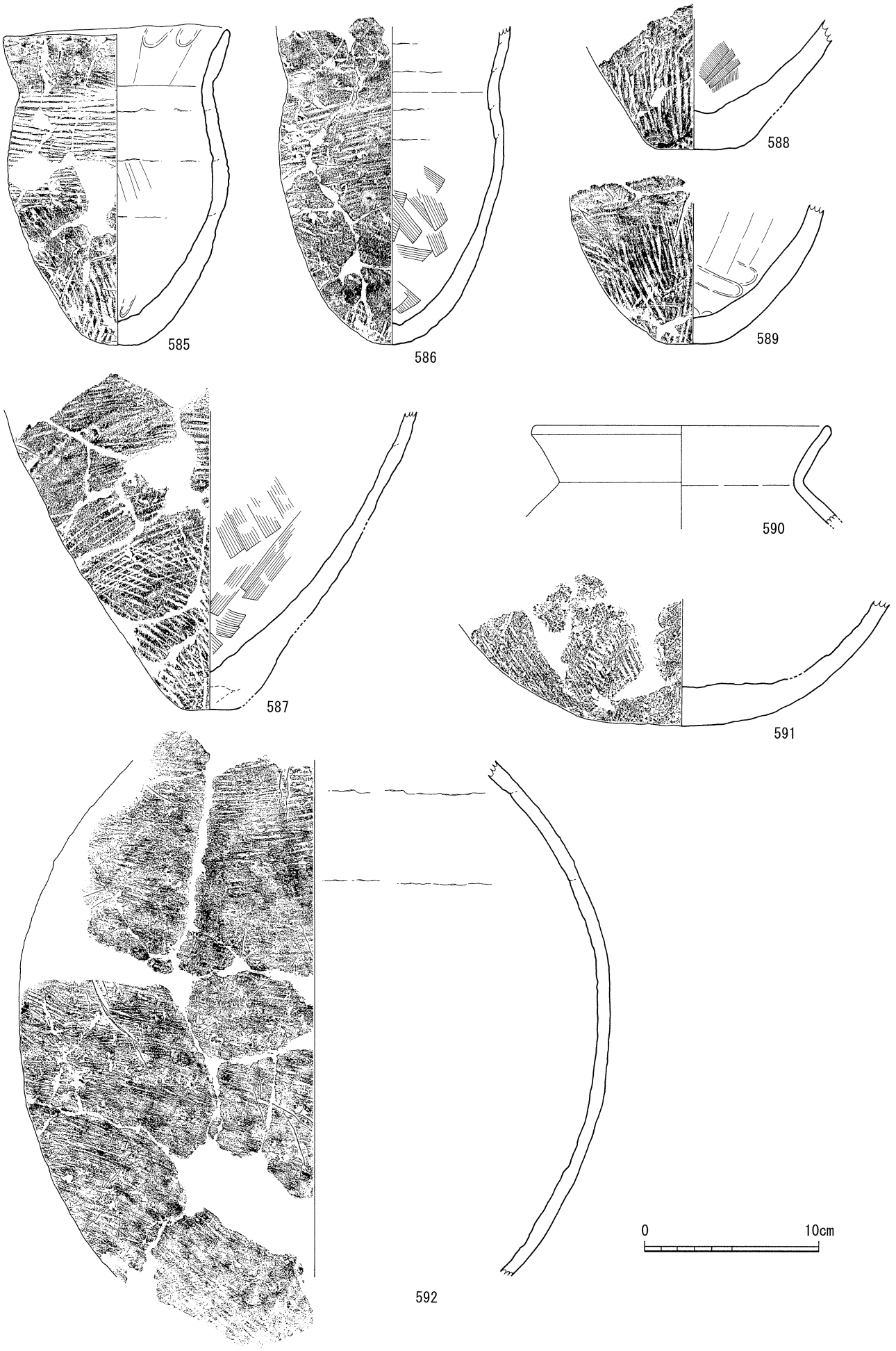
593～598は壺である。口縁部は、やや外傾するもの（593～594）、二重口縁のもの（595）、短く直立気味のもの（596）がある。594は外面にタタキ目を施してある。595・596は小型の壺で、595の外面胴部付近にはミガキを施してあり、596の外面胴部付近にはタタキ目が一部残っている。597・598は外面にタタキ目を施してあり、底部は、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。

599～601は鉢である。599は深鉢で、ゆるやかに内湾する口縁部に、底面が外反しながら立ち上がる平底である。600～601は浅鉢で、口縁部はゆるやかに内湾している。

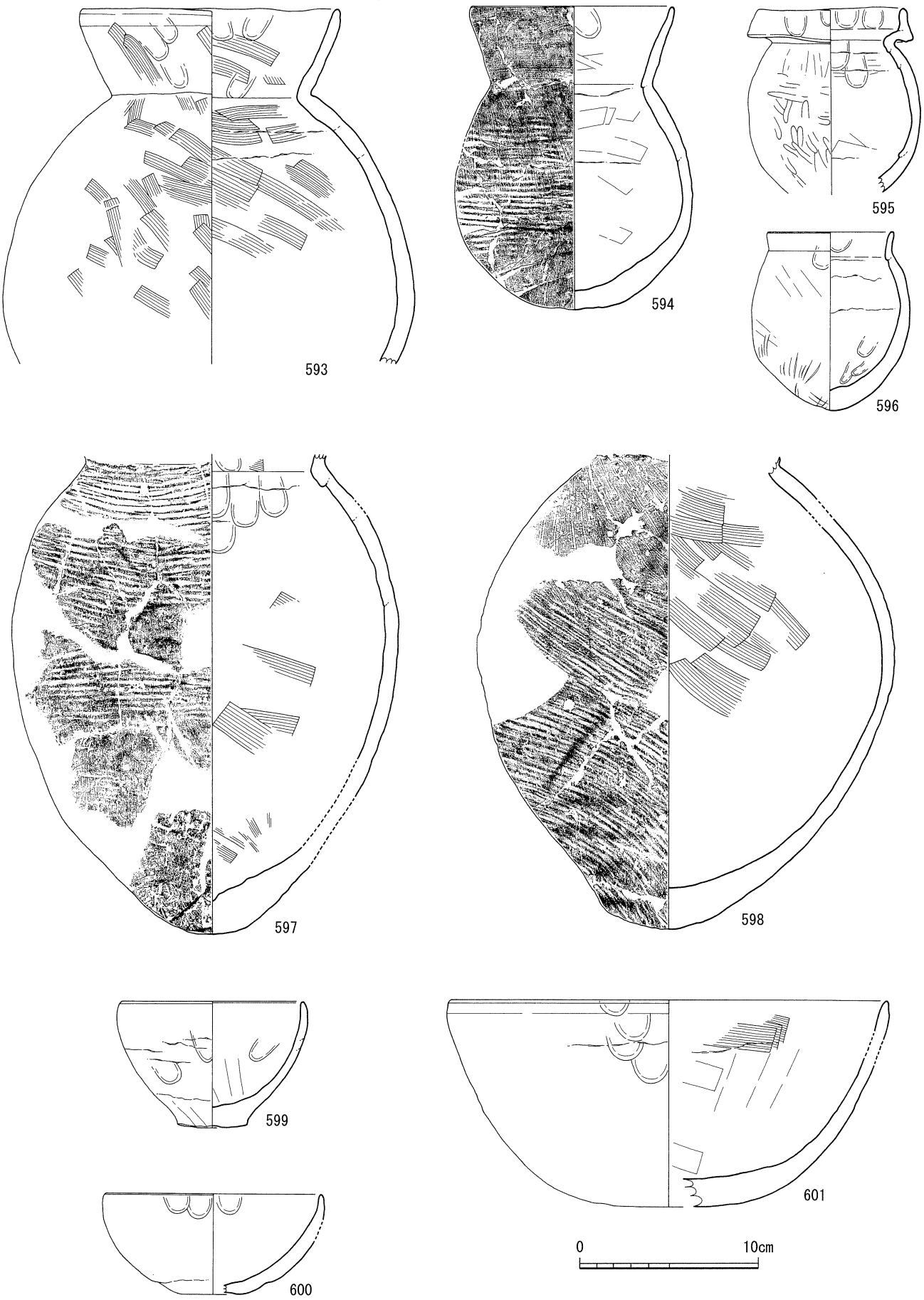
第117図　４号土坑（SC4）出土遺物実測図１（S=1/3）



第118図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図2（S=1/3）



第119図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図3（S=1/3）



第120図　4号土坑（SC4）出土遺物実測図4（S=1/3）

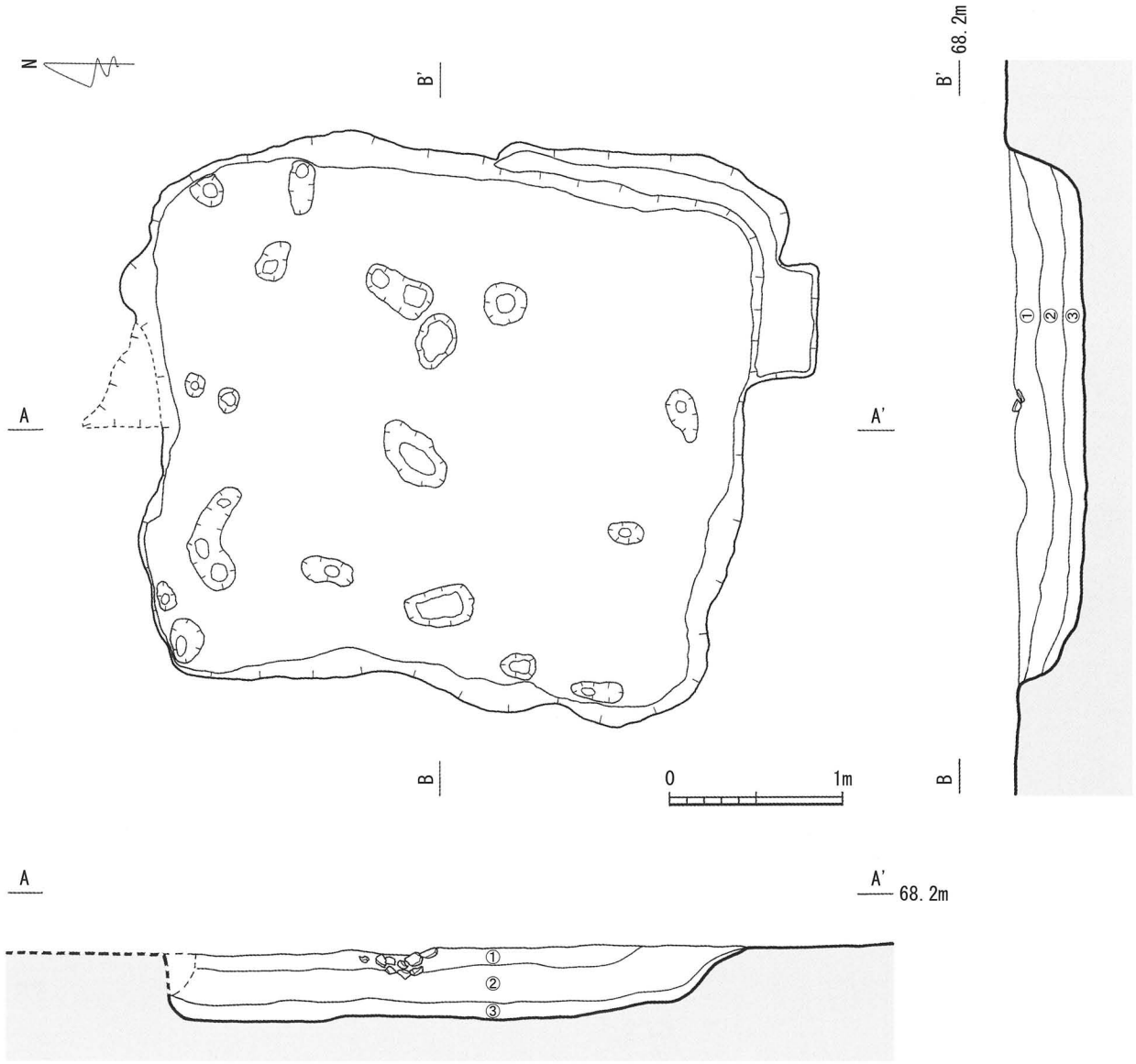
3号土坑（SC3）

遺構（第121図）

調査区M4グリッドに位置し、長軸3.35m、短軸3.10m、深さは最深で0.40mの方形である。赤ホヤ粒の混じる暗褐色の貼り床が施されていた。平面形の規模から考えると住居の可能性もあるが、主柱穴は確認できなかった。

遺物（第122・123図―602～615）

602～610は甕である。602～605は大型の甕で、口縁部は「く」の字状であるが、直線的に開いているもの（602・603）、直立気味にゆるやかに外反するもの（604）、直線気味に伸びていくもの（605）がある。底部は、丸みをもつ尖底（602）で、木葉痕がある。606～610は底部で、わずかに平坦面を残す尖底に近い



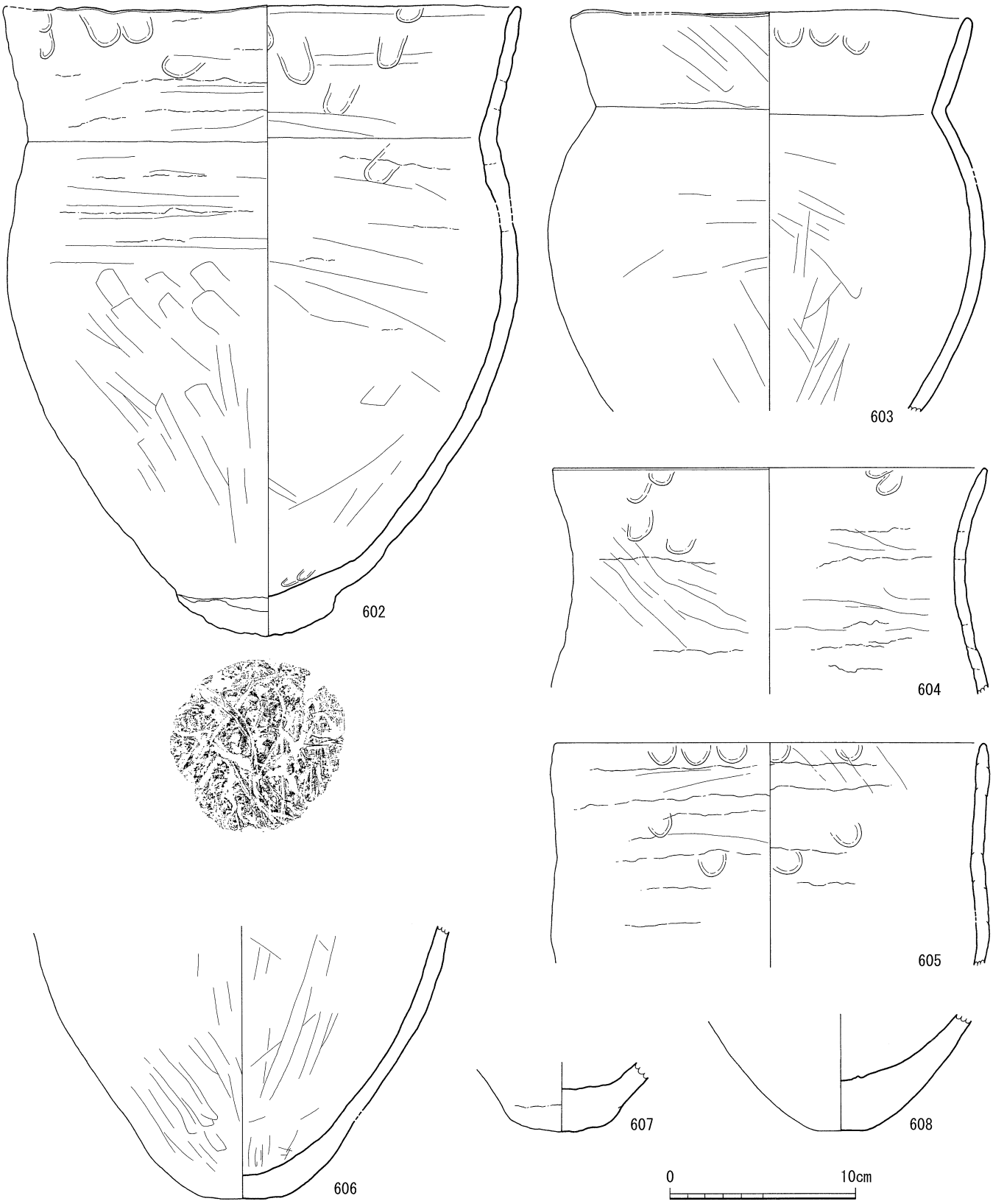
3号土坑土層注記（SC3）
①黒色土(7.5YR1.7/1)…やわらかく、しまりがない。
②黒褐色土(7.5YR3/1)…径1～2mm程の赤ホヤ粒を少量含む。ややしまりがある。
③暗褐色土(7.5YR3/4)…固くしまりがあり、土坑の貼り床である。

第121図　3号土坑（SC3）実測図（S=1/40）

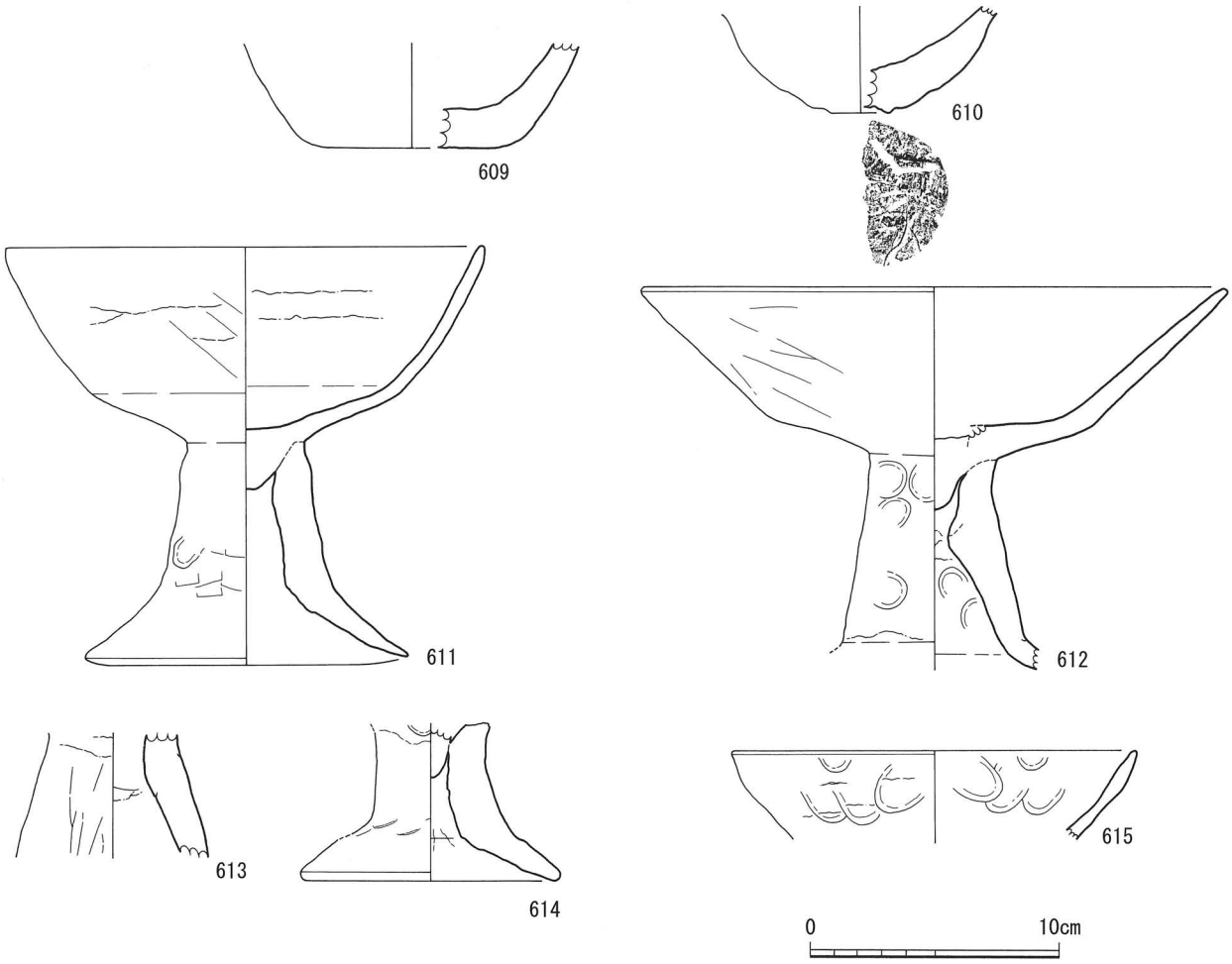
平底のもの（606・607）、平底のもの（608～610）がある。603・606の内外面には、ケズリとった様な調整が見られる。610には布目痕がある。

611～614は高坏である。611・612は口縁部が直線的に外傾し、受部内部は平らに近い。

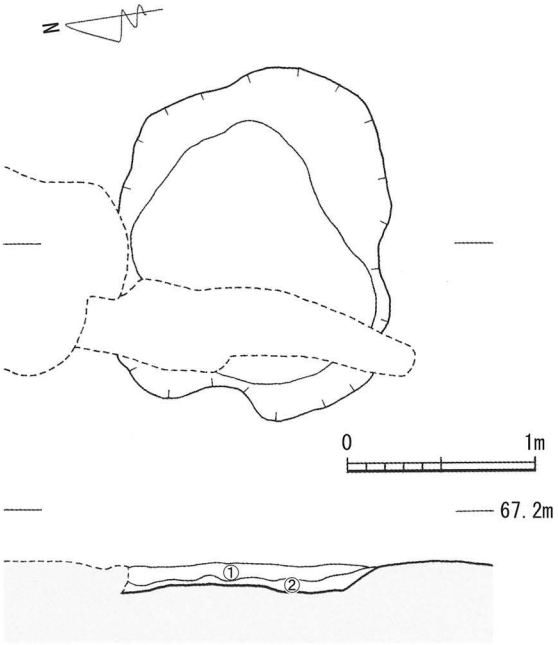
615は鉢で、内外面に指頭痕の残る内湾気味の口縁部である。



第122図　3号土坑（SC3）出土遺物実測図1（S=1/3）



第123図　3号土坑（SC3）出土遺物実測図2（S=1/3）



1号土坑土層注記（SC1）
①黒色土(10YR2/1)…やわらかく、しまりがない。
②黒褐色土(10YR2/2)…径1㎜以下の赤ホヤ粒を少量含む。

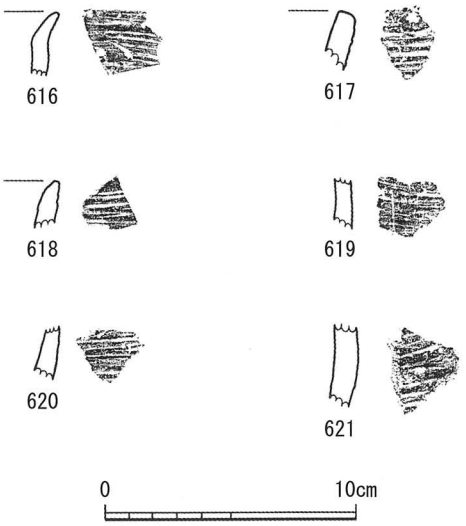
1号土坑（SC1）

遺構（第124図）

調査区H4グリッドに位置し、長軸1.82ｍ、短軸1.40ｍ、深さ0.15ｍの楕円形である。

遺物（第124図―616～621）

616～621は甕である。616～618は口縁部、619～621は胴部で、外面にタタキ目を施してある。



第124図　1号土坑（SC1）実測図（S=1/40）出土遺物実測図（S=1/3）

3　古墳時代後期の遺構と遺物（第125図）

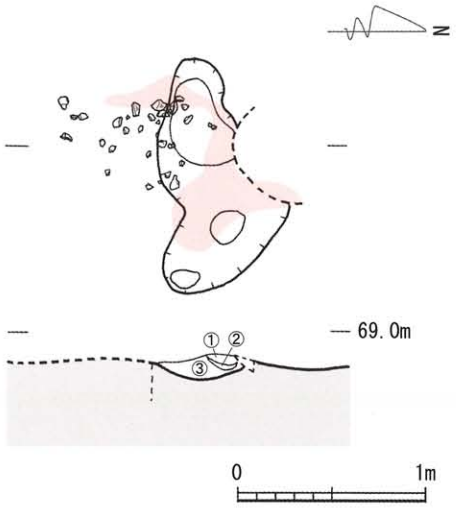
6号竪穴住居跡（SA6）

遺構（第125図）

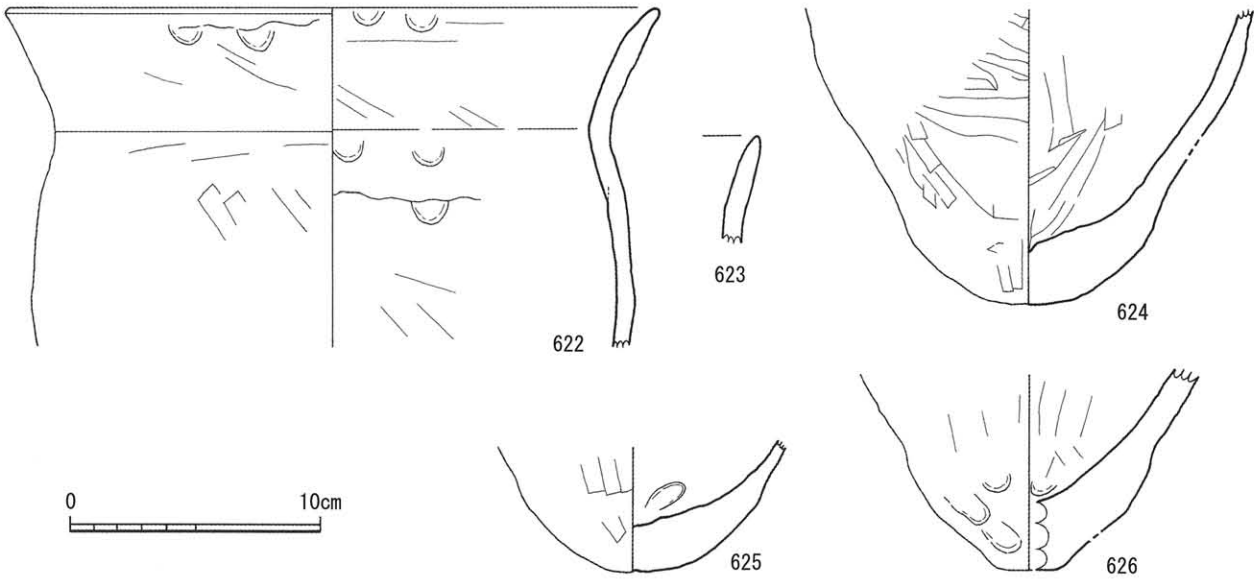
調査区K3グリッドに位置している。遺構は削平を受け、竪穴住居跡の平面形を確認することができず、住居跡内の地床炉のみ検出した。地床炉は0.40ｍ×0.70ｍ程の楕円形で、検出面からの深さは0.17ｍであった。検出面には焼土が広がり、住居床面直上だと考えられる。地床炉周辺には、土器片がまとまって出土した。

遺物（第125図―622～626）

622～626は甕である。622・623は口縁部で、直立気味に立ち上がり、口縁部端がゆるやかに外反している。624～626は底部で、器厚の厚い丸底のもの（624・625）、丸底に近い平底のもの（626）である。



6号竪穴住居跡内炉土層注記（SA6内炉）
①赤褐色土(5YR4/8)…径1㎜以下の炭化物粒を少量含む。
②黒褐色土(10YR2/2)…固くしまりがある。
③黒褐色土(10YR2/2)…②と似ているが、やわらかく、しまりがない。



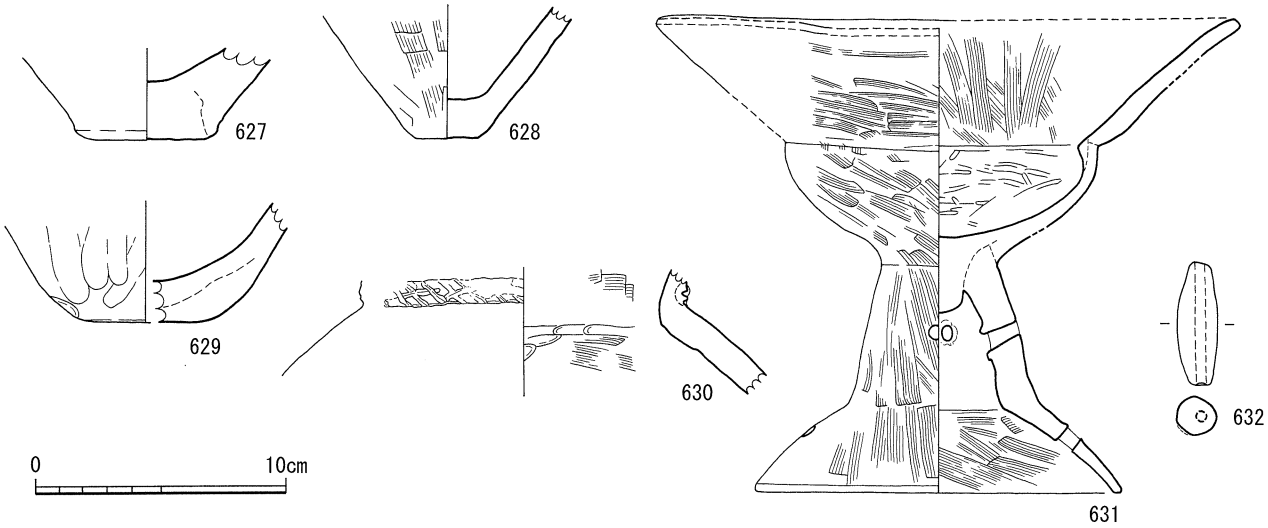
第125図　6号竪穴住居跡（SA6）住居跡内炉実測図（S=1/40）出土遺物実測図（S=1/3）

【参考文献】

松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号

第４節　包含層出土の遺物（第126図）

627・628は甕の底部で、平底である。629は甕または壺の底部である。630は頸部に刻目突帯をもつ壺である。631は高坏である。丸みをもった受部に大きく外反する口縁部を具備し、脚部はお椀をひっくり返したような形状をしている。632は管状土錘である。



第126図　包含層出土遺物実測図（S=1/3）

番号	器種	出土地点	重量(g)	備考
317	鉄鏃	SA5	1.5	２枚の刃部が折れて重なっている
318	鉄鏃	SA5	3.6	柳葉鏃／残存長 4.1cm／鏃身部最大幅約 1.5cm／茎部最大厚 0.3cm
337	鉄鏃	SA7	1.6	茎部片／残存長 3.3cm
378	鉄鏃	SA2	5.1	圭頭鏃／全長 5.5cm／刃部長 1.0cm／鏃身部最大幅 1.8cm／布目・繊維付着
410	鉄鏃	SA9	3.4	柳葉鏃／残存長 3.7cm／鏃身部最大幅 1.8cm／鏃身部最大厚 2.1cm
482	鉄鏃	SA3	6.7	柳葉鏃／残存長 6.8cm
483	鉄鏃	SA3	2.1	茎部片
484	鉈	SA3	5.2	柄部／残存長 4.4cm／細い棒状の鉄（有機質）が付着
485	鉈	SA3	9.6	残存長 5.3cm／裏すきの深さ約 0.1cm
508	鉄鏃	SA4	2.4	無茎鏃／残存長 2.6cm／矢柄の木質痕らしきものあり
509	鉈	SA4	0.1	先端部分／木質付着
573	鉄鏃	SA12	5.3	腸抉鏃／残存長 4.9cm／鏃身部最大厚 0.2cm／茎部最大厚 0.2cm
574	鉄鏃	SA12	2.1	茎部片か？
575	鉄鏃	SA12	6.5	茎部片／残存長 5.7cm

第７表　弥生時代・古墳時代鉄製品計測表

番号	器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
313	石庖丁	SA5	砂岩	5.5	8.5	1.3	60.1	
314	砥石	SA5	砂岩	16.2	7.6	2.1	453.7	
315	砥石	SA5	頁岩	7.5	5.6	1.6	118.0	
316	磨石	SA5	花崗斑岩	7.3	6.6	4.6	301.4	
335	棒状石製品	SA7	頁岩	13.0	3.0	1.1	57.4	
336	敲石	SA7	ホルンフェルス	16.0	5.1	3.2	402.5	
345	棒状石製品	SA8	頁岩	10.3	2.4	1.0	41.5	
346	敲石	SA8	砂岩	12.2	3.2	2.5	135.3	
347	台石	SA8	砂岩	25.6	14.8	11.0	5,100.0	
348	台石	SA8	花崗斑岩	33.9	21.5	10.2	10,800.0	
370	石庖丁	SA2	砂岩	5.2	8.6	2.0	102.8	
371	石庖丁	SA2	頁岩	4.1	7.6	0.4	27.4	
372	石錘	SA2	砂岩	6.3	4.7	1.0	41.3	
373	棒状石製品	SA2	砂岩	15.9	2.3	1.6	88.3	
374	敲・磨石	SA2	砂岩	10.6	9.4	6.3	930.0	
375	敲・磨石	SA2	砂岩	10.3	8.4	5.5	690.7	
376	敲・磨石	SA2	砂岩	11.9	7.2	3.5	472.5	
377	台石	SA2	花崗斑岩	23.0	15.9	8.1	4,100.0	
406	石庖丁	SA9	頁岩	4.4	8.0	0.5	27.8	
407	砥石	SA9	砂岩	11.5	9.5	2.5	391.2	
408	敲・磨石	SA9	砂岩	6.9	5.4	4.3	224.2	
409	台石	SA9	砂岩	28.2	33.4	9.0	12,400.0	
440	石庖丁	SA1	砂岩	4.3	5.8	1.5	46.1	
441	敲石	SA1	千枚岩	20.9	7.6	6.0	1,270.0	
480	石庖丁	SA3	頁岩	8.1	4.6	0.7	40.2	
481	敲・磨石	SA3	花崗斑岩	10.3	10.4	6.6	1,028.7	
505	石庖丁	SA4	砂岩	5.8	7.3	8.5	52.8	
506	敲・磨石	SA4	花崗斑岩	13.7	10.5	7.6	1,645.0	
507	敲・磨石	SA4	砂岩	16.0	7.1	2.6	444.6	
519	磨石	SA10	花崗斑岩	12.6	10.5	5.5	1,060.0	
520	磨石	SA10	砂岩	8.5	7.7	4.9	470.0	スス付着
521	台石	SA10	花崗斑岩	35.8	19.8	16.7	1,550.0	
539	敲・磨石	SA11	砂岩	14.9	5.7	2.2	274.4	
567	砥石	SA12	砂岩	11.4	10.6	4.5	470.5	
568	砥石	SA12	砂岩	5.2	3.7	0.9	21.4	
569	敲・磨石	SA12	砂岩	20.7	7.0	5.7	873.3	
570	台石	SA12	花崗斑岩	25.7	27.0	12.5	9,000.0	
571	台石	SA12	花崗斑岩	26.7	26.2	12.0	10,200.0	
572	台石	SA12	花崗斑岩	34.6	36.0	12.9	22,800.0	

第８表　弥生時代・古墳時代石器計測表

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
300	弥生土器	SA5	甕	口縁部～胴部	17.0			タタキ	工具ナデ	橙色	にぶい橙色	4mm以下の褐灰色・にぶい褐色・乳白色粒を含む。	スス付着
301	弥生土器	SA5	甕	口縁部	推定20.0			タタキ	工具ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の褐灰色・にぶい褐色・灰白色・乳白色粒を含む。	スス付着
302	弥生土器	SA5	壺	口縁部～底部	推定8.7	0.8	10.0	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	黄灰色	6mm以下の茶色・灰色・黒色・乳白色粒を含む。	
303	弥生土器	SA5	壺	口縁部				ナデ	ナデ	橙色	橙色	2mm以下の黒色、7mm以下の茶色粒を含む。	線刻による直線的な文様
304	弥生土器	SA5	壺	口縁部				ナデ	ナデ	明赤褐色	橙色	2mm程の茶色、3mm以下の黒色・乳白色粒を含む。	櫛描文
305	弥生土器	SA5	壺	口縁部				ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の灰白色・黒色、6mm以下の褐灰色・にぶい褐色粒を含む。	櫛描波状文
306	弥生土器	SA5	壺	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	2mm程の黒色・茶色、3mm程の灰褐色粒を含む。	線刻による直線的な文様
307	弥生土器	SA5	鉢	口縁部～底部	推定26.0	推定2.0	推定9.2	工具ナデ、指頭痕	工具ナデ	黄橙色	橙色	2mm程の茶色、3mm以下の褐色、5mm以下の乳白色粒を含む。	一部黒変
308	弥生土器	SA5	鉢	口縁部～底部	25.5	2.2	12.6	ナデ、ミガキ	工具ナデ、ナデ	橙色	橙色	3mm以下の黒色・浅黄橙色、4mm以下のにぶい褐色・褐灰色、5mm以下の灰白色を含む。	一部黒変
309	弥生土器	SA5	鉢	底部		2.0		工具ナデ	ナデ、指頭痕	橙色	橙色	2mm以下の黒色・赤褐色、4mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	ミニチュア
310	弥生土器	SA5	手捏土器	口縁部～底部	6.7	3.3	5.4	工具ナデ、指頭痕	指頭痕	明灰黄色	にぶい黄褐色	2mm程の茶色粒を含む。	一部黒変
311	弥生土器	SA5	手捏土器	口縁部～底部				ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の灰白色、5mm以下の褐灰色・にぶい褐色粒を含む。	
312	弥生土器	SA5	杓子状土器					指頭痕	指頭痕	黄褐色	黄褐色	6mm以下の乳白色・黒色・灰色粒を含む。	
319	弥生土器	SA7	鉢	口縁部～底部	推定13.1	6.9	13.8	ナデ	ナデ	橙色	橙色	3mm以下の茶色・白色・黒色粒を含む。	一部黒変、内外面とも風化ぎみ
320	弥生土器	SA7	鉢	胴部～底部		3.0		工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の黒色・にぶい褐色、5mm以下の褐灰色、6mm以下の灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
321	弥生土器	SA7	鉢	底部		4.2		ナデ	工具ナデ	にぶい橙色	浅黄橙色	3mm以下の明赤褐色、5mm以下の灰白色・にぶい褐色、6mm以下の褐灰色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
322	弥生土器	SA7	鉢	底部		3.6		工具ナデ、ナデ	ナデ	橙色	橙色	微細な金色光沢粒を僅かに含む。4mm以下の黒色・褐灰色・にぶい褐色・乳白色粒を含む。	
323	弥生土器	SA7	鉢	底部		4.0		工具ナデ	ナデ、指頭痕	浅黄橙色	浅黄橙色	微細な透明光沢・黒色光沢粒、5mm以下の褐灰色・にぶい褐色・褐色・黒色・乳白色粒を含む。	外面風化ぎみ
324	弥生土器	SA7	鉢	底部		4.3		工具ナデ、指頭痕	工具ナデ	橙色	黒褐色	4mm以下の黒色・灰色・茶色・乳白色粒を含む。	

第９表　弥生時代・古墳時代土器観察表１

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
325	弥生土器	SA7	鉢	口縁部～底部	推定25.2	6.4	12.8	工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	浅黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下のにぶい橙色・黒色・褐灰色・にぶい赤褐色、7mm以下の灰白色粒を含む。	
326	弥生土器	SA7	鉢	胴部～底部		6.3		ナデ	ナデ	橙色	橙色	4mm以下の褐灰色・にぶい褐色・褐色・赤褐色・赤乳白色・透明光沢・黒色光沢粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
327	弥生土器	SA7	鉢	底部		推定5.0		ナデ、指頭痕	ナデ	橙色	橙色	4mm以下の黒色・灰色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
328	弥生土器	SA7	鉢	口縁部～底部	推定18.1	推定0.4	8.9	工具ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の黒色、4mm以下のにぶい褐色、6mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	外面風化ぎみ
329	土師器	SA7	甕	底部		4.1		工具ナデ、ミガキ	ナデ	橙色	にぶい橙色	1mm程の乳白色粒、5mm以下の灰色・黒色・茶色・乳白色粒を含む。	外面風化ぎみ
330	土師器	SA7	甕	底部		推定2.0		工具ナデ	工具ナデ	黄橙色	黄褐色	4mm以下の白色・黒色・茶色・灰色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
331	土師器	SA7	甕	口縁部～頸部付近				工具ナデ、ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の褐灰色・にぶい褐色・乳白色粒を含む。	スス付着、内外面とも風化ぎみ
332	土師器	SA7	甕	口縁部～頸部付近				ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	2mm以下の褐灰色、3mm以下の黒色・にぶい橙色・灰白色粒を含む。	
333	土師器	SA7	甕	口縁部～胴部付近				ナデ	ナデ	黄橙色	黄褐色	6mm以下の黒色・茶色・灰色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
334	土師器	SA7	壺	胴部～底部		1.4		工具ナデ	工具ナデ	黄褐色	灰黄色	4mm以下の黒色・茶色・褐色粒を含む。	
338	弥生土器	SA8	甕	口縁部				ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	2mm以下の黒色・茶色・乳白色粒を含む。	
339	弥生土器	SA8	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	微細な黒色光沢粒、3mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	
340	弥生土器	SA8	鉢	胴部～底部		推定6.4		工具ナデ	工具ナデ	橙色	明黄褐色	2mm以下の灰色・黒色・淡黄色・乳白色、4mm以下の褐色・灰色粒を含む。	
341	土師器	SA8	甕	口縁部	推定16.2			工具ナデ	工具ナデ	暗赤褐色	赤色	6mm以下の白色・茶色・褐色粒を含む。	
342	土師器	SA8	甕	胴部～底部		推定5.0		工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙色	明赤褐色	4mm以下の淡黄色・灰色・にぶい褐色・乳白色粒を含む。	スス付着
343	土師器	SA8	甕	底部付近				工具ナデ	工具ナデ	赤色	赤色	3mm以下の白色・灰色・黒色粒を含む。	
344	土師器	SA8	壺	口縁部～胴部	19.0			工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	明褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰色・茶色・乳白色粒を少し含む。6mm以下の灰色・茶色粒を僅かに含む。	スス付着
349	弥生土器	SA2	甕	口縁部～底部	13.6	1.8	13.1	ハケメ	ハケメ	明赤褐色	橙色	2mm程の黒色、6mm以下の灰色粒を含む。	一部黒変
350	弥生土器	SA2	甕	胴部～底部		3.7		ハケメ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	橙色	橙色	5mm以下の白色・灰色・茶色・黒色粒を含む。	一部黒変、内外面とも風化ぎみ

第10表　弥生時代・古墳時代土器観察表2

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
351	弥生土器	SA2	甕	胴部～底部		5.4		工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	浅黄橙色	淡黄色	3mm以下の黒色・赤褐色、4mm以下の褐色・褐灰色、7mm以下の灰白色粒を含む。	
352	弥生土器	SA2	甕	底部		推定3.8		ハケメ	ハケメ	赤褐色	赤褐色	2mm以下の白色、4mm程の黒色、8mm程の茶色粒を含む。	
353	弥生土器	SA2	壺	口縁部	推定15.2			ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の赤褐色・黒色、、5mm以下のにぶい橙色、6mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	櫛描波状文
354	弥生土器	SA2	高坏	裾部		推定15.0		ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	黄橙色	黄橙色	2mm以下の茶色・白色・灰色・黒色粒を含む。	穿孔あり
355	弥生土器	SA2	鉢	口縁部～底部	14.8	12.6	15.4	ハケメ	ナデ	黄橙色	黄橙色	2mm以下の黒色、5mm以下の茶色粒を含む。	一部黒変
356	弥生土器	SA2	鉢	口縁部～底部	推定8.3	推定3.0	推定7.6	ハケメ、指頭痕	ナデ	明赤褐色	橙色	1mm程の黒色、2mm程の白色・茶色粒を含む。	
357	弥生土器	SA2	鉢	胴部～底部				ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の灰白色、3mm以下のにぶい橙色・黒色・褐灰色粒を含む。	スス付着
358	弥生土器	SA2	鉢	胴部～底部		12.4		ハケメ、指頭痕	ハケメ、指頭痕	黄橙色	黄橙色	1mm程の白色・黒色、2mm以下の茶色粒を含む。	一部黒変
359	弥生土器	SA2	鉢	頸部～底部		2.1		風化のため調整不明	工具ナデ	橙色	橙色	4mm以下の白色・黒色・茶色・灰色・褐色粒を含む。	外面風化著しい
360	土師器	SA2	甕	口縁部～底部	推定29.0	1.6	35.9	ハケメ、指頭痕、タタキ	指頭痕	黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の茶色・茶褐色粒を多く含む。	スス付着、内外面とも風化著しい
361	土師器	SA2	甕	口縁部～胴部	推定17.7			タタキ、指頭痕	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	5mm以下の黒色・赤褐色・灰褐色、7mm以下の灰白色粒を含む。	スス付着
362	土師器	SA2	甕	口縁部～胴部	推定26.4			ハケメ	ハケメ	黄橙色	黄橙色	2mm以下の黒色、3mm以下の茶褐色粒を含む。	一部黒変、内外面とも風化ぎみ
363	土師器	SA2	甕	口縁部～底部	推定18.4	3.0	27.2	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下の黒色・赤褐色・灰色・灰白色の粒を含む。	スス付着
364	土師器	SA2	甕	頸部～底部		推定3.9		ハケメ	工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	5mm以下の白色・茶色・黒色・灰色粒を含む。	一部黒変
365	土師器	SA2	甕	胴部～底部		推定2.4		ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい褐色	4mm以下の黒色・褐灰色、5mm以下の灰白色、10mm以下の褐色粒を含む。	内面風化ぎみ
366	土師器	SA2	甕	胴部～底部		3.8		工具ナデ、ナデ	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm以下の黒色、4mm以下の褐灰色・灰色・にぶい褐色粒を含む。	スス付着
367	土師器	SA2	高坏	裾部		14.4		ナデ	工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	1mm程の黒色、2mm程の灰色、6mm以下の茶色粒を含む。	
368	土師器	SA2	鉢	胴部～底部		3.0		風化のため調整不明	風化のため調整不明	橙色	橙色	2mm以下の白・黒色、3mm程の茶色粒を含む。	内外面とも風化著しい
369	土師器	SA2	鉢	胴部～底部		2.8		ハケメ	ミガキ	橙色	橙色	3mm以下の黒色・赤褐色、4mm以下のにぶい褐色・褐灰色・灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ

第11表　弥生時代・古墳時代土器観察表3

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
379	弥生土器	SC2	甕	口縁部～胴部	推定19.8			ハケメ	工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm以下のにぶい橙色・灰白色・明褐灰色・褐灰色、2mm以下の黒色光沢粒、橙色粒を含む。	スス付着
380	弥生土器	SC2	甕	胴部～底部		7.1		工具ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の明褐色・赤褐色・橙色、6mm以下のにぶい褐色・にぶい橙色・褐灰色・明褐灰色・黒色粒を含む。	
381	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	推定22.0	推定2.8	28.5	タタキ	ハケメ、ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色	灰黄褐色	5mm以下の黒色、9mm以下の灰色粒を含む。	スス付着
382	土師器	SA9	甕	口縁部～底部付近	推定21.0			タタキ	工具ナデ、ナデ	橙色	にぶい褐色	3mm以下の黒色・灰白色、5mm以下のにぶい赤褐色粒を含む。	スス付着
383	土師器	SA9	甕	口縁部～頸部	推定20.5			タタキ	ハケメ	にぶい褐色	にぶい橙色	1mm以下の白色、2mm以下の褐色、7mm以下の灰白色粒を含む。	スス付着
384	土師器	SA9	甕	口縁部～胴部	推定17.6			タタキ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の褐灰色、5mm以下の黒褐色粒を含む。	内面風化ぎみ
385	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	推定17.4	推定2.5	推定20.5	タタキ	ハケメ、工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の黒色、4mm以下の白色・灰赤色・褐灰色粒を含む。	スス付着
386	土師器	SA9	甕	頸部～胴部				タタキ	ハケメ	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の白色光沢粒、4mm以下の乳白色粒を含む。	一部黒変
387	土師器	SA9	甕	胴部付近～底部		推定2.5		タタキ	ハケメ、指頭痕	橙色	橙色	5mm以下の乳白色、6mm以下の黒色・灰色、7mm以下の赤褐色粒を含む。	
388	土師器	SA9	甕	胴部～底部		推定2.0		タタキ	ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の黒色、5mm以下の赤褐色・乳白色粒を含む。	一部黒変
389	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	推定13.9	4.9	25.4	タタキ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の灰白色、5mm以下の灰褐色・褐灰色・灰色粒を含む。	内面風化ぎみ
390	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	13.7	推定3.5	19.8	タタキ	工具ナデ、ナデ	にぶい橙色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰色、5mm以下の乳白色、8mm以下のにぶい橙色粒を含む。	一部黒変
391	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	推定11.8	推定1.3	12.1	タタキ、ナデ	ハケメ、指頭痕、ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微細な無色透明光沢粒、1.5mm以下の明赤褐色・灰白色・黒色、4mm以下の黒褐色、9mm以下の褐灰色・灰色粒を含む。	スス付着
392	土師器	SA9	甕	口縁部～底部	9.3	0.3	11.6	ハケメ、ナデ、指頭痕	工具ナデ、ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下のにぶい黄色・灰褐色・灰白色・にぶい褐色粒を含む。	一部黒変
393	土師器	SA9	甕	口縁部～胴部	推定13.8			ナデ	工具ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	4mm以下の灰白色、5mm以下の黒褐色粒を含む。	外面風化ぎみ
394	土師器	SA9	壺	口縁部～底部	16.6	8.4	50.7	タタキ	指頭痕、ハケメ、ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の白色・灰色・褐灰色・灰褐色粒を含む。	
395	土師器	SA9	甕or壺	胴部～底部		推定7.3		タタキ	風化のため調整不明	にぶい黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の灰色・灰褐色・褐灰色・灰黄色粒を含む。	内面風化著しい
396	土師器	SA9	壺	口縁部～底部	推定15.1	0.7	18.6	工具ナデ	工具ナデ	橙色	浅黄橙色	2mm以下の黒色光沢粒・赤褐色、5mm以下の灰褐色粒を含む。	スス付着
397	土師器	SA9	壺	口縁部～底部付近	推定12.0			ナデ、工具ナデ	ハケメ、指頭痕	橙色	橙色	1.5mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の黒色、2.5mm以下の橙色、3mm以下の赤褐色・灰白色粒を含む。	一部黒変

第12表　弥生時代・古墳時代土器観察表4

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
398	土師器	SA9	壺	口縁部～頸部	推定7.4			ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	
399	土師器	SA9	壺	胴部～底部		0.4		ハケメ、ミガキ	ナデ	橙色	にぶい橙色	1.5mm以下の黒色光沢粒・赤褐色、7mm以下のにぶい黄橙色・黒褐色・褐灰色・灰白色・浅黄色粒を含む。	
400	土師器	SA9 SA12	壺	頸部～底部		2.0		タタキ、ナデ	指頭痕、ハケメ、工具ナデ	にぶい橙色	橙色	2mm以下の白色、4mm以下の黒色・灰色・褐色粒を含む。	SA9とSA12で遺構間接合
401	土師器	SA9	鉢	口縁部～底部	推定22.4	1.8	9.5	工具ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	浅黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の灰白色・にぶい赤褐色・灰褐色・にぶい黄橙色粒を含む。	一部黒変
402	土師器	SA9	鉢	口縁部～胴部	推定22.2			工具ナデ、ミガキ	工具ナデ、ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	微細な無色透明光沢粒を少し含む。2mm以下の明赤褐色・灰白色・黒色光沢粒、5mm以下の黒色・明褐灰色・赤褐色粒を含む。	
403	土師器	SA9	鉢	口縁部～底部	11.2			タタキ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	淡橙色	にぶい橙色	2mm以下の緑灰色光沢粒、3mm以下の黒褐色、5mm以下の灰色粒を含む。	
404	土師器	SA9	甕or鉢	底部		推定4.8		タタキ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白色、3mm以下の褐灰色粒を含む。	木葉痕
405	土師器	SA9	手捏土器	頸部～胴部				工具ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	橙色	橙色	3mm以下の黒褐色・赤褐色、5mm以下の灰色粒を含む。	
411	土師器	SA1	甕	口縁部～底部	推定33.3	1.9	39.6	ハケメ、タタキ	工具ナデ	明黄褐色	明黄褐色	5mm以下の褐色・白色粒を含む。	一部黒変
412	土師器	SA1	甕	胴部～底部		1.3		工具ナデ、ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下の灰褐色・茶褐色・乳白色粒を多く含む。10mm程の灰褐色粒を少し含む。	一部黒変、ススの付着
413	土師器	SA1	甕	口縁部～底部	26.9	1.6	26.5	ナデ、工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な透明光沢粒を含む。4mm以下の茶褐色・黒褐色・灰褐色粒を多く含む。	一部黒変、ススの付着
414	土師器	SA1	甕	口縁部～底部	推定25.2			ナデ、タタキ	工具ナデ	黄橙色	橙色	3mm以下の黒色・茶色、6mm以下の白色粒を含む。	ススの付着
415	土師器	SA1	甕	頸部～底部		推定1.4		ハケメ、タタキ	ハケメ	黄橙色	黄橙色	5mm以下の白色・茶色・黒色粒を含む。	一部黒変
416	土師器	SA1	甕	口縁部～底部	24.2	1.0	26.6	ナデ、工具ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な透明光沢粒を含む。4mm程の茶褐色・黒色粒を多く含む。	ススの付着
417	土師器	SA1	甕	口縁部～胴部	推定25.4			工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	明褐色	明褐色	2mm程の茶色・黒色、3mm程の白色、4mm程の褐色粒を含む。	ススの付着
418	土師器	SA1	甕	口縁部～胴部付近	推定25.4			ナデ、工具痕ナデ	ナデ、工具ナデ	橙色	橙色	2mm程の黒色、4mm程の茶色、5mm程の白色粒を含む。	
419	土師器	SA1	甕	口縁部～頸部	推定25.4			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	橙色	明橙色	5mm以下の白色・黒色粒を含む。	
420	土師器	SA1	甕	胴部～底部		1.5		工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の黒褐色・灰褐色・乳白色粒を多く含む。6mm以下の茶褐色・灰褐色粒を少し含む。	
421	土師器	SA1	甕	底部		0.9		ハケメ	ハケメ	褐色	褐色	2mm程の黒色、9mm程の白色粒を含む。	

第13表　弥生時代・古墳時代土器観察表5

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
422	土師器	SA1	甕	口縁部～底部	16.7	0.8	16.8	ナデ、工具ナデ	工具ナデ	赤褐色	赤褐色	5mm以下の白色・茶色・黒色粒を多く含む。	一部黒変
423	土師器	SA1	甕	口縁部～胴部	推定16.0			ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	3mm以下の茶褐色・灰褐色・黒褐色粒を多く含む。	スス付着
424	土師器	SA1	甕	口縁部				ナデ	ナデ	橙色	橙色	2mm以下の白色、3mm以下の茶色粒を含む。	
425	土師器	SA1	壺	口縁部～底部	推定10.6	推定1.2	13.7	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	橙色	橙色	6mm以下の茶褐色・灰褐色・乳白色粒を多く含む。	
426	土師器	SA1	小型丸底壺	口縁部～底部付近	推定11.4			ナデ、ハケメ	ハケメ	明赤褐色	にぶい黄橙色	2mm程の黒色、4mm以下の茶色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
427	土師器	SA1	小型丸底壺	口縁部～底部	推定7.7	1.5	8.8	ナデ	ナデ	橙色	橙色	1mm以下の茶褐色・黒色粒を多く含む。	
428	土師器	SA1	高坏	口縁部～脚部	23.1	推定15.0	14.7	ナデ	工具ナデ	橙色	明黄褐色	1mm以下の茶色・黒色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
429	土師器	SA1	高坏	坏部	推定22.1			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	橙色	明黄褐色	2mm以下の茶色・黒色、5mm程の白色粒を含む。	
430	土師器	SA1	高坏	裾部		推定13.6		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	微細な透明光沢粒、2mm以下の茶褐色・灰褐色・黒褐色粒を多く含む。	
431	土師器	SA1	高坏	裾部		推定11.4		ナデ	ナデ	橙色	橙色	1mm以下の乳白色、4mm以下の茶褐色・灰褐色粒を多く含む。	
432	土師器	SA1	高坏	脚部				ナデ	ナデ	橙色	橙色	3mm以下の茶褐色・灰褐色・黒褐色粒を多く含む。9mm以下の灰褐色粒を少し含む。	
433	土師器	SA1	高坏	脚部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微細な透明光沢粒を含む。3mm以下の茶褐色・灰褐色粒を多く含む。5mm以下の乳白色・灰褐色粒を含む。	スス付着
434	土師器	SA1	鉢	口縁部～底部	推定17.0	2.2	12.1	ナデ、工具ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微細な透明光沢粒を含む。3mm以下の茶褐色・灰褐色・黒褐色粒を多く含む。	スス付着
435	土師器	SA1	鉢	口縁部～底部	推定21.5	0.7	15.2	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	明褐色	浅黄橙色	3mm以下の黒色、4mm程の茶色、5mm程の乳白色粒を含む。	
436	土師器	SA1	鉢	口縁部～底部	18.5	1.8	13.3	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な透明光沢粒を含む。5mm以下の茶褐色・灰褐色粒を多く含む。	スス付着
437	土師器	SA1	鉢	口縁部～胴部	推定17.6			工具ナデ、指頭痕	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な透明光沢粒、4mm以下の茶褐色粒を多く含む。	
438	土師器	SA1	鉢	口縁部～胴部	推定16.2			ナデ	ナデ	橙色	橙色	3mm以下の茶色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
439	土師器	SA1	手捏土器	口縁部～底部	5.9	0.5	4.5	ナデ	ナデ	橙色	橙色	5mm以下の灰褐色・茶褐色・黒褐色粒を多く含む。	
442	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定18.8			タタキ	工具ナデ	橙色	橙色	3mm以下の灰白色、4mm以下の黒色、5mm以下のにぶい橙色・にぶい赤褐色粒を含む。	スス付着

第14表　弥生時代・古墳時代土器観察表6

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
443	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定17.8			ナデ、ミガキ	工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	3mm以下のにぶい赤褐色、5mm以下の灰色・褐灰色粒を含む。	スス付着
444	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	推定15.6	推定2.1	28.3	ミガキ、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	にぶい橙色	明赤褐色	8mm以下の褐灰色・赤褐色粒、10mm以下の灰白色粒を含む。	
445	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定18.0			ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	2mm以下の黒色、4mm以下の白色、6mm程の茶色粒を含む。	
446	土師器	SA3	甕	口縁部～頸部	推定23.0			工具ナデ	ナデ	橙色	橙色	2mm以下の灰色・黄橙色、3mm以下の黒色、5mm以下の褐灰色、8mm以下の橙色粒を含む。	スス付着
447	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定23.6			ナデ	工具ナデ、指頭痕	明赤褐色	橙色	3mm以下の灰色・褐灰色、10mm以下のにぶい赤褐色粒を含む。	スス付着
448	土師器	SA3	甕	頸部付近～底部		推定2.0		工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	6mm以下の褐灰色、7mm以下のにぶい褐色粒を含む。	
449	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定24.3			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	赤色	赤色	2mm以下の黒色・茶色、3mm程の灰色、5mm程の乳白色粒を含む。	一部黒変
450	土師器	SA3	甕	口縁部				ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	1mm程の灰色・黒色・乳白色粒を含む。	
451	土師器	SA3	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	赤褐色	1mm以下の黒色、2mm程の灰色、3mm程の茶色粒を含む。	
452	土師器	SA3	甕	口縁部				ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	2mm程の褐色、5mm以下の灰白色粒を含む。	
453	土師器	SA3	甕	口縁部				ナデ	ナデ	黒褐色	明褐色	2mm程の茶色、4mm程の灰白色粒を含む。	
454	土師器	SA3	甕	胴部～底部		3.4		工具ナデ、指頭痕	工具ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の黒色、4mm以下のにぶい橙色、6mm以下の褐灰色、7mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。	スス付着
455	土師器	SA3	甕	底部		推定5.4		ミガキ	ナデ、指頭痕	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の黒色、4mm以下の褐色、6mm程の茶色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
456	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定16.0			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	橙色	浅黄橙色	3mm以下の灰色・茶色・黒色粒を含む。	一部黒変、スス付着、内外面とも風化ぎみ
457	土師器	SA3	甕	口縁部～頸部	推定14.8			ミガキ	工具ナデ、指頭痕	暗赤褐色	赤褐色	2mm程の白色・黒色、6mm程の茶色粒を含む。	外面風化ぎみ
458	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定17.2			ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	赤褐色	赤褐色	5mm程の黒色、6mm程の白色粒を含む。	
459	土師器	SA3	甕or壺	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰白色粒を含む。	
460	土師器	SA3	甕or壺	口縁部				ナデ	ナデ	暗赤色	極明赤褐色	1mm程の灰白色粒を含む。	
461	土師器	SA3	壺	口縁部～胴部	推定15.6			工具ナデ、ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	橙色	3mm以下の黒色、5mm以下の褐灰色、7mm以下のにぶい橙色粒を含む。	

第15表　弥生時代・古墳時代土器観察表7

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
462	土師器	SA3	壺	口縁部～肩部	推定14.4			タタキ、工具ナデ	工具ナデ	橙色	赤色	3mm程の黒色、4mm以下の茶色、5mm程の褐灰色粒を含む。	
463	土師器	SA3	壺	口縁部	推定21.0			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	赤色	赤色	6mm以下の茶色粒を含む。	
464	土師器	SA3	壺	口縁部				ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	1mm程の黒色、3mm程の灰色粒を含む。	
465	土師器	SA3	壺	口縁部				ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の褐灰色粒を含む。	貼付突帯
466	土師器	SA3	壺	胴部～底部付近				工具ナデ	ナデ	明赤褐色	灰黄褐色	2mm以下の黒色、3mm程の茶色、5mm以下の灰白色粒を含む。	内面風化ぎみ
467	土師器	SA3	壺	口縁部付近				ナデ	ナデ	橙色	橙色	3mm以下の黒色・灰白色、4mm以下の褐灰色・にぶい褐色粒を含む。	櫛描波状文
468	土師器	SA3	壺	口縁部	推定17.2			ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	2mm以下の褐灰色粒を含む。	櫛描波状文
469	土師器	SA3	壺	口縁部				ナデ	ナデ	赤色	赤色	2mm程の茶色、5mm以下の灰色粒を含む。	櫛描文
470	土師器	SA3	壺	口縁部付近				ナデ	ナデ	赤色	橙色	2mm程の褐灰色粒を含む。	櫛描文
471	土師器	SA3	壺	口縁部付近				ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の黒色光沢粒、3mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	
472	土師器	SA3	壺	口縁部～胴部	推定12.6			ナデ、工具ナデ	工具ナデ	橙色	橙色	2mm以下の黒色、3mm以下の灰白色、4mm以下のにぶい赤褐色、5mm以下の褐灰色粒を含む。	
473	土師器	SA3	壺	胴部～底部				工具ナデ	工具ナデ	赤褐色	明褐色	2mm程の褐色、4mm程の灰白色粒を含む。	一部黒変
474	土師器	SA3	高坏	裾部		13.8		工具ナデ、ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の灰白色、3mm以下のにぶい褐色・黒色、4mm以下の褐灰色粒を含む。	穿孔あり
475	土師器	SA3	高坏	裾部		推定13.0		ミガキ	工具ナデ	赤色	赤色	2mm以下の黒色・茶色・乳白色粒を含む。	
476	土師器	SA3	鉢	底部		3.0		工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	橙色	3mm以下の茶色・灰色粒を含む。	
477	土師器	SA3	鉢	胴部～底部		推定3.0		ナデ	ナデ、指頭痕	明褐色	明黄褐色	3mm以下の茶色・黒色・灰色粒を含む。	一部黒変
478	土師器	SA3	手捏土器	口縁部～底部	推定4.3	0.8	推定4.2	指頭痕、ナデ	ナデ	橙色	灰黄色	1mm程の茶色、2mm以下の白色・褐色・灰色粒を含む。	
479	土師器	SA3	手捏土器	頸部～底部付近				工具ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下のにぶい褐灰色、4mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	
486	土師器	SA4	甕	口縁部～頸部	推定17.3			工具ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい褐色	にぶい褐色	3mm以下のにぶい褐灰色、5mm以下の褐灰色、8mm以下のにぶい褐色粒を含む。	スス付着

第16表　弥生時代・古墳時代土器観察表8

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
487	土師器	SA4	甕	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	1mm程の茶褐色、8mm以下の乳白色粒を含む。	
488	土師器	SA4	甕	口縁部～頸部				工具ナデ	ナデ	明赤褐色	赤褐色	2mm以下の乳白色・黒色、5mm程の茶色粒を含む。	一部黒変
489	土師器	SA4	甕	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	暗赤色	赤色	3mm以下の乳白色粒を含む。	
490	土師器	SA4	甕	口縁部～頸部				工具ナデ	工具ナデ	暗赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の乳白色粒を含む。	一部黒変
491	土師器	SA4	甕	口縁部				工具ナデ、ミガキ	工具ナデ	極暗赤褐色	赤色	2mm程の乳白色、5mm以下の茶色粒を含む。	口縁端部に盛り上がりあり
492	土師器	SA4	甕	口縁部～胴部	推定23.6			工具ナデ、ミガキ	ナデ、工具ナデ	極暗赤褐色	赤褐色	3mm程の茶色・4mm以下の褐色粒を含む。	
493	土師器	SA4	甕	胴部～底部		推定1.4		工具ナデ	工具ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	8mm以下の黄褐色粒を含む。	
494	土師器	SA4	甕	胴部～底部		0.7		工具ナデ、ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい褐色	2mm以下の黒色、8mm以下の褐灰色・にぶい黄橙色、10mm以下の灰白色粒を含む。	
495	土師器	SA4	甕	胴部～底部		推定1.0		工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	灰褐色	1mm以下の灰白色、2mm以下の褐灰色、9mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。	
496	土師器	SA4	甕	胴部付近～底部		0.7		工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	にぶい赤褐色	にぶい橙色	6mm以下の灰白色、9mm以下のにぶい赤褐色、11mm以下のにぶい褐色粒を含む。	
497	土師器	SA4	壺	口縁部～頸部	推定10.1			ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の黒色、4mm以下の灰白色粒を含む。	
498	土師器	SA4	壺	口縁部～頸部	推定10.4			工具ナデ、ミガキ	工具ナデ	赤色	黄褐色	4mm程の灰色、6mm程の乳白色粒を含む。	
499	土師器	SA4	小型丸底壺	口縁部	推定8.4			ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	微細な透明光沢粒、2mm以下の褐灰色・にぶい褐色粒を含む。	
500	土師器	SA4	小型丸底壺	口縁部	推定8.5			ナデ	ナデ	浅黄橙色	淡黄色	2mm以下のにぶい褐色・褐灰色・黒色・乳白色粒を含む。	
501	土師器	SA4	高坏	坏部	推定16.5			ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な金色、2mm以下の黒色光沢粒、4mm以下のにぶい褐色・灰白色、5mm以下のにぶい橙色粒を含む。	
502	土師器	SA4	高坏	脚部				ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	2mm以下の黒色・褐灰色、4mm以下の灰白色粒を含む。	
503	土師器	SA4	鉢	口縁部～胴部	推定19.2			工具ナデ	工具ナデ	極暗赤褐色	暗赤色	5mm以下の灰褐色粒を含む。	
504	土師器	SA4	手捏土器	口縁部～底部付近	推定5.0			ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい赤褐色	赤褐色	2mm以下の茶色粒を含む。	
510	土師器	SA10	甕	口縁部～胴部	推定22.6			ナデ、工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の無色透明光沢粒・黒色光沢粒・褐色、6.5mm以下の灰白色・褐灰色・浅黄橙色・黒色粒を含む。	スス付着

第17表　弥生時代・古墳時代土器観察表9

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
511	土師器	SA10	甕	頸部付近～底部付近				工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の黒色光沢粒・無色透明光沢粒、10mm以下のにぶい褐色・にぶい黄橙色・褐灰色・橙色・黒色・灰白色粒を含む。	スス付着
512	土師器	SA10	甕	口縁部～胴部	推定21.2			工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の無色透明光沢粒・灰白色、9mm以下の赤褐色・にぶい褐色・褐灰色・橙色・浅黄橙色・黒色粒を含む。	スス付着
513	土師器	SA10	壺	口縁部～胴部	推定19.6			ハケメ、ミガキ	ハケメ、ナデ	明赤褐色	橙色	1mm以下の黒色光沢粒・明赤褐色、6mm以下の浅黄橙色・褐灰色・にぶい黄褐色・灰白色粒を含む。	
514	土師器	SA10	壺	口縁部～頸部	推定14.2			工具ナデ	工具ナデ	橙色	橙色	1mm程の金色、2.5mm以下の黒色光沢粒・にぶい赤褐色・灰白色、7mm以下のにぶい橙色・浅黄橙色粒を含む。	
515	土師器	SA10	壺	頸部～底部		0.5		工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	明褐色	微細な無色透明光沢粒、6mm以下のにぶい橙色・にぶい褐色・褐灰色・灰白色・黒色・にぶい黄橙色粒を含む。	スス付着
516	土師器	SA10	高坏	口縁部～裾部	推定16.1	12.3	推定14.7	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙色	橙色	微細な黒色光沢粒を僅かに含む。3mm以下の暗赤褐色、8mm以下の灰白色・橙色・明赤褐色・にぶい黄橙色粒を含む。	
517	土師器	SA10	高坏	脚部				ナデ	ナデ、工具ナデ	橙色	橙色	微細な無色透明光沢粒、2mm以下の黒色・灰白色、8mm以下のにぶい黄橙色・にぶい黄褐色・褐灰色粒を含む。	
518	土師器	SA10	鉢	口縁部～胴部	推定12.0			工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	橙色	微細な無色透明光沢粒、3mm以下の褐灰色・灰白色・にぶい黄橙色・黒色粒を含む。	
522	土師器	SA11	甕	口縁部～底部	推定20.4			工具ナデ、ナデ、指頭痕	工具ナデ、ナデ、指頭痕	にぶい橙色	橙色	3mm以下の白色光沢粒・黒色・明褐色、6mm以下のにぶい褐色・にぶい黄橙色・暗赤褐色粒を含む。	一部黒変、スス付着
523	土師器	SA11	甕	口縁部～頸部	推定22.5			ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下の茶褐色・灰色粒を含む。	スス付着
524	土師器	SA11	甕	口縁部～底部	推定17.4	3.8		ナデ、指頭痕	工具ナデ、ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	3mm以下の黒色光沢粒・無色透明光沢粒・灰白色、9mm以下のにぶい黄色・灰黄色・にぶい赤褐色粒を含む。	スス付着
525	土師器	SA11	甕	口縁部～底部	推定15.9	0.8	20.0	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を含む。	スス付着
526	土師器	SA11	甕	口縁部				ハケメ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を含む。	スス付着
527	土師器	SA11	甕	底部		1.8		ナデ、工具ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	5mm以下の灰色・茶褐色・黒色・白色粒を含む。	スス付着
528	土師器	SA11	甕	底部		4.0		タタキ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙色	灰色	8mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を含む。	一部黒変
529	土師器	SA11	甕	口縁部～底部	10.1	0.2	10.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	6mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を多く含む。	スス付着
530	土師器	SA11	壺	口縁部付近～底部				タタキ、ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	6mm以下の灰色・茶褐色・白色・黒色粒を多く含む。	スス付着、風化ぎみ
531	土師器	SA11	壺	口縁部～底部付近	推定10.3			ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の黒色光沢粒・にぶい黄橙色、7.5mm以下の灰黄褐色・にぶい褐色・灰白色・褐灰色・灰黄色粒を含む。	外面風化ぎみ
532	土師器	SA11	鉢	口縁部～底部		0.7		ナデ、ハケメ、指頭痕	ナデ、ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4mm以下のにぶい黄褐色・褐灰色・灰白色・橙色・黒色・にぶい黄橙色・暗赤褐色粒を含む。	内面風化ぎみ

第18表　弥生時代・古墳時代土器観察表10

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
533	土師器	SA11	鉢	口縁部～底部	推定 8.3		6.6	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の灰色・茶褐色・白色粒を含む。	一部黒変
534	土師器	SA11	鉢	口縁部付近～底部				ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	橙色	橙色	3mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を含む。	スス付着
535	土師器	SA11	鉢	底部				ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2.5mm以下の灰色・黒色・白色・茶褐色粒を含む。	スス付着
536	土師器	SA11	鉢	口縁部～胴部	推定 19.8			タタキ、工具ナデ	工具ナデ、ハケメ	にぶい黄橙色	橙色	6mm以下のにぶい褐色・灰褐色・黒色・赤褐色・橙色・明褐灰色・にぶい橙色・褐灰色粒を含む。	
537	土師器	SA11	鉢	口縁部～胴部	推定 12.8			ハケメ、ナデ	ハケメ	橙色	橙色	3mm以下の黒色・にぶい黄橙色・褐灰色・灰白色・にぶい赤褐色・浅黄橙色粒を含む。	
538	土師器	SA11	手捏土器	口縁部～底部				ナデ	ハケメ	灰白色	にぶい黄橙色	2mm以下の茶褐色・灰色・黒色粒を含む。	
540	土師器	SA12	甕	口縁部～胴部	推定 27.7			タタキ、ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の褐灰色、4mm以下のにぶい黄褐色、7mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。	スス付着
541	土師器	SA12	甕	口縁部～胴部	推定 19.2			タタキ、指頭痕	工具ナデ	橙色	橙色	3mm以下の灰色、4mm以下の黒色・灰白色・赤褐色、5mm以下のオリーブ黒色粒を含む。	スス付着
542	土師器	SA12	甕	口縁部～頸部	推定 20.2			タタキ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙色	にぶい橙色	微細な透明光沢粒、3mm以下の灰褐色・灰白色・黒褐色粒を含む。	スス付着
543	土師器	SA12	甕	口縁部～底部	推定 19.9	0.9	27.3	タタキ、ナデ、指頭痕	工具ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	微細な透明光沢粒、5mm以下の褐灰色・灰褐色・赤灰色・黄灰色粒を含む。	スス付着
544	土師器	SA12	甕	口縁部～底部	推定 15.6	4.2	17.0	タタキ、ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	7mm以下の黄灰色・黒褐色、8mm以下の褐灰色粒を含む。	スス付着
545	土師器	SA12	甕	口縁部～胴部	推定 16.2			タタキ	ナデ、工具ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	2.5mm以下の黒色、3.5mm以下のにぶい橙色、7.5mm以下の褐灰色・灰褐色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
546	土師器	SA12	甕	頸部～胴部				タタキ	工具ナデ	橙色	橙色	4mm以下の黒色、5mm以下の灰褐色・褐灰色、6mm以下の灰白色・灰色粒を含む。	スス付着
547	土師器	SA12	甕	胴部～底部付近				タタキ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい黄橙色	黄褐色	4mm以下の黒褐色、8mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	スス付着
548	土師器	SA12	甕	胴部～底部				タタキ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の黒色、6mm以下の灰褐色、8mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	
549	土師器	SA12	甕	胴部～底部		推定 0.8		ナデ	ナデ	橙色	橙色	2.5mm以下の灰白色・黒色、3.5mm以下のにぶい赤褐色、6mm以下の褐灰色粒を含む。	一部黒変
550	土師器	SA12	甕or壺	底部		12.0		工具ナデ	工具ナデ	明黄褐色	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色、5mm以下の灰褐色・黒色・灰白色粒を含む。	一部黒変、スス付着
551	土師器	SA12	壺	口縁部～頸部	推定 17.2			ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	微細な透明光沢粒、1.5mm以下の灰白色、2mm以下の茶褐色粒を含む。	
552	土師器	SA12	壺	頸部～胴部				工具ナデ	工具ナデ、ナデ	にぶい橙色	橙色	1mm以下の灰白色、4mm以下の黒褐色、10mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。	

第 19 表　弥生時代・古墳時代土器観察表 11

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
553	土師器	SA12	壺	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄色	2mm以下の灰褐色、3mm以下の黒褐色、5mm以下の黄灰色粒を含む。	櫛描波状文
554	土師器	SA12	壺	口縁部～底部	14.4	1.3	24.9	タタキ、ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	橙色	5mm以下の黒色、7mm以下の褐灰色・にぶい赤褐色、10mm以下の灰褐色粒を含む。	スス付着
555	土師器	SA12	壺	口縁部～頸部	推定12.2			ミガキ、ナデ	ナデ	橙色	橙色	微細な黒色光沢粒、3mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	一部黒変
556	土師器	SA12	壺	口縁部～頸部				工具ナデ	工具ナデ	橙色	橙色	2mm以下の灰白色、3.5mm以下の黒色、4.5mm以下の褐灰色粒を含む。	
557	土師器	SA12	壺	口縁部～胴部	12.3			ハケメ	ハケメ	橙色	橙色	3mm以下の黒色、5mm以下のにぶい褐色、7mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
558	土師器	SA12	壺	口縁部～胴部	推定17.5			ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm以下の黒色光沢粒・黒褐色、5mm以下の灰白色、6mm以下の赤褐色粒を含む。	スス付着
559	土師器	SA12	壺	胴部～底部		0.8		ミガキ、工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	1.5mm以下の灰白色、3.5mm以下の褐灰色粒を含む。	一部黒変
560	土師器	SA12	壺	胴部～底部		推定0.9		工具ナデ、ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	微細な黒色光沢粒、2mm以下の黒色・灰色、4mm以下の褐灰色粒を含む。	一部黒変
561	土師器	SA12	壺	頸部付近				工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙色	灰黄褐色	2mm以下の白灰色、10mm以下の褐灰色粒を含む。	櫛描波状文
562	土師器	SA12	壺or鉢	口縁部～胴部	推定10.0			ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	微細な透明光沢粒、1mm以下の黒色、3mm以下の灰白色粒を含む。	
563	土師器	SA12	高坏	裾部		推定14.4		ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微細な不透明光沢粒を含む。	
564	土師器	SA12	鉢	口縁部～底部付近	推定19.2			タタキ、ナデ	工具ナデ	橙色	橙色	2mm以下の不透明光沢粒、4mm以下の赤褐色、5mm以下の灰白色・黒褐色、9mm以下のにぶい赤褐色粒を含む。	
565	土師器	SA12	鉢	口縁部～底部	推定10.8	推定4.5	5.7	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	3mm以下の黒褐色、5mm以下の灰褐色、6mm以下の灰白色粒を含む。	一部黒変
566	土師器	SA12	不明					工具ナデ	ナデ、指頭痕	橙色	橙色	2mm以下の橙色、4mm以下の褐灰色、6mm以下の黒色・灰色・にぶい褐色粒を含む。	穿孔あり
576	土師器	SC4	甕	口縁部～底部	24.4	4.6	28.9	タタキ、ハケメ	ハケメ、指頭痕	にぶい黄褐色	明赤褐色	3mm以下の白灰色、5mm以下の暗赤色、6mm以下の黒色、8mm以下の灰色粒を含む。	
577	土師器	SC4	甕	口縁部～胴部	推定27.6			タタキ	風化のため調整不明	灰黄色	にぶい黄橙色	4mm以下のにぶい褐色、5mm以下の灰白色、7mm以下の褐灰色・灰褐色粒を含む。	スス付着、内面風化著しい
578	土師器	SC4	甕	口縁部～胴部	推定21.2			タタキ	ハケメ	にぶい黄橙色	橙色	2mm以下の灰白色、4mm以下の黒褐色、5mm以下のにぶい黄橙色、8mm以下の褐灰色粒を含む。	スス付着
579	土師器	SC4	甕	口縁部～胴部	23.3			タタキ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1mm以下の橙色、4mm以下の黒褐色、6mm以下の褐灰色・灰褐色・灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
580	土師器	SC4	甕	口縁部～底部	17.2	3.2	24.1	タタキ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm以下の白色、8mm以下の黒褐色、9mm以下の褐灰色粒を含む。	スス付着

第20表　弥生時代・古墳時代土器観察表12

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
581	土師器	SC4	甕	口縁部～底部	推定18.2	4.3	23.8	タタキ、指頭痕	ハケメ、指頭痕	橙色	浅黄橙色	2mm以下の橙色、4mm以下の褐灰色・黒色、7mm以下の灰白色・黒褐色粒を含む。	一部黒変
582	土師器	SC4	甕	口縁部～胴部	推定20.5			ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	3mm以下の灰色・褐灰色・黒褐色、6mm以下の灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
583	土師器	SC4	甕	口縁部～胴部	推定16.2			タタキ、ナデ	ハケメ	橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の灰白色・にぶい赤褐色・黒色、5mm以下の褐色、8mm以下の灰褐色粒を含む。	スス付着、内外面とも風化ぎみ
584	土師器	SC4	甕	口縁部～底部付近	推定15.1			タタキ、ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下の黒色・灰白色・にぶい褐色、8mm以下の褐灰色粒を含む。	スス付着
585	土師器	SC4	甕	口縁部～底部	12.9	1.4	18.6	タタキ、ナデ	工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	5mm以下の黒色、7mm以下の褐灰色粒を含む。	一部黒変
586	土師器	SC4	甕	頸部～底部		0.6		タタキ	ハケメ	にぶい黄橙色	橙色	4mm以下の黒褐色、5mm以下の灰白色、8mm以下の灰褐色・にぶい橙色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
587	土師器	SC4	甕	胴部～底部		推定3.4		タタキ	ハケメ	浅黄橙色	浅黄色	2mm以下の橙色、5mm以下の黒褐色、6mm以下の灰白色、8mm以下の褐灰色・灰褐色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
588	土師器	SC4	甕	胴部～底部				タタキ	ハケメ	橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の灰白色、5.5mm以下の黒褐色・褐灰色粒を含む。	
589	土師器	SC4	甕	胴部～底部		1.8		タタキ、ハケメ	工具ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	6mm以下の灰白色・褐灰色粒を含む。	一部黒変
590	土師器	SC4	甕or壺	口縁部～頸部	推定16.8			ナデ	ナデ	橙色	橙色	2mm以下の黒褐色、3mm以下の褐灰色・灰褐色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
591	土師器	SC4	甕or壺	底部		2.0		タタキ、ナデ	風化のため調整不明	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm以下の黒褐色、5mm以下の赤褐色・黄灰色、10mm程の灰褐色粒を含む。	内面風化著しい
592	土師器	SC4	甕or壺	頸部付近～底部付近				タタキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の褐灰色、6mm以下のにぶい褐色粒を含む。	スス付着
593	土師器	SC4	壺	口縁部～胴部	14.5			ナデ、ハケメ、指頭痕	ナデ、ハケメ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の黒色、3mm以下の灰白色、7mm以下の褐灰色粒を含む。	
594	土師器	SC4	壺	口縁部～底部	推定11.5	0.5	17.1	タタキ、ナデ、ハケメ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	にぶい橙色	橙色	3mm以下の黄灰色、4mm以下の黒褐色・褐灰色、5mm以下の灰白色粒を含む。	スス付着
595	土師器	SC4	壺	口縁部～底部付近	8.3			ミガキ、ナデ、工具ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の灰白色、4mm以下の黒褐色、5mm以下の褐灰色粒を含む。	スス付着
596	土師器	SC4	壺	口縁部～底部	推定7.2	0.3	推定10.1	工具ナデ、タタキ、ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の黒色光沢粒、5mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	一部黒変
597	土師器	SC4	壺	頸部～底部		0.8		タタキ	ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい橙色	5mm以下の灰白色、6mm以下の黄灰色・黒褐色、8m以下の褐灰色粒を含む。	スス付着
598	土師器	SC4	壺	頸部～底部		0.9		タタキ、ハケメ	ハケメ	橙色	橙色	5.5mm以下の褐灰色・黒色、6mm以下の灰褐色粒を含む。	スス付着
599	土師器	SC4	鉢	口縁部～底部	推定10.2	推定3.9	7.2	ナデ、指頭痕	工具ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色	にぶい橙色	3mm以下の黒色、6mm以下の灰白色粒を含む。	内外面とも風化ぎみ

第21表　弥生時代・古墳時代土器観察表13

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
600	土師器	SC4	鉢	口縁部～底部付近	推定 12.4	推定 3.1		ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	橙色	橙色	2mm以下の灰白色・黒色、2.5mm以下の灰褐色粒を含む。	
601	土師器	SC4	鉢	口縁部～底部付近	推定 24.5			ナデ、指頭痕	ハケメ、ナデ、工具ナデ	橙色	にぶい橙色	2mm以下の黄灰色・黒色、3mm以下の褐灰色・明赤褐色、4mm以下の白灰色粒を含む。	
602	土師器	SC3	甕	口縁部～底部	推定 27.8	8.4	34.4	ナデ、工具ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の赤褐色、6mm以下の褐灰色・灰白色粒を含む。	木葉痕
603	土師器	SC3	甕	口縁部～胴部	21.2			ヘラケズリ?	ヘラケズリ?、指頭痕	明赤褐色	明赤褐色	3mm以下の褐灰色、5mm以下の黒色・にぶい赤褐色、6mm以下の灰白色粒を含む。	
604	土師器	SC3	甕	口縁部～胴部	推定 23.4			ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	灰褐色	灰黄褐色	1mm以下の透明光沢粒、4mm以下の赤褐色、5mm以下の灰褐色粒を含む。	スス付着
605	土師器	SC3	甕	口縁部～胴部	推定 23.2			ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	灰黄褐色	にぶい黄橙色	2mm以下の灰白色・黒色、3mm以下の褐灰色、5mm以下の橙色・灰黄褐色粒を含む。	スス付着、内面風化ぎみ
606	土師器	SC3	甕	胴部～底部		推定 2.2		ヘラケズリ?	ヘラケズリ?	明赤褐色	明赤褐色	3mm以下の黒色・褐灰色、4mm以下の灰白色、5mm以下のにぶい赤褐色・灰黄褐色粒を含む。	
607	土師器	SC3	甕	胴部～底部		推定 1.0		工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄色	1mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒、3mm以下の灰白色・黒褐色、5mm以下のにぶい褐色、6mm以下の褐灰色粒を含む。	
608	土師器	SC3	甕	胴部～底部		2.5		工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	2mm以下の黒色、3mm以下の灰白色、4mm以下のにぶい褐色、5mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。	
609	土師器	SC3	甕	底部		推定 8.0		工具ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	2mm以下の黒色、4mm以下のにぶい褐色、7mm以下の灰白色粒を含む。	
610	土師器	SC3	甕	底部付近		推定 2.5		工具ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3.5mm以下の橙色、9.5mm以下の灰白色粒を含む。	布目痕
611	土師器	SC3	高坏	口縁部～裾部	推定 19.6	推定 13.2		ナデ、工具ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	橙色	橙色	3mm以下の灰白色、5.5mm以下の褐灰色粒を含む。	
612	土師器	SC3	高坏	口縁部～脚部	推定 23.7			ナデ、指頭痕	ナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の黒色光沢粒・にぶい赤褐色、5mm以下の灰白色、10mm以下の不透明光沢粒を含む。	内外面とも風化ぎみ
613	土師器	SC3	高坏	脚部				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	微細な黒色光沢粒、3mm以下の黒褐色、4mm以下の浅黄橙色、7mm以下の褐灰色、8mm以下の灰白色粒を含む。	
614	土師器	SC3	高坏	脚部～裾部		推定 12.2		工具ナデ、指頭痕	ナデ	浅黄橙色	褐灰色	2mm以下の黒色光沢粒、3mm以下のにぶい赤褐色、4mm以下の褐灰色、6mm以下の灰白色粒を含む。	
615	土師器	SC3	鉢	口縁部	推定 16.2			ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい橙色	にぶい橙色	微細な黒色光沢粒を少し含む。3mm以下の灰白色粒を含む。	
616	土師器	SC1	甕？	口縁部～頸部				タタキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の灰白色・褐灰色・赤褐色粒を含む。	
617	土師器	SC1	甕？	口縁部				タタキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の灰白色・にぶい黄橙色粒を含む。	
618	土師器	SC1	甕？	口縁部				タタキ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	1mm以下の黒色、4mm以下の灰黄褐色粒を含む。	

第 22 表　弥生時代・古墳時代土器観察表 14

番号	種別	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
619	土師器	SC1	甕？	胴部				タタキ	ナデ	浅黄色	にぶい橙色	2mm以下の黒色、3mm以下の褐灰色・灰褐色粒を含む。	
620	土師器	SC1	甕？	胴部				タタキ	ナデ	浅黄色	にぶい黄橙色	3mm以下のにぶい橙色、4mm以下の褐灰色粒を含む。	
621	土師器	SC1	甕？	胴部				タタキ	工具ナデ	にぶい黄橙色	灰黄色	3mm以下の褐灰色・黒褐色、5mm以下の灰白色、6mm以下のにぶい橙色粒を含む。	
627	土師器	包含層	甕	底部		推定 5.7		ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の黒色光沢粒・にぶい赤褐色・褐灰色・金色、10mm以下のにぶい黄橙色・浅黄橙色・明赤褐色・にぶい橙色粒を含む。	
628	土師器	包含層	甕	底部		推定 2.5		ハケメ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	5mm以下の橙色・灰色・褐灰色・灰白色・灰褐色・にぶい赤褐色粒を含む。	
629	土師器	包含層	甕or壺	底部		推定 5.0		ナデ、指頭痕	工具ナデ、ナデ	にぶい橙色	灰褐色	2mm以下の黒色光沢粒・赤褐色・暗赤褐色、6mm以下の褐灰色・灰褐色・灰白色、10mm程のにぶい橙色粒を含む。	一部黒変
630	土師器	包含層	壺	頸部				タタキ	ハケメ、ナデ、指頭痕	橙色	にぶい橙色	5mm以下のにぶい褐色・灰白色・褐灰色・黒褐色粒を含む。	貼付突帯
631	土師器	包含層	高坏	口縁部～裾部	23.2	推定 14.7	18.9	ハケメ、ナデ	ナデ、ハケメ、ミガキ	橙色	橙色	4mm以下の灰色・褐色・黒色粒を多く含む。	穿孔あり
				色調	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)						
632	土師器	包含層	管状土錘	にぶい黄橙色	4.9	1.6	11.3						

第 23 表　弥生時代・古墳時代土器観察表 15

第５節 不明遺構（第127図）

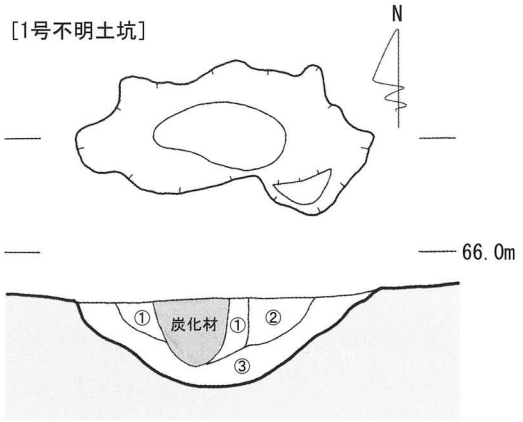
第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面検出遺構のうち、人為的な可能性のある土坑が４基あり、一括して記載する。いずれも焼土を伴う土坑である。

１号不明土坑（SC4 近くの焼土を伴う土坑）

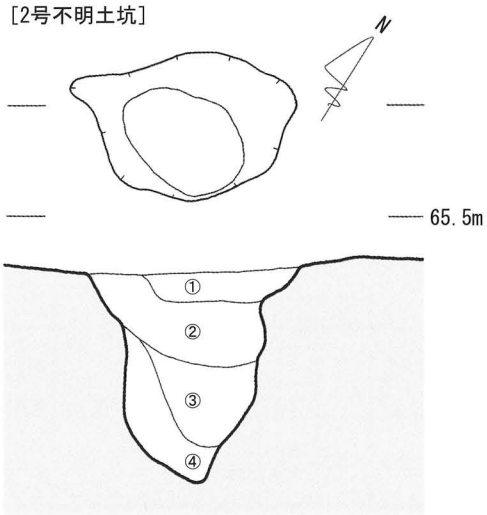
調査区中央部Ｈ５グリッドに位置しており４号土坑（SC4）の北側に隣接している。埋土中に 0.20ｍ×0.20ｍ程の炭化材を検出し、樹種同定の結果（第Ⅳ章第２節）コナラ属アカガシ亜種、放射性炭素年代分析の補正値は920±40年BPであった。遺物は出土していない。

２・３・４号不明土坑

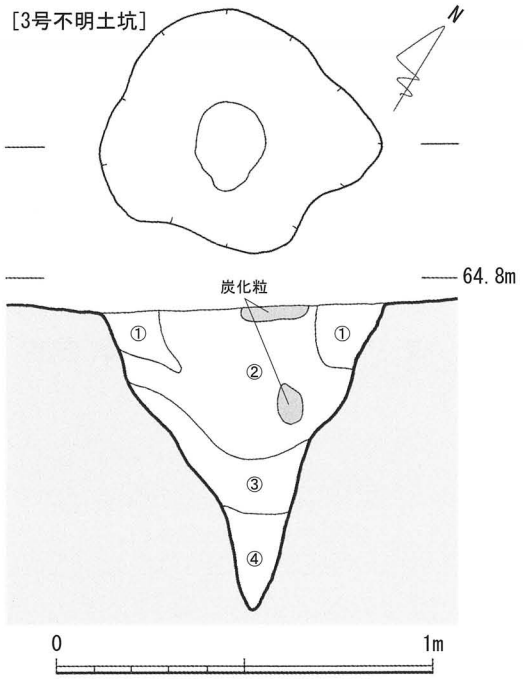
調査区北西部に位置し、いずれも不定形で長径が 0.60 ～ 0.70ｍ程、深さが 0.50 ～ 0.80ｍ程あり、焼土ブロックや炭化粒を多く含んでいる。いずれからも遺物は出土していない。



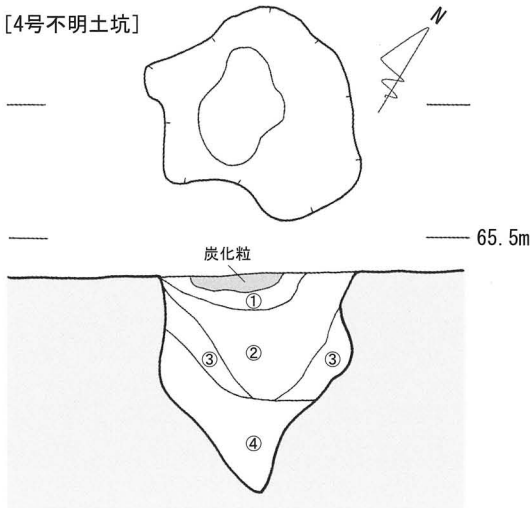
１号不明土坑土層注記
①にぶい黄褐色土(2.5YR4/3)…焼土。／②明赤褐色土(5YR5/6)…①と似ているが、やや粘性がある。／③黒褐色土(10YR3/2)…やわらかくしまりがない。



２号不明土坑土層注記
①暗赤褐色土(5YR3/2)…赤ホヤ粒・炭化物粒を多量に含む。やわらかくしまりがない。／②にぶい赤褐色土(5YR4/4)…焼土ブロックを多量に含む。ややしまりがある。／③赤褐色土(2.5YR4/6)…炭化物粒を少量含む。ややしまりがある。／④赤褐色土(5YR4/8)…炭化物粒を少量含むが、③よりも含む割合は少ない。ややしまりがある。



３号不明土坑土層注記
①黄橙色土(7.5YR7/8)…赤ホヤであるが、薄く赤みがかった色調である。やわらかくしまりがない。／②明赤褐色土(2.5YR5/8)…焼土。炭化物粒を多量に含む。ややしまりがある。／③暗明褐色土(5YR3/6)…焼土。②と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。／④暗赤褐色土(10YR3/3)…焼土粒を多量に含む。③と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。



４号不明土坑土層注記
①暗赤褐色土(5YR3/2)…赤ホヤ粒・炭化物粒を多量に含む。やわらかくしまりがない。／②明赤褐色土(5YR5/8)…焼土。炭化物粒を少量含む。ややしまりがある。／③暗褐色土(7.5YR3/3)…焼土粒を多量に含む。ややしまりがある。／④黒褐色土(7.5YR2/2)…赤ホヤブロックを少量含む。ややしまりがある。

第127図　不明土坑実測図（S=1/20）

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節 黒曜石の原産地同定

旧石器時代の石器石材である黒曜石について、肉眼観察による石材産地推定を、科学的根拠に基づく検証および裏付けを行う機会を得た。この分析は、蛍光Ｘ線分析法による原産地推定を佐賀大学文化教育学部の角縁進氏と熊本大学大学院生（当時）の芝康二郎氏に依頼して行ったものである。

１　試料

試料は黒仁田遺跡から出土した黒曜石石器 39 点である。

２　方法

分析は、佐賀大学文化教育学部に設置されている波長分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて各試料における化学組成（Nb、Zr、Y、Sr、Rb、Fe）の定量分析を非破壊で行った。

３　結果

分析結果および推定産地は以下の表の通りである。不明なものは不明と記している。

注記番号	247	接合資料 315・449	356	232	51	548	603	755	66	接合資料 161・738
Nb	0.188779	0.318907	0.195655	0.309019	0.446631	0.347100	0.376309	0.242702	0.296763	0.277405
Zr	0.166824	0.439017	0.341788	0.509754	0.528037	0.620459	0.607493	0.467718	0.420110	0.370616
Y	0.545041	1.668644	1.193541	1.611031	1.783800	2.052208	2.476759	1.929879	1.373543	1.379592
Sr	0.034098	0.088148	0.073040	0.108514	0.110845	0.131088	0.133335	0.098122	0.091075	0.078228
Rb	0.870788	2.559653	2.124464	3.228638	3.340059	3.961450	4.045318	3.014590	2.816121	2.461354
Fe	0.057243	0.074871	0.066794	0.075634	0.097659	0.100718	0.167651	0.078506	0.115877	0.093790
Rb%	37.1	39.8	40.9	41.4	41.4	41.6	42.3	41.9	42.6	42.6
Sr%	19.6	18.5	19.0	18.8	18.6	18.6	18.8	18.4	18.6	18.3
Zr%	43.3	41.7	40.2	39.9	40.0	39.8	38.8	39.7	38.8	39.1
判定	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留

注記番号	接合資料 108・112	473	546	539	接合資料 310・508	86	54	746	接合資料 302・504	609
Nb	0.234374	0.284917	0.049172	0.171486	0.326552	0.298255	0.467718	0.257637	0.207071	0.103377
Zr	0.330289	0.471540	0.140831	0.381629	0.480293	0.712366	0.757648	0.374201	0.332448	0.134015
Y	1.300706	1.502689	0.404341	1.171442	1.824658	2.310832	2.496580	1.366480	1.215982	0.488390
Sr	0.067137	0.097331	0.021422	0.074333	0.099471	0.142411	0.156561	0.082623	0.063740	0.026888
Rb	2.120102	3.107893	0.685169	2.425005	3.274916	4.847040	5.357769	3.006670	2.533785	1.077687
Fe	0.065953	0.073378	0.056803	0.082154	0.081048	0.134148	0.119423	0.072644	0.066671	0.075001
Rb%	42.0	42.6	37.4	42.1	43.4	43.6	44.3	46.9	46.7	47.7
Sr%	18.0	18.0	15.8	17.4	17.8	17.3	17.5	17.4	15.9	16.1
Zr%	40.0	39.4	46.9	40.5	38.8	39.1	38.2	35.7	37.4	36.2
判定	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留

注記番号	411	63	850	845	610	79	97	653	867	208
Nb	0.246687	0.250671	0.645663	0.795853	0.824771	0.735175	0.476130	0.686090	0.092467	0.180631
Zr	0.169330	0.208671	0.364999	0.525270	0.444323	0.408456	0.261300	0.378463	0.100717	0.145781
Y	0.693456	1.109499	1.962213	2.718596	2.012640	2.122919	1.012496	1.987795	0.283207	0.430565
Sr	0.039641	0.051052	0.080256	0.116921	0.096101	0.085528	0.051010	0.085053	0.021736	0.022594
Rb	1.343715	2.071775	3.327042	5.226422	4.312832	3.973034	2.370376	4.118285	1.198045	1.264566
Fe	0.064190	0.080121	0.091029	0.134089	0.112251	0.113605	0.081507	0.102830	0.055160	0.061721
Rb%	46.1	51.4	50.1	52.2	51.8	52.1	50.9	54.4	56.9	51.4
Sr%	18.4	17.1	16.3	15.8	15.6	15.1	14.8	15.1	13.9	12.4
Zr%	35.5	31.6	33.6	32.0	32.6	32.7	34.3	30.5	29.2	36.2
判定	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳

注記番号	851	625	355	613
Nb	0.242756	0.241559	0.174811	0.084148
Zr	0.194249	0.236928	0.140003	0.141835
Y	0.651391	0.783935	0.411807	0.330959
Sr	0.033030	0.046823	0.024769	0.024275
Rb	2.049481	3.318049	2.234237	2.384570
Fe	0.070034	0.087889	0.066697	0.067981
Rb%	55.7	61.5	65.3	66.6
Sr%	12.1	11.7	9.8	9.2
Zr%	32.2	26.8	25.0	24.2
判定	腰岳	不明	不明	不明

【参考文献】

角縁　進・石坂岳二・川野良信1999「ガラス円板を用いた珪酸塩岩石中の主成分元素および微量元素の蛍光X線分析」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』3-2佐賀大学文化教育学部，p.133-140.

角縁　進・宇都宮恵2003「蛍光X線分析法による黒曜石の産地同定（2）」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』7-2佐賀大学文化教育学部，p.47-58.

第２節　炭化材についての分析

弥生時代・古墳時代の住居跡貼り床面と土坑中から検出された炭化材の樹種同定と放射性炭素年代分析を株式会社古環境研究所に委託し実施した。以下は、株式会社古環境研究所の分析調査報告書を改編して掲載している。

樹種同定

１　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２　試料

試料は、SA5、SA7、SA9、SA12、１号不明土坑から採取された炭化材５点である。

３　方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結果

以下の表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

試料	結果（学名／和名）	
試料１（ＳＡ５）	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
試料２（ＳＡ５）	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
試料３（ＳＡ７）	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
試料４（ＳＡ９）	*Symplocos*	ハイノキ属
試料５（ＳＡ12）	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
試料６（１号不明土坑）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属

以下に同定根拠となった特徴を記す。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科（図版４）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20.0ｍ、径1.5ｍに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科（図版４）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、

放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15.0ｍ、径0.6ｍぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* **ブナ科（図版４）**

横断面：中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30.0ｍ、径1.5ｍ以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. **ツバキ科（図版５）**

横断面：小型の道管が単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8.0～10.0ｍ、径20.0～30.0ｍである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ハイノキ属 *Symplocos* **ハイノキ科（図版５）**

横断面：小型で角張った道管が単独あるいは２～４個不規則に複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～４細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりハイノキ属に同定される。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

５　所見

分析の結果、サカキ２点、ツブラジイ１、コナラ属コナラ節１、コナラ属アカガシ亜属１、ハイノキ属１が同定された。コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイ、サカキは、温帯下部の暖温帯照葉樹林を構成する常緑高木である。コナラ属アカガシ亜属には二次林種も含まれ、ツブラジイも二次林を形成することがある。コナラ属コナラ節には、ナラガシワや二次林種のコナラが含まれる。ハイノキ属は、暖地の山地や林内に成育する広葉樹である。いずれも照葉樹林ないし広葉樹の二次林要素であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

【参考文献】

佐伯浩・原田浩1985「針葉樹材の細胞」木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩1985「広葉樹材の細胞」木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣，p.296.

山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

放射性炭素年代測定

1　はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の14C濃度は現在とは異なっていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により14C年代から暦年代に較正する必要がある。

2　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ＳＡ５	炭化材(ツブラジイ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	ＳＡ５	炭化材(コナラ属コナラ節)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	ＳＡ７	炭化材(サカキ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	ＳＡ９	炭化材(ハイノキ属)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	ＳＡ12	炭化材(サカキ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.6	１号不明土坑	炭化材(コナラ属アカガシ亜属)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

(1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。14Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5,568年を使用した（実際の半減期は5730年）。BPはBefore Physicsの略。

(2) δ（デルタ） 13C測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) 補正14C年代値

δ13C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ13C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の 14Cの詳細な測定値およびサンゴのU-Th年代と14C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 14C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68%確率）と２σ（95%確率）は、補正 14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。

3　測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	14C年代 (年BP)	δ13C (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代(西暦) (1σ:68%確率, 2σ:95%確率)
No.1	223349	1790±40	-26.6	1760±40	交点：cal AD 250 1σ：cal AD 230～340 2σ：cal AD 150～390
No.2	223350	1810±40	-26.5	1790±40	交点：cal AD 240 1σ：cal AD 220～260 2σ：cal AD 130～350
No.3	223351	1910±40	-27.9	1860±40	交点：cal AD 130 1σ：cal AD 100～220 2σ：cal AD 70～240
No.4	223352	1820±40	-26.4	1800±40	交点：cal AD 230 1σ：cal AD 150～250 2σ：cal AD 120～340
No.5	223353	1870±40	-26.7	1840±40	交点：cal AD 150 1σ：cal AD 120～230 2σ：cal AD 80～250
No.6	223354	930±40	-25.8	920±40	交点：cal AD 1060, 1080, 1150 1σ：cal AD 1030～1180 2σ：cal AD 1020～1210

4　所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では1760±40年BP（1σの暦年代でAD230～340年）、No.2の炭化材では1790±40年BP（同AD220～260年）、No.3の炭化材では1860±40年BP（同AD100～220年）、No.4の炭化材では1800±40年BP（同AD150～250年）、No.5の炭化材では 1840±40年BP（同AD120～230年）、No.6の炭化材では 920±40年BP（同AD1030～1180年）の年代値が得られた。このうち、No.6では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

【参考文献】

Stuiver et al. 1998「INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration」Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫1999「放射性炭素法」考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

第３節　炭化種子についての分析

弥生時代・古墳時代の住居跡貼り床面と土坑中の埋土採取後にフローテーション作業を行い、その結果検出した炭化物の種実同定と放射性炭素年代分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した。以下は、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析調査報告書を改編して掲載している。

１　はじめに

分析調査では、集石遺構(SI1)と住居跡(SA)、土坑(SC)より検出された種実遺体の同定を実施し、当時の植物利用や周辺植生に関する資料を作成する。また、種実遺体の放射性炭素年代測定を実施し、年代に関する資料を作成する。

２　試料

試料は、土坑２基、住居跡３軒と、集石遺構１基の覆土より検出された種実73試料(No.1-73)である。種実同定は全試料を対象に、放射性炭素年代測定はNo.6、No.37の２試料を対象に実施する。以下に、各試料の詳細を記す。

・SC4(土坑)24試料(No.1-24)
・SC2(土坑)３試料(No.25-27)
・SA5(住居跡)(No.28-33)、SA5床面に広がる焼土(No.40-45)
・SA7(住居跡)(No.37-39)
・SA9(住居跡)(No.46-50)、SA9内土坑(No.37-36)、炉(No.54,55)、SA9より出土した壺中の埋土(56-72)
・SI1(集石遺構)(No.73)

３　方法

(1) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

(2) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC１により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC１によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(２時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1.0mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差とし

て標準偏差(One Sigma)を用いる。

4　結果

(1) 種実同定

分析の結果、炭化が認められた種実について、木本２、草本の栽培植物３、その他の草本３の合計８分類群が同定された。検出された種実は、コナラ属－シイ属(SA5焼土)、シイ属?(SC4)と、栽培植物のヒエ－キビ(SA12)、ムギ類(SC4(No.6;年代測定対象))、マメ類(SA7(No.37;年代測定対象))である。その他(エノキグサ、タデ属など)は、元々黒く硬い果皮や種皮をもつため、炭化の有無の厳密な判別は困難である。分類群及び個数を以下の表に示す。

試料No.	遺構	分類群	部位	状態と個数	備考
No.2	SC4	シイ属?	果実	破片1	
No.6	SC4	ムギ類	胚乳	破片1	年代測定対象
No.8	SC4	タデ属?	果実	完形3破片2	
		エノキグサ	種子	完形3	
No.37	SA7	マメ類	種子	半分2	接合し1個体、年代測定対象
No.40	SA5	コナラ属―シイ属	子葉	破片1	
No.41	SA5	エノキグサ	種子	完形1	
No.46	SA9	タデ属?	果実	完形1破片1	
No.48	SA9	タデ属	果実	完形2	
No.52	SA12	ヒエ―キビ	胚乳	完形1	
No.55	SA9	タデ属?	果実	完形1	萼残存

以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

コナラ属－シイ属 *Quercus*－*Castanopsis* ブナ科（図版６）

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。卵状楕円体の子葉の合わせ目に沿って縦半分未満に割れた破片で大きさ4.0㎜程度。外面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられ、合わせ目の表面は平滑。

シイ属?　*Castanopsis*？　ブナ科（図版６）

果実が検出された。炭化しており黒色、長さ8.0㎜、径7.0㎜程度の広卵体。基部は切形で着点は円状不定形。果皮は薄く、表面には細く浅い溝が縦列する。果皮が剥がれた部分に確認される子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。

＜草本：栽培植物＞

ヒエ－キビ　*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno－*Panicum miliaceum* L. イネ科ヒエ属－キビ属（図版６）

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ1.7㎜、幅1.4㎜、厚さ1.0㎜程度のやや偏平な広卵体。背面は丸みがあり、基部正中線上に幅広い胚の凹みがある。腹面は平ら。表面はやや平滑。

ヒエ、キビなどの同定は、走査型電子顕微鏡下による内外穎の観察で判別可能とされるが(松谷1980・2000など)、本試料に同定根拠となる穎の付着は認められないことから、ヒエーキビにとどめた。

ムギ類　*Hordeum valgale* L.－*Triticum aestivum* L.　イネ科オオムギ属－コムギ属（図版６）

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。頂部を欠損し、紡錘状長楕円体のオオムギと楕円体のコムギの判別が困難であったため、ムギ類にとどめた。破片の長さは4.0㎜、径3.0㎜程度。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は粗面。

マメ類　Leguminosae　マメ科（図版６）

種子の破片が検出された。炭化しており黒色。子葉の合わせ目上に沿って半分に割れており、接合し1個体となる。長さ6.2㎜、径4.6㎜程度の長楕円体で腹面方向にやや湾曲する。腹面の子葉の合わせ目上にある長楕円形で縁が隆起する細長い臍を欠損する。子葉内面の幼痕や初生葉が確認され、北大基準(吉崎1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する。種皮表面はやや平滑。

遺跡出土の炭化マメ類は、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている(吉崎1992)。一方、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている(南木1991など)。近年では、DNA分析による判別が開発されつつある(矢野2002)。

今回確認された種子は、「アズキグループ」に該当するが、種類の特定は議論の段階にあるため、「マメ類」にとどめた。今後の資料の蓄積を待ち、再検討が望まれる。

＜その他の草本＞

タデ属　*Polygonum*　タデ科（図版６）

果実が検出された。黒色、長さ1.8㎜、径1.5㎜程度の三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面。

タデ属?　*Polygonum*？　タデ科（図版６）

果実が検出された。灰黒色、長さ2.0㎜、幅1.6㎜程度のやや偏平な広卵体。頂部は尖り、基部は切形。半分に割れる個体が多くみられる。果皮表面は粗面。エノキグサの種子に似るが、半割し、果皮断面は厚く柵状であることや、基部に萼が残存する個体(No.55)がみられることから区別される。

エノキグサ　*Acalypha australis* L.　トウダイグサ科エノキグサ属（図版６）

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5～1.8㎜、径1.3～1.5㎜程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、断面は柵状組織が内側に湾曲する。表面には細かい粒状の凹みが密布しざらつく。

(2) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を、以下に示す。

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)			相対比
No. 6 SC4	257±34	σ	calAD 1,528 ～ 1,550	calBP 422 ～ 400	0.181
			calAD 1,634 ～ 1,667	calBP 316 ～ 283	0.641
			calAD 1,783 ～ 1,796	calBP 167 ～ 154	0.178
		2σ	calAD 1,515 ～ 1,598	calBP 435 ～ 352	0.297
			calAD 1,617 ～ 1,679	calBP 333 ～ 271	0.516
			calAD 1,764 ～ 1,800	calBP 186 ～ 150	0.161
			calAD 1,939 ～ 1,951	calBP 11 ～ -1	0.026
No. 37 SA7	761±35	σ	calAD 1,227 ～ 1,233	calBP 723 ～ 717	0.094
			calAD 1,239 ～ 1,248	calBP 711 ～ 702	0.150
			calAD 1,251 ～ 1,279	calBP 699 ～ 671	0.756
		2σ	calAD 1,215 ～ 1,287	calBP 735 ～ 663	1.000

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、2σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。また表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差をσとして計算させた結果、No. 6(ムギ類の炭化胚乳)はcalAD1,528～1,796、No. 37(マメ類の炭化種子)はcalAD1,227～1,279を示す。

5 考察

種実同定の結果、コナラ属－シイ属、シイ属?、ヒエーキビ、ムギ類、マメ類、タデ属、タデ属?、エノキグサが確認された。

ヒエーキビ、ムギ類、マメ類は、古墳時代では確実な栽培植物とされ(南木1991)、本遺跡周辺域における植物質食糧としての利用が推定される。また、いずれも炭化していることから、火を受けたことが推定される。

ただし、その利用時期に関して、土坑 (SC4) から検出されたムギ類(No. 6)の測定年代は 260±40BP、暦年較正結果はcalAD1,528～1,796、住居跡 (SA7) から検出されたマメ類(No. 37)の測定年代は760±40BP、暦年較正結果はcalAD1,227～1,279と、発掘調査所見から推定された遺構の年代観よりも新しい年代を示し、両試料間の年代差も大きい。すなわちムギ類、マメ類は、後代のものが遺構内に混入した可能性があるため、現時点では各遺構から確認された栽培植物の種実を、当該期における利用に直結させるのは慎重にならざるを得ない。今後は、試料採取時の土壌の観察所見や採取時及び採取後の履歴等の検証を行い、これらの利用時期を慎重に評価することがのぞまれる。

一方、栽培植物を除いた分類群では、木本のコナラ属－シイ属、シイ属?は、本地域に分布する照葉樹林の主要構成種で、堅果が食用可能な有用植物である。これらは、周辺域の森林に生育していたものに由来

すると思われ、遺構内に持ち込まれ利用された可能性もある。また、炭化していることから、火を受けたことが推定される。ただし、時期に関しては、上述の栽培植物と同様に慎重に評価する必要がある。

草本のタデ属、タデ属?、エノキグサは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、調査区周辺域の草地等に生育していたものに由来すると思われる。

【参考文献】

石川茂雄1994「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

松谷暁子1980「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」浦幌町郷土博物館報告,第16号,203-211.

松谷暁子2000「植物遺残の識別と保存について」Ouroboros,東京大学総合研究博物館ニュース,Volume5,Number1,8-10.

南木睦彦1991「栽培植物,古墳時代の研究 4生産と流通Ⅰ」石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編,雄山閣,165-174.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000「日本植物種子図鑑」東北大学出版会,642p.

矢野　梓2002「遺跡から出土した小型豆のＤＮＡ分析」DNA考古学Newsletter3.

吉崎昌一1992「古代雑穀の検出」考古学ジャーナル,355,ニューサイエンス社,2-14.

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査では、旧石器時代～古墳時代にかけて多くの遺構・遺物を検出した。各遺構・遺物についてはすでに述べたが、その中でも特徴的な事柄について検討をし、まとめとしたい。

第１節　旧石器時代の様相

旧石器時代では、姶良Ｔｎ火山灰層（第Ⅸ層）上位のⅦ層中部でナイフ形石器、剥片尖頭器を中心とする第Ⅰ期が、Ⅵ層上部で細石刃石器群を中心とする第Ⅱ期を確認した。

１　第Ⅰ期の様相

第Ⅰ期は、ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群であるが、量的に少なく散漫な状態であった。遺物は合計72点を確認し、器種別の内訳は、ナイフ形石器２点、剥片尖頭器２点、スクレイパー１点、その他は剥片類である。石材別に見ると、流紋岩61点、ホルンフェルス11点で、第Ⅰ期の特徴的な石器は全て本遺跡の眼下に位置する五ヶ瀬川で採集可能な流紋岩（松田2005）である。

ナイフ形石器（1）は、右側縁の全体（長側縁）、左側縁下部（短側縁）および下端にブランティング加工が施されており、加工のほとんどが腹面側からだが、基部付近では背面側からの加工も施され、いわゆる狸谷型ナイフ形石器の範疇に入ると考えられる。また、素材の利用方法や加工状況から、ナイフ形石器（2）も、いわゆる狸谷型ナイフ形石器に類似する。剥片尖頭器は、両側縁にブランティング加工を施し、ブランティングによる抉りのないもの（3）と、あるもの（4）がある。接合作業を試みた結果、接合資料は４例確認され、そのうち石器製作作業の復元の可能な接合資料（第８図）は、縦長剥片製作を目的にしたものであった。

第Ⅰ期の編年的位置づけとしては、宮崎県旧石器文化談話会の設定した編年の第５段階に相当すると考えられる。

２　第Ⅱ期の様相

第Ⅱ期は、細石刃石器群を中心とする本遺跡旧石器時代の主体であり、数多くの接合資料が得られた。また、石器石材においては、流紋岩だけでなく、黒曜石製石器も多数出土している。

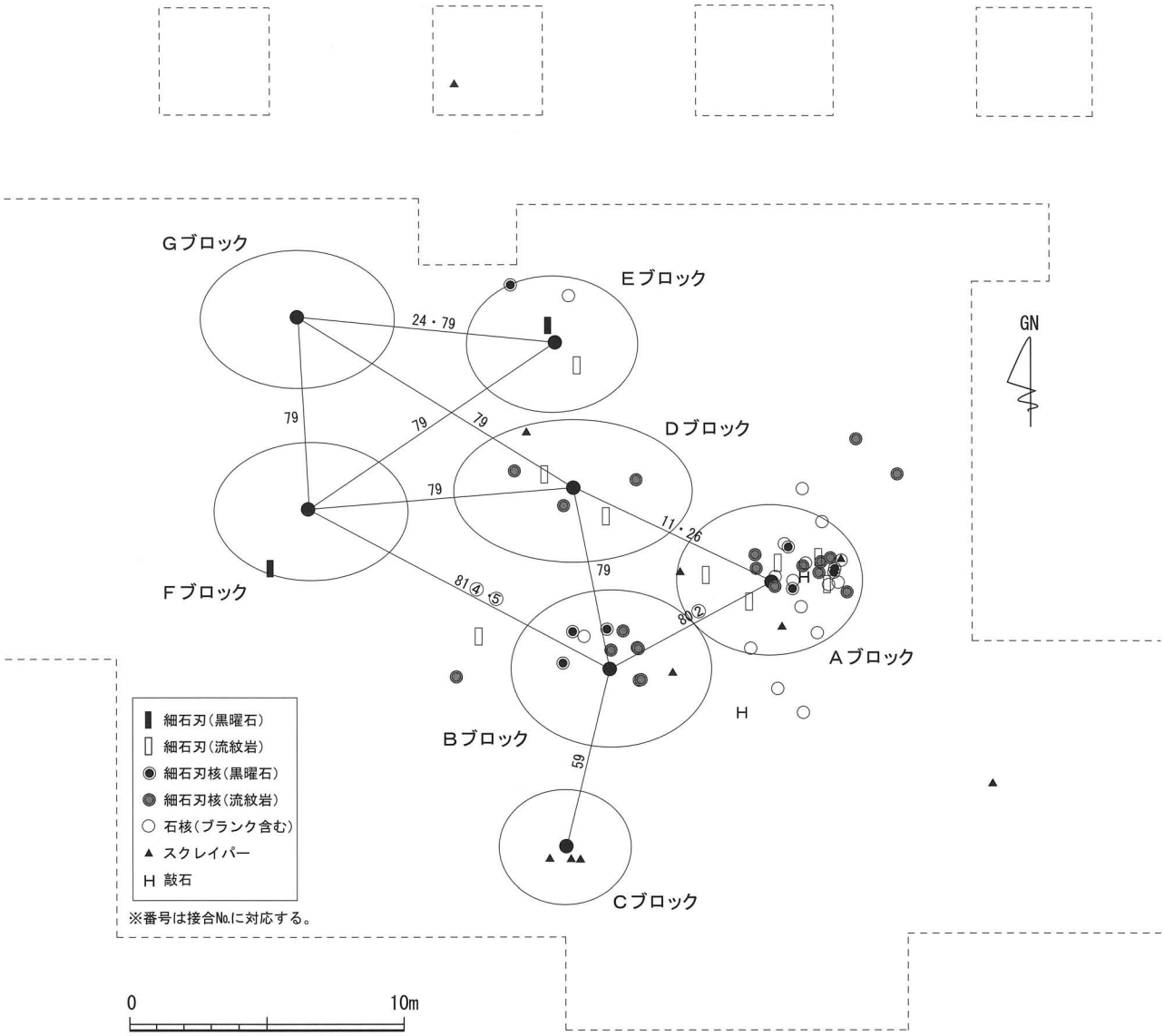
以下、石器石材消費の特徴から、遺跡における集団の行動と場の復元、また、細石刃製作技術の特徴から、第Ⅱ期の編年的位置づけについて検討を行う。なお、以下の接合資料についての説明には、便宜上接合No.を用いて記述を行う（第24表を参照）。

(1) 遺跡における行動と場の復元

石器群ブロックの同時性について

本遺跡においては、７か所の石器群ブロックが視覚的に認識できる。第Ⅲ章第１節の２で述べた通り、K4グリッドとＪ４～５グリッドの２か所の密集分布をＡ・Ｂブロック、出土石器量はそれらより少ないものの、調査区南東側から順にＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆブロックとした（第12図）。各ブロックに明確な線引きができるわけではないが、以下、説明の便宜上それぞれ区分し、それらの同時性について検討を行う。

接合資料の接合関係を見ると、全てのブロックに石器が分布する例は存在しない。しかし、複数のブロックにまたがって分布しているものがある（第128図）。接合No.79は、ＡとＣブロックを除く全てに、また接合No.11とNo.26はＡとＤ、接合No.24はＥとＧ、接合No.59はＢとＣ、接合No.80はＡとＢ、接合No.81はＢとＦと、複数のブロックにまたがって分布している。全接合資料76例のうち、複数のブロックにまたがる接合資料が７例というのは、同時性を示す点で多い数とは言い難い。しかし、それら接合資料の各石器が、Ａ～Ｆのブロック全てに分布しているということから、Ⅵ層出土の石器群については、同時性を有しているものと考える。



第128図　細石刃石器群におけるブロック相関概念図（S＝1/250）

石器製作作業の復元

第Ⅱ期における石器総数は793点で、石器接合率は49.6%にのぼり、半数の石器が何らかの接合資料に属していることになる。石器石材については大きく流紋岩製と黒曜石製とに分けられ、前者が720点、後者が40点と前者のほうが主体となる。その他敲石には、チャートや礫岩も利用されている。以下、主体となる流紋岩を中心とした非黒曜石と黒曜石との２つに石材を分け、石器製作作業の復元を検討し、石材の搬入から搬出にいたる過程について比較を行う。なお、基本的に接合資料を中心に検討を行う。

流紋岩を中心とする非黒曜石（第129図上）

接合 No.80 は扁平な楕円礫を２分割し、それぞれ別々に作業が行われる。分割後、その分割面あるいはその対極の面を打面とした剥片剥離が行われる。剥片の形状は幅広の不定形で、二次加工は施されていない。これらの剥片剥離作業は、分割面を打面とする細石刃核の側面調整として行われているものである。しかし、細石刃核あるいはブランクは欠落しており、同一母岩の細石刃核も存在しないため、遺跡外に搬出された可能性が高い。

接合 No.81 は、接合 No.80 よりも推定される原礫は大きいが、搬入形態としての大きさはほぼ同じ大きさである。分割礫の平坦面から、打面再生、打面転移を介しながら剥片剥離作業が行われる。剥離された剥片は、

平面形状や厚みなどが多様であり、特に傾向は見出せない。接合石器中、明確な二次加工が認められるのは、打面再生剥片を利用したもの1点のみである。欠落部分はあるが、何を目的として剥片剥離が行われたかは不明である。

接合№83は、上述した2つの接合資料とは異なり、縦長剥片剥離が行われている。円礫を輪切りにするように打面を形成し、打面転移を介しながら数枚の縦長剥片を剥離している。この縦長剥片の一部は細石刃核として利用されている。接合資料には欠落部分が大きく存在しており、それらは搬出された可能性が高い。

その他接合№24は、分割礫を利用した分割面からの側面調整を示すものであり、おそらく細石刃核ブランク製作に関連するものと考えられる。接合№79は、縦長剥片の他に不定形剥片が剥離され、さらに石核も存在するが、明確に細石刃核と呼べるものではない。

以上は、原礫あるいは分割礫の搬入から作業が開始され、細石刃核前段階までの作業工程を示すものが主体である。この他に細石刃製作ではなく不定形剥片を剥離するものも存在している。ただし、後者の目的剥片が何かという点については不明である。

一方、素材剥片あるいは細石刃核から作業が開始されるものがある。それらは細石刃核に調整剥片が接合するものがほとんどであり、次の3つに分けることが可能である。

① 細石刃核と側面あるいは下面調整剥片が接合するもの（接合№16・18・34・43・71）

② 細石刃核同士が接合するもの（接合№7・33）

③ 細石刃核が分割され、それが接合するもの（接合№78）

最も多い①の中で、接合№34は、細石刃核に調整剥片10点が接合し、細石刃剥離によって調整剥片と細石刃核との間に生じた欠落部分は約3.0cmと、縮小部分が分かる。接合№16は、打面形成から細石刃製作までの工程が全て観察できる資料で、初期段階の石核の打面と最終的に整形された細石刃核の打面とは、その大きさが異なっており、長軸4.5cmが3.5cmまで、短軸3.5cmが1.5cmまで縮小している。

次に多い②の中で、接合№33は、細石刃核2点が打面同士で接合しており、打面形成後には別々に作業が行われている。これに対して、接合№7では、細石刃核の打面再生後に、全く別の打面から細石刃製作が行われている。この点で接合№33と接合№7とではやや異なる。

以上のような石器製作作業の復元から、流紋岩の石材の搬入には、原礫あるいは分割礫の搬入から作業が開始されるものと、細石刃核あるいはその素材剥片から作業が開始されるものとが確認でき、搬出にいたる過程については、細石刃核が欠落するものと、細石刃核が遺跡内に残されるものとが確認できた。このような違いを、接合資料類型として以下のよう2つに分類する。

接合類型a「原礫あるいは分割礫から作業を開始し、細石刃核が欠落するもの」

接合類型b「細石刃核あるいはその素材を搬入し、細石刃製作が行われ細石刃核が遺跡内に残されるもの」

この二者は、後述する石器分布においても対照的な位置を示している。

黒曜石

蛍光X線分析の結果（第Ⅳ章第1節）、黒曜石は大きく桑ノ木津留産と腰岳系とに分けられる。これらの搬入形態は流紋岩のそれとは明確に異なり、また産地ごとにも相違が認められる。

桑ノ木津留産黒曜石（第129図左下）

接合資料から想定される大きさは最大でも長軸5.0cm前後であり、搬入形態は、そうした小角礫あるいは簡易な石核調整の施された石核であったと想定される。細石刃核あるいは石核と打面形成（再生）剥片との接合資料（接合№63・64・65）が存在していることから、石器製作が遺跡内で行われたことは確実である。しかしながら、それらの接合資料は石器数が全て各2点で構成され、細石刃は1点しか出土していないことから、石器製作の規模は相対的に小さいものであったと考えられる。

腰岳系黒曜石（第129図右下）

礫形態で搬入された痕跡は認められない。石器総数は11点で、その内訳は、細石刃1点、細石刃核1点、スポール1点、剥片類8点である。剥片類の中には、細石刃核の調整剥片と呼べるものもあるが、細石刃核とは接合しない。また、数点は遺跡内で剥離されたものである可能性が高いが、遺跡外で製作されたものが製品として搬入されたと推測できるものもある。それらの形態は、概して整っており、微小剥離痕も認められる。スポールも同様である。スポールも遺跡内での製作の痕跡が認められず、スポールの打点部には明瞭な擦痕が認められる。なお、蛍光X線分析によって不明黒曜石と判定されたものも、肉眼観察では腰岳系に近い。また、石器の稜線上には潰れが認められ、消耗度という点においても腰岳系黒曜石と類似している。3点のみの存在であることから、きわめて少量の搬入であったと考えられる。

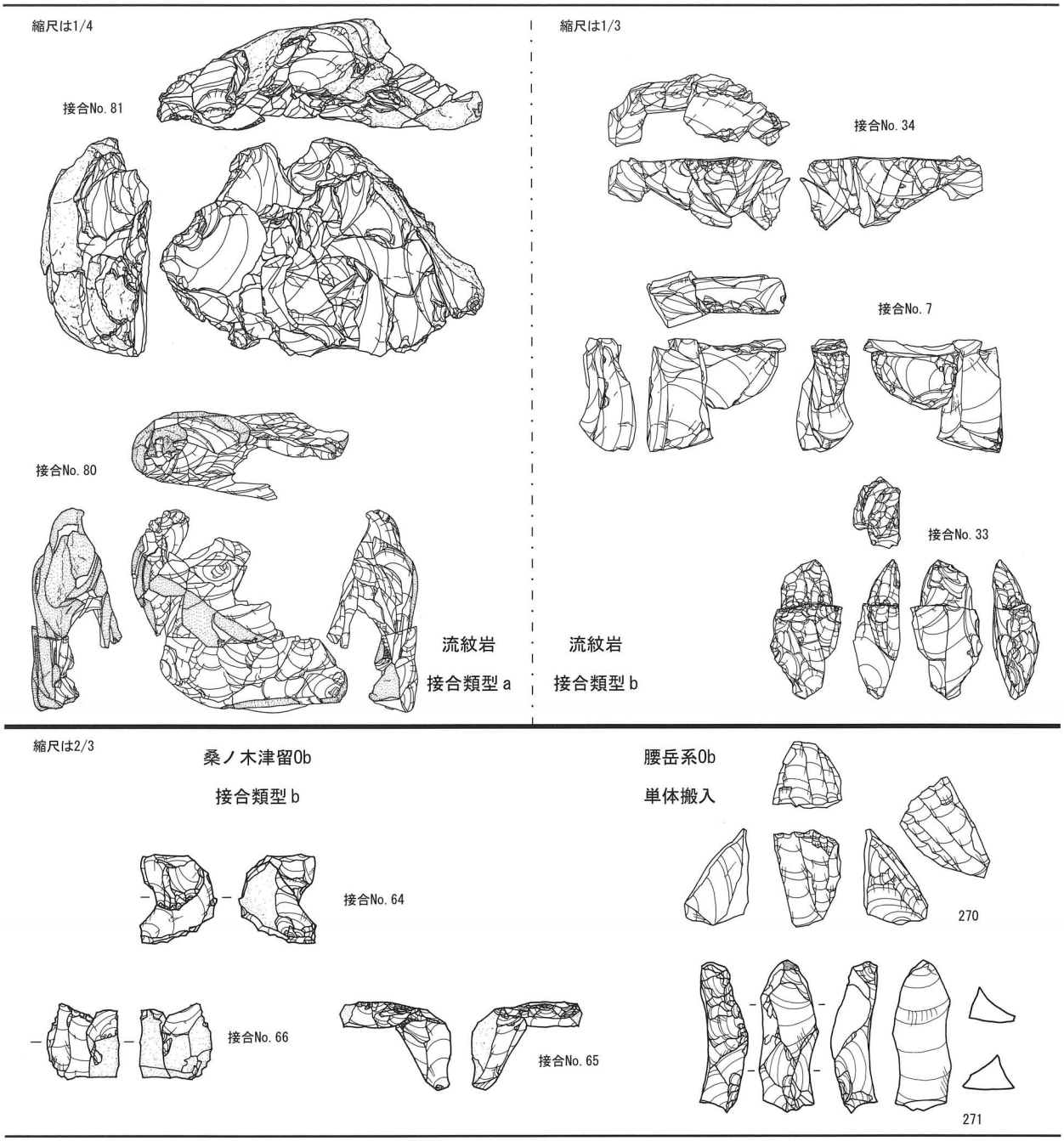
小結

以上のように、石器製作作業において、流紋岩を中心とする非黒曜石と黒曜石とでは、搬入から搬出にいたる過程が異なっている。非黒曜石の接合資料から推測される石器の搬入形態には、石器製作作業における接合資料類型として、大きく2つに分類できる。1つは原礫あるいは分割礫を搬入し細石刃核ブランクを製作するが、細石刃核が欠落する一群（接合類型a）、もう1つは細石刃核あるいは細石刃核の素材剥片を搬入し、遺跡内に細石刃核が残される一群（接合類型b）である。厳密な個体別資料分類は行っていないが、接合していない剥片類に自然面の認められるものは、ほとんど存在しない。そのため、仮に厳密な個体別資料分類を行ったとしても、後者が前者に組み込まれる可能性は低い。

原礫あるいは分割礫で搬入されるものには、原礫の大きさの窺い知れる資料がある。接合No.24は、長軸20.0cm、短軸10.0cm、厚さ10.0cm程の楕円礫、接合No.80は、長軸15.0cm、短軸12.0cm、厚さ5.0cm程の(亜)円礫、接合No.81は、長軸28.0cm、短軸15.0cm、厚さ15.0cm程（推定）の円礫、接合No.83は、長軸12.0cm以上、短軸10.0～12.0cm、最大厚13.0～15.0cm程の円礫となる。接合No.24と接合No.81の搬入形態はほぼ半割された分割礫なので、それぞれの搬入時点での大きさは、長軸20.0～30.0cm、短軸10.0～20.0cm、厚さ10.0cm前後の礫ということになる。このように非黒曜石では、20.0cm程の円礫を搬入し、旺盛な石器製作が認められるのに対し、黒曜石では、小角礫あるいは製品を搬入し、石器製作の痕跡はあまり認められない。

番号	接合No.	石材	数	搬入形態	作業内容	搬出
Ⅱ-①	7	流紋岩	4	細石刃核	細石刃核→細石刃製作（2段階）	細石刃
Ⅱ-②	16	流紋岩	8	石核	石核整形→細石刃製作（失敗）	—
Ⅱ-③	17	流紋岩	4	石核？	連続的な剥片剥離→スクレイパー製作	石核
Ⅱ-④	18	流紋岩	4	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑤	24	流紋岩	9	分割礫	石核整形	石核
Ⅱ-⑥	31	流紋岩	10	石核	石核整形→細石刃製作？	剥片・細石刃核
Ⅱ-⑦	33	流紋岩	3	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑧	34	流紋岩	11	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑨	37	流紋岩	3	石核	石核修正（打面再生）→剥片剥離	剥片
Ⅱ-⑩	43	流紋岩	3	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑪	71	流紋岩	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑫	78	流紋岩	3	細石刃核	細石刃核→細石刃剥離→細石刃核分割	剥片？
Ⅱ-⑬	79	流紋岩	23	分割礫	縦長剥片剥離→石核整形→細石刃製作（失敗か）	数点の縦長剥片
Ⅱ-⑭	80	流紋岩	39	原礫	原石分割→石核整形→細石刃製作	剥片・細石刃核
Ⅱ-⑮	81	流紋岩	62	分割礫	原石分割→一般剥片剥離か	数点の剥片
Ⅱ-⑯	83	流紋岩	26	分割礫	縦長剥片剥離→石核整形→細石刃製作（失敗か）	数点の縦長剥片
Ⅱ-⑰	64	黒曜石	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑱	66	黒曜石	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
Ⅱ-⑲	65	黒曜石	2	原礫	原石分割→細石刃製作	細石刃

第24表　第Ⅱ期接合資料作業内容一覧



第129図　石材別消費状況の比較

石器製作作業と場との関係

第12図の主要遺物の分布と接合関係の通り、調査区南側と北側では、石器分布に量的な多寡が認められる。南側に位置するAブロックとBブロックは、それぞれ径5.0m前後の円形を呈し、ブロックには多くの剥片類とともに細石刃核を含む石核が存在している。総数25点の細石刃核のうち、12点がAブロックに、8点がBブロックに分布する。また、Aブロックにチャート製の敲石が、さらにブロック外ではあるもののA・Bブロックに近接して礫岩製の敲石が出土している。これらは、A・Bブロックにおける石器製作の旺盛さを示していると考えられる。

一方、北側に位置するC～Gのブロックは、石器数も少なく、Dブロックに3点分布しているものの、その他のブロックでは、複数の細石刃核は分布していない。接合資料も少なく、この北側のブロックのみに分布する接合資料は6例しかない。これらは、北側と南側とで作業内容に何らかの差異があった可能性

を示していると考えられる。

以下では、A・Bブロックを南側ブロック群、C～Gブロックを北側ブロック群と呼称し、この南・北ブロック群の作業内容の差異の存在を念頭に、非黒曜石と黒曜石製石器とに分けた石器分布から、石器製作作業と場との関係について検討を行う。

流紋岩を中心とする非黒曜石製石器の分布

南側ブロック群における接合資料を見ると、Aブロックで完結する接合資料は40例、Bブロックで完結する接合資料は7例である。接合資料76例のうち半数以上がこの2つのブロックで完結しており、A・Bブロック付近で石器製作作業が旺盛に行われたことは明らかである。さらに、この両ブロックともに多くの細石刃核が分布しており、また、細石刃製作に関わる接合資料も存在している。

まず、前述した石器製作作業における接合資料類型別に分布を見た場合、接合類型bに属する資料がA・Bブロックのみに存在し、また、その分布は1つのブロックで完結する点が特徴的である。例えば、Aブロックでは、接合№16・18・33・34・43が出土しており、Bブロックでは、接合№7・71が出土している。このように、細石刃製作に関わる接合資料は全て南側ブロック群に確実に分布している。対照的に、北側ブロック群では、細石刃製作に関わる接合資料は存在しない。

これに対して接合類型aに属する資料は、数ブロックにまたがって分布する点が特徴的である。例えば、接合№79は、AとCブロックを除く全てのブロックに、接合№24はEとG、№59はBとC、№80はAとB、接合№81はBとFにそれぞれ分布している。このように、南側ブロック群のみに集中するわけではなく、その他のブロックも含まれることが、先の接合類型bに見られた特徴との大きな違いである。

接合類型bの中でも、分布の中心となるブロックは存在しているものの、作業工程によって分布に差異が認められるものがある。接合№79は、作業が開始されたと考えられるDブロックを中心に分布しているが、剥片数点が別ブロックに分布しており、作業終了時点と考えられる石核が残されたブロックは、BブロックとEブロックとに分布している。接合№81では、作業工程の初期段階資料はBブロックで収まるのに対して、打面転移が行われた以降の資料は、Bブロックを中心に分布しつつも、数点の剥片がブロック外に分布している。接合№83では、2つの分割礫の双方で分布に違いがあり、1つがAブロックに集中しているのに対して、もう一方はBブロックにも広がる。

このように、接合資料類型別では分布の仕方が接合類型別により異なること、さらに、接合類型aでは作業工程によって分布に差異があることが特徴的である。この差異が何に起因するかは分からないが、作業工程が多くなるに従い、分布するブロック数が増える傾向にあり、作業によって場所を変えていた可能性、あるいは異なる作業場所で作業が並行して進行していた可能性が考えられる。

次に、石器を器種別に見た場合、スクレイパーはA・Bブロックに4点分布しているが、この他にもC・Dブロックに1点ずつ、さらにブロック群から大きく離れて2点分布している。また、細石刃はAブロックに集中して分布する傾向があるものの、2点がDブロックに、1点がEブロックに分布している。このうち、Eブロックに分布している細石刃(16)には両側縁に、Dブロックの1点(17)には片側縁に微小剥離痕が認められ、細石刃に関しては消耗度の高い細石刃が北側ブロック群に分布する傾向にある。

このように、器種別の分布では、特に細石刃の分布に差異があり、消耗度の高い細石刃が、製作ブロックと考えられる南側ブロック群とは離れた北側ブロック群に分布することが特徴的である。

黒曜石製石器の分布（第130図）

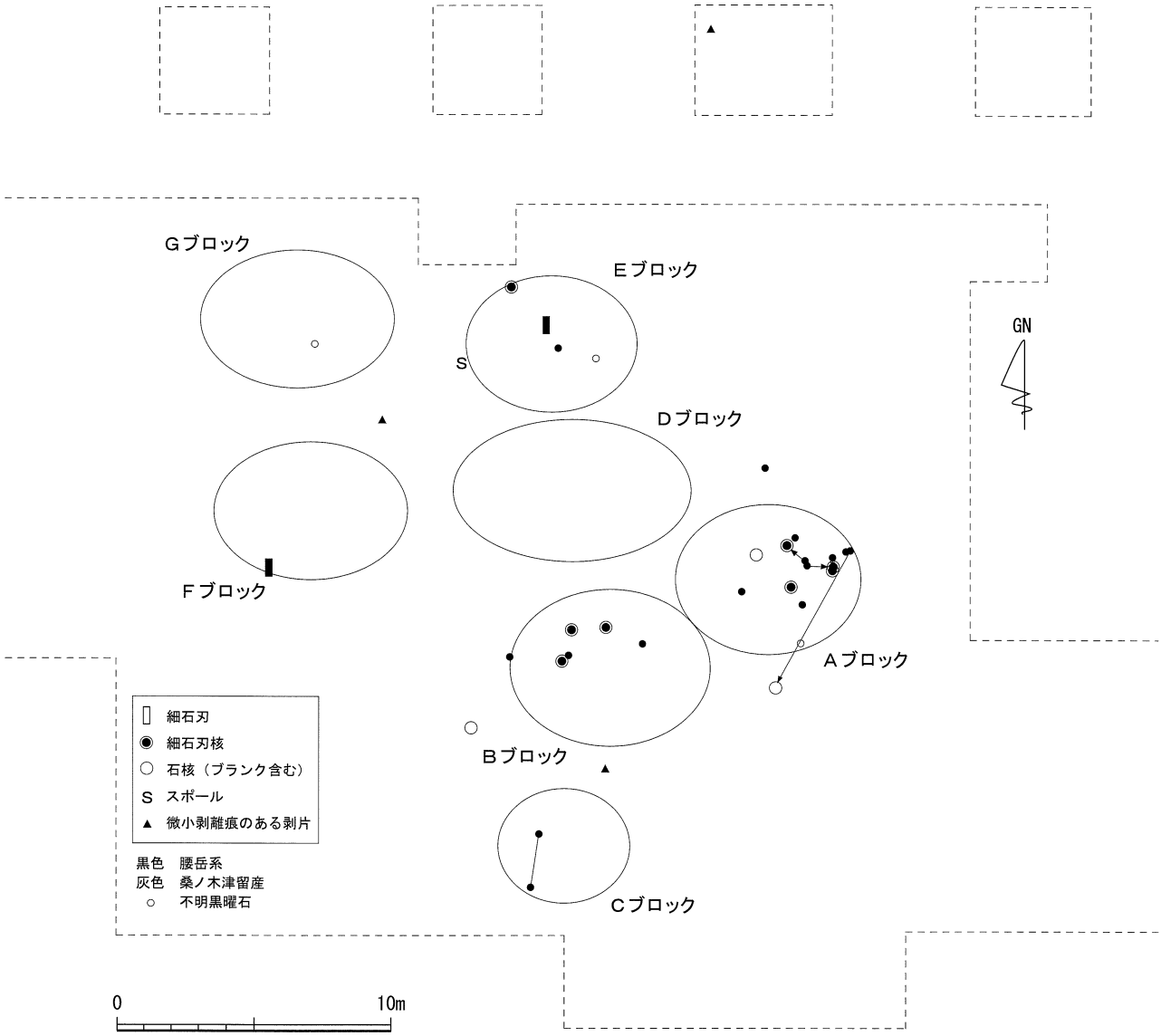
桑ノ木津留産黒曜石を見ると、Aブロックに集中する傾向にある。ただし、遺跡内製作を示すと考えられる細石刃核はBブロックにも分布しており、こうした南側ブロック群を中心とする分布の特徴は、非黒曜石のそれと類似している。しかし、細石刃は南側ブロックではない、Eブロックに分布しており、細石刃核の分布とは全く異なる。この細石刃には微小剥離痕が認められ、おそらく使用されたものと考えられる。これが遺跡内で製作されたものかどうかは定かでないが、製作ブロックと考えられる南側ブロック群

とは離れて分布している点は重要である。

腰岳系黒曜石を見ると、桑ノ木津留産黒曜石とは違い、どのブロックに集中するわけでもなく散漫な分布を示している。しかし、腰岳系の中でも形態的に整った石器、すなわちスポール、細石刃、細石刃核、微小剥離痕のある剥片に関しては南側ブロック群からは出土しておらず、石器分布の散漫なＥブロックなど、概して北側ブロック群に認められる。

不明黒曜石は、3点ともに別々のブロックで出土している。3点中稜上の潰れの確認できる2点(281・282)は、調査区北側のＥ・Ｇブロックに分布している。

以上のような黒曜石産地別分布や石器の消耗度(使用の有無)から、石器製作作業と場との特徴として、製作ブロックとしての南側ブロック群と、そうではない石器使用に特化した北側ブロック群とに区別できることが考えられる。



第130図　黒曜石産地別分布（S＝1/250）

小結

石器製作作業と場との関係を、全体的な分布、非黒曜石の分布、黒曜石の分布から3点にまとめると次の通りである。

1点目は、全体的な分布の傾向として、石器の多くが南側ブロック群に分布し、北側ブロック群では石器数や接合資料も少なく、石器製作の痕跡に乏しいことである。

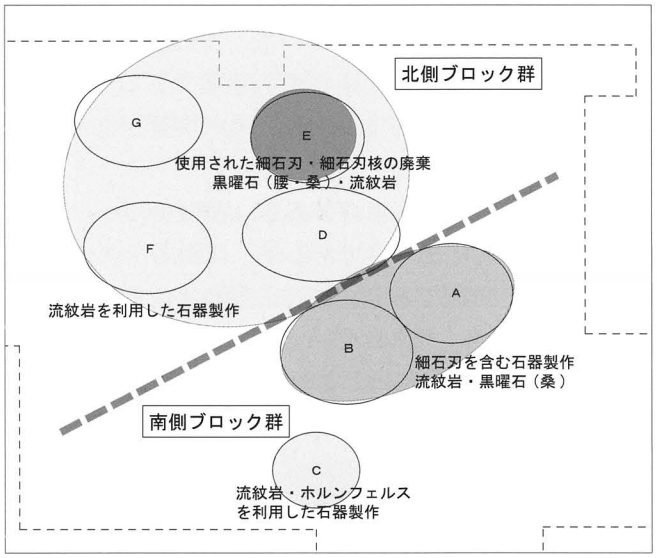
2点目は、非黒曜石の細石刃の分布に特徴があり、消耗度の高い細石刃が、北側ブロック群に分布することである。

3点目は、黒曜石の分布が、南側ブロック群では製作ブロックとして、北側ブロック群では石器使用に特化したブロックとに区別できることである。

つまり、南側ブロック群では細石刃製作を中心とする石器製作作業が行われ、北側ブロック群では、石器製作作業は行われるものの、基本的に細石刃製作作業は行われず、消耗度の激しい石器が残されていると言える。

また、後者で石器使用行動が行われていたとは考えにくく、スクレイパーなどの加工具と考えられる石器は、むしろ南側ブロックに多く分布している。さらに、使用された細石刃と腰岳系黒曜石製石器が北側ブロック群に偏在し、特にEブロックには、腰岳系黒曜石製の細石刃核、スポール（擦痕あり）、使用痕のある桑ノ木津留産黒曜石と流紋岩製の細石刃が存在している。これらは、使い古された石器がEブロックを中心とする北側ブロック群に廃棄されたことを物語っているのではないだろうか。

以上のことから、石器製作作業と場との関係においては、南・北の両方のブロック群ともに石器製作に関係があるものの、南側ブロック群は細石刃製作に特化した場、北側ブロック群は使い古された石器が残された場であると考えられる（第131図）。



第131図　南・北ブロック群の機能的差異

(2) 第Ⅱ期の編年的位置づけ

細石刃製作技術の特徴から、第Ⅱ期の編年的位置づけについて検討を行う。

まず、非黒曜石における細石刃製作技術の特徴である。素材は基本的に剥片素材だが、その供給方法は、分厚い剥片あるいは分割礫をそのまま利用するものと縦長剥片を利用するものとがある。しかし、縦長剥片が規格的に剥離された石核は存在せず、どちらかといえば前者の素材供給方法が多く認められる。したがって、特定の方法が採用されているわけではないと考えられる。

素材利用の方法としては、素材剥片の主要剥離面を側面に設定する場合が多い。そして、その前後に形成される単剥離面を打面に設定している。

石核調整は、基本的に細石刃剥離時と同一の打面からの側面調整である。側面調整の他に下縁調整や背縁調整が施されるものもある。正面形はV字状あるいは長方形状である。

作業面は、素材剥片の一端を作業面としている。基本的に打面転移は行われないが、短軸両端で細石刃剥離が行われるものや異なる平坦面を打面とした細石刃剥離が見られるものもある。

本遺跡の出土資料において、特に重要なのは細石刃剥離開始後に石核の縮小過程を示す資料の存在である。例えば接合No.33は、2つの細石刃核が打面同士で接合しており、縮小過程の把握が可能である。すな

わち、細石刃核（残核）と、その背部に接合する剥片との打面幅が異なっており、初期段階の細石刃核の打面幅と、残核の打面幅では5.0～6.0㎜の縮小が認められる。また接合№34では、側面調整剥片と細石刃核の間に生じた欠落部分によって、約3.0㎝分の細石刃剥離が行われていたことが分かる。

このように縮小過程の想定できるものの他、技術的に見た場合に重要なのは接合№7である。この接合資料では、細石刃核の打面再生以前と打面再生後に採用された技術に相違が認められる。再生以前には、平坦打面からの細石刃剥離が行われているのに対して、再生後には横打打面調整によって整形された打面が採用され、石核調整も入念である。この技術は、従来の分類に当てはめれば前者が船野型、後者が福井型となり、両者が1つの細石刃核において共存していることになる。

次に、黒曜石における細石刃製作技術の特徴である。非黒曜石における特徴と比べ、実に単純である。小角礫を素材として、石核調整はほとんど施されず細石刃剥離にいたるもので、打面再生は行われているが、打面調整はほとんど施されていない。

以上のような細石刃製作技術の復元される細石刃核は、従来の分類では全て船野型（橘1975）、あるいは上下田型（橘1991）の特徴を備えるものである。ただし、下縁調整や背縁調整が施されるものもあり、これは、船野型というよりも福井型の特徴である。上述した接合№7では、1つの接合資料中に船野型と福井型とが文字通り「共存」している。この接合資料をあえておしなべて理解しようとするならば、その普遍的な属性は、平坦打面と小口面の意識である。その際の石核調整は必要に応じてなされたものであり、おそらく石核調整の一部は、固定具との関連があるものと考えられる。細石刃核打面上には、細石刃剥離とは直接関係しない側面からの調整が認められるものがあり、これは、従来から指摘されている細石刃剥離に伴う固定具装着の可能性がある（宮田1998）。

最後に、編年的位置づけであるが、技術的な面から第Ⅱ期は、芝康次郎氏の設定したF－S群（芝2007b）としての評価が可能であり、細石刃期後半に相当すると考えられる。当該期の石器群には土器が共存している場合があるが、本遺跡では出土していない。土器編年と石器群編年のすりあわせは非常に難しい。しかしながら本遺跡の資料は、これらを考える上での重要な材料を提供するものだと言えよう。

第２節　縄文時代早期の様相

縄文時代早期では遺構として、破砕礫が大部分を占めている集石遺構1基（第68図）を検出した。遺物は、チャート製の石鏃が8点出土し（第75図）、二等辺三角形の形状で、平基のもの、正三角形に近い形状で、基部に浅い抉りのあるもの、二等辺三角形の形状で抉りのあるものがある。また、本遺跡1点のみ出土の石匙は（第75図）、つまみから身が横に広がる横型で、石材はサヌカイトである。遺跡周辺には採取不可能な石材のため、持ち込まれたものと考えられる。さらに、攪乱部分ではあったが貝殻条痕文土器が出土した。深鉢の口縁部は（第75図）、直立しやや丸みをおびている。口縁部に貝殻腹縁刺突文を、口縁下に貝殻条痕文を、その上から列点状の刺突文を施している。

以上のような遺構・遺物を確認したが、その分布は極めて疎であり、本遺跡においてこの時期は、活動が希薄であったものと考えられる。

第３節　弥生時代・古墳時代の様相

弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡は全部で12軒検出し、住居跡間の切り合いはなかった。これらからの遺物の出土層位は、大きくは床面などの最終機能面と堆積土とに分かれる。本報告書に掲載している遺物は、遺構堆積土の下位～床面のものであるが、堆積土中においても、床面で取り上げたものと接合した遺物を取り扱っている。

以下では、まず出土遺物の遺構別器種構成から、出土量の多さや完形の度合いを考慮に入れ、それらの特徴を比較し、出土土器の編年的位置づけを行う。さらに、検出した遺構（竪穴住居跡・土坑）の特徴から、黒仁田遺跡の集落構成の復元を行う。

１　出土遺物の遺構別器種構成

(1) 出土土器

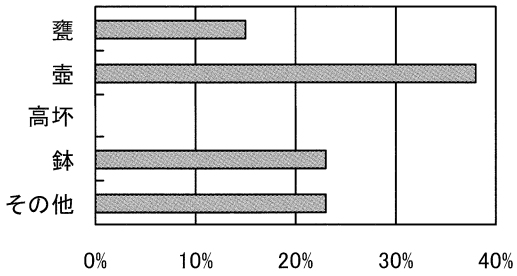
報告書記載の土器総数は274点で、その器種構成の割合は、甕が49%、壺が20%、高坏が7%、鉢が16%、その他が８%で、甕が最も個体数の割合が多く、本遺跡の主要器種となる。しかし、これらは通時的に見た場合である。そこで以下、竪穴住居跡別に器種構成の特徴を比較し、各時期の比較を行う。なお、出土した遺物は弥生時代終末から古墳時代の土器群である。その編年的位置づけについては、松永編年（松永2001）と今塩屋・松永編年（今塩屋・松永2002）を用いる。

竪穴住居跡別の器種構成

５号竪穴住居跡（SA5）

本遺構の土器総数は13点で、全て弥生土器である。その器種構成の割合（第74・75図）は、壺が38%と最も多く、鉢（23%）、甕（15%）となっている。壺は、櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部がある。鉢は浅鉢で、口縁部は短くしっかりと外傾しており、底部は丸底、貼付円盤状の平底、平底がある。以上の特徴から松永編年の４期（弥生時代終末）と考えられる。

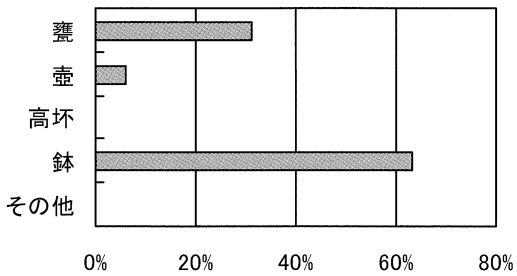
第132図　SA5の器種構成



７号竪穴住居跡（SA7）

本遺構の土器総数は16点で、器種構成の割合（第77図）は、全て弥生土器の鉢が63%と最も多く、次いで土師器の甕（31%）、土師器の壺（６%）となっている。鉢の中でも深鉢の底部は、上げ底で端部がわずかに張り出すもの、張り出さないもの、平底で端部が張り出さないものがある。浅鉢の底部は、貼付円盤状の平底、尖底がある。甕の底部は、内面が平坦ではない平底がある。口縁部は、ゆるやかに外反している。壺は長形胴で、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。以上の特徴から松永編年の４・５期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

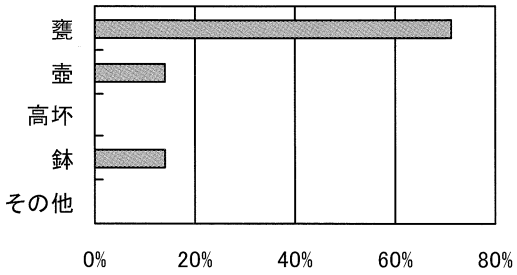
第133図　SA7の器種構成



8号竪穴住居跡（SA8）

本遺構の土器総数は7点で、器種構成の割合（第79図）は甕（弥生土器・土師器の混在）が71%と最も多く、次いで土師器の壺（14%）・弥生土器の鉢（14%）となっている。流入したと考えられる弥生土器の甕の口縁部には、端部に貼付突帯がある。個体数が少なく時期の異なるものが混じっているが、その中において完形の度合いが高いものに、甕の底部には平底が、鉢は深鉢で、底部は上げ底の端部がわずかに張り出しているものがあり、7号住居跡で出土した底部の特徴と似ている為、松永編年の4・5期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

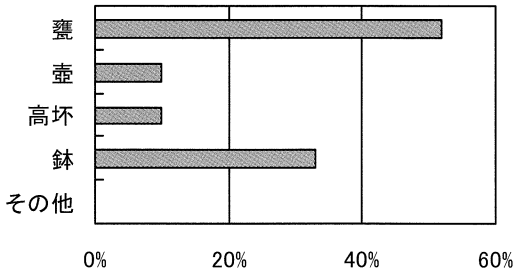
第134図　SA8の器種構成



2号竪穴住居跡（SA2）

本遺構の土器総数は21点で、器種構成の割合（第81～84図）は甕（弥生土器・土師器の混在）が52%と最も多く、次いで鉢（弥生土器・土師器の混在）が33%、高坏（弥生土器・土師器の混在）が10%、弥生土器の壺（10%）となっている。弥生土器の甕の口縁部はゆるやかに外反し、底部は上げ底で端部がわずかに張り出すもの、わずかな上げ底のものがある。土師器の甕には、表面の所々にタタキ目の残るものがある。口縁部は、ゆるやかに外反するもの、やや直線的に開くものがある。底部は平底、わずかな上げ底がある。弥生土器の鉢には、深鉢の口縁部が、ゆるやかなに内湾するものがある。底部は、高台脚付の平底、上げ底で端部がわずかに張り出すもの、わずかな上げ底のものがある。浅鉢には、頸部で屈曲し外反する口縁部をもち、底部は小さな平底がある。土師器の鉢には、平底をもつ深鉢の底部やレンズ状の底部に、内湾しながら立ち上がる胴部をもつ浅鉢がある。以上の特徴から松永編年の4・5期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

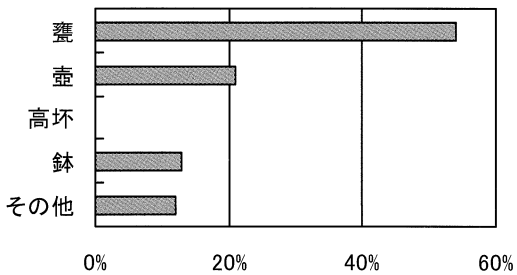
第135図　SA2の器種構成



9号竪穴住居跡（SA9）

本遺構の土器総数は24点で、器種構成の割合（第88～91図）は甕が54%と最も多い。次いで壺（21%）、鉢（13%）となっている。甕には大型・中型・小型がある。大型の甕は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開き、底部は側面が直線的に立ち上がる平底である。中型の甕は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開き、底部は側面が直線的に立ち上がる平底である。小型の甕は、外面にタタキ目の施してあるもの、一部タタキ目の残るもの、ハケメ・ナデ主体のものがある。口縁部は、「く」の字状で直線的に開いているもの、短く直立気味のものがある。壺は、直立気味に立ち上がる二重口縁壺や口縁部が外反するもの、直立気味のものがある。底部は尖底に近い平底のもの、レンズ状の平底のものがある。小型の壺は、短く外傾する口縁部で、頸部付近にミガキが施されており、ソロバン玉状の胴部に底部は丸底のものがある。鉢は、口縁部は外傾のゆるいもの、ゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の3・4期（古墳時代前期～中期）と考えられる。

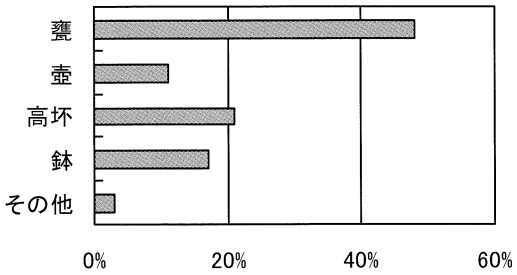
第136図　SA9の器種構成



1号竪穴住居跡（SA1）

本遺構の土器総数は29点で、器種構成の割合（第93～96図）は甕が48%と最も多い。次いで高坏（21%）、鉢（17%）、壺（11%）、となっている。甕には大型・中型・小型がある。大型の甕は、頸部下の表面所々にタタキ目が残るものがあり、口縁部は直線的に外反している。底部は側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底で、わずかに平坦面がある。中型の甕は長胴形と球胴に近いものがあり、長胴形は、口縁部が直線的に外反し、底部は丸みをもつ尖底がある。高坏の口縁部は直線的に外傾し、受部内面は平らに近いものがある。鉢はいずれも深鉢で、口縁部が巻き込み気味に立ち上がるもの、ゆるやかに内湾するもの、外傾するものがある。底部は平底がある。壺は球形胴で、口縁部は短く直立するものがある。小型丸底壺は半球形と球形がある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

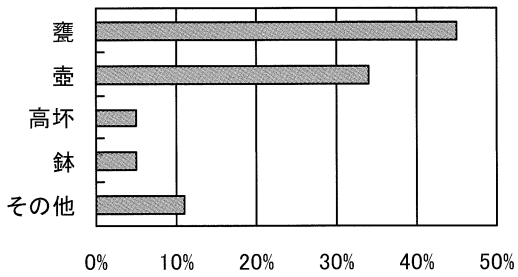
第137図　SA1の器種構成



3号竪穴住居跡（SA3）

本遺構の土器総数は38点で、器種構成の割合（第98～101図）は甕が45%と最も多く、次いで壺（34%）、高坏（5%）・鉢（5%）となっている。甕には、大型と中型がある。大型の甕の口縁部がややゆるやかに外反するものがある。中型の甕は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、外面全体にタタキ目の残るもの、一部にミガキを施しているものがある。口縁部は直線的に外反しているもの、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反しているもの、短く屈曲するものがある。底部は、丸みをもつ尖底やわずかに平坦面やくぼみのあるもの、厚みのある平底がある。壺の口縁部は、やや外反するもの、直立に近く立ち上がるもの、頸部に格子目状の突帯があるものがある。また、櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺もある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

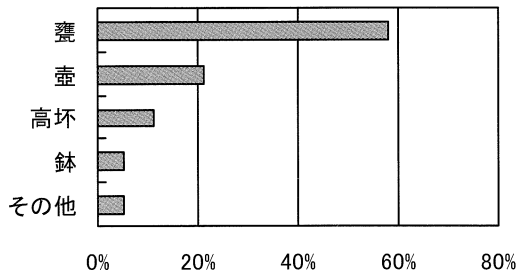
第138図　SA3の器種構成



4号竪穴住居跡（SA4）

本遺構の土器総数は19点で、器種構成の割合（第103・104図）は甕が58%と最も多く、次いで壺（21%）、高坏（11%）・鉢（5%）となっている。甕は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、口縁部が直立気味に長くゆるやかに外反し、底部は、丸みをもつ尖底がある。球形胴の甕は、外面頸部下にミガキが施され、口縁部が直線的に伸びているものがある。壺の口縁部は、外反するもの、直立に近く立ち上がるものがある。小型丸底壺の口縁部は、直線的に開くものがある。高坏の脚部は外面にミガキが施されているものがある。鉢は深鉢で、口縁部はゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

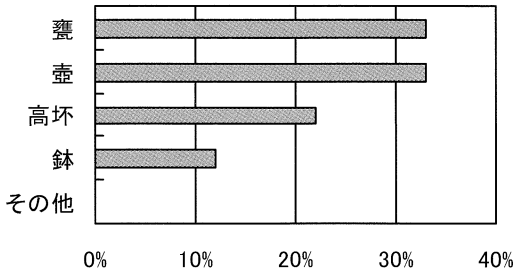
第139図　SA4の器種構成



10号竪穴住居跡（SA10）

本遺構の土器総数は9点で、器種構成の割合（第106・107図）は甕と壺がそれぞれ33%と最も多く、次いで高坏（22%）・鉢（12%）となっている。甕の外面は工具によるナデ調整主体に、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反するもの、「く」の字状で直線的に開くものがある。壺は、口縁部は直立に近く立ち上がるもの、やや外反するものがある。小型の壺は、扁球胴の丸底のものがある。高坏は、受部と口縁部境に段があり、直線的に外傾した口縁部に、受部内面は平らに近く、裾部は小さく屈曲して開いているものがある。鉢は、ゆるやかに内湾する口縁部のものがある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

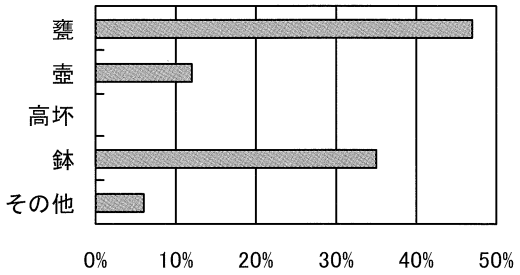
第140図　SA10の器種構成



11号竪穴住居跡（SA11）

本遺構の土器総数は17点で、器種構成の割合（第109・110図）は甕が47%と最も多く、次いで鉢（35%）、壺（12%）となっている。壺よりも鉢の割合の高いことが特徴的である。甕の外面はナデ調整主体に、口縁部は直立気味に外反し、底部は、わずかに平坦面のある尖底に近い平底のものがある。鉢は深鉢では、ゆるやかに内湾する口縁部で、底部は丸底のもの、平坦面のある尖底に近い平底のもの、レンズ状の平底のものがある。浅鉢では、口縁部はゆるやかに外傾するもの、ゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

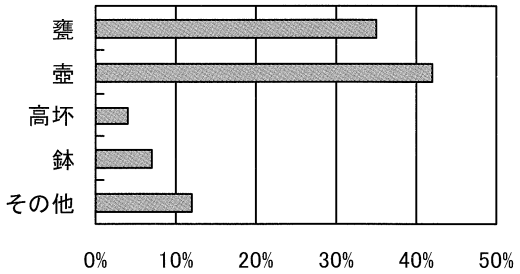
第141図　SA11の器種構成



12号竪穴住居跡（SA12）

本遺構の土器総数は28点で、器種構成の割合（第112～115図）は壺が42%と最も多く、次いで甕（35%）、鉢（7%）、高坏（4%）となっている。甕よりも壺の割合の高いことが特徴的である。壺の口縁部は、直立気味のもの、二重口縁のもの、やや外傾するもの、大きく外反するものがある。底部は尖底に近い平底のものがある。甕は大型と中型のものがある。大型の甕は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いており、底部は、丸みをもつ尖底のものがある。中型の甕は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いており、底部は、丸みをもつ尖底のものがある。鉢は浅鉢で、外面にタタキ目を施してあり、口縁部はゆるやかに外傾しているもの、ゆるやかに内湾する口縁部に、底部は平底のものがある。壺の中に、大きく外反する口縁部のものはやや異質であるが、その他の器種の特徴から、今塩屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

第142図　SA12の器種構成



6号竪穴住居跡（SA6）

本遺構は住居跡内の地床炉のみの検出で平面形態は確認できず、出土土器（第125図）も甕が6点のみである。甕の口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部端がゆるやかに外反するものがある。底部は器厚の厚い丸底のもの、丸底に近い平底のものがある。以上の特徴から今塩屋・松永編年の5期（古墳時代後期）と考えられる。

各時期別の器種構成

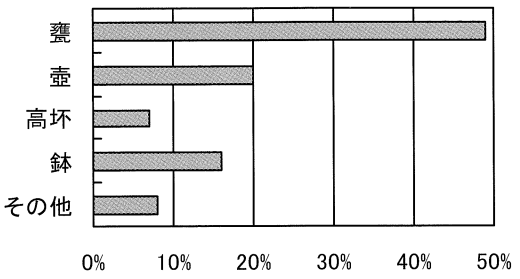
出土遺物の特徴から、Ⅰ期を弥生時代終末から古墳時代初頭（SA5・SA7・SA8・SA2）、Ⅱ期を古墳時代前期から中期（SA9・SA1・SA3・SA4・SA10・SA11・SA12）、Ⅲ期を古墳時代後期（SA6）と、大きく3時期に分けることができる。しかし、各時期においては、さらに細分できる可能性は否めない。

Ⅱ期のSA9は、同時期とした他の住居跡の遺物時期と比べると幅があるが、SA9とSA12で一個体分の壺が遺構間接合したことから、同時期のものとみなし、Ⅱ期として一括することにした。以下、個体数の多いⅠ期とⅡ期の器種構成の比較を行う。

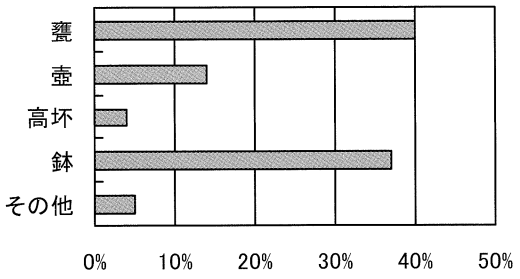
前述したように、報告書記載の土器総数は274点で、その器種構成の割合（第143図）は、甕が49%、壺が20%、高坏が7%、鉢が16%、その他が8%で、甕が最も個体数の割合が多く、全住居跡から出土しており、本遺跡の主要器種となる。これらをⅠ期とⅡ期の時期別に分けて見ると若干の差異が認められる。

Ⅰ期の器種構成の割合（第144図）は、甕が40%、壺が14%、高坏が4%、鉢が37%、その他が5%で、甕と鉢の個体数の割合がさほど変わらず、他の器種よりも、それらの個体数の割合が高いのが特徴的である。甕や鉢（深鉢）の底部は、小さな張り出しのある上げ底が多く、浅鉢の口縁部は短くしっかりと外傾している。本遺跡周辺の山田遺跡（第1図）においては、弥生時代終末と考えられる住居跡から、甕や壺、鉢等の遺物が13点出土している。そのうち、鉢の個体数の割合が高く、本遺跡と同様な傾向にあるが、時期幅において直結させるには難しい面がある。

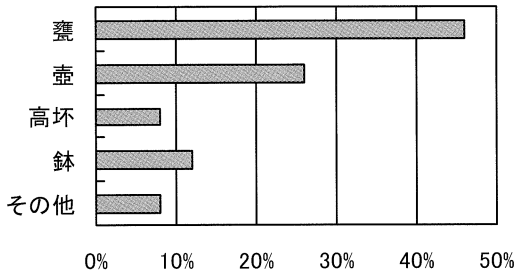
第143図　遺構全体の器種構成



第144図　Ⅰ期の器種構成



第145図　Ⅱ期の器種構成



Ⅱ期の器種構成の割合（第145図）は、甕が46%、壺が26%、高坏が8%、鉢が12%、その他が8%で、Ⅰ期と比べ甕が主体となり、鉢よりも壺の割合が高くなるのが特徴的である。甕は、胴部形態で長胴と球胴があり、長胴形の甕は、口径から大型（口径19cm以上）、中型（14～19cm）、それ以下の小型と区分できる。外面にタタキ目を施すものが多く、底部は尖底に近い平底や側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底が多く、口縁部は直線的に外反するもの、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反するものがある。壺は大型壺と広口の中型壺、さらに小型壺と小型丸底壺がある。鉢では、深鉢の口縁部は、巻き込み気味に立ち上がるもの、ゆるやかに内湾するものが多く、底部は、平坦面のある尖底に近い平底が多い。浅鉢の口縁部は、外傾のゆるいもの、ゆるやかに内湾するものがあり、底部は平底のものが多い。高坏は、口縁部が直線的に外傾し、受部内面が平らなものが多い。本遺跡周辺の吉野第2遺跡・山口遺跡第2地点（第1図）

においては、古墳時代中期と考えられる住居跡から、甕や壺、高坏、鉢等の土師器が出土し、本遺跡と同じように甕主体の傾向にある。本遺跡では、須恵器の出土はない。上記の2遺跡においても、出土量は概して低く、土師器の占める割合が、本遺跡と同様に極めて高い。

以上、竪穴住居跡別に器種構成の特徴を比較し、その編年的位置づけを行った。宮崎県の県北地域における弥生時代終末から古墳時代中期の集落遺跡調査例は、県内の他地域に比べると多くはない。本遺跡の資料は、当該時期の土器様相を考える上で、重要な材料を提供するものだと言えよう。

(2) 出土石製品

各住居跡から25点の石製品が出土している。時期としては、Ⅰ期から18点、Ⅱ期から7点である。器種別では、石庖丁が7点（SA1・SA2・SA3・SA4・SA5・SA9）で、どれも両端に抉りのあるものである。磨石は3点（SA5・SA10）で、厚みのある楕円礫を用いている。台石は8点（SA2・SA8・SA9・SA10・SA12）で、どれも一抱えもある大きさの花崗斑岩を用いる場合が多く、特に12号竪穴住居跡に集中して出土した。敲石は12点（SA1・SA2・SA3・SA4・SA7・SA8・SA9・SA11・SA12）で、楕円やコッペパン状の礫を用いており、敲打痕とともに磨り痕もある敲・磨石として扱う器種が、9点であった。その他には、砥石が5点（SA5・SA9・SA12）、用途は不明であるが、棒状石製品が3点（SA2・SA7・SA8）であった。棒状石製品は、本遺跡周辺の吉野第2遺跡（第1図）において、古墳時代中期の住居跡から10～15cm規模の棒状の砂岩礫が10数点出土しており、さらに、都城市坂元A遺跡の弥生後期の住居跡や中尾遺跡の古墳時代の住居跡においても確認されている。

(3) 出土鉄製品

7軒の竪穴住居跡（SA2・SA3・SA4・SA5・SA7・SA9・SA12）から14点の鉄製品が出土している。時期としては、Ⅰ期から4点、Ⅱ期から10点である。器種別では、鏃と鉈が出土しており、鏃には圭頭鏃、柳葉鏃、無茎鏃、腸抉鏃の4種類が認められる。鏃は、刃部に布を巻くことで、保護または保管をしていたのではないかと考えられる。

2　集落構成の復元

(1) 竪穴住居跡（ＳＡ）の特徴

竪穴住居跡は、12軒検出した。そのうち1軒（SA6）は、住居跡内の地床炉のみの検出で、平面形態は確認できなかったが、残りの11軒については第25表の通りである。集落の時期については、前述したように出土遺物の特徴から、Ⅰ期を弥生時代終末から古墳時代初頭、Ⅱ期を古墳時代前期から中期、Ⅲ期を古墳時代後期と大きく3時期に分けられる。

本遺跡の竪穴住居跡群は、平面形態が方形・長方形主体の住居跡群と言える。住居跡の規模は、一辺が5.00mを超える大型住居跡が7軒（SA1・SA2・SA3・SA5・SA9・SA11・SA12）、4.00～5.00mの中型住居跡が4軒（SA4・SA7・SA8・SA10）で、大型住居跡の多い点が特徴的である。特にSA9は、8.20m×7.80mと本遺跡最大であった。集落時期の特徴では、Ⅰ期よりもⅡ期が比較的大型の住居跡であり、時期が遡るほど小規模化していく傾向にある。本遺跡周辺の山口遺跡第2地点（第1図）においては、弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約30軒確認されている。住居跡の規模を比較した結果、本遺跡とほぼ同様な傾向である。

構造的な特徴は、11号竪穴住居跡を除く全てに貼り床が施されている。また、貼り床面が被熱により赤化し、掘り方の浅い単純な地床炉の確認された住居跡が4軒ある。また、焼土面のみ確認された住居跡は5軒あり、明らかに火を用いた何らかの活動が行われていたことを示すものである。4号竪穴住居跡にはベッド状遺構が、11・12号竪穴住居跡それぞれの北側部分には張り出しがある。本遺跡周辺の張り出しのある住居跡については、地蔵ヶ森遺跡（第1図）に類似例がある。主柱穴については2本または4本で、大型住居跡はすべて4本柱であった。これは当然、床面規模に応じて自ずと規模を増す上屋構造に対応した結果と言える。12号竪穴住居跡には、主柱穴検出後の貼り床面を除去した床面において、それぞれの主柱穴の近くに、同じような柱穴を確認し、柱の位置を変えたか、柱の補強を行った可能性が考えられる。

遺構間接合については、SA9 と SA12 で一個体分の壺が接合した。ちょうど真ん中から半截したものが、それぞれの住居跡から出土し、接合したものである。意図的に分割された可能性が高く、なんらかの行為性が考えられる。しかし、SA9 では、南西側壁付近から土器破片として出土、SA12 では、東側から土器破片として出土と、両住居跡間に意図的な共通性は見られなかった。

遺構番号	規模(m)			床面積(㎡)	平面形態	柱数	時期	主な遺物	備考
	長軸	短軸	深さ						
ＳＡ５	5.40	3.60	0.55	19.44	長方形	2	Ⅰ期	甕・壺・鉢・手捏土器・杓子状土器・鉄器・石庖丁・砥石・磨石	焼土・貼り床
ＳＡ７	4.20	3.80	0.30	15.96	方形	2	Ⅰ期	甕・壺・鉢・鉄器・敲石	焼土・貼り床
ＳＡ８	4.10	3.40	0.30	13.94	長方形	2	Ⅰ期	甕・壺・鉢・敲石・台石	貼り床
ＳＡ２	6.55	6.25	0.40	40.93	方形	4	Ⅰ期	甕・壺・鉢・高坏・鉄器・石庖丁・石錘・敲・磨石	地床炉・貼り床
ＳＡ９	8.20	7.80	0.75	63.96	方形	4	Ⅱ期	甕・壺・鉢・手捏土器・鉄器・石庖丁・砥石・敲・磨石・台石	焼土・貼り床
ＳＡ１	5.05	4.95	0.55	24.99	方形	4	Ⅱ期	甕・壺・小型丸底壺・鉢・高坏・手捏土器・石庖丁・敲石	貼り床
ＳＡ３	6.25	5.60	0.45	35.00	長方形	4	Ⅱ期	甕・壺・高坏・鉢・手捏土器・鉄器・石庖丁・敲・磨石	地床炉・貼り床
ＳＡ４	4.90	4.00	0.50	19.60	長方形	2	Ⅱ期	甕・壺・小型丸底壺・高坏・鉢・手捏土器・鉄器・石庖丁・敲・磨石	ベッド状遺構・貼り床
ＳＡ10	4.65	4.40	0.30	20.46	方形	2	Ⅱ期	甕・壺・鉢・高坏・磨石・台石	地床炉・貼り床
ＳＡ11	6.35	5.35	0.55	33.97	長方形	4	Ⅱ期	甕・壺・鉢・手捏土器・敲・磨石	焼土・張り出し
ＳＡ12	6.60	6.60	0.65	43.56	方形	4	Ⅱ期	甕・壺・鉢・高坏・鉄器・砥石・敲・磨石・台石	焼土・張り出し・貼り床
ＳＡ６	—	—	—	—	—	—	Ⅲ期	甕	地床炉

第25表　竪穴住居跡（SA）一覧

(2) 土坑（ＳＣ）の特徴

土坑は4基検出し、第26表の通りである。そのうち4号土坑は、土器一括廃棄の目的をもつもので、その他は不明である。時期については、出土遺物の特徴から、2号土坑は弥生時代終末から古墳時代初頭のⅠ期、その他の土坑は古墳時代前期から中期のⅡ期と、大きく2時期に分けられる。4号土坑に投棄されている土器は、Ⅱ期の主要器種である甕が大部分であった。

遺構番号	グリッド	規模(m)			平面形態	時期	主な遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
SC2	Ｌ４	3.02	2.50	0.50	楕円形	Ⅰ期	甕	
SC4	Ｈ５	2.20	2.20	0.20	方形	Ⅱ期	甕・壺・鉢	土器一括廃棄
SC3	Ｍ４	3.35	3.10	0.40	方形	Ⅱ期	甕・鉢・高坏	貼り床
SC1	Ｈ４	1.82	1.40	0.15	楕円形	Ⅱ期	甕	

第26表　土坑（SC）一覧

(3) 集落内における活動

Ⅰ期の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落は、竪穴住居跡4軒（SA2・SA5・SA7・SA8)、土坑1基（SC2）で、丘陵上の台地平坦面に集中し、比較的散漫な状況で分布している。2号竪穴住居跡からは、石錘が1点ではあるが出土しており、漁撈活動の存在が窺われる。

Ⅱ期の古墳時代前期から中期にかけての集落は、竪穴住居跡7軒（SA1・SA3・SA4・SA9・SA10・SA11・SA12)、土坑3基（SC1・SC3・SC4）で、丘陵上の台地平坦面と台地頂部付近の2か所に分かれている。おそらく集落の中心は、調査区外の北側部分だと考えられる。住居跡の主軸は北西方向をとるものが主となっている。中でも9号竪穴住居跡は、長軸8.20m、短軸7.20mで床面積63.96㎡と非常に大きなものとなる。当時の一般的な竪穴住居跡の規模から考えると、今回検出された9号竪穴住居跡は、一般住居ではなく集会施設のような利用が考えられる。さらにその住居跡内には土坑（第87図）があり、そこから完形の状態で二重口縁壺(394)が出土した。土坑の規模は長軸0.70m、短軸0.65mで、貼り床面から0.25m程掘り込んでいる。その埋土は自然堆積ではない黒色土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。おそらく何らかの活動目的で壺を意図的に据えていたものと考えられる。

Ⅲ期の古墳時代後期の集落は、6号竪穴住居跡の地床炉のみの検出で、詳細は不明である。

以上のことから本遺跡は、主として弥生時代終末から古墳時代中期にかけて活動をしており、住居跡等の切り合いもなく、比較的散漫な状態で分布していることから、一時期、あるいは短期間のみ営まれていた集落と考えられる。また、収穫物の収納施設たる「倉庫」（掘立柱建物）は検出されず、竪穴住居中心の活動であったと考えられる。

自然科学分析結果（第Ⅳ章第2・3節）から、遺跡周辺の環境は、ツブラジイ、サカキといった照葉樹が分布し、草本のタデ属、エノキグサも生育する草原的な環境であったと考えられる。また、畑作活動が行われていた傍証となる、ヒエ－キビ、ムギ類、マメ類といった栽培植物が確認されている。しかし、ムギ類、マメ類の年代測定では、後代のものが遺構内に混入した可能性が指摘される結果となり、当該期における利用に直結させるのには無理があった。栽培植物を除いた分類群のコナラ属－シイ属、シイ属?といった堅果が、食用可能な有用植物として確認されている。これらは、周辺域の森林に生育していたものに由来すると思われ、遺構内に持ち込まれ利用された可能性がある。また、炭化していることから、火を受けたことが推定されるが、時期に関しては、上述の栽培植物と同様に慎重に評価する必要がある。

【参考文献】

宮崎県旧石器文化談話会2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66

秋成雅博2005「宮崎10段階編年の概要」『九州旧石器』第9号　九州旧石器文化研究会

小畑弘己2002「第四章　考察」『吉武遺跡群XⅣ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集　福岡市教育委員会　pp. 61-68

国武貞克2005「後期旧石器時代前半期も居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』78　物質文化研究会　pp. 1-25

芝康次郎2007a「九州細石刃石器群編年の再検討」『古文化談叢』第56号、1-23頁、九州古文化研究会、福岡。

芝康次郎2007b「細石刃文化の到来とその変遷について」『九州旧石器』第11号、41-54頁、九州旧石器文化研究会、福岡

橘　昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3　別府大学考古学研究会　pp. 1-70

橘　昌信1990「船野技法についての一考察」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会　pp. 21-32

松田清孝2005「宮崎県下の地質的背景」宮崎県旧石器文化談話会「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66　旧石器文化談話会所収　pp. 47-50

松本　茂2002「東南部九州における細石刃石器群編年に関する覚書―宮崎県岩土原遺跡第２文化層の再検討―」『富山大学考古学研究室論集蜃気楼―秋山進午先生古稀記念―』六一書房　pp. 27-45

宮田栄二1998「細石刃の製作技術―細石刃核の固定方法からの視点―」『九州の細石器文化―九州島における細石器文化の石器と技術―』九州旧石器文化研究会　pp. 35-40

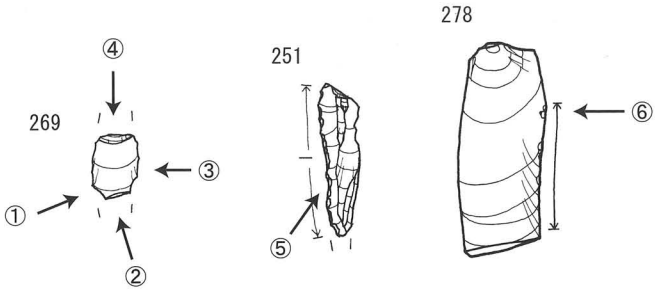
松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号

今塩屋毅行・松永幸寿2002「日向における古墳時代中～後期土師器－宮崎平野部を中心にして－」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会　第5回九州前方後円墳研究会実行委員会

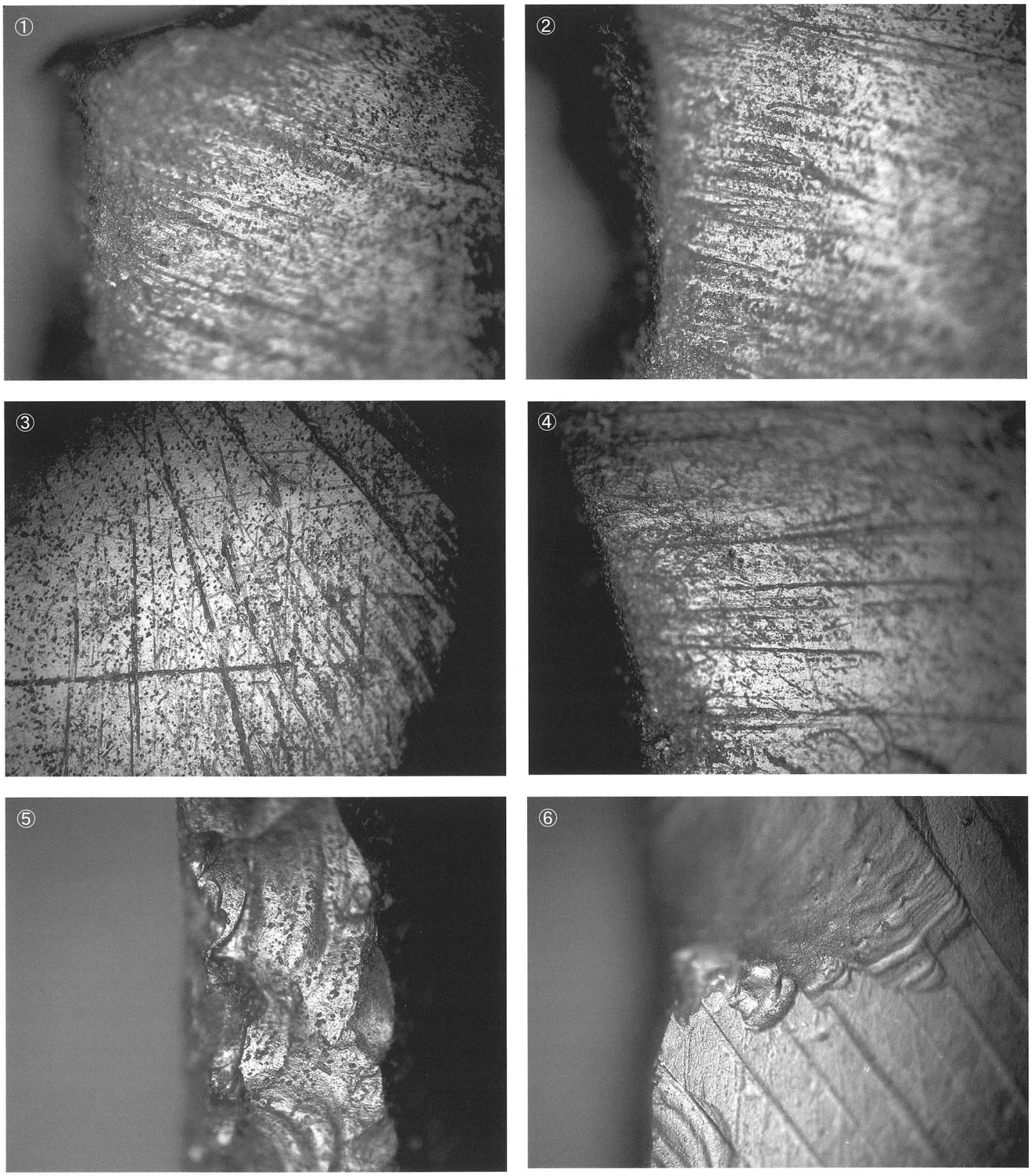
宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡第２地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集』

宮崎県埋蔵文化財センター2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』

宮崎県埋蔵文化財センター2007「吉野第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集』

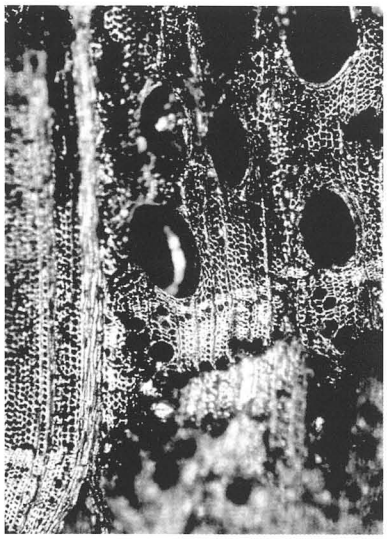
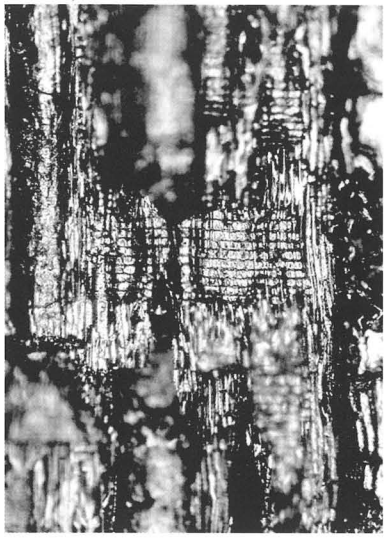
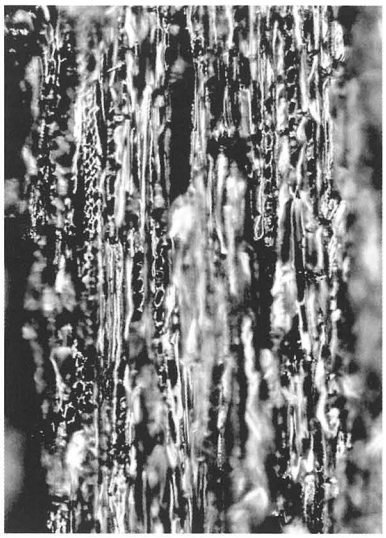


①②④：刃部に直交する線状痕
③：刃部に平行する線状痕
⑤：連続する微小剥離痕
⑥：微小剥離痕と線状痕



黒曜石製石器における使用痕

図版４　炭化材Ⅰ

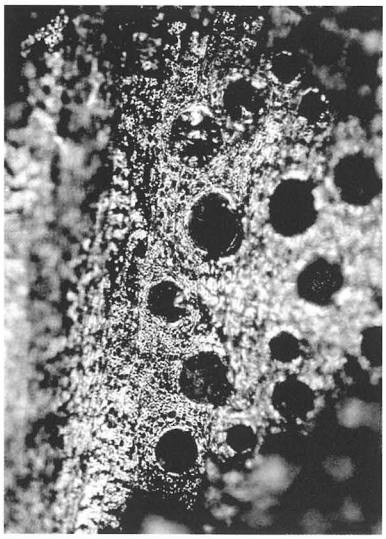




横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.4mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

試料１（ＳＡ５）　ツブラジイ

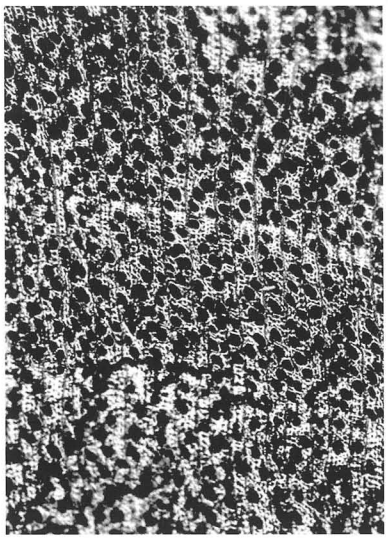
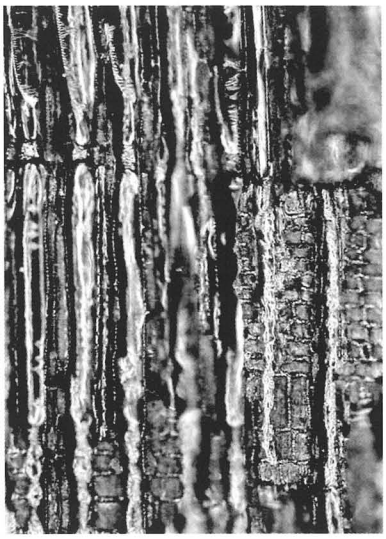
横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

試料２（ＳＡ５）　コナラ属コナラ節



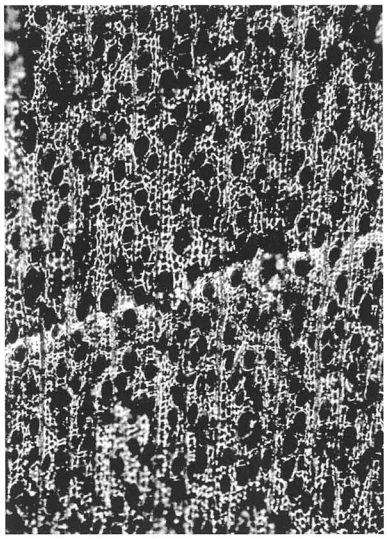
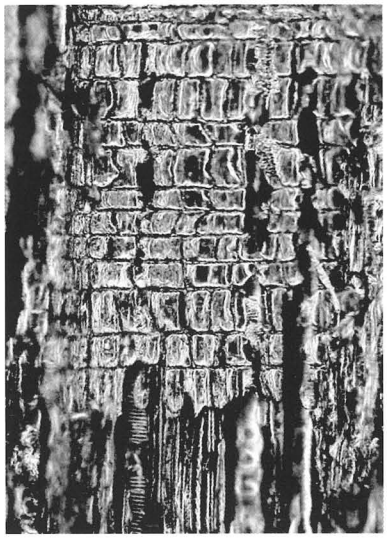
横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

試料６（１号不明土坑）　コナラ属アカガシ亜属

横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

試料３（ＳＡ７）　サカキ

横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

試料４（ＳＡ９）　ハイノキ属

図版６　炭化種子

：２㎜

試料２　シイ属？ 果実

：２㎜

試料６　ムギ類 胚乳

：２㎜

試料８　エノキグサ 種子

：２㎜

試料８　タデ属？ 果実

：２㎜

試料８　タデ属？ 果実

：２㎜

試料４０　コナラ属ーシイ属

：２㎜

試料３７　マメ類 種子

：２㎜

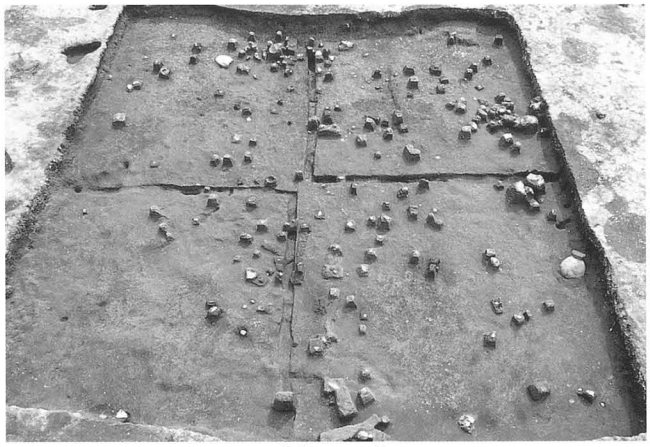
試料４８　タデ属 果実

：２㎜

試料３７　マメ類 種子

：２㎜

試料５２　ヒエーキビ 胚乳

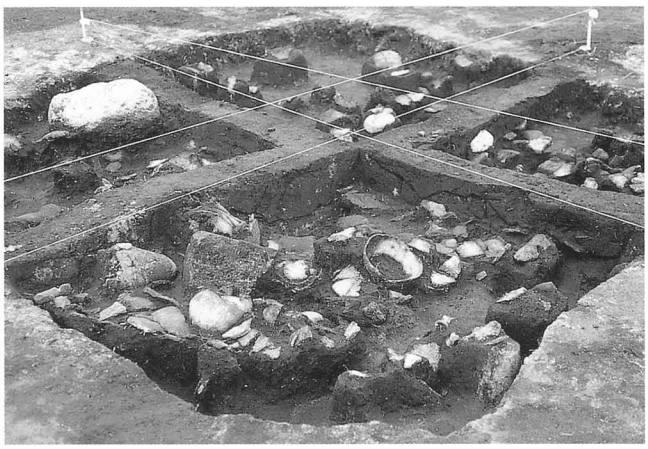

SA9遺物出土状況

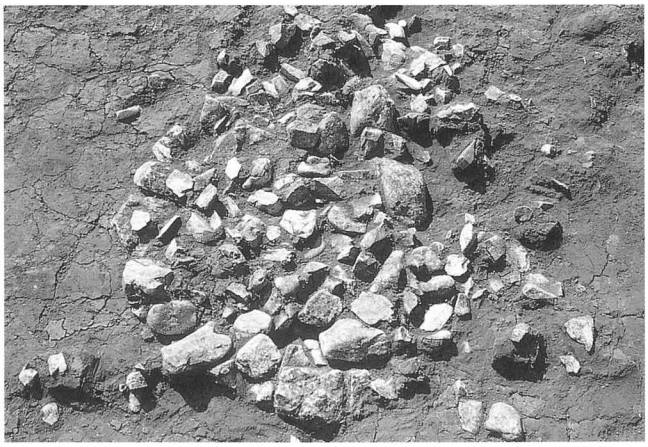
SA9壺（394）出土状況

SA1土器集中部分

SA7鉢（319）出土状況

SA12炭化材検出状況


SC4遺物出土状況


集石遺構検出状況〈縄文時代早期〉

作業風景